

# 仮定表現に関する日中対照研究：機能拡張および文法化の観点を中心として

李, 慧

<https://hdl.handle.net/2324/7329395>

---

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（学術）, 論文博士  
バージョン：  
権利関係：



仮定表現に関する日中対照研究  
—機能拡張および文法化の観点を中心として—

李 慧

2024年4月



## 要 旨

本論文は、機能拡張および文法化の観点から日本語と中国語の假定表現の対照研究である。20 世紀初頭より「假定関係を表す表現」（以下、「假定表現」と略す）に関する研究が、日本語、中国語それぞれについて行われ、数多くの研究成果が蓄積されてきたが、それらの研究は主に、複文の分類、各形式の意味用法について展開されたものがほとんどであった。そこで本研究では、日本語の「ば」「たら」「なら」、中国語の“如果”、“要是”、“的话”を中心として、これらの表現の機能拡張と文法化の類似点・相違点およびその要因を明らかにするために、対照研究を試みた。

本論文は全 11 章から構成され、第 1 章から第 4 章は本研究の序論、第 5 章から第 10 章は本論、第 11 章は結論である。

序論である第 1 章から第 4 章では、研究の背景、目的、先行研究およびデータについて述べた。第 5 章以降が本論である。第 5 章は日本語の假定表現に関する章である。日本語假定表現「ば」「たら」「なら」の機能拡張とそのプロセスについて議論した。「ば」「たら」「なら」のような假定関係を表す代表的な接続表現は、非仮定的用法からの発達と見なすことができるが、その過程で終助詞的機能、接続詞的機能が発達する様子を明らかにした。第 6 章は中国語の假定表現に関する章である。中国語の假定関係を表す接続表現に関する機能拡張では、非接続表現が接続関係を表すようになるプロセスをとることを確認した。これは日本語と異なる中国語の特徴であり、本研究では假定表現の出現状況や文中の位置関係などの差異によって「假定表現」（假定関係を表す専用表現）、「準假定表現」（他の品詞から転じてきた、假定関係を表すとともに他の意味を表せる表現）、「次假定表現」（假定関係も表せるが他の意味を中心とする表現）の三種に類別した。

続く第 7 章では、第 5 章と第 6 章の結果に基づいて、両言語における假定表現の機能拡張の類似点と相違点を述べた。小柳 (2018) の文法化と多機能化の議論に基づいて、日中両言語の假定表現に関する機能拡張の類似点と相違点を提示し、さらに、その点について両言語が非対応関係になっていることを明らかにした。

第 8 章と第 9 章では通時的文法化の側面も加えながら假定表現の類似点と相違点を対照した。第 8 章は指示詞と假定表現の融合形式の文法化についての考察である。日本語においては「そうしたら」「それなら」などの指示詞を含む接続表現が成り立つのに対して、中国語では接続機能と指示機能とを同時に備える準假定表現“那”と“那么”が存

在している。日本語「そうしたら」と中国語“那么”について対照することで、日本語では、「そうしたら」では指示機能と接続機能をいずれも完全に保持しているのに対して、「そしたら」では指示機能部分の「そ」が短縮化されているため相対的に指示機能が弱まり接続機能が強い表現となっていると考えられる。一方、中国語では“那”が指示機能と接続機能をもともと備えている上に、“那么”では“么”が加わることでさらに接続機能が強化されることで接続性が強い表現になっていると考えられる。このように、日本語と中国語の文法化のプロセスの違いが、日本語と中国語の相違を生み出していると考えられる。

第9章は助詞と仮定表現の融合形式の文法化についての考察である。具体的に提題助詞と文末語気助詞(終助詞)に分けてそれぞれ見ていった。まず、仮定表現と提題助詞とが結合した日本語「(の)なら」と中国語“的话”について対照した。話題提示機能と接続機能を兼ねる日本語「なら」と中国語“的话”それぞれの文法化プロセスを明確にした。その上で、「(の)なら」構文と“如果(说)……的话,……”構文の対照を行った。結論として、「なら」構文と“如果……,……”構文、「のなら」構文と“如果(说)……的话,……”構文が対称関係をなすことが明らかになった。次に、仮定表現と文末助詞との連続性の部分については日本語「ば・たら」の終助詞的機能と中国語“就是(了)”について対照研究を行った。仮定表現と助詞との融合による文法化においてはもともと仮定表現で繋がれる複文が単文になっており、換言すれば日本語においても中国語においても単文化がその誘因の一つと考えられる。

第10章では、これまでの章で行った議論を踏まえ、日本語と中国語の仮定表現の機能拡張と文法化の類似点と相違点について統合的観点から考察を行った。日本語と中国語は異なる文法化の類型に属していると考えられるため、日本語においては形式の非仮定から仮定へ、中国語においては品詞分類の非接続から接続への拡がり成り立つわけであろう。また、異なる文法化の類型の両言語が似たような文法化プロセスを経ていることからみると、構文上の類似性がその誘因の一つと考えられる。さらに、融合がもう一つの誘因であるともみられた。融合を介して複文における仮定表現の機能が弱くなり、他の機能へ転じるとともに、もとの複文の形が崩れて脱文(節)化しているとも考えられる。

第11章では、本研究のまとめと今後の課題を述べた。第5～10章で考察した内容をまとめた上で、本研究の意義と今後の課題について述べた。

## 【凡 例】

1. 用例および引用文の傍線、太字、番号などは、特に断らない限り、引用者が付したものである。
2. 用例の中の？印は、その文が不自然であることを示す。  
\*印は、その文が非文であることを示す。  
( ) は、補足内容であることを示す。
3. 用例番号は、本研究で収集したデータ、著書から引用した例文及び自作例、すべてを通し番号にて示した。
4. 日中両言語は共に漢字を使用するため、どの言語のことばであるかを判断しにくい場合も存在する。それを区別するため、日本語のことばを括弧の際、「 」を使用し、中国語のことばを括弧の際、“ ”を使用することにする。

# 目 次

要 旨.....	i
凡 例.....	iii
目 次.....	iv
・ 表目次.....	vii
・ 図目次.....	ix
<b>第1章 序 論.....</b>	<b>1</b>
1.1 本研究の背景.....	1
1.2 本研究の目的.....	3
1.3 本研究の研究対象.....	4
1.4 本研究の構成と概要.....	7
<b>第2章 理論的枠組み.....</b>	<b>9</b>
2.1 機能拡張について.....	9
2.2 文法化について.....	11
2.2.1 文法化の定義.....	12
2.2.2 文法化に関する通時的と共時的観点.....	14
2.2.3 文法化に関する基準.....	16
2.2.4 文法化の方向性.....	18
2.3 機能拡張と文法化を援用する理由.....	21
<b>第3章 日中仮定表現に関する先行研究概観と本研究の位置づけ.....</b>	<b>23</b>
3.1 日本語・中国語の複文における仮定複文の位置づけ.....	23
3.1.1 日本語の複文における仮定複文の位置づけ.....	23
3.1.2 中国語の複文における仮定複文の位置づけ.....	27
3.2 仮定表現に関する先行研究.....	33
3.2.1 日本語の仮定表現に関する先行研究.....	34
3.2.2 中国語の仮定表現に関する先行研究.....	37
3.2.3 日本語・中国語の仮定表現の対照研究.....	38
3.3 文法化の観点からの日中仮定表現に関する先行研究.....	41
3.4 先行研究に見られる問題点と本研究の位置づけ.....	45
<b>第4章 本研究のデータ収集方法.....</b>	<b>48</b>
4.1 データ収集源.....	48
4.2 収集方法について.....	49
<b>第5章 日本語の仮定表現の機能拡張: 仮定から非仮定へ.....</b>	<b>53</b>
5.1 日本語における仮定表現の構造上の特徴.....	53
5.2 日本語で用いられる仮定表現.....	54

5.3	日本語における仮定表現の機能拡張.....	56
5.3.1	「ば」の機能拡張.....	57
5.3.2	「たら」の機能拡張.....	63
5.3.3	「なら」の機能拡張.....	72
5.4	本章のまとめ.....	77
<b>第6章</b>	<b>中国語の仮定表現の機能拡張: 非接続から接続へ.....</b>	<b>79</b>
6.1	中国語における仮定表現の構造上の特徴.....	79
6.2	中国語で用いられる仮定表現.....	80
6.3	中国語における仮定表現に関する機能拡張.....	83
6.3.1	接続(助)詞類.....	84
6.3.2	助詞類.....	85
6.3.3	副詞類.....	103
6.4	本章のまとめ.....	105
<b>第7章</b>	<b>仮定表現の機能拡張の日中対照研究.....</b>	<b>110</b>
7.1	仮定表現を使用しない場合(無標識型、仮定の意味は文脈より理解される)..	110
7.2	主節のみに仮定表現が使用される場合(従属節と主節の接続、時間的継起性) .....	111
7.3	従属節に仮定表現が使用される場合(論理関係型).....	112
7.4	機能拡張の日中対照.....	113
<b>第8章</b>	<b>指示詞と融合した日中仮定表現の文法化.....</b>	<b>119</b>
8.1	日本語における指示詞を含む仮定表現.....	119
8.1.1	先行研究の概観.....	121
8.1.2	辞書による調査.....	122
8.1.3	分析.....	124
8.1.4	まとめ.....	136
8.2	中国語における指示詞を含む仮定表現.....	138
8.2.1	“那”と“那么”に対する見方.....	138
8.2.2	“那么”の歴史的由来.....	139
8.2.3	準仮定表現としての“那”と“那么”の品詞分類.....	140
8.2.4	“那么”の文法化プロセス.....	143
8.3	「そうしたら」と“那么”における文法化のプロセス.....	146
8.3.1	「そうしたら」と“那么”における文法化のプロセスの類似点.....	147
8.3.2	日本語の「そうしたら」と「そしたら」.....	149
8.3.3	中国語の“那”と“那么”.....	154
8.4	指示性と接続性の違いがもたらした日中言語間の差異.....	157

<b>第9章 助詞と融合した日中仮定表現の文法化</b> .....	<b>160</b>
9.1 提題助詞と融合した日中仮定表現の文法化.....	160
9.1.1 仮定表現と提題助詞の連続性.....	160
9.1.2 日本語における「なら」「のなら」の通時的変化.....	161
9.1.3 中国語“的话”の通時的変化.....	164
9.1.4 「なら」「のなら」と“如果(说).....(的话),.....”構文の対照.....	167
9.2 終助詞と融合した日中仮定表現の文法化.....	175
9.2.1 仮定表現と終(語気)助詞の連続性.....	175
9.2.2 終助詞との連続性からみる日中両言語における仮定表現の対応関係.....	176
9.2.3 文末における日本語「ばいい」と中国語“就是(了)”.....	179
9.3 単文化がもたらした仮定表現の文法化.....	181
<b>第10章 考察</b> .....	<b>183</b>
10.1 文法化の種類.....	183
10.2 構文上の類似性.....	185
10.3 融合がもたらした脱文(節)化.....	188
10.4 日本語と中国語の文法化の相違点と類似点はどこから起こるのか.....	189
<b>第11章 結論</b> .....	<b>191</b>
11.1 本研究の要約.....	191
11.2 本研究の意義.....	194
11.3 今後の課題.....	195
<b>参考文献</b> .....	<b>197</b>
<日本語>.....	197
<中国語>.....	206
<英語>.....	209
<b>付録1 本研究で利用する『中日対訳コーパス』の小説の詳細</b> .....	<b>213</b>
<b>付録2 本研究で利用するBCCWJの小説の詳細</b> .....	<b>215</b>
<b>付録3 本研究で利用するCCJの小説の詳細</b> .....	<b>216</b>
<b>付録4 各辞書の概要</b> .....	<b>217</b>

・ 表目次

表 1-1	「ば」と「たら」「なら」の関係 (松下).....	4
表 1-2	日中仮定関係を表す表現の対応関係.....	6
表 2-1	新語の生産の種類.....	20
表 3-1	先行研究における中国語複文の分類.....	29
表 3-2	日本語と中国語における複文の意味上の分類.....	30
表 3-3	蓮沼ほか (2001) の条件表現の下位分類.....	31
表 3-4	日中両言語における仮定複文の対応関係.....	32
表 3-5	本研究で扱う仮定複文の日中対応関係 (蓮沼ほか (2001) に基づく).....	32
表 3-6	「たら」の各用法に対応する中国語表現 (小川 (2001)).....	39
表 3-7	日本語史の時代区分.....	42
表 3-8	中国語史の時代区分.....	42
表 4-1	『中日対訳コーパス』以外に本研究で利用しているコーパス.....	52
表 5-1	「ば」「たら」「なら」と「もし」などの副詞との共起率.....	55
表 5-2	仮定表現の前接述語の種類.....	55
表 5-3	「ば」の各用法の出現数および出現率 (BJSTC).....	58
表 5-4	「ば」の各用法の出現数および出現率 (BCCWJ).....	58
表 5-5	「たら」の各用法の出現数および出現率 (BJSTC).....	63
表 5-6	「たら」の各用法の出現数および出現率 (BCCWJ).....	63
表 5-7	「なら」の各用法の統計 (BJSTC).....	72
表 5-8	「なら」の各用法の出現数および出現率 (BCCWJ).....	73
表 5-9	CEJC における仮定表現の出現数.....	77
表 6-1	中国語における仮定関係を表す接続表現一覧表.....	82
表 6-2	日中両言語における仮定表現の文中の位置.....	83
表 6-3	中国語仮定表現の使用状況.....	84
表 6-4	“呢”の辞書上の記述.....	94
表 6-5	“么”の辞書上の記述.....	101
表 6-6	中国語仮定表現の当代小説と口語資料における出現数.....	109
表 7-1	日本語「たら」「なら」の中国語訳語の出現状況.....	110
表 7-2	日中仮定表現の機能拡張.....	116
表 7-3	日本語仮定表現「ば・たら」の各段階の特徴.....	117
表 7-4	日本語仮定表現「なら」の各段階の特徴.....	117
表 7-5	中国語仮定表現の各段階の特徴.....	118
表 8-1	「こ-/そ-/あ- + たら・なら」をめぐる調査対象.....	122
表 8-2	辞書による調査結果.....	123

表 8-3	各調査対象の使用状況.....	124
表 8-4	「そうしたら」の辞書解釈.....	124
表 8-5	「そうしたら」の用法のまとめ.....	127
表 8-6	「そしたら」の辞書解釈.....	128
表 8-7	「そうしたら」と「そしたら」の前接形式.....	129
表 8-8	「それなら」の辞書解釈.....	131
表 8-9	「そんなら」の辞書解釈.....	133
表 8-10	中国語の指示表現の体系.....	138
表 8-11	“那么”の品詞類.....	143
表 8-12	辞書における「そうしたら」と「そしたら」の記述.....	150
表 9-1	「なら」の出現数と出現率.....	167
表 9-2	“的话”の出現数と出現率.....	167
表 9-3	中国語仮定関係を表す助詞.....	177
表 9-4	日本語と中国語における仮定表現と終助詞の対応関係.....	178
表 9-5	文末「ばいい」に対応する中国語.....	179
表 10-1	文法制度化の種類.....	183
表 10-2	日中仮定表現の機能拡張と文法化の種類.....	185
表 10-3	融合を介した日中両言語の仮定表現.....	188

・ 目次

図 2-1	「たり」の変化.....	11
図 2-2	言語変化の段階.....	15
図 2-3	文法化の度合い (大堀 (2005)).....	17
図 3-1	三上 (1953) と南 (1974) の日本語複文の構造上の分類.....	25
図 3-2	日本語複文の意味上の分類.....	26
図 3-3	日本語の複文の分類.....	27
図 3-4	中国語の複文の分類.....	28
図 3-5	日中両言語の条件表現の共通モデル (李 (2011)).....	40
図 3-6	「ば」の歴史的変化.....	43
図 5-1	日本語の假定複文の構文形式.....	54
図 5-2	「ば」の機能拡張プロセス.....	62
図 5-3	「たら」の機能拡張プロセス.....	70
図 5-4	「ば」と「たら」の多機能化.....	72
図 5-5	「なら-1」から「なら-2」への機能拡張.....	74
図 5-6	「なら」の機能拡張プロセス.....	76
図 5-7	「なら」の多機能化.....	76
図 6-1	中国語の假定複文の構文形式.....	79
図 6-2	準假定表現“时”の機能拡張.....	88
図 6-3	準假定表現“的话”の機能拡張.....	91
図 6-4	中国語の假定関係を表す接続表現の類別.....	105
図 6-5	準假定表現と次假定表現の文構造上の共通性.....	107
図 6-6	中国語の假定表現の多機能化.....	109
図 7-1	日中両言語の假定表現の機能拡張の異同.....	114
図 8-1	「そうしたら」の文法化プロセス.....	128
図 8-2	「そしたら」の文法化プロセス.....	130
図 8-3	「そんなら」の文法化のプロセス.....	134
図 8-4	“那么”の歴史的変遷 (志村 1995: 196-211 を整理したもの).....	140
図 8-5	太田 (1958) における“那么”の転化過程.....	145
図 8-6	呂 (1985) における“那么”の転化過程.....	145
図 8-7	“那”、“那么”の文法化プロセス.....	146
図 8-8	「そうしたら」の文法化のプロセス (まとめ).....	147
図 8-9	“那么”の文法化のプロセス (まとめ).....	148
図 8-10	接続機能を果たす“那”と“那么”の相違点.....	157
図 8-11	「そうしたら」「そしたら」と“那”、“那么”の対応関係.....	158

図 9-1	条件文と話題文の類似性.....	161
図 9-2	「なら」の機能転化.....	162
図 9-3	「なら」の仮定表現から提題標識への変化.....	162
図 9-4	“的话”の機能転化.....	164
図 9-5	「なら」と“的话”の機能転化.....	166
図 9-6	「なら」の構成形式.....	171
図 9-7	「のなら」の構成形式.....	172
図 9-8	“如果说”の文法化プロセス.....	174
図 9-9	「ば・たら」の終助詞化.....	176
図 9-10	“就是(了)”の終助詞化.....	178
図 10-1	提題助詞と仮定表現の構文上の類似性.....	186
図 10-2	終助詞と仮定表現の構文上の類似性.....	187
図 10-3	接続詞と仮定表現の構文上の類似性.....	187

# 第1章 序論

## 1.1 本研究の背景

日本語「ば」「たら」「なら」「と」は述語の活用形式として仮定条件を表す接続表現<sup>1</sup>であると認識され、この四者の使い分けおよびそれぞれの意味記述に関して多くの成果が出されている。これらの研究によって有意義な研究結果が蓄積されているのだが、学習者にとっては下記例 (1) のような「たら」の用法は理解しやすいが、例 (2) に見られる用法は理解し難いものである。例 (2) の「ったら」は例 (1) の「たら」と如何なる関係にあるのか、この疑問が本研究の出発点となった。

- (1) a. 万一雨が降ったら試合は中止です。 (『日本語文型辞典 (改訂本)』2023: 184)  
b. 疲れたら休んでもいいですよ。 (『日本語文型辞典 (改訂本)』2023: 185)  
c. 大学を卒業したらどうするつもりですか? (『日本語文型辞典 (改訂本)』2023: 186)
- (2) 「あ、いてえ！止せ、止せ、止せたら！生き物だから少し鄭重にしてくんねえ、踏み台にされたり蹴られたりしちゃ、いくら頑丈でもたまらねえや。<sup>2</sup>」

『痴人の愛』

例 (2) の「ったら」は一見、文末の終助詞的用法であり、仮定関係を表す接続助詞「たら」には当たらない用法である。この「ったら」は、節と節を繋ぐのではなく、文末に置かれて接続助詞用法から逸脱した非仮定を表す用法と見なすことができる。一方、例

<sup>1</sup> 日本語と中国語における節と節を繋ぐ品詞分類自体が異なるため、日本語では常に「接続助詞」、中国語では“连词”、“关联词”と呼ばれるが、本研究では「接続表現」を統一して用いることにする。また、中国語では元々助詞や副詞などが節と節を繋ぐために用いられることからみて、「接続表現」で統一するほうがいいと考えられる。佐久間 (2002: 162) の定義に従い、「接続表現」とは「文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文の接続語、接続句に対する概念である」とする。いわゆる接続助詞に代表されるものであるが、それ以外に、一種の活用形と見られるものから、名詞などが機能語化して接続助詞的に働くようになったものまでが含まれる。また、接続表現より前にある部分を「前節 (従属節)」、後ろにある部分を「後節 (主節)」と呼ぶことにする。これらと区別するために、それぞれの節で述べられている内容 (コト) 自体を指す場合には「前件」と「後件」という用語を使用する。

また、接続助詞については、『日本語文法事典』(1988: 351) によると、「連用的な従属節を形成する助詞」であり、活用形の基本形・過去形・連用形や活用語尾に後接して、連用的な従属節を形成する形式である。

<sup>2</sup> 例文の詳細については第4章を参照されたい。

(1) の例文においてはいずれも、「たら」で前節と後節を繋ぎ、前後節を意味的に関連させて、一種の複文を構成する。これは日本語における接続助詞の一般的用法だと言える。このように、日本語の複文においては、前節と後節を繋ぐために接続表現 (多くの場合は接続助詞) が必要である。例 (1) と例 (2) からは、「たら」という同一形式が複数の用法、あるいは多機能を持っていることが明らかである。では、日本語の典型的な仮定表現「ば」「たら」「なら」はどのような多機能を発達させているのだろうか、またそれぞれの機能の間にはどのような繋がりがあるのだろうか。

これに対して、中国語では、例 (3a) のようないわゆる“意合法”<sup>3</sup> をよく使用するが、これはつまり、接続表現を使用せず、文脈によって前後節の意味を判断するケースが多くあるということである。これを日本語に訳す場合には、何らかの接続表現が使用されることが多い。

- (3) a. 你 去, 我 也 去。 自作例  
       あなた 行く 私 も 行く
- b. 如果 你 去, 我 也 去。  
       接続語 あなた 行く 私 も 行く
- c. 要是 你 去, 我 也 去。  
       接続語 あなた 行く 私 も 行く
- d. 你 去 的话, 我 也 去。  
       あなた 行く 接続語 私 も 行く  
       あなたが行くなら、私も行く。

例 (3a) では、一つ一つの語がある順序にしたがって並べられており、形態上の変化は見られない。従来から言われてきたように、中国語は人称、格、時制などの文法範疇上の特徴に乏しい言語であり、文法的関係は主に語順で示される。中国語の文法あるいは中国語の文章を理解するには、語順と機能語<sup>4</sup> (虚辞) を重要視すべきだと一般に認識さ

<sup>3</sup> パラタクシス (parataxis) とも呼ばれる。王 (1984: 89-90) では中国語の複文において“关联词语”(関連詞語、日本語の接続表現に近い)などを明示しない“意合法”の文が多くあると指摘されている。文を構成する各成分の意味や前後文脈によって理解するしかない。

<sup>4</sup> 機能語と実質語は単語を類別する方法の一つである。機能語とは、文型を構成する要素、つまり文中に並んだ語同士の関係を表し、文の構造の骨格となる語。助詞、助動詞、形式名詞、接続表現などの類を指す。これに対して、物事を指し示す実質的な内容を表す語は実質語と呼ばれ

れている (例えば、高 (1948) 等)。その一方で、中国語では例 (3a) と同じ意味を表す際には、例 (3b)、(3c)、(3d) のような仮定関係を表す表現を加える文も成立する。日本語における動詞の語形変化とは異なるが、これらの表現が機能語に属することは日中両言語では一致している。では、中国語における仮定関係を表す表現にも、例 (2) に示した日本語「たら」のような用法の発達が見られるのか否か、あるいは、他の固有の発達を遂げているのかという疑問が湧いてくる。

また、例 (3a)、(3b)、(3c)、(3d) のように、仮定関係の意味を表すには、中国語ではいくつかの類義的表現がある。これは日本語の「ば」「たら」「なら」の類義性と似ていると言えよう。つまり、仮定関係を表す意味カテゴリーには共時的多様性が存在している。いわゆる Hopper and Traugott (1993) が指摘する文法化の特徴の一つである「重層化」である。これは、Heine, Claudi, and Hünemeyer (1991) では Wittgenstein の「家族的類似性」の理論を文法化に応用し、文法化連鎖<sup>5</sup>の一環として位置づけられている。Hopper and Traugott (1993) によると「重層化は、同じ領域で起る形式の文法化が連続的に起った共時的結果である」(Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 149))。仮定関係を表す領域には、日本語と中国語において表現の多様性が存在しており、これらの表現には歴史上同じ語源の分岐であることもあれば異なる語源からの拡張であることもある。この点も含めて日中両言語における共通性と相違性を見ていく。

## 1.2 本研究の目的

本研究では、1.1 で述べた背景を踏まえた上で、日本語と中国語の仮定関係を表す表現に注目して両言語を対照する。さらに、日本語と中国語の仮定表現の文法化の特徴およびそのプロセスの類似点と相違点について分析・考察を進める。具体的には、以下の 3 つの疑問点にできる限り答えていきたい。

1) 1.1 で示したように、仮定条件的接続表現として広く認められている「たら」は仮定関係を表す用法の外、他の用法も持ち、多機能性を有している。このように、二つ以

---

る。名詞、形容詞、動詞などの類を含む。両者はそれぞれ構造語と内容語とも言う (山口・秋本 (編) (2001)、戴 (編) (2007) などを参照のこと)。

<sup>5</sup> Heine, Claudi, and Hünemeyer (1991) では “Grammaticalization Chains” (文法化連鎖) という名称を使うのに対して、Hopper and Traugott (1993) では Heine らの「連鎖」の意味は「文法形式の源がいくつかあるということをとえられるので「重層化」という術語を使いたい」(日野訳 (2003: 128)) としている。

上の意味・機能が一つの形式で表現されるようになるのはなぜか。つまり、その動機づけはどこにあるのかを明らかにしたい。また、同じ仮定条件の形式「ば」「たら」「なら」は同様の多機能性をもっているのか。

2) 中国語において一般に仮定関係を表す表現と見られるのは“如果”、“要是”、“的话”、“就”などであるが、これらの表現は連詞(“如果”、“要是”、“若”)、助詞(“的话”)、副詞(“就”)というように、品詞が異なるにもかかわらず、中国語ではよく仮定関係を表す接続表現として扱われている。それぞれ異なる品詞の表現がどのようなプロセスを経て仮定的意味・機能をもつようになったのか。

3) 日本語と中国語における仮定表現の文法化にはどのような類似点と相違点があるのか。また、それはどのような理由によるのか。

### 1.3 本研究の研究対象

本研究は日本語と中国語の仮定表現を研究対象とする。具体的には、日本語では「ば」「たら」「なら」<sup>6</sup>、中国語では“如果”、“要是”、“的话”、“呢”などを含む。松下(1930)は、未然仮定を表す文語「ば」は口語では「たら(ば)」「(完了を表す) 或いは「なら(ば)」「(非完了を表す) になるとしている<sup>7</sup>。これを簡単に整理すると、表 1-1<sup>8</sup>のように表すことができる。

表 1-1 「ば」と「たら」と「なら」の関係

	文語	口語
完了	未然形+ば	たら(ば)
非完了		なら(ば)

益岡(2011)では、原因理由を表す接続形式である「だけに」と「だけあって」を例と

<sup>6</sup> 仮定表現には「と」が含まれるべきだが、本論文では、「ば」とそれから発達してきた「たら」「なら」のみを取り上げることにする。山口(1969: 151)では「と」形式は、もともとは仮定関係を表す意味ではなく、単に時間的關係から帰結に先行しているにすぎないとしており、「と」については、もう少し調査した上で改めて議論していきたい。

<sup>7</sup> 松下(1930: 530-551)はこれを「未然仮定拘束格」と呼ぶ。拘束格とはいわゆる順態条件法或いは順態接続法である。さらに拘束格として仮定拘束格と確定拘束格の二種類を挙げ、仮定拘束格を「未然仮定」と「現然仮定」に分ける。ここで言う「完了」と「非完了」は「未然仮定」の下位分類であるとしている。

<sup>8</sup> 表 1-1 は松下(1930: 545-550)の記述を表にまとめたものである。

して両者の関わりを論じ、「ベース形式と発展形式の分化」という見方をはじめて提示した。その見方は、基本となる接続形式（「ベース形式」と呼ぶ）である「だけに」に部分的・萌芽的に存在する特性が、その形式から分化した「発展形式」である「だけあって」において全面的に表されるというものである。益岡は、後にこの理論を仮定条件を表す四形式にも応用した。益岡 (2013) では以下のように述べられている。

「～バ」という条件を表す形式から派生した「～タラバ」・「～ナラバ」という複合的な形式が文法化して、条件を表す「～タラ」・「～ナラ」という独立の形式に発展した。  
(益岡 2013: 160)

さらに、益岡 (2014) はこの理論について以下のように詳細にまとめている。

#### (4) 「ベース形式と発展形式の分化」

A: 基本となる「ベース形式」から、それに特定の要素が組み込まれて形成される類義的な「発展形式」が派生・分化する。

B: ベース形式に部分的に存在する特性が発展形式によって全面的・明示的に表される。

C: 発展形式の形態には縮約が見られる。  
(益岡 2014: 533)

以上によれば、仮定関係を表す接続表現の中で、「ば」形式が最も典型的な標識で、「たら」「なら」はともに「ば」形式の派生形式である。最も無標<sup>9</sup>の形式である「ば」がそれぞれ文語の完了の助動詞「たり」と断定の助動詞「なり」という要素を組み込んで、最終的に派生的形式「たら」「なら」になるわけである。以上のことをふまえ、本研究では日本語の場合、「ば」形式とそこから発生した「たら」形式、「なら」形式を中心に論を進めていく。

一方、中国語の仮定複文の構成形式は大きく二種類に分けられる。一つは仮定関係を表す接続表現を使用するタイプ、もう一つは非仮定関係を表す接続表現を使用するタイプと接続表現を使用しないタイプである。

<sup>9</sup> 無標とは有標に対する概念である。形がより単純で、より多くの言語に見られ、それぞれの言語における使用頻度の高い項目、言い換えればより「当たり前」と直観的に思われる項目は「有標性が低い(無標)」である。逆に、特別の標識などを伴う場合はより「有標」である。これらは第6章の「有標識」と「無標識」と同一のものではない。

(5) 要 嫌 淡, 我 给 你 拿 盐 去! 《钟鼓楼》

接続語 嫌う (味が) 薄い 私 あげる あなた 取る 塩 行く

味が薄かったら、塩を持ってきますよ。

(6) 她 愿 出 钱 买 车 呢, 好; 她 不 愿意, 他 会 去

彼女 願望 出す 金 買う 車 接続語 よい 彼女 否定 願望 彼 願望 行く

賃 車 拉。

《骆驼祥子》

賃貸する 車 引く

彼女がお金を出して (人力) 車を買うならよし、嫌だというなら、彼 (祥子) は車を賃貸しに行き行って引きたいのだ。

(7) 你们 再 哭, 我 也 哭 啦!

《轮椅上的梦》

あなたたち もっと 泣く 私 も 泣く 語気

これ以上泣くなら、私も泣いちゃいますよ。

上記の例 (5) においては“要”という仮定表現を使用しており、例 (6) の“呢”は非仮定表現であるにもかかわらず、仮定の意味を帯びていると見られる。この点については第 6 章で詳しく述べる。例 (7) は“意合法”で仮定表現は使用されていないが仮定関係を推測できる例文である。それぞれに対応する日本語は接続表現「ば」「たら」「なら」で表現されていることがわかる。これらの例で示した日本語と中国語の仮定関係を表す形式の対応関係は表 1-2 のようにまとめられる。

表 1-2 日中仮定関係を表す表現の対応関係

言語	日本語	中国語
表現	仮定関係を表す接続表現 (とりわけ「ば」「たら」「なら」)	① 仮定関係を表す接続表現
		② 非仮定関係を表すが文脈中で仮定の意味を表わせる接続表現 ③ 接続表現を使用しない (意合法)

本研究はこの表に示す日中両言語の接続表現を対象として、議論を進めていくことにする。日本語では「ば」「たら」「なら」を「仮定関係を表す表現」の代表例として取

り上げ、中国語では上記の三つのタイプに分けて述べる。なお、これらの表現には仮定関係から拡張されて非仮定関係を表す用法もあるが、それは機能上の問題であり、ここでの分類には加えない。

#### 1.4 本研究の構成と概要

本研究は序論から結論までの全 11 章から構成される。第 2 章からの各章で行う主な内容を以下に示す。

第 2 章では、本研究で採用した機能拡張および文法化に関する理論的背景を概観し、これまで累積してきた成果をまとめる。

第 3 章では仮定複文および仮定関係を表す表現に関する日中両言語の先行研究を概観し問題点を示した後、本研究の立場を提示する。

第 4 章は本研究で利用したコーパスとデータ収集方法について説明する。

第 5 章以降が本論である。第 5 章～第 7 章は認知言語学の観点から日本語と中国語の仮定表現をまとめる。その上で、両言語の仮定表現の機能拡張の類似点と相違点を述べる。第 8 章と第 9 章は日中両言語における具体的な仮定表現に注目し比較対照を行う。第 10 章は、日本語と中国語の仮定表現の機能拡張と文法化の類似点と相違点について統合的観点から考察を行う。

第 5 章では日本語の仮定表現の機能拡張に関して分析を行う。仮定表現が日本語複文においてどのような構造上の特徴をもつのか、日本語における仮定表現には具体的にどのようなものがあるか、それぞれがどのような様相を呈しているかについて明らかにした後、日本語の仮定表現「ば」「たら」「なら」の機能拡張について詳しく分析する。

第 6 章は中国語の仮定表現の機能拡張に関して分析を行う。第 5 章の日本語仮定表現と同様の手順で分析を行う。仮定表現の中国語複文における構造上の特徴、中国語における具体的な仮定表現およびその様相についてまとめた後、仮定関係を表す接続(助)詞類、助詞類、副詞類の機能拡張について詳しく分析する。

第 7 章は、第 5 章と第 6 章の結果に基づいて、日本語と中国語における仮定表現の機能拡張を対照し、議論を行う。

第 5 章、第 6 章、第 7 章の機能拡張の観点を補い、第 8～9 章は文法化の観点より日中仮定表現を対照する。具体的には、指示詞との関係(第 8 章)、助詞との関係(第 9 章)、という 2 つの関係に焦点を当てて、両言語の仮定表現はどのような文法化のプロセスを辿っていったかについて議論を行う。

第 8 章は指示詞との連続性からみる日中仮定表現の文法化に関する章である。まず、日本語と中国語における仮定表現の中に指示詞を含むものを抽出し分析する。さらに、具体的な標識、日本語「そうしたら」と中国語“那么”を対照して議論を行う。

第 9 章は助詞との連続性からみる日中仮定表現の文法化に関する章である。具体的には提題助詞と文末語気助詞（終助詞）に分けてそれぞれ見ていく。まず、仮定表現と提題助詞との連続性の部分については日本語「(の) なら」と中国語“的话”を対照する。次に、仮定表現と文末助詞との連続性の部分については日本語「ば・たら」の終助詞的機能と中国語“就是 (了)”を対照して、議論を行う。

第 10 章は、これまでの章で行った議論を踏まえ、日本語と中国語の仮定表現の機能拡張と文法化の類似点と相違点について統合的観点から考察を行う。

第 11 章では、本研究のまとめと今後の課題を述べる。第 5～10 章で考察した内容をまとめた上で、本研究の意義と今後の課題について述べる。

## 第2章 理論的枠組み

本章では、本研究で援用した機能拡張および文法化に関する理論的背景を概観した上で、この理論を援用する理由を述べる。

### 2.1 機能拡張について

松本 (編) (2003) は先行研究をまとめながら「意味拡張」を次のように定義している。

1つの語が複数の意味をもつことは、ごく一般的な現象である。これが多義性である。そして、この多義性を生じさせる、基本的な意味から新たな意味への派生を意味拡張という。 (松本 (編) 2003: 14)

靱山・深田 (2003: 74-75) は、「花」という語を例として、意味拡張の概念を以下のよう  
に紹介している。以下、靱山・深田の「意味拡張」の説明をまとめる。

- (8) a. 花瓶に花を活ける。  
b. Aさんは職場の花だ。  
c. 花見に行く。 (靱山・深田 (2003: 74)、下線はそのまま)

上記三つの「花」については、a. の「花」は植物としての花を指しており、基本的な意味である。b. は植物としての花とは異なるが、それと同じ特徴「美しい」「人の目を引く」等をもつ「人」をさしている。1つの語が複数の意味をもつということは、その語が多義的であるということである。すなわち、形式と意味とは一対一の関係ではないのである。「花」のような内容語は基本的な意味から派生的な意味へ拡張し、多義をもつようになる。

機能語も内容語と同様に、複数の意味や機能をもつものがある。ただし、機能語は多くの場合は、文法的機能を表すものであるため、文法的機能そのものが拡張することがある。その拡張については、「意味拡張」より「機能拡張」という用語を使う方がより相応しいと考え、「機能拡張」という用語を用いることにする。つまり、機能語の基本的な機能 (基本的な用法) から派生的な機能 (派生的な用法) への転化を「機能拡張」と呼ぶことにする。同じ形式が多くの機能をもつことも、逆に異なる形式が類似した機能

を表すこともある。

小柳 (2018) では「機能拡張」という用語を使わず、「機能語化」と「多機能化」という用語を使って語や文法形式の変化について論じている。小柳 (2018) で挙げられた「たり」の例を説明しておきたい。「たり」の変化は以下の例を通して見られる。

(9) 「たり」の変化を示す例文

a. 付帯状態存在

遠くあれば 一日一夜も 思はずて [於母波受弓] 有るらむ [安流良牟] ものと思ほしめすな (遠くにいるから、私があなたのことを一日一夜も思わないで過ごしているだろう、とお思いにならないで下さい。) <万葉集・巻15・3736: 8C 後期成>

(小柳 2018: 45)

b. 結果継続

女君はさながら臥して、右近はかたはらに、うつ伏し臥したり。(女君は先ほどのまま倒れていて、侍女の右近はそのそばにうつ伏せになっている。)

<源氏物語・夕顔、1-p.166: 1001-1014 年頃成>

(小柳 2018: 41)

c. 結果継続

今はすでに齢も傾いて、齒も抜け、力も落ちて、ただ世の常の犬にも劣った。(老犬である私は) 今はもう歳もとり、齒も抜け、力も落ちて、ただ普通の犬にも劣っている。)

<エソポのファブラス、p.485: 1593 年刊>

(小柳 2018: 41)

d. 過去

かの勅使と連れて、リヂャの国へ赴いた。(その勅使と連れだって、リヂャ国へ出向いた。)

<エソポのファブラス、p.429: 1593 年刊>

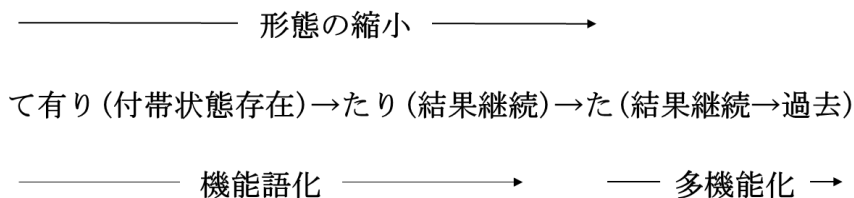
(小柳 2018: 41) <sup>10</sup>

例 (9a) の「て有り」は「付帯状態存在」と小柳 (2018: 44-45) は位置づけており、「事物の存在、事物が動作のもたらした状態を伴って存在する」として使われているとする。例 (9b) は a. の意味をさらに表意化 (小柳 2018: 45) した意味であり、「て有り」→「たり」のような形態上の変化を伴っている。例 (9c) では「た」だけが残り、結果継続を表

---

<sup>10</sup> (9) のすべての下線は小柳 (2018) のままである。

している。例 (9d) は「た」の意味が変化を起こして過去を表すようになった。小柳 (2018) はこの変化の経路を以下のように図式化する。



(小柳 (2018: 45) より引用したものである。)

図 2-1 「たり」の変化

本研究では、機能語の間に差異が存在したという小柳 (2018) の主張に賛同するが、機能語の間に境界線がはっきりしない部分があるため、「機能語化」と「多機能化」をまとめた言い方として「機能拡張」という用語を使い、広義的に捉えることにする。また、小柳 (2018) は主として日本語を例として観察したものであるが、内容語からの発達も見られる中国語の仮定表現については、「機能拡張」という用語の方が適切である。さらに、小柳の「機能語化」と「多機能化」という用語は通時的变化に重点が置かれていると見られるため、形式の共時的な振る舞いに重点を置く本研究では、「機能拡張」という用語を使用することにした。なお、各文法形式も一定の意味を有しており、機能拡張に伴う意味の変化を否定するわけではない。しかも、「機能拡張」に伴い「意味拡張」が発生する場合、「意味拡張」に伴い「機能拡張」が起こる場合、両者の前後関係は簡単に決めることはできない。この点については、第 5、6、7 章で詳しく見ていく。

## 2.2 文法化について

本研究では、機能拡張と文法化を基盤として、日本語と中国語の仮定表現の変化の一端を明らかにする。

言語研究の歴史を振り返ると、その中心はおおよそ通時的研究から共時的研究、さらに通時的研究あるいは両者の融合という流れにあると見られる(大堀 (2002)、高橋 (2016) などを参照のこと)。「文法化」という用語は Meillet が 1912 年の論文で最初に用いた用語と言われる<sup>11</sup>が、1980 年代以降文法化の研究が盛んに行われるようになる。もともと

<sup>11</sup> 戴 (編) (2007: 379) 《新编英汉语言学词典》なども参照されたい。

「内容語から機能語」という文法化の捉え方はやや「狭い」と見られていたが、研究が進むにつれて、捉え方も変わってきている。

## 2.2.1 文法化の定義

近年、文法化の考え方が日本語や中国語の研究に広く取り入れられるようになってきた。例えば、Traugott (1988, 2010 など)、Hopper and Traugott (1993)、沈 (1994, 1998)、秋元ほか (2004)、三宅 (2005) などである。文法化は言語変化の一種であり、概して「内容語<sup>12</sup>だったものが、機能語としての性格を持つものに変化する現象」(三宅 2005: 61)と捉えることができる。中国語では“实词虚化”(実詞虚化)と呼ばれており、字面的には「実質語から機能語への変化<sup>13</sup>」と理解される<sup>14</sup>。しかし、言語の変化とともに、機能語の性格がより稀薄化し、それまでなかった新しい用法をもつようになる現象も「文法化」と言われるようになった(沈 (1994, 1998))。Hopper and Traugott (1993, 2003)などは文法化の理論を拡張させて、とくに語用論、(間)主観化などの観点から文法化について説明をしている。さらに、一方向性仮説をより汎用性のある説へと発展させていっている。Heine, Claudi, and Hünnemeyer (1991)はメタファー、メトニミーなど認知意味論的観点から文法化について論じている。Lehmann (2015)は文法化に関するまとまった研究書であるが、文法化の定義、文法の範疇から文法化プロセスとパラメータについて詳しく紹介しており、1982年に第一版が出版されて以来、文法化の基本的文献として広く読まれている。文法化については次の定義がよく使われている。

“We defined grammaticalization as the process whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions, and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions. We also characterized it as the process whereby the properties that distinguish sentences from vocabulary come into being diachronically or are organized synchronically.”

---

<sup>12</sup> 内容語、機能語は一般言語学用語で、実質的な内容(概念)を表す語は内容語、実質語、概念語と呼ばれるが、実質的な内容(概念)をもたない語は構造語、機能語、付属語と呼ばれている。

<sup>13</sup> 日本語文法学会(編)(2014: 145)『日本語文法辞典』による。

<sup>14</sup> 中国の文法化に関する研究は最初、“实词虚化”と「文法化」を区別せずに行われたが、研究が進むにしたがって、中国語の“实词虚化”は語の意味上の変化を指すことが多く、「文法化」は文法形式の獲得するプロセスとそれに関連する理論を指し、両者には同一の意味ではないと指摘されるようになった(沈(1994, 1998)、杨(2016)など)。

(語彙項目や語彙構造が、ある言語の文脈の中で文法的な機能を果たすようになる過程で、いったん文法化が進むと、一層文法的な機能を果たす語に変化しつづける過程である。それはまた、語彙と文を区別する特質が、通時的に生まれたり共時的に編成される過程である。) (Hopper and Traugott (1993: xv)、日野訳 (2003: xv))

また、文法化には、語彙項目の文法機能への変化、文法機能がさらに変化しつづけるという二つの側面が含まれているとしている。さらに、通時的にも共時的にも文法化を観察することができる。大堀 (2002: 179) は Hopper and Traugott (1993) などを参照した上で、「文法を構成する要素が新たに生まれるとき、それらはどこからやって来て、どんな経過で発達するのだろうか。ある要素が文法構造の中に組み込まれ、何らかの機能領域を実現するとき、このプロセスを文法化という」とした。Brinton and Traugott (2005) は、次のように文法化の定義を捉えている。

“Grammaticalization is the change whereby in certain linguistic contexts speakers use parts of a construction with a grammatical function. Over time the resulting grammatical item may become more grammatical by acquiring more grammatical functions and expanding its host-classes.”

(文法化は、発話者が文脈の中で、構成体の一部を文法的機能を持って使用するようになる変化である。その創り出された文法項目は、時間とともに、さらに文法機能を獲得して語基範疇を拡張することで、より文法的になる。)

(Brinton and Traugott (2005: 99)、小柳訳 (2018: 54))

文法化は、文法的要素が (史的に) 発達して、関連する一連の機能的・語用論的・意味的・形態統語的・音韻的変化が生じることと広義に捉えられるようになった (Traugott (2010)、福元訳 (2011: 59))<sup>15</sup>。本研究では、これまでの先行研究を参照して、「文法化」を言語変化の一種であり、内容語から機能語へ、機能語から更なる発達で、一連の形態統語的・意味機能的・語用論的<sup>16</sup>・音韻的変化が生じることと広義に捉えることにする。

---

<sup>15</sup> Traugott, E. C. (著)、福元広二 (訳) (2011) 「文法化と (間) 主観化」『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』(高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編)), 大修館書店, 59-70.

<sup>16</sup> 文法化には語用論あるいは語用論化が深く関与していると考えられる。さらに、(間) 主観化という意味変化の方向性も出されている。Traugott (2003: 134) は、“nonsubjective > subjective > intersubjective” という非主観的 > 主観的 > 間主観的の方向が意味変化に影響を与えると述べ

## 2.2.2 文法化に関する通時的と共時的観点

文法化という言葉自体には「化」が含まれており、ある種の「変化」と理解できるかもしれない。Matisoff (1991: 383) が、“Grammat (ic[al]) ization is inherently a diachronic concept.” と述べたように、一般的に文法化は通時的变化と捉えられている。Givón (1971)、Hopper and Traugott (1993)、Lehmann (2015) などは全て、主に通時的観点から捉えた研究成果であるといえる。河上 (1996: 180) は「文法化研究には、大きく分けて通時的 (歴史的) 研究と共時的研究がある。通時的研究は、文法形の発展および意味変化を歴史的に探るものであり、共時的研究は、談話との関わりで意味変化を探るものである。」と指摘している。言語の発展から考えれば、現段階 (ある時期) の言語現象はその前の一時期の変化した結果であるともいえる。しかも、「古い形式と新しい形式、形態素の機能には重なり合う時期が必ずあるので」 (Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 128))、新旧形式の共時的側面と通時的側面には分けにくい部分が存在しており、その間には過渡的段階があるため、つまり連続的であると考えられる。一方、秋元ほか

---

ている。

“ ‘Grammaticalisation’ is the process whereby lexical items or phrases come through frequent use in certain highly constrained local contexts to be reanalysed as having syntactic and morphological functions, and, once grammaticalised, continue to develop new grammatical functions. ” (文法化とは、語彙項目やフレーズが高度に制約された文脈で頻繁に使用されることによって、統語的および形態的機能を再分析されるプロセスである。ひとたび文法化が完成すれば新しい文法機能を創出し続ける。) (Traugott (1995a: 32)、引用者訳)

そして、文法化における (間) 主観性を次のように定義している。

It is a gradient phenomenon, whereby forms and constructions that at first express primarily concrete, lexical, and objective meanings come through repeated use in local syntactic contexts to serve increasingly abstract, pragmatic, interpersonal, and speaker-based functions. ( (間) 主観性とは) 最初は主として具体的で、語彙的で、客観的な意味を表す形式や構文が、特定の統語的文脈で繰り返し使用されることを通して、だんだんと抽象的で、語用論的で、対人関係的で、話し手に基盤を置く機能を果たすようになる段階的な現象。

(Traugott (1995a: 32)、大橋 (2024) を参照した上で訳した)

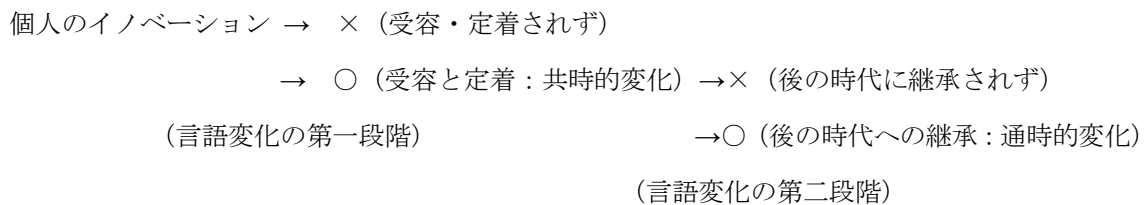
さらに、Traugott (2010: 30) は「文法化と (間) 主観化はそれぞれに独立した現象ではあるが、重なり合うところもある (福元訳 (2011: 59)) 。」と主張している。このように、文法化と (間) 主観化については検討する余地があり、両者をどのようにうまく融合して言語変化の現象を解釈するかについてはこれから更なる検討していく必要があり、今後の課題としたい。

(2004: 4) は「文法化は主として通時的変化に対して言うが、必ずしも通時的な面だけではなく、文法化のある段階ではお互いに共存する異形が存在することから、共時的な面にも関係する」と述べている。つまり、共時的側面は通時的な変化の結果であり、共時的な変化は通時的な変化の起点であると考えられる。

高橋 (2016) は、言語変化のプロセスについて次のように述べている。

- ・共時的文法化の始まりである抽象的な意味を持つ語の派生は、派生元の語とはカテゴリーを異にするという点において、非連続的である。
- ・共時的文法化を経た語が、さらに後世に継承されていく時、通時的文法化の特性が現れる。(中略) こうした通時的文法化のプロセスにおいて、古い意味・用法が徐々に使用されなくなる一方で、より抽象的で内容が希薄な新しい意味・用法が獲得されていく様子は、漸進的な変化と捉えられる。」
- ・文法化は共時面の非連続的なプロセスと、通時面の連続的・漸進的なプロセスの両特性を合わせ持つのである。(高橋 2016: 61-62)

高橋 (2016) の説明をまとめると、以下のようになる。



(高橋 (2016: 57-58) の表 1 と表 2 をまとめたもの)

図 2-2 言語変化の段階

高橋 (2016) は文法化にはいくつかの段階があると指摘し、次のようにも述べている。

文法化は通時的な複数の時代に及ぶ言語変化を表すものである。文法化の第一段階の「共時的文法化」を経て、さらに後世へと継承されるプロセスが文法化の第二段階の「通時的文法化」である。通時的文法化は、その変化の度合いに応じて、さらに第三段階、第四段階等の区分をすることができるだろう。(高橋 2016: 56)

つまり、言語変化については「共時的 → 通時的 → 共時的 → 通時的 ……」のように繰り返されて形式が常に変わっていつているということである。

本研究は現代日本語と中国語に着目して、主として共時的文法化の観点から日中仮定表現の文法化の類似点と相違点について検討する。

### 2.2.3 文法化に関する基準

大堀 (2005: 3) は、典型的な文法化を「自立性をもった語彙項目が付属語となって、文法機能をにうようになっている」と定義づけている。さらに、文法化の進み方を説明するために、先行文献を参照した上で日本語への適用を考慮して 5 つの基準を設定している<sup>17</sup>。

#### (10) 文法化の基準

基準 1 意味の抽象性 (意味のスキーマ性の度合い)。具体的な内容をもった語彙項目の意味がスキーマ化され、一定の機能領域を実現するようになるプロセス。

(例: 「ところ」: 具体的場所→抽象的状況・時間。)

基準 2 範列の成立 (閉じたクラスをなすか)。格・数・時制・態の標識のように少数且つ有限の対立からなる要素の集合 (範列・パラダイム) は、抽象度の高い意味を表す。

(例: 代名詞などは閉じたクラスと考えられがちだが、日本語の人称代名詞「僕」「私」「オレ」の多様性を考えると、閉じたクラスと開いたクラスの間にあたり、英語などと異なる扱いが必要である。)

基準 3 標示の義務性。特定の形態素による標示が、ある機能を表すために要求されることが義務性である。

(例: 「たち」や「ら」による日本語の単数/複数の対立は標示が義務的ではないので、文法化の度合いは低い。)

基準 4 形態素 (形式) の拘束性。「自立語から付属語へ」という変化である。文法化の進行の反映として、拘束性が増すときには音韻の縮約がともなうことがある。

(例: 「(て) しまう」から「ちゃう」への変化、「(て) おく」から「とく」への音韻の縮約。)

基準 5 文法内での相互作用。文法全体の中で、他の部分と相互作用をもつかという、

---

<sup>17</sup> 大堀 (2005: 3-4) を中心にして、大堀 (2002: 182-183) の記述を適宜組み合わせたものである。

文法内の位置づけに関する基準がある。

(例: 「決して」はもともと強調表現であるが、現在は否定との相互作用があり「決して～ない」という呼応は文法規則の一部となっている。)

上記の基準により文法化の度合いを測ることができる。大堀はこれらをまとめて図式化して以下のように示している。

← 低い		高い →
具体的	意味・機能	抽象的
開いたクラス	範列の成立	閉じたクラス
随意的	標示の義務性	義務的
自由形式	形態の拘束性	拘束形式
相互作用なし	文法内の相互作用	相互作用あり

(大堀 2005: 4)

図 2-3 文法化の度合い (大堀 (2005))

大堀 (2002) は以上の基準に即した例を文法化の典型例として、さらに視野やその範囲を広げて周辺のケースが存在するとしている。大堀 (2005) は文法形式が拡張されて異なる機能をもつようになり、構文のおよび語用的な要素も考慮に入れて文法化の適用範囲を検討している。すなわち広義の文法化が存在して、以下の 3 つのケースも文法化に含まれるという立場をとる。

#### (11) 広義の文法化

- ① 多機能性の発達<sup>18</sup>。元々文法形式であったものがさらに拡張されて異なる機能になうようになるプロセス、すなわち多機能性の発達である。

(例: 格標識から接続構造の標識への拡張、日本語では格助詞の「が」から逆接を表す接続助詞への転用。)

- ② 構文の発達。一定の文法機能と結びついた語 (またはあるカテゴリーに属する語や句) の配列、すなわち構文までも含めることが可能である。

---

<sup>18</sup> 「多機能性」は大堀 (2002) では文法化の周辺のケースとして検討していたが、大堀 (2005) では構文の発達と語用論的標識の発達を加えている。

(例: 「～のは～だ」という焦点化構文の成立。)

- ③ 語用論的標識の発達。文の中核となる意味 (否定・格関係など) を表す形式だけでなく語用論的な機能を果たすケース。

(例: 接続助詞 (「けど」) や名詞 (「わけ」) などが語用論的機能をにやう文末表現への変化。)

(大堀 2005: 6-10)

以上の文法化の適用範囲を確認した上で、本論文も広義の文法化の意味を取ることにする。第 5、6、7 章では主に機能の発達から日中仮定表現の機能拡張を確認し、第 8、9 章からは第 5、6、7 章の分析を参考にして、具体的な標識の文法化プロセスを両言語の対照を行いながら見ていきたい。さらに第 10 章は両言語の文法化の類似点と相違点をまとめ、その理由を述べる。

#### 2.2.4 文法化の方向性

文法化は、内容語から機能語へと変化し、その方向性は Hopper and Traugott (1993) では、「特殊な文脈で使われる語彙項目 > 統語論的 > 形態論的」(日野訳 (2003: 116)) と指摘している。つまり、逆方向はないということである。語彙のもっている実在の意味が次第に薄くなって、より抽象的な意味へと変化する、この方向性は文法化の定義と合致している。Hopper and Traugott (1993) と同時に、「ある形式が語彙形式から文法形式に文法化するとき、それは、名詞とか動詞といった主要な文法的範疇に認められるような形態論的・統合論的特性を失う傾向にある。(Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 128)) 」とも述べており、いわゆる「開いたクラス」から「閉じたクラス」へと文法化が進むことを述べている。Hopper and Traugott (1993) では「開いたクラス」を大きな文法範疇として、主に名詞と動詞で代表されるとし、「閉じたクラス」を小さい文法範疇として、接続詞や助動詞や代名詞で代表されるとする。「大きな文法範疇>形容詞・副詞 > 小さな文法範疇 (Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 126)) 」が示すように、後にある小さい文法範疇は前の文法範疇に由来するという一方向性仮説を立てた。この一方向性仮説は絶対的なものではなく、反例があると指摘されている (Matsumoto (1988: 340-341)、Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 218-219) などを参照されたい)。

三宅 (2005) は、「内容語」と「機能語」というカテゴリー間に明らかな境界線が入れない場合を念頭に、次のように述べている。

文法化に関する研究は変化の漸次性／カテゴリーの連続性を捉えなければならない、  
というわけでは必ずしもない。静的に、変化前と変化後を異なった体系とみなし、  
両者のパラメーター設定を考えるという対照的研究も有り得るので、今後はそのよう  
な研究があってもよいと思われるが、現在のところ、文法化に関する研究は、動的  
に変化を捉えようとするものが主流であるし、そこにこそ有効性が認められている。

(三宅 2005: 63)

現代日本語の文法化研究には、カテゴリーの連続性に着目し、「内容語」と「機能語」  
の変化の過程とその中間段階の存在を積極的に認めることが重要であると考えられる。

小柳 (2018: 89-102) は内容語から機能語への変化を典型的な文法化として、機能語が  
さらに「多機能化」するとしている。

#### (12) 文法変化の方向的類型

機能語化：内容語が機能語になる変化。

多機能化：機能語が拡張的に新しい機能を持つ変化。

(小柳 2018: 93)

また、「機能語」自体の定義についても難しいと指摘した上で、詳しい定義を出して  
いる。

#### (13) 機能語の定義

① 機能語は、統語的あるいは意味的機能を有し、かつ内容的・素材的な意味を表さ  
ない、あるいは希薄な語である。

② 機能語は、付属的であることと必然的な関係を持たず、自立的な機能語もある。

(小柳 2018: 91)

例えば、日本語の中には、接続詞と接続助詞はどちらも機能語のカテゴリーに属して  
おり、接続詞は接続助詞より自立的であることは明らかであろう。また、中国語の中  
では、助詞“的话”と語気助詞“呢”は接続詞“那么”と副詞“就”より自立性が低いこと  
もはっきりしている。そのため、本研究では小柳 (2018) に出されている「機能語」の定  
義に従い、「機能語」をより自立的であるか、より付属的であるかによって詳しく分け、

「自立的機能語」と「付属的機能語」という名称も援用する。こうすれば、内容語から機能語への変化というプロセスも詳細に分類することができる。

表 2-1 新語の生産の類型

		生産される新語		
		内容語	付属的機能語	自立的機能語
資材	内容語	<b>多内容化</b>	<b>機能語化 A</b>	<b>機能語化 B</b>
	付属的機能語	内容語化 1	<b>多機能化 1A</b>	多機能化 1B
	自立的機能語	内容語化 2	多機能化 2A	<b>多機能化 2B</b>

(小柳 (2018: 94) より引用したものである。太字は原文のまま、事例の多い類型の意味である。)

小柳 (2018) は例を挙げてそれぞれの具体的な意味を説明している。

(14<sup>19</sup>) 文法変化の方向性

- a. 多内容化: 内容語 → 内容語  
例: 動詞や名詞の多義性
- b. 機能語化 A: 内容語 → 付属的機能語  
例: はべり (丁寧の存在動詞 → 丁寧の複合動詞後項)
- c. 機能語化 B: 内容語 → 自立的機能語  
例: つゆ (名詞 → 程度副詞)
- d. 多機能化 1A: 付属的機能語 → 付属的機能語  
例: た (アスペクト → テンス)
- e. 多機能化 1B: 付属的機能語 → 自立的機能語  
例: が (接続助詞 → 接続詞)
- f. 多機能化 2A: 自立的機能語 → 付属的機能語  
例: われ (代名詞 → 終助詞/文末助詞)<sup>20</sup>
- g. 多機能化 2B: 自立的機能語 → 自立的機能語  
例: まこと (副詞 → 感動詞)

(小柳 (2018: 95、97、118) を参照した上で補足しながら作成した。)

<sup>19</sup> 本研究の例文番号を合わせるため新しくつけた。

<sup>20</sup> 小柳 (2008: 94) では日本語では「この (筆者: 2A を指す) の類型が劣勢である」と指摘し、例外として扱われている。

また、表 2-1 の内容語化 1 と内容語化 2 および多機能化 1B と多機能化 2A はあまりない類型であると指摘している。

中国語の中では、語の品詞性に関する論争がよく行われてきた。形態上の変化が乏しいことがその理由の一つであろう。言語の歴史変化とも密接に関わっていると考えられる。そのため本研究では、仮定表現の文法化プロセスをまとめる際に、小柳 (2018) が出したこれらの用語と定義を参照する。

文法化の研究が深まるにつれて、扱う範囲が次第に広がってきている。元々、内容語が機能語に拡がるという現象を扱っていたが、機能語がさらに多くの機能をになうようになってきたり、さらに語用論的標識として使われるようになってきたりするものも研究の視野に入ってきた (高田・椎名・小野寺 (編) (2011)、高田・小野寺・青木 (編) (2018) を参照)。Traugott (1988: 407) によると、文法化は、初期の段階では意味・語用論的強化が、その後の段階では漂白化と関わっていると見られる。秋元ほか (2004: 4-7) によれば、「語用論的推論」とは、会話の含意がある文脈中に頻繁に現れることによって慣習化していき、その過程で多義が生じ、やがて一方の意味が優勢になることを言う。また、「漂白化」とは、意味の弱化または消失のことで、意味の一般化・意味の縮小、脱意味化とも言われる。しかし、意味が完全に消失してしまうことはなく、ある程度保持されると説明している。

### 2.3 機能拡張と文法化を援用する理由

山梨 (2000) は、通時的な変化を辿って現在の言語現象を解釈することについて、次のように述べている。

日常言語を記述していく際には、一般に、時間的・歴史的な変化の側面にかかわる通時的な考察と、この側面を捨象した共時的な考察は区別していくアプローチがとられる。(中略) 共時的な視点からみた言語現象の一面が、通時的・歴史的な変化にかかわる要因によって動機づけられている可能性も十分に考えられる。

(山梨 2000: 6-7)

本研究でも、文法化に関する理論を概観して上で、共時的と通時的を相補的に連続的に捉え直すことにする。

三宅 (2005: 61-73) は文法化の共時的研究が有意義であると主張している。その意義を2点にまとめている。

- ① 同一の形式における内容語的な用法と機能語的な用法との連続性、及び両者の有機的な関連性を捉えることが可能になること。
- ② 文法化後の機能語としての意味・文法機能を説明する際に、文法化前の内容語としての意味からの類推が可能になること。(ただし、②は①の帰結)

(三宅 2005: 73)

本研究も、文法化は連続性をもっているものであり、文法化を共時的に研究することは有意義であると考ええる。その上で、「機能拡張」と「文法化」の2つの部分に分けて議論していく。機能拡張の議論では、仮定表現の多機能性および機能間のつながりを示すことに重点を置く。文法化の議論では、仮定表現の機能拡張を実現させる理由を掘り下げて、具体的にはどのような形式と関わってどのような変化を経ているかについて検討することに重点を置く。

本研究は、以上の先行理論に基づいて、まず、仮定表現に関する先行研究をまとめた上で、機能拡張と文法化の観点から仮定表現を記述する。機能拡張に関する章(第5章は日本語、第6章は中国語)では、日本語と中国語の仮定表現の具体的な用法・機能を確認し、それら用法・機能の繋がりを明らかにしていく。続く第7章では、両言語の仮定表現の機能拡張について対照研究を行う。その後、文法化に関する章(第8章は指示詞との融合、第9章は助詞との融合)では、対応関係を見せる具体的な表現に注目して、それぞれの文法化プロセスを対照する。第10章では、これまでの結果に基づき、日本語と中国語の仮定表現の機能拡張と文法化の類似点と相違点についての考察を行う。

### 第3章 日中仮定表現に関する先行研究概観と本研究の位置づけ

20世紀の初めから日中両言語において、「複文」に関する問題が研究者の関心を引き、今日までに数多くの成果が報告されている。本章では、日中両言語における仮定表現についての先行研究に触れる前に、まず両言語における複文の分類及びその中での仮定複文の位置づけを確認しておく。次に仮定関係を表す標識に関する主な先行研究をまとめ、さらに文法化あるいは言語変化の観点から仮定表現を扱う研究をまとめる。最後に、先行研究を踏まえた上で本研究の位置づけを提示する。

#### 3.1 日本語・中国語の複文における仮定複文の位置づけ

日本語の「複文」は中国語で“复句”と呼ばれるが、説明の便宜上、本研究では統一した言い方、すなわち「複文」を使用する。以下、両言語の複文における仮定複文の位置づけを見ておきたい。

##### 3.1.1 日本語の複文における仮定複文の位置づけ

日本語の文はその構造的分類から「単文」と「複文」に分けられる<sup>21</sup>。「単文」とは、一つの節で成り立っている文である(例(15))のに対して、「複文」とは、節を二つ以上含む文である(例(16))。

(15) 北海道の冬は寒い。 (宮島・仁田(編)1995:4)

(16) 酒を飲みすぎて、彼は悪酔いをしてしまった。(同上)

次に、日本語複文の下位分類について詳しく見てみよう。従来の研究では、複文の分類は形式、構文、意味という三つの観点から論じられている。まず、形式的な側面から説明するものに寺村(1981)が挙げられる。寺村(1981)は文を繋ぐ形式について以下の6つを挙げている。

- (i) 一つの文の文末の述語の活用形でつなぐ
- (ii) 接続助詞でつなぐ

---

<sup>21</sup> 日本語学校文法の中には、英文法の Simple Sentence、Compound Sentence、Complex Sentence という伝統的な三分法になぞらえながら、「単文」と「複文」と「重文」に分類したものもある。

- (iii) 一つの文を他の文の名詞の修飾節にする (文の連体節化)
- (iv) 一つの文を他の文の名詞的構成要素とする (文の名詞節化)
- (v) 引用 (文の引用節化)
- (vi) 接続詞でつなぐ (「複文」から「談話」へ) (寺村 1981: 12)

この (i) ~ (vi) の箇条書きは文接続の形式から日本語の複文にどのような種類があるのかを示している。下線 (引用者による) 部分の「接続助詞」と「接続詞」について本研究では「接続表現」という言い方に統一する (1.2「本研究における用語の説明」に詳しい)。

一方、日本語学における「複文」の研究は、「連体修飾節」と「連用修飾節」を中心として行われ、特に「従属度 (陳述度)」という観点から三尾 (1942)、三上 (1953)、南 (1974, 1993) らによって「複文の階層性」に関する体系的な理論が提出された<sup>22</sup>。三上 (1953) は、「①補語を食い止めるか否か。②連体法に収まるか否か。③丁寧化が早いか遅いか。」という三つの「準則」により、用言の活用形を、「単式・軟式・硬式」に分類している。条件節は、「軟式」に分類されている。南 (1974) は三上の分類を参考にして、述語的部分の要素の現れ方とその部分以外の要素の現れ方などに準じて、接続助詞を A・B・C 類に分ける階層的類型を提案した。

- A 類:** (～ながら (継続)、～つつ、～て (付帯状況)、～ (連用) 中止形 (継起) 等)  
 生起可能な要素: ガ格以外の格成分、ボイス (及び関連する副詞成分)
- (a) 太郎は [ラジオを聞きながら]、勉強しました。
- B 類:** (～のに、～ので、～ながら (逆接)、～と、～なら、～たら、～ば、～て (理由・継起・並列)、～ても、～ (連用) 中止形 (並列・理由) 等)  
 生起可能な要素: A 類に含まれる要素、ガ格、アスペクト、否定 (肯定)、丁寧さ、テンス (及び関連する副詞成分)
- (b) [雨が降って]、試合は延期された。
- C 類:** (～が、～けど、～から、～て (逆接)、～ (連用) 中止形 (逆接)、～し等)  
 生起可能な要素: B 類に含まれる要素、主題、対事的モダリティ (及び関連する副詞成分)

<sup>22</sup> 「複文」に関してはこれ以外に益岡 (1997)、野田ほか (2002)、日本記述文法研究会 (編) (2008)、前田 (2009) などとも参照されたい。

(c) 「雨は降ったけど」、地面はあまり濡れていなかった。

(南 (1974: 114-139) をまとめたもの、下線は引用者)

上記の三上と南両氏の分類を整理すると、図 3-1 のようになる。

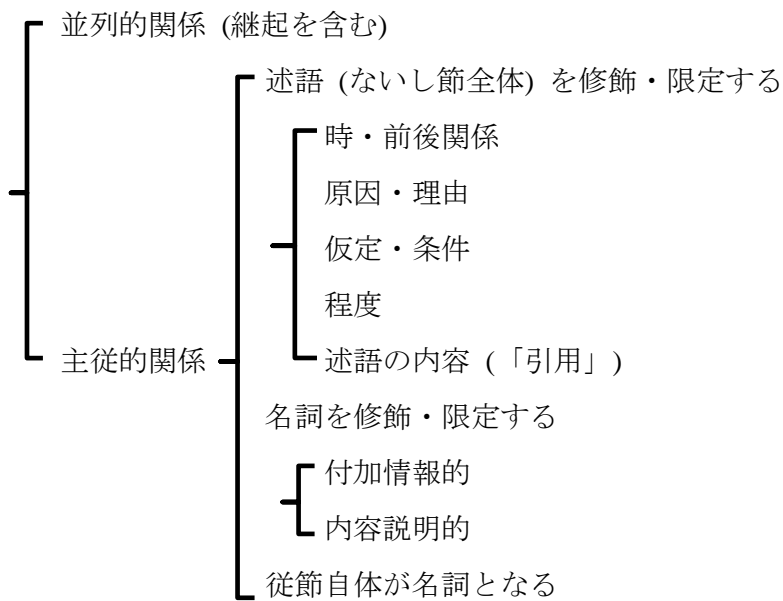
三上		南
単式	.....	A 類
複式	┌ 軟式 ..... └ 硬式 .....	B 類
		C 類

図 3-1 三上 (1953) と南 (1974) の日本語複文の構造上の分類

図 3-1 からわかるように、三上と南の分類は基本的に対応する。しかし、三上 (1953: 183) では「ば」は代表的な軟式、「たら」はそれより硬く、「なら」はさらに硬いと述べている。南 (1974: 128) は仮定関係を表す「と」「ば」「たら」「なら」の四形式をいずれも B 類に属するとしているが、前接する述語的部分の要素には違いがあるとも記している<sup>23</sup>。

最後に、意味的關係から複文を分類したものを見てみよう。寺村 (1981) では節と節の意味的關係から複文を、並列的關係を表すものと主従的關係を表すものに大別する。詳細は以下の通りである。

<sup>23</sup> 有田 (1991: 104) は南の「たら」「なら」が B 類に属するという主張に反対している。有田 (1991) は「～たら」と「～ば」の属する階層と「～なら」の属する階層が全く同様ではないとし、「バ、タラ節は、スルーシタの対立を含まず、特定の叙述を表すのにシタが用いられないという点では、A 類の副詞節に近く、ナラ節はスルーシタの対立を含み、特定の叙述を表すシタが用いられるという点で、カラ、ノでなどの B 類の副詞節に近い。つまり、バ、タラ節とナラ節とは異なる階層に属している可能性がある。」と述べている。



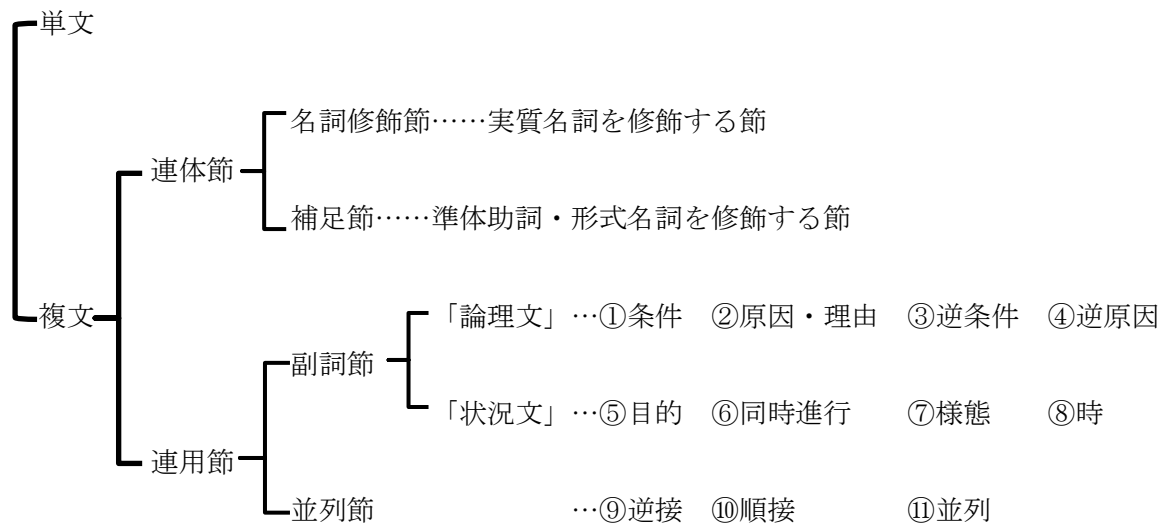
(寺村 1981: 19)

図 3-2 日本語複文の意味上の分類<sup>24</sup>

ここで「並列的關係」と「主從的關係」というのは、前後節には修飾・限定する関係をもつか否かによる分類である。「仮定・条件」は主從的關係を持っている「複文」の一類である。

一方、前田 (2009) は先行研究を振り返った上で、その立場を述べている。複数の節同士が複文を構成し、その関係を「連体節」と「連用節」に大きく分けた上で、連用節の下位分類の中に副詞節を挙げている。その上で、前後節の意味関係からさらに「条件」「原因」など類別を行った。前田 (2009: 16-17) の 2 つの分類図をまとめると図 3-3 のようになる。

<sup>24</sup> 寺村 (1981) ではこの図を「節と節の意味的關係」と題しているが、前述の形式上、構文上の分類とより明確に対比させるため、本研究では「日本語複文の意味上の分類」とした。



(前田 (2009: 16-17) の 19) と 20) の図をまとめたもの)

図 3-3 日本語の複文の分類

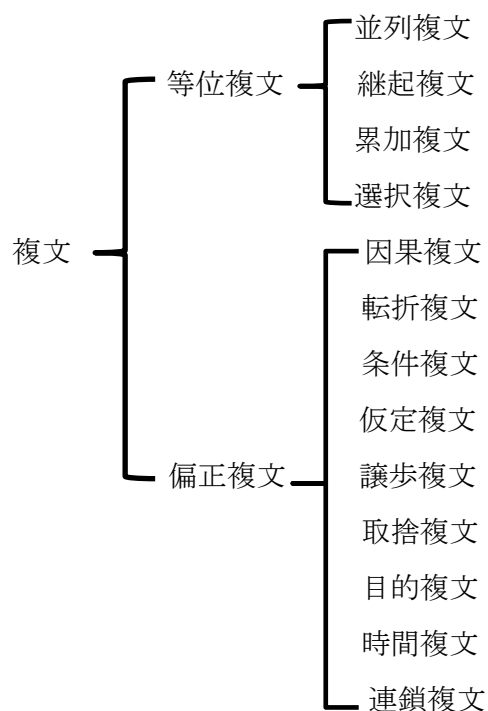
寺村 (1981) は節間の並列的關係と主従的關係を先に分けて、その次に述語を修飾するか、名詞を修飾するかで、いわゆる連用節と連体節に下位分類した。前田 (2009) はそれと異なり、先に連体節と連用節を区別した。その後、連用節の下位分類に副詞節を入れた。前田 (2009) は「仮定」を取り出さず「条件」の中に入れて見られるが、寺村 (1981) は「仮定・条件」として取り扱っている。本研究は、仮定節を主従的關係を表す複文とし、さらに「仮定」と「条件」を区別しているという点から、寺村の捉え方に従う。

### 3.1.2 中国語の複文における仮定複文の位置づけ

中国語の文の種類にも「単文」(“单句”)と「複文」(“复句”)の区別がある。これは一種の文構造上による分類であると言われる(刘、潘、故 (2019) など)。単文は一つの主語—述語構造(述語)だけを含むもので、複文は二つまたは二つ以上の意味的に関連のある単文から構成されるものである<sup>25</sup>。しかし、複文の下位分類の展開は主に意味的観点から行われている。刘、潘、故 (2019) では節と節の文法関係に基づいて、複文を等位複文(対等の複文)と偏正複文(非対等の複文)の二つの類型に大別する。つまり、前節と後節が並列的に、あるいは主従的に存在するかによる分類である。しかし、

<sup>25</sup> 中国語の「単文」「複文」の定義は刘、潘、故 (2019) とその訳本(片山ほか (1991))を参考にしている。

この二つの類型を細分化する際に、ほとんどが前後節の意味上の関係に依存する分類になっている。例えば、以下の図 3-4 に示す通りである。



(刘、潘、故 2019: 864-872)

図 3-4 中国語の複文の分類

図 3-4 の「並列」「条件」「假定」「因果」「譲歩」などはすべて前後節間の意味関係に基づいた分類である。これを日本語の複文分類の図 3-3 と対照してみると、假定複文は主従的關係を表す複文の下位分類に帰属することが両言語の共通点であることがわかる。

一方、中国語における「假定複文」に関する研究は「条件複文」、「譲歩複文」、「因果複文」との関わりや分類がその中心となる（ここでの「假定」「条件」「因果」などはすべて狭義的解釈である）。「假定複文」（假设句）は黎（1924: 218）によって最初に正式に提示され、主従的複文に属する「仮説的原因文」とであると定義されたが、これはのちに争点となった。なぜなら、「仮説的原因文」には、「仮説的」（假定関係）、「因果的」（因果関係）、「条件的」（条件関係）という三つの要素が含まれており、より複雑なものを見なせるからである。これらの「関係」は言語学的分類の根拠となる一方で、「假定複文」「条件複文」「譲歩複文」など、それぞれの複文の間の境界は曖昧なものとなっ

た。これらの関係の中でどれが主要な位置を占めるかによって分類すると、次の表 3-1 のようになる。

表 3-1 先行研究における中国語複文の分類<sup>26</sup>

著作（《》書名記号を略す）	假定複文	譲歩複文	条件複文
新著国語文法（黎（1924））	+	+	+
汉语知识（张（1979））	+	-	+
汉语语法纲要（王（1982））	-	+	+
现代汉语语法讲话（丁ほか（2002））	-	+	+
现代汉语（黄ほか（2002））	+	-	+

表 3-1 からわかるように、最も早期に提示された黎（1924）の分類では「假定複文」は一つの独立した類型であるとし、张（1979）と黄ほか（2002）はこの主張を踏襲している。一方、王（1982）、丁ほか（2002）は「假定複文」を「条件複文」の下位分類に属すとし、张（1979）、黄ほか（2002）は「譲歩複文」を「假定複文」に類別した。その他、吕（1942）や邢（2001）も同様に、假定文を因果文（広義的因果文）の範疇に分類する。このような分類を成すのは意味上から複文を分類することによると考えられる。また、「假定複文」に示された複雑性もその一因である。これらの「假定複文」と隣接するものを明らかにするためには、前提として吕や邢が主張したとおり、「假定」「条件」「因果」は同一レベル<sup>27</sup>のものではなく、「因果」は「假定」「条件」などよりも基本的なもので、ベースになるということをも確認する必要がある。具体的には、吕（1942）は、「広義の因果関係」を次の三種に分類している。

#### (17) 広義の因果関係の三種類

1. 假设句: 若甲则乙, 甲乙皆虚, 理论的, 一般的, 泛论因果。（“要是……就……”）
2. 推论句: 既甲则乙, 甲实乙虚, 应用理论于实际, 推断因果。（“既然……就……”）

<sup>26</sup> “+” は当該項目がその著作に出ており、“-” は当該項目がその著作に出てないことを意味する。

<sup>27</sup> 「假定」「条件」「因果」は日本語と中国語の両言語においても、広義的な捉え方または狭義的な捉え方がある。「因果」を広義的に捉える場合、「假定」や「条件」はその下位類となるが、「条件」を広義的に捉える場合、「因果」や「假定」はその下位類となるのである。本研究の注目点はこれらの具体的な違いではないため、これ以上触れないことにしておく。

3. 因果句: 因甲故乙, 甲乙皆实, 实际的, 个案的, 说明因果。(“因为……所以……”)  
(吕 1942: 428)

日本語訳:

1. 仮定文: 甲であればすなわち乙、甲、乙はともに虚 (仮定、非リアリティ) である、理論的で一般的で、幅広く因果を論じる。(関連詞語: “要是……就……”)
2. 推論文: 甲であるからにはすなわち乙、甲は実 (事実) で、乙は虚 (仮定) である。理論を実際に応用した推断的因果関係である。(関連詞語: “既然……就……”)
3. 因果文: 甲であるが故に乙、甲乙ともに実 (事実) である。实际的で個別的で、因果関係を説明する。(関連詞語: “因为……所以……”)

(新田 (2007: 36) に基づき若干修正したものである。)

呂の解釈を見ればわかるように、「仮定文」「推論文」「因果文 (狭義の因果文を指す)」はすべて「広義の因果文」の下位分類に置かれる。これは日本語で「と・ば・たら・なら」が「仮定的・順接の因果関係」を表す接続表現として扱われるのと似ている。一方、王ほか (1994) は条件関係を出発点として、現代漢語のすべての複文を条件文と非条件文とに区別した上で、前者は偏正複文、後者は等位複文にあたりとし、さらに「仮定複文」を「条件複文」の下位分類の一つであるとしている。これに対して、日本語の場合では、「仮定的」という点に関してみると、周知のように、条件文には「仮定条件」と並んで「確定条件」と呼ばれるものが存在する。すなわち、日本語の「仮定文」は「条件文」の下位分類として扱われている。

以上の日中両言語の複文の意味上の分類を寺村 (1981) と刘、潘、故 (2019) を例としてまとめると、表 3-2 のようになる。

表 3-2 日本語と中国語における複文の意味上の分類<sup>28</sup>

	日本語 (寺村)	中国語 (刘、潘、故)
	時・前後関係	時間複文
	原因・理由	因果複文
		目的複文

<sup>28</sup> この表は寺村と刘、潘、故の「主従的關係」文の下位分類である。両氏以外にも、種々の分類があるため、ここではその一端のみを示した。

偏正複文 (主従的關係)	假定・条件	假定複文 条件複文 転折複文 譲歩複文
	程 度 述語の内容（「引用」） 名詞を修飾・限定する (付加情報的と内容説明的) 従節自体が名詞となる	
		取捨複文 連鎖複文

上記の表からわかるように日本語の「假定・条件」は中国語の「假定複文」「条件複文」「転折複文」「譲歩複文」にほぼ対応するが、その細かな差異を明らかにするために、蓮沼ほか (2001) の説明と例文を引用しながら分析する。蓮沼ほか (2001) では、条件表現を、出来事を仮定的に予想しているのか、実際に起こった出来事について事実に述べるのかに分け、さらに予想される結果が起こる場合 (順接) とそうでない場合 (逆接) に分類している。この分類は、次のようにまとめることができる。

表 3-3 蓮沼ほか (2001) の条件表現の下位分類

意味 接続	仮定的	事实的
順接	薬を飲めば頭痛が治る。	薬を飲んだので頭痛が治った。
逆接	薬を飲んでも頭痛が治らない。	薬を飲んだのに頭痛が治らなかった。

(蓮沼ほか 2001: 11)

この「順接・仮定的」「順接・事实的」「逆接・仮定的」「逆接・事实的」の4つはそれぞれ中国語の「假定複文」「因果複文」「譲歩複文」「転折複文」に一致すると考えられる。(表3-2と3-4の灰色で塗りつぶした枠内の「複文」の前の表現は中国語の言い方である。)

表 3-4 日中両言語における仮定複文の対応関係

意味 接続	仮定的	事実的
順接	仮定複文	因果複文
逆接	譲歩複文	転折複文

以上述べてきたように、日中両言語の仮定複文は主従的關係を表す複文（つまり二つの節には片方が主要、片方がそれに付随するもの）の下位分類の一つであり、意味上、両言語の順接仮定的な仮定複文と対応關係を有している。そこで本研究で扱う日本語と中国語の仮定複文と他の複文との關係は、表 3-5 のようにまとめることができる。本研究では、この仮定複文を研究対象とする。

表 3-5 本研究で扱う仮定複文の日中対応關係（蓮沼ほか（2001）に基づく）

		代表的日本語表現	代表的中国語表現 <sup>29</sup>
順接的・ 仮定的	仮定複文	「ば」 「たら」 「なら」	・ 仮定關係を表す接続表現類 ・ 仮定關係を表すが文脈中で仮定の意味を表せる接続表現類 ・ 意合法類
順接的・ 確定的	因果複文	「から」 「ので」	
逆接的・ 仮定的	譲歩複文	「ても」	
逆接的・ 確定的	転折複文	「のに」	

<sup>29</sup> 中国語ではこれらの複文關係を表すときに大体3つの表現類型があると考えられる。それは、専門的に接続關係を表す接続表現類（中国語では“连词”）、文脈中によって付与される接続機能をもたせる他の類と接続標識を使用しない意合法類の3種類である。（邢（2001）、刘、潘、故（2019）などを参照されたい）。なお、表 3-5 の因果複文、譲歩複文、転折複文の具体的な表現についてはここでは省略する。

## 3.2 仮定表現に関する先行研究

3.1 節では日中両言語の仮定複文の複文全体における位置づけを見てきたが、その結果、両言語の仮定複文には対応関係があることが分かった。従来の日本語研究では、「仮定関係を表す表現」を条件表現の中から取り出して論述するものは限られており、「ば、たら、なら、と、ても」など「条件表現」の枠で扱われている。一方、中国語の研究では、「因果」「仮定」「条件」という3つの用語、又は「因果複文」「仮定複文」「条件複文」という3つの複文の類型が論争の焦点となっておりその論争が続いている。そのため、本研究では日中のこれら用語上の齟齬をできるだけ少なくするため「仮定」と「仮定関係を表す表現」、「仮定表現」という用語を可能な限り用いることにする。

「仮定」表現という名称からも窺われるように、日本語、中国語の双方において、それは複文の前件と後件の関係（意味関係）に注目した分類であると考えられる。しかし、日本語が中国語と異なるのは、やや早い時期の日本語研究で形態に基づく呼応論があることである（日本語条件文の研究史について、詳細については小林（1996）、有田（2007）などを参照されたい）。日本語では一般に「ば・たら・なら・と・ても」などの表現は統一的に「条件表現」と呼ばれる。本研究では、いわゆる「仮定条件」を主な考察対象とするため、日本語で使用される「条件表現」という用語は用いずに、「仮定表現」という用語を用いることにする。「仮定表現」で構成される複文は「仮定複文」と呼ぶことにする。具体的には、日本語の「ば・たら・なら」、中国語の接続詞<sup>30</sup>（“要是”、“如果”）や副詞（“就”）などで構成される複文である。仮定複文については、刘、潘、故（2019）は次のように述べている。

従属節がある仮定を述べ、主節がそのような状況のもとで出現するであろう結果を説明する。口語では、常用の関連詞語は“要（是）……，就……”、“如果……，就……”などであり、文語では、従属節には“假如”、“倘若”、“如”、“倘使”、“设若”などが多く用いられ、主節には“就”、“便”、“那么”などが多く用いられる。

（刘、潘、故 2019: 868<sup>31</sup>）

<sup>30</sup> 中国語のいわゆる「連詞」（“连词”）を「接続詞」とする。接続詞“如果”、“要是”、“倘若”、“假如”は、副詞“就”などと同時に用いられ、呼応して、仮定関係を表す。こうした接続詞と副詞との間の境界線は非常に曖昧で、従来から中国語文法における論点の一つである（例えば、胡（編）《词类问题考察》（1996）；《词类问题考察续集》（2004）など）。

<sup>31</sup> これは、日本語版『現代中国語文法総覧（下）』片山・守屋・平井共訳（1991: 736）を参照した上で訳したものである。日本語版は1983年に出版された中国語版の初版に基づいて訳されて

本節では、仮定複文を明示する要素である、仮定関係を表す接続表現に関する研究をまとめる。

### 3.2.1 日本語の仮定表現に関する先行研究

日本語の仮定表現についての研究はほぼ「条件表現」の研究に含まれており、国語学の言い方、すなわち、「順接・仮定的条件」として扱われるのが一般的である。以下、条件表現にも目を配りつつ、「仮定関係を表す接続表現」を中心に先行研究を概観する。

日本語条件表現研究の歴史を繙くと、日本の伝統的国文法における条件表現の研究の中心は 1900 年代頃 (山田文法) から、語論 (品詞論) そして句論 (構文論) へと展開されたようである。その後、阪倉 (1958) などを経て、条件表現の研究は次第に体系化する。現代語を対象とする条件文に関する初めてのまとまった研究は国立国語研究所 (1951, 1964) である。それは「ば」「たら」「なら」「と」という四形式の意味的特徴について詳しく記述したものである。それ以降、森田 (1967) は日本語教育の立場から四つの形式の特徴を分析し、2000 年に入ってから各接続助詞の用法の比較が議論の中心となったように見受けられる。ここでは、本研究の研究対象に関する代表的な先行研究をいくつかまとめる。

#### 国立国語研究所 (1964)

国立国語研究所 (以下、国研と略す) (1964) は、現代語を対象とする条件表現に関する初めてのまとまった研究であり、その分析結果や考察はそれ以降の各接続形式の特徴と使い分けの解明を目指す研究者の指針となったものである。まず、国研 (1964) は「と」「たら」「ば」がもつ共通の用法を次の 3 点にまとめている。

##### 1. 陳述的条件

直後に「いい」「いけない」「だめだ」など評価をあらわす語がつづいて、全体として一つの述語に近い表現をつくっているもの

##### 2. 前おき

- a. 題目の提示
- b. 発言内容についての注釈
- c. 表現形式についての注釈

---

いる。本稿が参照した中国語版は 2019 年に出版された第三版である。

d. 根拠

3. 客観的条件

(国研 1964: 149-153)

ここの1. 陳述的条件は本研究で分類した「ば」「たら」の機能の一つである。「ば」や「たら」は主節の「どう」「いい」などと共起することを通して終助詞的機能へ拡張している。これは国研(1964)が指摘したように、「ば」や「たら」はその主節に評価することと共「一つの述語に近い表現をつくっている」ことである。

また、前置き用法の「よければ」「よかったら」などは話し言葉によく現れる。中国語では“可以的话”が似たような表現があり、さらに語用論的標識として認められてきている。この用法については、本研究では取り扱うことはできないが、今後語用論的研究を進めた後、対照研究を行っていきたい。

山口 (1969)

国研のまとめにつづき、山口(1969)は従来の研究成果を踏まえ、各形式の特徴を詳しく分析している。特に、山口は「たら」と「なら」を一つのグループとして扱い、それらは「と」と「ば」より個別的で仮定性が強いと特徴づけている。その理由は「ば」と「と」の以下のような特徴による。

「ば」：恒常条件・一般条件などと呼ばれる表現にみられるような、条件の一般的非個別的傾向が強い。(山口 1969: 149)

「と」：単なる時間的關係から帰結に先行しているにすぎない。(同上: 151)

すなわち、「ば」は非個別的傾向が強いこと、「と」の主たる用法は「時間的關係」であることから、「ば」「と」はともに「仮定性が弱い」としている。

さらに「たら」と「なら」の共通性を抽出した上で、両者の相違点をまとめている。「たら」の特徴的な点は仮定用法を表す以外に、完了を示す「た」による完了的意味を備える確定用法にあるとしている。また、「なら」の特徴については、断定助動詞「だ」との関係から他の形式より直接に判断する意味が強いと述べている。これは「たら」「なら」の語源に関わる特徴であると言える。

次に述べる益岡の一連(1993, 2013, 2014)の階層レベルでの「と」「ば」「たら」「なら」の研究は、この山口の4形式の特徴づけに起因するものである。これは、本研究が

山口の4形式の区分を参考にし、「ば」と「たら」と「なら」を研究対象とした所以である。

#### 益岡 (1993, 2013, 2014)

三上 (1953) をはじめ、文の階層性も次第に注目されてきた。益岡 (1993) は、この文の成立には階層的な構造が関係するという観点から条件文への投影を示した。また、「～ば」形式は「～れば」、「～たら (ば)」、「～なら (ば)」という分化した形式を有するとし、この三つを研究対象とした。

「～れば」形式——「命名レベル」

「～たら (ば)」形式——「現象レベル」

「～なら (ば)」形式——「判断レベル」

(益岡 1993: 30)

益岡 (1993) によれば、「～れば」形式と「～たら (ば)」形式は命題レベルの表現であり、「～なら (ば)」形式はモダリティレベルの表現であるという点で、両者は大きく異なる。またこれと並行して、「仮定条件」の各形式の用法に関する分析も行われている。

劉 (2016) では認知言語学の観点から日本語条件表現を記述した上で、中国教育現場での指導方法を提案している。「と」「ば」「たら」「なら」で繋ぐ前後節の関係を「時間性」、「条件性」、「仮定性」といったスキーマを使用して詳しく分析し、これら四つの表現は多層的かつ動的なカテゴリーモデルを成していると述べた。その上で、「と」「ば」「たら」の三形式を中心に比較し、それぞれの典型的意味を抽出した。さらに中国語学習者と日本語母語話者の理解の差異を検討した。

前田 (2017) は「なら」の前接形式を中心に検討を行った。順接条件表現のその他の三形式「ば・たら・と」と比べて「なら」の前接形式が多様であり、「形容詞+なら」という用例を提示し、「なら」の接続形式を拡充させた。また、「たならば」が否定形に接続する傾向が強いことを用例に基づいて説明した。

徐 (2020) は日本語の条件表現形式を陳述副詞「もし」との共起関係から考察し、「たら」は「もし」と最も共起しやすい形式であり、「と」は最も共起しにくいという結果を出した。これは従来の研究で指摘されてきた「と」の低い仮定性と一致した結果である。

### 3.2.2 中国語の仮定表現に関する先行研究

中国語の仮定複文の研究も日本語のそれと大体同じ時期に展開されている。1924年の黎の「仮定複文」の定義をめぐる論争をはじめ、その後「条件」「仮定」「因果」の境界についての議論が続く。1980年代になると、接続を表す表現の研究が多くなっていく。例えば、“如果”、“要是”、“就”などが帰属する品詞類や、“如果……，就……”、“如果……，那么……”構文形式についての研究が行われた。ただし、日本語の「条件表現」の研究に比べてかなり少なく、論文はある程度存在するが、専門的著書はわずかしき出されていない。以下、これらの先行研究を概観する。

#### 邢 (2001)

邢 (2001) は複文を示す接続表現には大まかに4つの表現類型があると指摘している。

1. 句间连词。它们通常连接分句，不充当句子成分。如“因为、所以、虽然、但是、不但、而且”等等。
2. 关联副词。它们一般既起关联作用，又在句子里充当状语。如“就、又、也、还”等。
3. 助词“的话<sup>32)</sup>”。这是一个表示假设语气的助词，总是用在假设分句末尾，标明分句与分句之间具有假设和结果的关系。
4. 超词形式。它们本身已不是一个词。如“如果说、若不是、不但不、总而言之<sup>33)</sup>”等等。

日本語訳:

1. 文(節)間接続詞。文節を繋ぐ役割を果たし、文成分にならない。例えば、“因为、所以、虽然、但是、不不但、而且<sup>34)</sup>”等。
2. 関連副詞。文節を繋ぐ役割を果たしつつ、文の連用修飾語<sup>35)</sup>になる。例えば、

<sup>32)</sup> “的话”の「品詞類」の詳細については第6章を参照のこと。

<sup>33)</sup> 中国語の複文の接続形式は複雑かつ多様であることが、本研究では「接続表現」という統一的な言い方を使用した理由の一つである。

<sup>34)</sup> “因为”、“所以”は因果関係を示す接続詞、“虽然”、“但是”は逆接関係を示す接続詞、“不不但”、“而且”は累加関係を示す接続詞である。それぞれ単独に使用することもできるし、複数の接続詞が組になって使用されることもある。

<sup>35)</sup> この副詞類は日本語複文を分類するときの基準に似ている。日本語の仮定節は副詞節あるいは連用修飾節の下位分類の一つとされるからである。

“就、又、也、还<sup>36</sup>”等。

3. 助詞“的话”。これは仮説的語気を表す助詞であり、前節の末尾に置かれ、前件と後件に仮定と結果の関係があることを示す。
4. 語彙レベルを超えた複合辞。これら自体はすでに一つの語ではない。例えば、“如果说(といえは)、若不是(でなければ)、不但不(でないばかりか)、总而言之(総じていえは)”など。(邢 2001: 28-29、引用者訳)

邢はこの類型を示した上で、仮定関係を示す代表的な従属節の表現は“如果”であり、それは主節の“就”と常に呼応して使用されると述べている。“如果……，就……”は“如果……，那么就……”と言うこともできる。

邢以外にも、2000年以降の仮定複文の研究では、ほかの助詞(例えば“的话”)などの非仮定表現から仮定用法への推移に関する研究も出されている。しかし、それは日本語のようにそれぞれの形式に対応する用法があるというものではなく、逆にどのような形式が仮定関係を表せるかといった点に着目するものである。そして、接続詞と副詞の組み合わせの可能性も研究の対象となっている。例えば、王(2010)では言語類型論的観点から“的话、么、着”などの助詞が仮定複文に使えるようになる過程と動機づけが論じられている。張(2011)は“假定”と“假设”の違いを詳しく考察し、両者ともに仮定関係を表せるとは言え、実際には別々の意味から転化してきたものと結論づけている。このように、中国語の複文の接続形式や接続表現の品詞性については複雑かつ多様であるため、本研究では「接続表現」という、品詞分類に関わらない統一的な言い方を使用することとした。

### 3.2.3 日本語・中国語の仮定表現の対照研究

仮定複文や仮定関係を表す表現の日中対照研究は言語ごとの研究よりも数が少ない。またそれらは、主に接続表現の対照に焦点が当てられているため、それぞれを合わせて見ていくことにする。日本語と中国語の仮定関係を表す接続表現を対照する研究においては、両言語の対応する表現に注目するものがその中心となる。

#### 鈴木(1990)

現代中国語について、「関連詞が用いられていないもの、用いられているもの、その

---

<sup>36</sup> それぞれ日本語の「すぐに、また、も、まだ」の意味に近い。

ほかの要素を含むもの」によって、条件文を大きく分けている。それらの相互関係は、必ずしも日本語の「ば」「たら」「なら」「と」のような明確なものではなく、文脈によって、その使い分けがなされていることが示されたが、具体的に日本語のどの形式が中国語のどの形式に対応するかは説明されていない。

### 小川 (2001)

『雪国』と『駱駝祥子』の日中二つの小説とその訳本を対照しながら、仮定関係を表す「たら」の三種類の用法、現実化以前の事態を表す用法、仮定的事態を表す用法、反事実的条件を表す用法、それぞれの用法が中国語でどのように訳されるかを考察対象としている。

表 3-6 「たら」の各用法に対応する中国語表現 (小川 (2001))

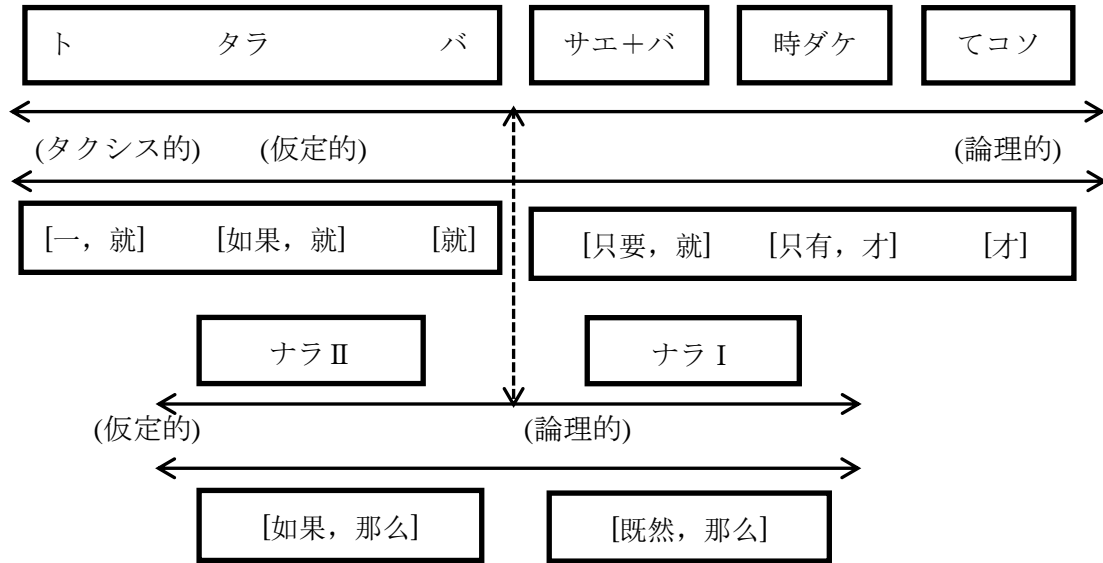
	用 法	中国語訳
仮定条件の用法	現実化以前の事態を表すもの	“等……了” “……了……以后” “……以后”、“……后” “……了”、“……就” “……了……就”
	仮定的事態を表すもの	“要是……就……” “如果……就……”
	反事実的条件を表すもの	“要是……”、“假若……” “假若……那就……” “要是……就……”
事実的用法	既然の事態を表すもの	“一”、“一看” “就”、“便”、“时” 意合法

(小川 (2001: 99-112) を表にまとめたもの)

鈴木、小川両氏の研究は、初期段階での仮定関係を表す接続表現の日中対照である。これらを見ればわかるように、日本語仮定表現の各用法に対応する中国語表現を見出すことを目的としてはいるが、訳語との対応関係を中心とした考察に止まっている。

李 (2011)

日本語「たら・ば・と・なら」と中国語“就、才、那么”との対応関係および日中両言語の条件表現の再分類を通して共通モデルを構築した。これは、マクロの視点から日中条件表現の体系をまとめた研究である。



(李 2011: 202)

図 3-5 日中両言語の条件表現の共通モデル (李 (2011))

このモデルを用いて少し説明してみよう。李 (2011) は日本語の条件表現の典型的な形式を「ト・タラ・バ」であるとし、三つの形式がアクチュアルな事態を表す場合は「タクシス的」で、ポテンシャルな事態を表す場合は「論理的」で、その中間、つまりアクチュアル・ポテンシャルな事態どちらも表すのが可能な場合は「仮定的」であるとした。

「ト・タラ・バ」形式は大きく「タクシス的・仮定的・論理的」の3つに分類することができるとした。これらの形式は「タクシス的・仮定的・論理的」いずれも表し得るが、特にバ形式は取り立て詞サエと共起して「サエ+バ」形式で論理関係を表す専用形式になる。その他、「時ダケ/場合ダケ」「てコソ/てハジメテ」も論理関係を表す専用形式である。

(李 2011: 201-202)

「ト・タラ・バ」に対応する中国語表現としては、李 (2011) は“就”と“才”との

呼応形式を挙げている。

「なら」については、従来の見方に従い、「ナラⅠ」と「ナラⅡ」に分けて考えている。「ナラⅠ」は与えられた根拠による推論を、「ナラⅡ」は仮定的判断を表すとして区別され、それぞれ中国語の“既然……，那么……”、“如果……，那么……”に対応すると指摘している。

この研究では“就、才、那么”という主節に現れる副詞もしくは接続詞に焦点を当てているが、これは日本語と対照研究を行うためであろう。従来の中国語仮定複文の研究が従属節に現れる接続表現に注目してきたのとは少し異なる。邢 (2001) などに指摘されたように、従属節に現れる“如果”が仮定を表す典型的な標識であり、日本語の仮定関係を表す常用形式「たら・ば・なら・と」と対照する際に、最も多く使用される“如果”を無視した点は問題であろう。

#### 楊・李 (2019)

楊・李 (2019) は「なら」形式を研究対象として、文末のモダリティ表現によって「なら」で接続した文を6類に分類し、それぞれの種類に対応する中国語訳をまとめた。「のなら」文は中国語の“如果说 p (的话), (那/就) q”に、「のなら+モダリティ」文は“如果 p 的话, (就) q”、「ならば」と「ならば+モダリティ」は意合法、「たなら」は“只要 p 的话, 就 q”、「たなら+モダリティ」は“如果 p 的话, (就) q”、“如果 p, (就) q”に、それぞれに訳す傾向が強いという結果を出している。

### 3.3 文法化の観点からの日中仮定表現に関する先行研究

日本語における仮定表現の研究は条件表現の中で検討されてきたが、その歴史的変遷や条件表現史についての先行研究を以下でまとめる。

阪倉 (1958) は条件表現の歴史変化をまとめ、以下のように述べている。

古代語<sup>37</sup>の一共時態において、「行けば」という形式が、既定条件の表現として、「行

---

<sup>37</sup> 日本語と日本史上の時代区分については、高田・小野寺・青木 (2018) では以下のように規定している。この時代区分は周知の区分であるため、本研究もこの区分に従って議論を行う。

かば」「行きたらば」などという形式による仮定条件の表現に対しつつ存在したという事実と、一方、近代語における一共時態において、「行くから」「行くので」「行くほどに」「行くによって」「行くと」「行けば」「行きたれば」等々の形式による既定条件の表現に対しつつ、「行けば」が、「行ったら」「行くなら(ば)」「行かば」などともに仮定条件の表現形式として存在したという<sup>38</sup>。(阪倉 1958: 106)

つまり、古代日本語では既定条件と仮定条件をはっきり区別した「已然形+ば(例えば、「行けば」)」と「未然形+ば(例えば、「行かば」)」の形は近代語に至ってその用法が発達しているか、「已然形+ば」の形で既定条件と仮定条件を兼務していると思われる。古代語では「ば」は、仮定条件用法は未然形、確定条件用法は已然形にそれぞれ接続する。その後、未然形接続の「ば」は次第に廃れ、未然形に接続し表した仮定用法は已然形接続の「ば」に受け継がれていく。

表 3-7 日本語史の時代区分

上代	奈良時代およびそれ以前	-794	古代語
中古	平安時代	794-1192	
中世前期	鎌倉時代	1192-1333	
中世後期	室町時代	1333-1603	近代語
近世	江戸時代	1603-1868	
近代	明治・大正・昭和前期	1868-1945	
現代	昭和後期から現在	1945-	現代語

(高田・小野寺・青木 2018:VI)

一方、中国語史の時代区分については、各種の分け方があるが、本研究では王(1985)などを参照したうえ、以下のように区分する。

表 3-8 中国語史の時代区分

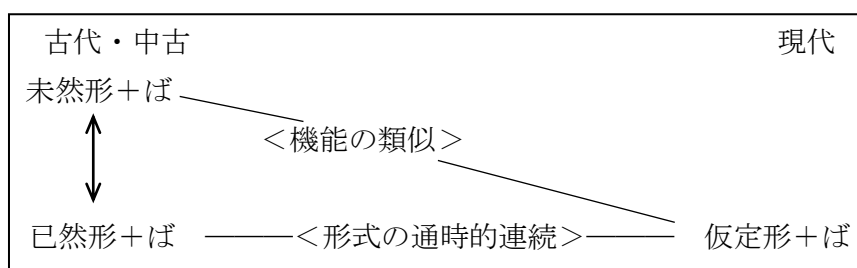
上古	漢代まで	-219	古代語
中古	魏・晋・南北朝	219-581	
近古	隋・唐・五代・北宋	581-1127	
近代	南宋・金・元・明・清・五四前	1127-1919	近代語
現代	建国まで	1919-1949	現代語
当代	建国から現在	1949-	

(※中国語に関しては 1919 年から現在まで現代語と呼ぶことが多くあるが、文学史からみれば、1949 年の中華人民共和国の建国を境目として分けることが多い。本研究で利用する CCL コーパスは現代と当代に分けるため、現在使われる中国語の状況を確認するにあたって、当代に限定したのである。)

<sup>38</sup> 阪倉の原文では歴史仮名遣いの部分を全部現代の表記に変えた。以下同様である。

高山・青木 (編) (2010: 124-125) は「已然ば」による節の仮定条件化を指摘し、「ば」の前節の事態が事実としてはまだ捉えていないものも含んでいる可能性があるために、「已然形+ば」から現代語の「仮定形+ば」へと通時的に変化していった、と述べている。つまり、「ば」の前件が確定した事態か、個別的あるいは未確定の事態か、さらには、話者がどのようにその事態を捉えているか、発話する時点にすでに認識できたのか等、はっきりしない部分が存在しているためにこのような変化が起こった。阪倉 (1958: 112) は「現代語における仮定条件の表現が「たら」「なら(ば)」およびこの「仮定形+ば」という三形式におさまり、そしてこの傾向が、室町末期の、近代語の出発を画する時期からようやく顕著になり始めたものである。」と指摘し、小林 (1996: 23) では「近世後期江戸語に至ると、「未然形+ば」はすでに衰退してしまっている。」と述べられている。『日本語歴史コーパス (CHJ)』で検索してみたところ<sup>39</sup>、「ば」が使用される用例数は鎌倉時代の書物の中には 16,974 件、室町時代の書物の中には 4,761 件、江戸時代の書物の中には 6,769 件という数字が出たが、鎌倉時代に室町時代の 3 倍以上の用例数があったのは興味深いことであろう。

福田 (2006) と高山・青木 (編) (2010) は同じく図のように「ば」の由来をまとめている。ただし、福田 (2006: 49) では「未然形+ば」と「已然形+ば」とは「同音異義語である蓋然性も否定できない。已然形に付く一バは確かに現代語の一レバの祖形ではあるけれども、それと未然形に付く一バと同じ形式であるという保証はない。」と述べられている。すなわち、歴史的資料を判断するには難しさがあり、現代から当時を推測しかできず、いくつかの可能性を提供するだけとなる。これは文法化研究の意義でもありと考えられる。



(福田 (2006: 49) と高山・青木 (編) (2010: 127) に基づいて若干修正した)

図 3-6 「ば」の歴史的変化

<sup>39</sup> 検索対象を鎌倉時代、室町時代、江戸時代をそれぞれ設定し、書字形出現形を「ば」にして短単位検索を行った。

さらに、阪倉 (1958: 109) は「室町時代の口語的な資料において注意されるのは、「用言+ならば」という形式が、一般化したことである。これは、もと「用言+たらば」が事態の実際上の生起を予想する完了性のものである」とも述べており、言語資料と口述記述が発展したために、条件表現の多様性と発達が室町時代以降に見られることが明らかになった。小林 (1996: 23) では「「タラバ」「ナラバ」という表現形式の発達は、一般の「未然形+ば」の衰退とは逆行する現象である」と述べられているように、室町時代以降、「ば」が衰退してきた代わりに、「たら (ば) 」と「なら (ば) 」が発達してきていると見られる。

「たら」と「なら」の形式上の成立については、小林 (1996: 193) は、両者はそれぞれ「完了」を表す「たり」の未然形と「断定」を表す「なり」の未然形に由来しているとしている。その理由として、小林 (1996) は以下のように述べている。

「ナラ」「タラ」という形式が成立した理由、すなわち「未然形+ば」という表現形式をとりながら、本来必須の要素であるはずの助詞「バ」を脱落させることが可能であった理由は、「ナラバ」「タラバ」の発達に伴い、この表現形式全体が接続助詞的なものとして意識されだし、特に「バ」を必要としなくなったのだと考えられる。

(小林 1996: 204)

つまり、「たら」と「なら」の成立についてこのような経路をたどっている。

#### (18) 「たら」と「なら」の成立

「たら」: 完了「たり」の未然形 → たらば → たら

「なら」: 断定「なり」の未然形 → ならば → なら

これらの假定表現の成立については、古代日本語における「未然形+ば」の形式が「たらば」と「ならば」に分化し、「未然形+ば」の形式が衰退していく中で、「未然形+ば」の意味は「已然形+ば」で兼務され、または「已然形+ば」の形式の機能が拡張したと言えよう。これらが現代日本語に至って、「たら (ば) 」「なら (ば) 」「(れ) ば」になってきたと考えられる。

一方、中国語に関する文法化の研究は、とりわけ假定表現の研究は“実词虚化”(実質

語から機能語への転化) という観点から行われてきた。例えば、古川 (2006: 18) では、中国語の假定表現の“要”はその動詞から文法化してきたと指摘している。中国語の中に“要”を含む一連の語彙があり、動詞“要”は助動詞や連詞(接続詞)へ拡張しているとされている。古川(2006: 27)は、動詞“要”→助動詞“要”→連詞“要是”という経路で文法化してきていると提示している。そのプロセスでは動詞の目的語が次第に複雑になっていって節にまで広がり、“要”は動詞から連詞への変化が起こっているというわけである。また、“要”という言葉自体が含意する「意向」や「願望」は将来あるいは非現実のことを指すことが多くあることが、“要”の文法化を起こさせる動機づけの一つである。張(2017: 29)は“要”を5つの段階に分けて、その動詞から連詞への文法化プロセスを明示した。この過程では“要”に続くものは目的語から節への変化によって主語の他動性を弱め、主語の願望を弱めることになる。これは“要”が假定表現として使用される理由となる。また、彭(2020)は文法化の理論に基づく中国語研究の可能性を論じている。その中で“的话”についての論述があり、“的+名词”という構造で作られることば“的人”、“的事”、“的话”の三者は、“的话”の使用頻度が最も低かったにもかかわらず文法化が発生していると指摘した上で、高い使用頻度は文法化を起こす唯一の要因ではないと証拠づけている。このように、中国語の假定表現の文法化に関する研究は、ある表現の多用法に注目して、假定用法に至るまでの考察がその中心である。

### 3.4 先行研究に見られる問題点と本研究の位置づけ

これまで、日本語と中国語における假定文、条件文およびそれに関する接続表現の研究が多く行われてきている。本章はまず、日中両言語の假定複文と假定関係を表す接続表現に関する代表的な先行研究を概観した。日本語のいわゆる条件表現の研究の中心は「と・ば・たら・なら」四者の使い分けやそれぞれの機能の解明にある。また、中国語假定複文の研究は主に相関する複文との違いを中心に行われている。つまり、両言語の假定関係を表す接続表現の研究はそれぞれの言語の枠内で異なった方法で進められている。しかし、日本語のみあるいは中国語のみでいわゆる条件文に対する研究を行うにはそれぞれ限界がある。

また、従来の日中假定複文や接続表現の対照研究で指摘される点はそれぞれの対応表現に注目しているが、現段階では日本語から中国語の接続表現を考察する傾向が顕著で、中国語の中心的な研究対象である従属節に出現する接続詞類についてはあまり研究されていない。両言語の対照研究を行えばより明らかになる部分も多いため、そこで本研

究は両言語を対照して、假定表現の具体的な用法・機能から出発し、機能拡張の観点から各自の言語に起っている用法・機能を変化・拡張を確認する。また、両言語の対照を通して、その類似性と相違性をまとめる。まず日本語と中国語の假定関係を表す接続表現のそれぞれの意味や機能とそのあいだの対応関係を第5章と第6章で検討する。第5章と第6章の結果に基づいて、第7章では日本語と中国語における假定表現の機能拡張の類似点と相違点をまとめる。

文法化の観点から行われる先行研究については、日本語の場合は条件表現変遷史に注目するのに対して、中国語の場合は假定表現の由来に注目するものが多い。日本語と中国語の假定表現を文法化という観点を中心に対照する研究は管見の限り見当たらない。ただし、通言語的に文法化を議論した Hopper and Traugott (1993) では、条件を表す接続語の由来を以下の5種類にまとめ、日本語と中国語についても言及している。

- (19) a. 法をあらわす形式。中国語の“要”（望む、必要だ、もし）。
- b. 疑問符。
- c. 継続の時を表す語、継続か瞬間かであいまいな時を表す語。
- d. コピュラ構造。日本語の「なら」（である）。
- e. すでに知られていること、旧情報を示す形式。

(Hopper and Traugott (1993: 186)、日野訳 (2003: 212-213) より引用した。本研究に関する例だけを提示した。)

つまり、通言語的観点からみれば、假定表現は以上の5種類の語や形式から派生すると指摘しているのである。とりわけ、日本語の場合は「なら」形式はコピュラ構造より、中国語の假定文に使用する接続表現“要”は意向や願望を表す動詞“要”より派生してきたことを、例として提示している。

このコピュラ構造と関連すると述べられている日本語「なら」と類似した中国語の假定表現は“的话”については、第9章で詳しく議論する。中国語の“要”の文法化については3.3の古川 (2006) と張 (2017) で詳しく検討されている。

また、Hopper and Traugott (1993: 186) で言及されている疑問との関係、時間の継起との関係、旧情報を示すとの関係についても第8章から10章で詳しく議論する。具体的には、指示詞との関係 (第8章)、助詞 (提題助詞と終助詞) との関係 (第9章)、との関係に焦点を当てて検討を行い、文法化の側面も加えながら日本語と中国語の假定表現を対照

する。最後に第 10 章では、それまでの章で行った考察の結果に基づき、日本語と中国語の仮定表現の文法化の特徴について、文法化の種類、構文上の特徴および脱節化といった視点から対照する。

## 第4章 本研究のデータ収集方法

### 4.1 データ収集源

本研究は主に以下の収集源からデータを収集した。

#### (1) コーパスから引用した例文

(1-1) 『中日対訳コーパス (BJSTC) 』(第一版) (2003、北京日本学研究中心) に収録された小説の例文<sup>40</sup> (詳細は付録を参照されたい)。このコーパスは大規模な日中対訳コーパスであり、4.2 節で述べる理由で仮定表現の日中対照を行うには非常に有効なコーパスである。

#### (1-2) 日本語と中国語の別々の小説および会話のコーパス

日本語小説: 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 』小説データ

日本語会話: 『日本語日常会話コーパス (CEJC) 』会話データ

中国語小説: 『北京大学現代漢語コーパス (CCL) 』<sup>41</sup>小説データ

中国語会話: 『北京大学現代漢語コーパス (CCL) 』口語データ

#### (1-3) 歴史コーパス

日本語: 『日本語歴史コーパス (CHJ) 』

中国語: 『北京大学古代漢語コーパス (CCL) 』

(1-1) のコーパスは、本研究のデータ収集のためには大変有効なコーパスであるが、作成された時代が少し古いために、現在の用法とは異なる場合もあるかもしれない。また、小説中の会話のコーパスであるために実際の会話とは異なる可能性もある。これらのことを考慮の上、以下の日本語と中国語両言語について別々に作成された上記の3つ

---

<sup>40</sup> 『中日対訳コーパス』に収録されているのは、文学作品 105 (中国 23 篇、日本 22 篇、及びそれらの翻訳:約 1,130 万字) と、それ以外の文章 45 (中国 14 篇、日本 14 篇、日中共同 2 篇、及びそれらの翻訳:約 575 万字) である」 (徐一平 2004: 136)。

各章で使用する例文には、コーパスから収集した例文、それ以外の作品から引用した例文、筆者による作例の三種類がある。コーパスからの作品選択については、訳文ができるだけ自然なもの、また「ば」「なら」「たら」が比較的多く用いられているものを考慮して行った。例文の後ろに出典を明記した。なお、コーパスの例文については誤植や翻訳ミスがあるので、可能な限り原著に当たって、修正した。

<sup>41</sup> 『北京大学現代漢語コーパス (CCL) 』 ([http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)) は古代と現代に分けて中国語のデータを収録されている。書き言葉だけではなく、近年口語資料も付け加えている。

の新しいコーパス (1-2) も補足的に利用することにする。

(1-2) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』と『北京大学現代漢語コーパス (CCL)』では、2000年以降の日本語と中国語の小説からのデータを用いた。BCCWJ自体に収録される対象の刊行年代は1976～2005年<sup>42</sup>であるため、本研究では2000～2005年の小説をデータとしてとった。それと対応して中国語の小説データもできる限り日本語の小説に近い年代の小説を選んだ。詳細については付録を参照されたい。

『日本語日常会話コーパス (CEJC)』と『北京大学現代漢語コーパス (CCL)』からは会話データを収集した。

(1-3) の歴史コーパスを利用したのは、通時的変化に触れる際古い時代の用例を調査するためである。

## (2) 辞書、専門文法書から引用した例文

先行研究に言及する際、原文が簡体字であれば簡体字で、繁体字であれば繁体字で引用する。

## (3) 自作例

本研究の自作例については、三人以上のインフォーマントが不自然と判断した場合、それを不自然な文と見なし、「?」「??」「\*」などの印を付している。作例は多くはないが、特に表現の置き換えに用いられている。

なお、専門文書や自作例を用いたのは、文学作品の翻訳については訳者個人の習癖や言い回しに不自然さを感じるものもあったため、それを補うためである。また、文学作品の翻訳の中で、明らかに不自然、誤っていると思えるものについては、その都度修正を行うことにする。

## 4.2 収集方法について

(1-1) の『中日対訳コーパス』を利用に際しては、コーパスの開発者である徐・曹が紹介した方法で検索した。徐・曹 (2002) はコーパスの利用方法を紹介し、コーパスを応用した一連の論文を集め『中日対訳語料庫的研制与应用研究论文集 (中日対訳コーパスの開発とその応用に関する論文集)』(2002、外语教学与研究出版社)を出版した。曹 (2002) はその中で中日対訳のテキストを例として、三種類の利用方法をまとめた。

---

<sup>42</sup> 詳しくは、コーパス (<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html>) を参照されたい。

まず、原文と対訳文では同じ内容をもっているが、対訳文は原文の性格と訳者の主観に制約されているので、所属言語の研究には向かず、原文言語の研究に照応的に利用されるのがよいと考えられた（このような研究は「原文と訳文の照応的研究」と呼ぶ）。

対等的に二言語の対照研究をするには、やはり並行的に同じ意味または近似的な内容をもつ言語 A と言語 B を対象にすべきだと思われる（このような研究は「原文と原文の並行的な研究」と呼ぶ）が、ただし、もし両言語にそれぞれ対訳文をもっている場合、対照先の言語の対訳文を参照的にも利用できないかと考えられた（このような研究は「対照言語の訳文の参照的研究」と呼ぶ）。（後略）<sup>43</sup> （曹 2002: 50）

曹が上記で述べているように、対等に 2 言語を対照するためには、「原文と原文の並行的な研究」が望ましい。しかし、日本語と中国語の仮定表現を対照する場合には、この方法をとることは非常に困難である。その理由は、第 3 章で明らかにしたように、仮定関係は、日本語では仮定関係を表す接続表現で表されるのが一般的であり対照すべき語を決定することができるが、中国語ではそもそも仮定表現そのものを使わない「意合法」が頻繁に用いられるため、さらに接続表現が用いられる場合も複文の接続形式は複雑かつ多様であるため、基準となる表現自体を決定することが難しいためである。さらに、中国語でなんらかの基準となる表現を決定した場合、中国語に特徴的な「意合法」の用法を取り扱うことができなくなる。これは中国語の仮定関係を表す表現の研究においては、大きな問題である。そこで、本研究では、『中日対訳コーパス』を使用する際には、まず日本語の仮定関係を表す接続表現「ば」「たら」「なら」を基準として日本語と中国語を対照し、その後中国語の仮定表現にどのようなものがあるかを明らかにしてから、中国語を基準とした対照も行った。

具体的には、以下の手順でデータを収集した。まず、日本語原文の場合は、曹の提示する「原文と訳文の照応的研究」を用いて、日本語原文と中国語訳文を照応させた。すなわち、日本語原文中で「ば」「たら」「なら」をキーワードとして検索を行い、それが中国語訳文中でどのような訳文になっているかを検索して照応させた。次に、中国語原文の場合は、曹の提示する「対照言語の訳文の参照的研究」を用いた。すなわち、中国語原文の日本語訳文を「ば」「たら」「なら」をキーワードとして検索を行い、それ

---

<sup>43</sup> 下線や太字は引用者による。

が中国語原文でどのようなになっているかを検索して照応させた。この 2 つの収集方法のみだと日本語基準の収集に偏るため、最後に中国語の仮定表現をキーワードとして「中国語原文、日本語訳文の照応的研究」によりデータを収集した。最後にこの中国語を基準としたデータ収集を行うことが可能となったのは、最初に日本語を基準として中国語の仮定表現にはどのようなものがあるかを明らかにすることができたために、それを基に、中国語の仮定表現にどのようなものがあるかが明らかにされたためである。

以上のような方法で、中日対訳小説から該当する用例を抽出し、全体的な傾向を観察する。すべての中国語の用例について日本語訳文とともに提示する。引用する際、例文の後に出典を明記しておく。なお、文法書や作例の場合は、使用する際、筆者による訳文を付ける。

次に、(1-2) の 4 種のコーパスから、日本語、中国語における仮定表現のデータを個別に収集し、とりわけ日本語と中国語を別個に分析する部分では、その結果を提示した。これはこの節の初めに述べたように、『日中対訳コーパス』は仮定表現の日中対照研究を行うには最適のコーパスであるが、このコーパス中の小説は少し古いものであるため新しい小説中の会話とは異なる可能性があることと、小説中の会話と実際の会話には相違があるため、文法化についても相違があるかもしれないためである。それぞれのコーパスを利用するに際して表 4-1 に示した検索対象と条件を設定した。『日中対訳コーパス』に収録される小説が 2000 年以前のもものがほとんどである。それと区別するために、日本語と中国語のそれぞれのコーパスではできる限り 2000 年以降出版されるものを中心にデータをとった。日本語では 18 篇の小説が抽出されたため、中国語も同様に 18 篇抽出した。詳細については、付録 2 と付録 3 を参照されたい。今回利用する BCCWJ のデータはごく一部に限られているが、さらなる調査は今後の課題としたい。(1-3) の歴史コーパスは、通時的变化に触れる際に用例抽出のためにのみ利用した。

表 4-1 『中日対訳コーパス』以外に本研究で利用したコーパス

コーパス	検索対象	検索条件
現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)	コアデータ <sup>44</sup> 出版・書籍 文学	出版年 2000 年代
北京大学現代漢語コーパス (CCL)	当代 <sup>45</sup> 文学	大陸作家 <sup>46</sup> 出版年 2000 年前後
日本語日常会話コーパス (CEJC)	コアデータ 雑談と用談・雑談	
北京大学現代漢語コーパス (CCL)	当代 口語 (対話、テレビインタビュー)	
日本語歴史コーパス (CHJ)		
北京大学古代漢語コーパス (CCL)		

<sup>44</sup> 日本国立国語研究所が開発した一連のコーパスはコアデータと非コアデータに区別づけた。コアデータはそれぞれの品詞や表記 BCCWJ においては、その中の約 1/100 のデータは人手による解析しより精度が高めている。

<sup>45</sup> 日本の時代区分と異なる点でもあるが、日本語では現在の時代を「現代」と呼ぶのに対して、中国語では「当代」と呼んでおり、「現代」は一つ前の時代を指すことが多い。表 3-7 と 3-8 を参照されたい。

<sup>46</sup> 『北京大学現代漢語コーパス (CCL)』は中国語で書かれる小説を収録しており、中国大陸が中心として、中国香港や中国台湾出身の作家の小説も収録されている。本研究は中国大陸作家に限定することにした。

## 第5章 日本語の仮定表現の機能拡張：仮定から非仮定へ

「仮定表現」の日中対照研究については、意味と用法・機能中心の議論は数多く存在するが、本研究では先行研究の結果を基に、共時的（第5～7章）と通時的（第8～9章）の二つの連続性をもつ文法化に関連する理論を援用し、日中両言語の仮定表現の対照研究を行う。本章では、まず日本語複文における仮定表現の構造上の特徴を明らかにした上で、具体的な日本語の仮定表現の「機能拡張」を見る。構造上の特徴を先に確認するのは、後文で検討する機能拡張とかかわっているからである。機能拡張に関連する内容語と機能語の判定、いわゆる品詞の境界線がはっきりしない部分が存在しており、その品詞分類は文の構造における位置から判定できる可能性が十分あるため、仮定表現の構造上の特徴から見ていくことにする。

### 5.1 日本語における仮定表現の構造上の特徴

日本語は「主語—目的語—述語」というSOV型言語で、述語は文の最後に置かれる。日本語の仮定表現「ば」「たら」「なら」は述語の活用形に後接することが一般的な形式である。仮定表現で構成される複文においては、従属節が前置され、主節が後置されるという特徴をもっている。つまり、「従属節→主節」という基本構造である<sup>47</sup>。この従属節前置の「P(仮定)、Q(結果)」という基本構造は、従属節後置の「主節(結果)→従属節(仮定)」という構造になることもある。仮定関係を表す複文の構文形式のうち、基本構造である「P→Q」を「基本型」、「Q→P」を「倒置型」と呼んでおく。このようにすると、日本語の接続表現の文中の位置は以下のように示される<sup>48</sup>。

---

<sup>47</sup> Greenberg (1963: 84) は言語類型論的な立場から、「Universal 14. In conditional statements, the conditional clause precedes the conclusion as the normal order in all languages. (引用者訳:条件文において、条件節(従属節)が帰結節(主節)に先行するのは一般的語順である)」ことを指摘した。

<sup>48</sup> この形式の図式は、主節、従属節と接続詞の位置関係を表現するのに一般的に用いられている図式である。同様の図式を用いたものに、森田(1989)、謝(2006)、新田(2007)、章(2014)、王(2017)等が挙げられる。

- ① 

C1	P	C2
----	---	----

 , 

Q
---

。
- ② 

Q
---

 , 

C1	P	C2
----	---	----

。

(Cは接続表現、1、2は接続表現の数を示す。C1とC2が出現可能な位置を示し、同時に使用されることもあれば、片方しか使用されないこともある。Pは仮定節、Qは帰結節である。)

図5-1 日本語の仮定複文の構文形式

基本型および倒置型の構文形式の具体例 (20) と (21) を以下に挙げる。

(20) それはもしも<sup>49</sup>面接試験でやられたら、一番困るところだね。 『青春の蹉跎』

(21) それでいいですよ。そういう気持ちを抱くだけなら。(Yahoo!知恵袋、2005<sup>50</sup>)

## 5.2 日本語で用いられる仮定表現

本節では、日本語の複文においてどのような仮定表現が用いられるかについて簡単に述べる。

日本語の仮定表現という真っ先に思い出されるのは「たら・ば・と・なら」という四つの接続助詞である。これらの接続表現の間の意味機能はそれぞれ異なるが、仮定関係を表現できることは認められている。一方、「もし」「もしも」などの副詞は従属節の初めに用いられ、仮定節となる場合は節の最後に「たら・ば・と・なら」などの接続助詞を伴う<sup>51</sup>。『中日対訳コーパス (BJSTC) 』より収集した仮定複文の中に出現した副詞およびその出現状況は以下のようにまとめられる。「もし」「もしも」などの副詞と共起することが意外に少ないことがわかる。

<sup>49</sup> 日本語では、「もし(も)」「仮に」「万一」など仮定関係を表す副詞はあまり考慮に入れられていないが、実際はこれらも接続表現の一種である。

<sup>50</sup> 明らかな倒置型の例が少なかったため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 』の非コアデータ(本研究がデータ収集に利用した以外の部分のデータ)により一例挙げた。「語彙素」を「なら」で検索したものである。

<sup>51</sup> 徐(2020)は「陳述副詞「もし」から見る日本語の条件表現」の中で、条件表現「た」「ば」「たら」「なら」「ても」「場合」「時」と「もし」の共起状況を検討した。結果としては、「たら」「なら」>「ば」>「と」という順で「もし」と共起し、従来指摘されている「たら」と「なら」の仮定性が強いという主張と一致した。

表 5-1 「ば」「たら」「なら」と「もし」などの副詞<sup>52</sup>との共起率

	ば	たら	なら
総出現数	1,803	842	565
	214	88	51
副詞「もし」などとの共起率	11.87%	10.45%	9.03%

この結果を見ると、日本語においては仮定節を構成するのは、「もし」などの副詞ではなく、従属節末の接続助詞「ば」「たら」「なら」であることがわかる。

また、接続助詞としての「ば」「たら」「なら」に前接する述語について調査すると、「ば」と「たら」の場合は動詞述語、「なら」の場合は名詞述語が多いという分布の差異が見られる<sup>53</sup>。しかも、「なら」が名詞に接続する場合、半分程度は形式名詞である。例えば、「の(ん)なら」「ことなら」「ところなら」「くらいなら」「場合なら」「ものなら」「つもりなら」「だけなら」「ようなら」が現れている。この点については、第9章で詳しく検討する。また、「ば」では名詞および形容動詞の使用がゼロであること、「たら」では名詞、形容動詞、形容詞の使用がいずれも低いこと、「なら」では形容動詞と形容詞の使用が低いことがわかる。

<sup>52</sup> 「もし」の他に「もしも」「仮に」のような表現が見られた。

<sup>53</sup> 「ば」「たら」「なら」に前節する動詞、名詞、形容動詞、形容詞という述語の種類によって、以下のような差異が見られる。

表 5-2 仮定表現の前接述語の種類

仮定表現 述語	ば	たら	なら
動詞	1,224 (70.99%)	674 (88.80%)	124 (36.25%)
名詞	0 (0.00%)	31 (4.08%)	188 (54.97%)
形容動詞	0 (0.00%)	6 (0.79%)	23 (6.73%)
形容詞	500 (29.00%)	48 (6.32%)	7 (2.05%)
合計	1,724 (100%)	759 (100%)	342 (100%)

(※日本語の中に「だめ」のように形容動詞と名詞を兼務している言葉が少なからず存在しているが、今回の統計では全て「形容動詞」の類に入れた。『中日対訳コーパス (BJSTC)』から収集した「ば」「たら」「なら」の接続助詞用法をさらに前接述語に分けてまとめた。)

### 5.3 日本語における假定表現の機能拡張

前述のように、これまで日本語の假定関係を表す接続表現に注目する研究は主に構文論的、意味論的な視点から論じられてきたが、最近の研究は次第にその機能拡張にも触れている。関連する研究としてヘイズ高野園・新里 (2001)、白川 (2009)、元 (2010)、劉 (2016)、桑 (2019) が挙げられる。以下それらの先行研究について簡単に概観する。

ヘイズ高野園・新里 (2001: 127-142) では「たら」と「ったら」をめぐって、条件接続助詞から談話・対人機能の助詞への変化が議論されている。「ったら」を「たら」から独立した形式として、「たら」の談話における対人機能をもつ終助詞、係助詞としての側面に注目し、歴史的側面と機能的側面から両者の差異を詳しく考察している。結果として、「たら」の機能は<提案><仮説><願望・後悔><提題>、「ったら」の機能は<威圧的要求><強意の呼びかけ><強意の断定><提題>のそれぞれ 4 つに分けられると指摘している。元 (2010: 199-216) も同じく「たら」の発話行為と対人関係について考察している。また、「たら」には主節を省略<sup>54</sup>し、終助詞のように文の最後に置くという拡張用法があることを指摘している。白川 (2009: 11) はこのような用法を「言いさし(文)」と称し、さらに「言い尽くしの「言いさし文」と「関係づけの「言いさし文」」に分けている。劉 (2016: 182) は「意味論的な省略による言いさし文」と「語用論的な省略による言いさし文」に分けた上で、「文脈との関係がそれほど強くなく、主節「B」が習慣的に省略され、同じ言語形式に復元できる場合」の「意味論的な省略による言いさし文」について詳しく検討を行い、条件節に関わっている「なきや／なくちゃ」「ないと」「たら／ば」の「意味論的な省略による言いさし文」は、「定型表現の習慣化や文法化が大きく関与している」(劉 2016: 193) と指摘した。

桑 (2019) は大堀 (2002) が提出した「独立従属節」に基づいて、条件文による独立従属節を元の複文との関連性について検討し、主節の内容が「直接表出型<sup>55</sup>」の場合は主節が省略されやすいことを明らかにした。

以上のように、「ば」と「たら」の機能拡張に関する研究では、「ば」と「たら」に

---

<sup>54</sup> 高橋 (1993: 26) は、省略されるまえと省略したあとの文の意味が同じではないと主張している。「これらの文が省略されるまえと同様に、のべかたをもっていることを意味している。しかし、このことは、かならずしも、省略されるまえと同様ののべかたをもっていることを意味しない。」と述べている。

<sup>55</sup> 「いい」、「痛い」、「嬉しい」と「困る」など気持ちや感情を表す表現は「直接表出」とされ、桑 (2019: 39) では、これらは「簡単な形容詞や動詞に過ぎず、復元しやすい」と述べている。さらに、「主節の内容が復元されやすいほど、条件独立節の用法が成立しやすい」(桑 2019: 39-40) とも指摘している。

終助詞的用法があり、主節が省略され「ば」と「たら」で言い終わる従属節が独立した文になっているという結果が出ている。「ば」と「たら」のこの機能拡張が並行して進んでいると見られる。一方、「なら」については、江田 (2005)、丹羽 (2006)、日本語記述文法研究会 (編) (2009b) が「なら」の主題や提題を表す用法について議論している。

本節では先行研究を踏まえ、「ば」と「たら」と「なら」の機能拡張について論じる。また、それらの拡張プロセスも明らかにしたい。

### 5.3.1 「ば」の機能拡張

「ば」は古典日本語では未然形と已然形<sup>56</sup>に接続し、それぞれ「順接仮定条件」と「順接確定条件」を表した。現代日本語では「ば」はもっぱら「順接仮定条件」として使用されるようになった。また、「ば」を使う用例を観察すると、「そうすれば」「そういえば」のように指示詞と複合した慣用的用法が多く現れる。この用法は「慣用方法」としておく。もう一つは先行研究にも指摘されたように、「ば」の後に疑問詞や形容詞(「～ば+どうか/いかが/いい/よろしい」など)を置く用法である。これを「文末用法」<sup>57</sup>と呼ぶことにする。さらに、「ってば」の形で名詞や文に接続して、話し手の主観的態度を表すことができる。このように、『広辞苑』(第七版)と収集した用例に基づき、接続形式によって分類すれば、「ば」は「接続助詞用法」、「慣用用法(接続詞的用法)」、「文末用法」、「ってば」用法の4つに分けられる。また、靱山 (2002) など語の多義性を分析するにあたって使用される「プロトタイプ認定基準<sup>58</sup>」を参照すれば、その中でも「接続助詞用法」が中心的なものと認定されよう。以下、説明の便宜上、ここでは「ば」の接続助詞用法を基本(中心的)用法として「ば-1」、「慣用用法」を「ば-2」、「文末用法」を「ば-3」、「ば」の「ってば」用法を「ば-4」と表記することにする。各用法の使用率を次の表 5-3 にまとめた。

---

<sup>56</sup> 「未然形」と「已然形」はともに古典日本語の言い方であり、現在では「仮定形」というのが普通である。

<sup>57</sup> 「ば」に後接する疑問詞「どう」「いかが」は省略することができるため、ここでは「たら」の分類と併せて「文末用法」と呼ぶことにする。

<sup>58</sup> 認知意味論では、語の種々の語義が無秩序に派生してきたものではなく、基本義(プロトタイプ)を起点とし、そこから何らかの認知的原則や動機づけで意味拡張を成し遂げ、拡張義(周辺の)になるとする。本節の研究対象、文法項目の機能拡張でも同じような基本的(中心的)機能と拡張した(周辺の)機能を有すると考える。詳細については、靱山 (2002)などを参照されたい。

表 5-3 「ば」の各用法の出現数および出現率 (BJSTC)

「ば」全 1,803 例				
表 記	「ば-1」	「ば-2」	「ば-3」	「ば-4」
用 法	接続助詞用法	慣用用法	文末用法	「ってば」用法
出現数	1,724	52	22	5
出現率	95.62%	2.89%	1.22%	0.27%

一方、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』の検索については、本研究では2000～2005年の小説のコアデータ(付録2を参照)に限定した(以下の表5-6と5-8も同様)ため、「ば-4」の用例が出なかった。しかし、『日本語日常会話コーパス (CEJC)』には「ば-4」(ってば)の用例は25例出たため、以下、分析する際は入れておいた。

表 5-4 「ば」の各用法の出現数および出現率 (BCCWJ)

「ば」全 121 例				
表 記	「ば-1」	「ば-2」	「ば-3」	「ば-4」
用 法	接続助詞用法	慣用用法	文末用法	「ってば」用法
出現数	106	12	3	0
出現率	87.60%	9.92%	2.48%	0%

辞書では「ば」の意味記述は以下のようにになっている。

(22) 「ば」の意味記述

【接続助詞】

- ① 文語で未然形に接続し、仮定の順接条件を示す。口語では仮定形に接続する。「仮定形+ば」は「已然形+ば」と同じ語形だが、已然形のもつ確定の意味を表さなくなったもの。
- ② 文語で已然形に接続する。確定条件を示す。
- ③ 口語の仮定形に接続して、同趣の事柄を並べる。
- ④ 形容詞型活用の語尾「く」、打消の「ず」などに付いた係助詞の「は」が、江戸時代以降、連濁したもの。仮定条件を表す。(『広辞苑』(第七版、電子版))

接続助詞「ば」は、現代日本語では仮定関係を表す標識として、従属節末に置かれ、主節と繋がる。以下が基本的な用法の例である。

(23) もし、この実験に成功すれば、もう水を絶たれて降参したりすることもない。

『砂の女』

例 (23) の「ば」は接続助詞として、動詞の仮定形に後接して使われている。「前件」と「後件」の間には「仮説—結果」という関係がある。同じく動詞の連用形に後接している形式の中に、動詞の前接部分に指示詞が現れるものがある。それが例 (24) に見られる「指示詞+すれば」の形式である。

(24) なるほど、という風に彼女は二、三度肯き、またブレスレットをいじった。「そうね、そういうの思いつかなかったわ。あなたの電話番号も**そう**すれば調べられたのにね。でも、その病院のことだけど、また今度話すわね。今あまり話したくないの、ごめんなさい。」

『ノルウェーの森』

(25) 「本当に、助かりますよ……一人のときと違って、朝もゆっくり出来るし、仕事じまいも、二時間は早くなったでしょう?……行くゆくは、組合にたのんで、なにか内職でも世話してもらおうと思って……それで、貯金してね……**そう**すれば、いまに、鏡や、ラジオなんかも、買えるんじゃないかと思って……」

『砂の女』

例 (24) と例 (25) は動詞「する」の仮定形と指示詞とを組み合わせる用法である。「ば」の前接部分は元々の「節」から「そうする」のような「句」へと変化していき、「そうすれば」は次第に慣用用法になっていったと見られる<sup>59</sup>。さらに、「すれば」という指示詞が省略される形式は「接続詞」として辞書にも記載されている。

(26) 「すれば」の意味記述

〈接続詞〉 そうすれば。それでは。

(『広辞苑』(第七版、電子版))

<sup>59</sup> 「ば」形式の用法の中には、「そうすれば」「そう言えば」「そう思えば」など慣用的に使われているものが多い。これは「たら」と「なら」と異なるところだと言えよう。また、これらの表現、とりわけ「そうすれば」の短縮形「すれば」が接続詞として認められているが、他の表現はまだ進行中であると推測される。

ここでは、「すれば」と「そうすれば」ともに「ば-2」、慣用用法に入れておく。さらに、「そうすれば」の中の指示詞「そう」が脱落し、「すれば」が文頭に置かれる接続詞的用法も次第に用いられるようになっていったと推測される<sup>60</sup>。つまり、「すれば」はより従属的な接続助詞の機能（「ば-1」）からより独立的な接続詞の機能（「ば-2」）への文法化のプロセスを経てきているのである。

次に、「ば」の後接する部分（の変化）によってもたらされた「ば」の機能変化を見よう。

(27) 「じゃあ、そうすればいいじゃないか！」 『死者の奢り』

(28) そう言って笑った。八千代の方も大船に乗った気持だった。勘定はあとから父に請求すればいい。 『あした来る人』

例 (27) と例 (28) は一見「ば」の接続用法と同じ文構造であるが、実際には、その主節は大きく異なっている。「いい (です) か」「如何 (です) か」「どう (です) か」などが「ば」と共起することが多い。「ば」と「どうか」などは慣用化 (イディオム化) され、「ば-3」になる。さらに、以下のような主節を省略する例文も見られる。

(29) おじちゃん、久男が偉くなったらここんちのお酒、寒風山って名前に変えれば。  
(白川 2009: 81)

例 (29) は「寒風山って名前に変えればどうですか?」ともなりえる。これらの文では、本来あるべき主節の疑問表現（「如何か」「どうか」など）が省略され、「ば」のみで主節の「如何か」「どうか」を含意することが慣用化し、接続助詞「ば」が終助詞に転化する、という機能拡張が起きたと考えられる。つまり、「ば-1」は慣用化という動機づけを経て、文末用法の「ば-3」になる。

最後に、「ば-4」すなわち「ってば」は、「と言えば」から変化してきたものである。

---

<sup>60</sup> 「すれば」の接続詞用法は辞書で認められているが、コーパスで用例を検索したところ使用例がなかった。古い言い方で話し言葉ではあまり使わない。この点は文頭で普通に使える「したら」と「なら」とは異なってくる。また、辞書に記載されている用例は、「二百人籠者があれば、知音の音信にゆくものが二百人。すれば、四百人あまりあるぞ」（寛永刊本蒙求抄（1529 頃）、『精選版 日本国語大辞典』より）で、かなり古い時代に使われており、現在はあまり使われていないようである。

「名詞＋ってば」、「終止文＋ってば」に分けられ、2つの機能を持っていると考えられる。それは、提題助詞的機能と終助詞的機能である。

a. 提題助詞的機能

「ってば」は「(っ)たら」と同じように、「と言う」の假定形から音の縮約<sup>61</sup>を経てきた形である。詳細は三枝(1999: 4)を参照されたい。「と言う」の「引用機能」を残しながら「提題機能」になっているのである。

(30) 克己ってば、すごく不機嫌な顔してる。 (三枝 1999: 1)

例(30)の「ってば」は名詞に接続し、後ろに続く文がその名詞に対する評価や陳述を行う。

b. 終助詞的機能

終助詞的機能も「ば-4」の一つの現れである。これも「言う」の性質に関わると考えられる。三枝(1999: 10)も、終助詞用法「ってば」「ったら」について「意味的には「と言え」「と言ったら」に戻して前件と同じ表現の後件を付け加えることができる」と述べている。つまり、「ってば」「ったら」の機能は「と言え」「と言ったら」と同じく、前述した人や事柄を再度提出する際に使われ、その人や事柄について述べるといふものである。「と言え」の縮約形式としての「ってば」は、前文に既に出現した内容を強調し再び取り出して言う時に使われる。「すでに言っただろう」という意味合いが含まれている。話し手がやや嫌がっている気持ちが感じられる。日常会話コーパスでもこのような用法がほとんどであり、a.の提題を表す用法は出なかった。

(31) 待て！冗談いうな！おい、待ってくれよ！……後悔するぞ！……あんたには、まだ、  
ぜんぜん分っちゃいないんだ！……たのむ……待ってくれってば！ 『死者の奢り』

(32) 大丈夫だってば、——承知したってば、——。 『痴人の愛』

(33) おひょおひょ、紙に紙ごみにするにはもったいない、あー、おいで、おちびさん、

---

<sup>61</sup> 『大辞林』(第四版:1707)では、「といったら」の転。「ったら」の形で用いることが多いとはっきりと記述している。つまり、「ったら」の形式は「言う」と共起し「と言う」＋「たら」になり、さらに「言う」を縮約して「ったら」になる。

おいで、あー、お昼お昼はスープレーマン、おいでってば。(T011\_015<sup>62</sup>) (CEJC)

以上の二つ、「名詞+ってば」、「完全文+ってば」は、「ば」の接続機能から「ば」の前接部分(の変化)による機能拡張になっていると考えられる。上記の a.と b.二つの下位分類は、「ば」と動詞「言う」の仮定形の慣用化により、「～と言う+ば」→「～といえば」(「い」が脱落して「と」と「え」が短縮して「って」になる)→「ってば」という変化の過程で、「ば-1」→「ば-4」のプロセスを完成させている。なお、「ば-4」は「ってば」の形をとるため、ここでは「準」を付け加えることにする。また、「ば-3」と「ば-4」をともに「終助詞的機能」という用語を使うと誤解を招く可能性もあるため、また「ってば」の終助詞機能が確立しているとはいえないため、「ば-4」を「準終助詞的機能」としておく。形式から見れば、「ば」が文末に置かれることは似ているが、「ば-3」においては、主節がなくても補足することができるのに対して、「ば-4」の準終助詞的機能においては、「ば」の前が完全文であるため、何も補足する必要はない。

以上の分析に基づき、「ば」の機能拡張プロセスを簡単に整理してみよう。

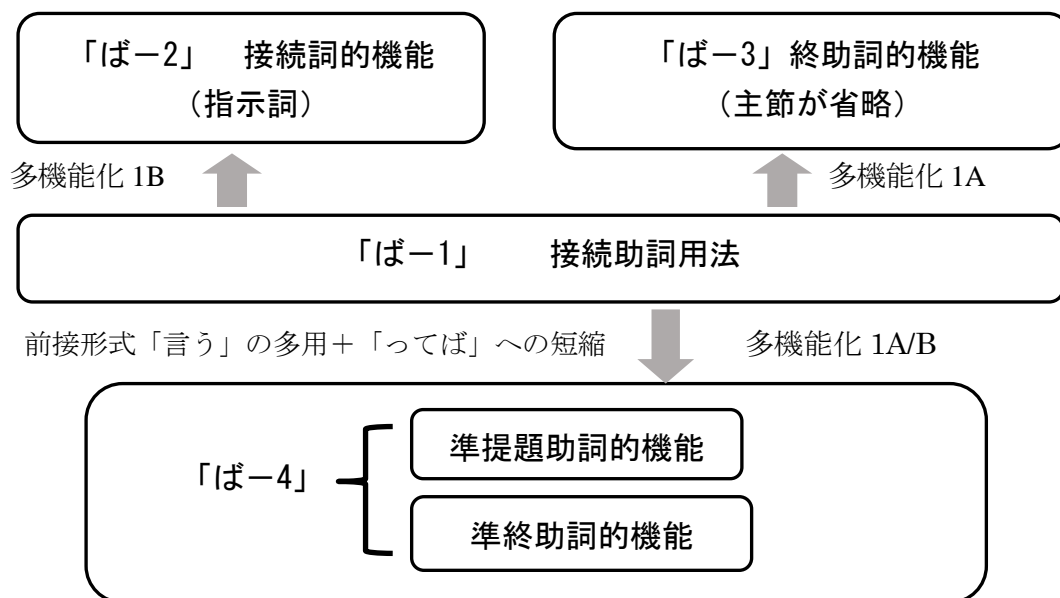


図 5-2 「ば」の機能拡張プロセス

<sup>62</sup> 『日本語日常会話コーパス』から引用した例は括弧内に会話 ID を付けておいた。以下は同様である。

「ば」の機能拡張図を小柳 (2018) が提出した文法化の方向性に合わせると、以下の通りである。「ば」は元々接続助詞なので、終助詞、提題助詞への拡張は同じく付属的機能語の枠内の変化で、多機能化 1A であると言えよう。一方、接続詞への拡張は付属的機能語から自立的機能語への移り変わりである多機能化 1B であると見られる。「ば」のこれらの機能拡張はすべて、「たら」の用法にも見られる。

### 5.3.2 「たら」の機能拡張

『広辞苑』(第七版)などの辞書に基づき、接続形式によって分類すれば、「たら」は「接続助詞用法」、「名詞・活用語の命令形・終止形などに接続する用法」、「慣用用法」、「文末用法」の4つに分けられる。以下、この『広辞苑』の分類に基づき、「たら」の接続助詞用法を基本(中心的)用法として「たら-1」、「慣用用法」を「たら-2」、「文末用法」を「たら-3」、「ったら」用法を「たら-4」と表記し、各用法の使用率を次表5-5にまとめた。

表5-5 「たら」の各用法の出現数および出現率 (BJSTC)

「たら」全 842 例				
表 記	「たら-1」	「たら-2」	「たら-3」	「たら-4」
用 法	接続助詞用法	慣用用法	文末用法	「ったら」用法
出現数	759	33	32	18
出現率	90.14%	3.92%	3.80%	2.14%

「ば」の状況と同様、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』で検索した結果と『中日対訳コーパス (BJSTC)』との差異は大きくはなかった。ただし、表5-6が表すように、「たら-4」はBCCWJにおいて検索する際、2000~2005の小説のコアデータ(付録2を参照)に限定したため、この部分では用例は出なかった。

表5-6 「たら」の各用法の出現数および出現率 (BCCWJ)

「たら」全 67 例				
表 記	「たら-1」	「たら-2」	「たら-3」	「たら-4」
用 法	接続助詞用法	慣用用法	文末用法	「ったら」用法
出現数	57	2	8	0
出現率	85.08%	2.98%	11.94%	0%

まず、「たら」の最も基本的な用法—接続助詞用法—「たら-1」から見ていく。「たら」の「接続助詞」としての用法は『新明解国語辞典』（第八版:968）に「【接続助詞】ある事柄が完了・成立したことを仮定する。接続はすべて過去の助動詞「た」に準ずる」と扱われている。最も詳しく解説している辞書は『大辞林』である。「た」を「古語の完了の助動詞「たり」の連体形「たる」からの転<sup>63</sup>。」で、中世以降は「た」という形式で定着してきたとする。「たら」は「たる」の古語の仮定形であり、接続助詞「ば」を伴わなくても用いられる。詳細については以下の通りである。

(34) 「たら」の意味記述

- ① 仮定条件を表す。仮にそうであるならば。もしそうなったらば。

「雨が降ったら、中止にする。」

- ② 未来の確定条件を表す。

「春になったら暖かくなる。」

- ③ 遠回しに命令する意を表す。主として女性が用いる。

「早くお帰りになったら。」

(『大辞林』第四版:1618)

上記の用例からみると、「たら」は「た」の仮定形として、①のような「仮定条件を表す」ものが基本的な用法であると見られる。

(35) それはもしも面接試験でやられたら、一番困るところだね。 『青春の蹉跎』

(36) 今の機を逸したら、永遠に人生は私を訪れぬだろう。 『金閣寺』

例 (35) と (36) の「たら」は接続助詞として、動詞の連用形に後接して使われている。「前件」と「後件」の間には「仮説—結果」という関係がある。同じく動詞の連用形に後接している形式の中に、動詞の前接部分に指示詞が現れるものがある。それが以下の例 (37)、例 (38) に見られる「指示詞+したら」の形式である。

(37) 「わたし、先刻申し上げましたように、いまは別に外国へ行きたくありませんの。」

---

<sup>63</sup> 『スーパー大辞林』（電子版）を利用した。デジタル大辞泉においては「助動詞「たり」の連体形「たる」の音変化」と述べている。つまり、「たり」→「たり」連体形「たる」→「た」のように変化してきたということである。

急にそんなことをすすめていただくとさびしくなりますわ。」

「別にすすめはせん。ただその方が気が変わるなら、そうしたらいいと思ったまでだ。」 『あした来る人』

(38) 「然し、君、解ったら、そうしたら好いじゃありませんか、僕は君等の将来を思  
って言うのです。」 『布団』

例 (37) と例 (38) は「たら」と指示詞とを組み合わせる用法である。「たら」の前接部分も元々「節」から「句」へと変化していき、「そうしたら」は次第に慣用用法になっていったと見られる。「そうしたら」の使用頻度が高くなるにつれて、「したら」という指示詞が省略される形式が派生してきた。「したら」は一つの「接続詞」として辞書にも記載されている。

(39) 「したら」の意味記述

〈**接続詞**〉 先行の事柄の結果として、後続の事柄が起こることを示す。順態の仮定条件。そうしたら。したらば。

「だから由良一座の代わりに若宮一座ができる <略>」

「したら、先生はどうするんだ？」 (『春泥』)

(『日本語大辞典』(第二版) 1995: 781)

ここでは、「したら」と「そうしたら」はともに「たら-2」、慣用用法に入れておく。この用法は『日本語日常会話コーパス』に見られた。例 (40) は「したら」が接続詞として機能している例である。

(40) サイコロ振るのね、いやーしたら、十一番の、これに引っかかっている僕が、これをも  
らって、もう一個、十一あるよね。 (K013\_020) (CEJC)

さらに、「したら」の中の「し」が脱落し、「たら」が文頭に置かれる接続詞的用法もある<sup>64</sup>。例 (41) と (42) はその具体例である。

<sup>64</sup> 対談では「たら」が独立して使用される例も観察された。「あのう、本来の千秋楽であった日、その日に父からなんかメッセージね、みんな、父の言葉を聞きたい、白鷺さんの言葉を聞きたいだろうな、たら、「千秋楽おめでとう」って、それを私は転送したんですけど」のような例

(41) 始発だからさ中央線も座れるかなと思って、うーん、うーん、絶対座れるもんね、あ、そっかそっか、うーん、確かに、たら、見事に引かかっちゃった。

(C001\_001) (CEJC)

(42) 楽かなって感じ、ちっちゃい場所で実験やって、で広いところで待っててもらったりとか、子供遊ばせられるじゃん、それだったら、たら、一万円ぐらいかかるん違うの。

(K003\_006) (CEJC)

つまり、「たら」はより従属的な接続助詞の機能からより独立的な接続詞の機能<sup>65</sup>への文法化のプロセスを経てきている。これも「たら-2」に入れておく。「そうしたら」→「したら」→「たら」は機能拡張には2段階あると考えられるが、「したら」も「たら」も接続詞用法が成立したという着点は同じであるためである。

次に、「たら」の前接部分に変化することなく（動詞の連用形のまま）、後接する部分（の変化）によってもたらされた「たら」の機能変化を見てみよう。

(43) なんなら、行ってごらんになったら如何ですか。 『あした来る人』

(44) 仕事を勉強するために外国へ行ったらどうかな。 同上

例 (43) と例 (44) は一見して、「たら」の接続用法と同じ文構造であるが、実際には、その主節は大きく異なっている。「如何 (です) か」「いい (です) か」「どう (です) か」などが「たら」と共起することが多い。「たら」+「如何か」「いいか」「どうか」などは慣用化 (イディオム化) され、「たら-3」になる。この機能拡張について、森田 (1989) は以下のように説明している。

---

がある。(この会話例は林修が松たか子にインタビューした番組 (日曜日の初耳学、2022 年 6 月 19 日放送) の会話を文字化したものである。下線は引用者による。) このような文頭に置かれる「たら」は「したら」から発達したのか、あるいは「だったら」から発達したのかは課題として資料を収集して検討したい。なお、ここの「たら」は「したら」から発達したと考えられる。<sup>65</sup> BCCWJ、CEJC では、「たら」のこういう独立した用法は「接続詞」という品詞類に位置づけられていることが分かった。コアデータに限らず、BCCWJ では「たら」が接続詞と位置づけられた例は 6 例 (検索条件:「語彙素」を「たら」、「品詞」を「接続詞」) しかないが、CEJC では 72 例 (検索条件:「語彙素」を「たら」、「品詞」を「接続詞」) 見られ、口語では「たら」の接続詞用法が進んでいると言える。

動詞を前件として、「～たら」で文を止めるか、「……たらいい／たらどう／……たらいかが」の形を取ると、相手にある行為の開始または終止を促す表現となる。仮定的な条件を提示することによって、結果的にその実現を促す勧誘表現となるのである。(森田 1989: 687)

さらに、以下のような主節を省略した例文が見られる。この場合、「たらどう？」の意味の疑問文になる。

- (45) チョッキのボタンをお外しになったら?見ていて窮屈そうだわ。 『あした来る人』  
(46) 「それ、お棄てになったら」と、八千代は注意した。 同上

例 (45) は「チョッキのボタンをお外しになったらどうですか?」、例 (46) は「それ、お棄てになったら如何ですか?」ともなりえる。これらの文では、本来あるべき主節(「如何か」「どうか」など)が省略され、「たら」のみで主節の「如何か」「どうか」を含意することが慣用化し、接続助詞「たら」が終助詞に転化する、という機能拡張が起きたと考えられる。つまり、「たら-1」は慣用化という動機づけを経て、文末用法の「たら-3」になる。

つまり、「たら-1」から「たら-2」「たら-3」へ機能拡張する際、相手向けの勧誘を示すという対人機能が発現する。上記の例 (43) と例 (44) を観察すると、二つの文はどちらも話し手が聞き手に対して勧誘をするという発話であり、それゆえ「行ってごらんになる」と「外国に行く」の主語は聞き手であり、話し手が聞き手に対して当該の行為を行うことを促す機能をもっていることがわかる。

このような従属節を導く「たら」などの接続助詞で文が終止し、一見主節のない文は白川 (2009: 11) では「言いさし」と呼ばれている。同様に、Maynard (1997: 121-124) は日本語 (特に話し言葉) では、述語の「終止形」で文を終える場合は相対的に少なく、その代わりに「て形」「終助詞」などの形式が用いられる「裸の終止形の回避」とも言うべき伝達上の選好傾向があると指摘している。Maynard (1997: 119) は、「動詞以外の要素で文を終えることを通して、文を言い切るという印象を弱め、対人的な交渉の余地があるということを示唆する<sup>66</sup>」効果があると述べている。堀江 (2014b: 688) は「終止

<sup>66</sup> 堀江 (2014b: 687-688) 訳を参照して訳したものである。原文は、“This strategy of ending sentences with elements other than verbs helps make the sentence less final, implying that it remains open

形と連体形の区別が明確でないことは、文を終結させるために述語の終止形以外の手段が必要となることにも繋がる」とし、「このため、日本語においては、絶えず文末の位置で終止形述語に代わる新しい文終結形式の要請が潜在的にあり、「従属節の主節化」形式<sup>67</sup>（「言いさし」）もその一つの有力な資源となっている」と述べている。

最後に、「たら-4」すなわち「ったら」を見てみよう。「たら」のこの用法は今回のデータには18例見られた。これらは、「名詞+たら（ったら）<sup>68</sup>」、「活用語の命令形・終止形+たら（ったら）」、「感動詞+たら」に分けられ、大体3つの機能を持っていると考えられる。それは<提題><要求><強調>である<sup>69</sup>。

a. <提題>

「提題機能」への拡張は「たら」が名詞に後接する場合に見られる。この「(っ)たら」は「と言う」の条件形「と言ったら」の縮約形であると三枝(1999: 4)は指摘している。「と言う」の「引用機能」を残しながら「提題機能」になっているのである。

(47) 大貫ったら、ほんとにいやになるわ。 『あした来る人』

(48) 何せ、うちの社長ったら、がっちりしていますからね、二万円と言ってねばったのですが、やっと一万円。 『斜陽』

(49) 酒は飲むし、月給は今月ったら七千円しか持って帰らないし。 『あした来る人』

例(47)～(49)の「(っ)たら」は名詞に接続し、後ろに続く文がその名詞に対する評価や陳述を行う。また、その評価はマイナス評価の場合が多い。

b. <要求>

「相手に行為を要求する」機能も「たら-4」の一つの現れである。これも「言う」の性質に関わると考えられる。下の例(50)と例(51)は「いう」という動詞がまだ保留さ

---

for interpersonal negotiation.”である。

<sup>67</sup> Evans (2007) によって “the conventionalized main use of what, on prima facie grounds, appear to be formally subordinate clause” (形式的には一見して明白な基準で従属節のように見えるものの習慣化された主節用法)と定義され、“insubordination”(従属節の主節化)と命名される。

<sup>68</sup> 「たら」と「ったら」に関する相違点の詳細はヘイズ高野園・新里(2001)を参照されたい。

<sup>69</sup> 三枝(1999)、ヘイズ高野園・新里(2001)、加藤(2003)、大野・キンベリー(2005)、白川(2009)、元(2010)などを参照のこと。

れており、その前に動詞の命令形が現れる。動詞「言う」が残ることで話し手が命令しているということが明示されているため、話し手が聞き手にその行為を遂行させるのだということ<sup>70</sup>が明らかにされていると言える。

(50) 阿呆な奴ちゃ。早よここへよんでこいうたら。 『雁の寺』

(51) よし！詫まらなけりゃそれでいいから、今直ぐ此処を出て行ってくれ！さ、出て行けと云ったら！ 『痴人の愛』

さらに、「と言ったら」の縮約形式「ったら」が現れる例もある。次の例 (52)、例 (53) を参照されたい。

(52) ほら、ほら又すべった！そんなに急いで廻るからよ！もっと静かに！静かにった  
ら！ 『痴人の愛』

(53=(2)) あ、いてえ！よせ、止せ、止せったら！生き物だから少し鄭重にしてくんねえ、  
踏み台にされたり蹴られたりしちゃ、いくら頑丈でもたまらねえや<sup>71</sup>。 同上

例 (52) と (53) は「言う」が省略され、「ったら」だけで行為要求を表したり、相手の行為を阻止することを表している。上記の三つの例文はすべて同じ小説の中に現れる例であるため、著者に特有の表現という可能性も否定できないが、いずれにしろそこには相手への強い要求が明らかに表されていると言える<sup>72</sup>。

#### c. <強調>

「たら」が感動詞に後続するデータは 1 例あった。

(54) 「おい！何してるんだ！おいったら！」私は立ち上って、足で彼女の腰のあたりを

---

<sup>70</sup> 日本語記述文法研究会 (2009a) では、「といえは」「という」と「いたら」を主題提示機能として分類し、これらの形式の違いについて記述している。

<sup>71</sup> この例文については、三枝 (1999) はこのような「ったら」は「たら」とかなり異なる性格をもつと主張している。理由としては、「ったら」の前接部分はすでに「完全文」であり、南の文階層理論によれば、この「ったら」は D 類に属すべきとし、「たら」は B 類に留まらない。なお、「完全文」と「不完全文」の言い方と判断基準については白川 (2009) を参照されたい。

<sup>72</sup> 日本語記述文法研究会 (2009a)、白川 (2009) などを参照のこと。

乱暴にぐんぐん揺す振りました。

『痴人の愛』

例 (54) の「おいッたら」の「たら」は意味がほとんどなく、「おい」を強調するだけである。

以上の三つ、「名詞+たら (ったら)」、「活用語の命令形・終止形+たら (ったら)」、「感動詞+ったら」は「たら」の接続機能から、「たら」の前接部分 (の変化) による機能拡張になっていると考えられる。上記の a. と b. と c. 三つの下位分類は、「たら」と動詞「言う」の慣用化により、「～と言う+たら」→「～といたら」→「ったら」という変化の過程で、「たら-1」→「たら-4」のプロセスを完成させている。なお、「たら-4」の下位類の b. と c. の「ったら」の用法はいわゆる「終助詞的用法<sup>73</sup>」であり、「たら」の形は取らない。「たら」と「ったら」の詳細な差異についてはヘイズ高野園・新里 (2001) を参照されたい。

以上の分析に基づき、「たら」の機能拡張プロセスを簡単に整理してみよう。

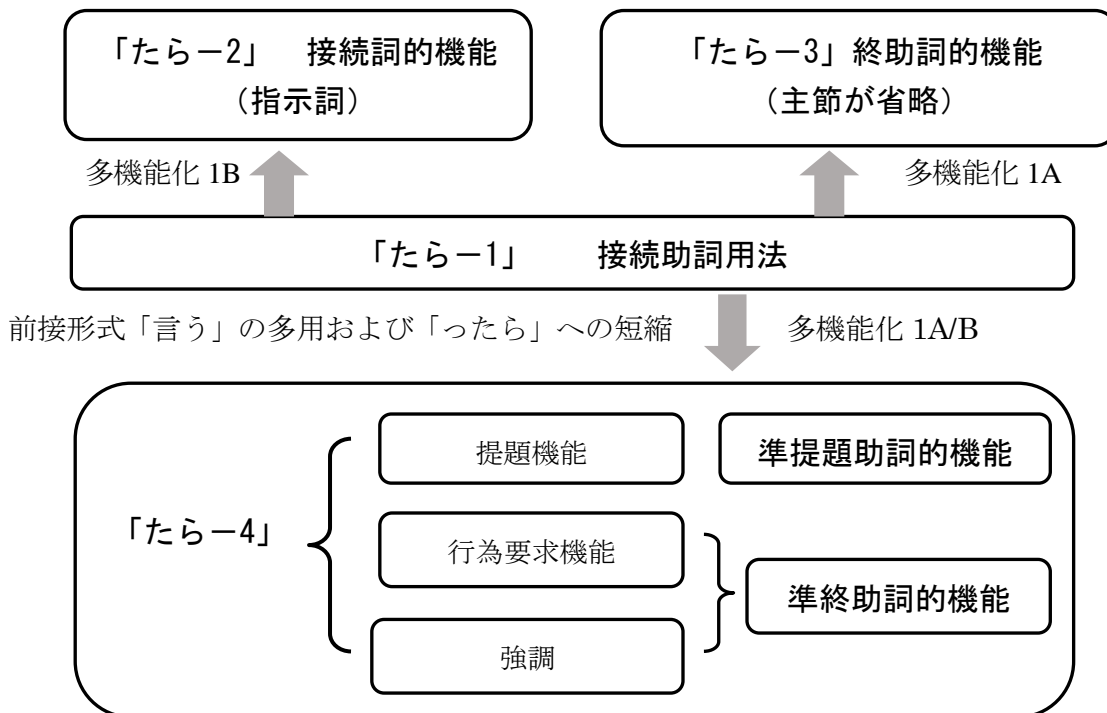


図 5-3 「たら」の機能拡張プロセス

<sup>73</sup> 白川は一連の研究 (例えば、白川 1991a, 1991b, 1995 など、後に白川 (2009) に収録される) で文末に置かれる接続助詞に注目して、「言い終わり」と「言いさし」を区別した。「言いさし」の用法としては、形式上は文末に置かれ、終助詞のように見えるが、それは元々の文中に置かれる接続助詞としての用法の延長線上の位置づけられると述べている。

元々動詞の連用形に接続し、文中に接続機能をもつ「たら」は前件と後件を繋ぐために使用されるが、「たら」で繋ぐ前接形式や後接形式において変化が起きることによりその接続機能が変わってきている。まず、接続助詞「たら」の前接形式と同様の動詞の連用形に接続する場合に起こる変化である。動詞「する」の連用形「し」に後続する「したら」は前後節を繋ぐ「接続機能」をもつと言えるが、指示詞と融合・慣用化して「そうしたら」のように全体として接続詞になる場合は、「たら」は接続機能を保っているが、前後節を繋ぐ「接続機能」とは異なる。この点については次章で詳しく議論する。次に、前接する形式も動詞の連用形のまま、後件に出現する「どうだ」等との慣用化を経て、さらにはその欠落により対人機能をもつ「終助詞」に近似する文末用法をもつようになるものがある。この過程においては、慣用化つまり語用論的強化<sup>74</sup>も一つの重要な動機付けである。なお、「たら」の拡張したこの二つの機能は「ば」にも見られる。

また、もう一つは前接形式が一見動詞ではない場合である。「たら」を発言動詞「言う」と同時に用いることで、「～といたら」の慣用的表現になり、提題機能としてよく使われる。使用頻度が高くなる中で、「～とい」の音は次第に脱落し、名詞などに直接接続し、「ったら」になる。

「たら」と「ば」がの機能拡張がかなり並行的に機能拡張を進行させている<sup>75</sup>ように見られるため、両者を一つにまとめてみる。

---

<sup>74</sup> 「たら」と「どうだ」「いいか」など勧誘や意見を表す表現と文脈中に同時に使用され、必然的ではなかった結びつきが慣習化され、文法機能を担うことは語用論的強化と呼ばれる。Traugott (1989)などを参照されたい。

<sup>75</sup> しかし、「たら」は「ば」より文法化が進んでおり、とりわけ、提題的機能と終助詞的機能に関して「たら」は定着しているように見られる。『新明解国語辞典』（第八版）では、「たら」を「接続助詞」「副助詞」「終助詞」という三つの品詞を付している。

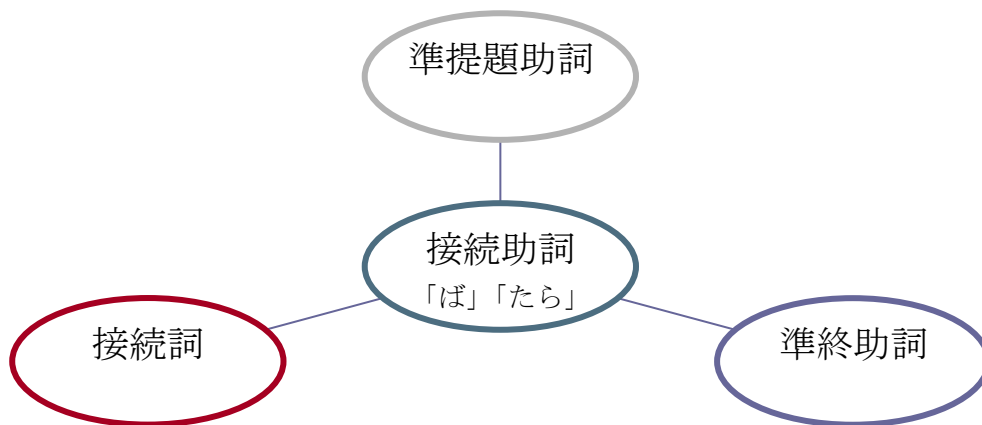


図 5-4 「ば」と「たら」の多機能化

### 5.3.3 「なら」の機能拡張

「たら」と同様に、「なら」の場合も『広辞苑』（第七版）などの辞書に基づき、接続形式によって分類することで、「接続助詞用法」を「なら-1」、「名詞・助詞・副詞に接続する用法」「慣用用法」「文頭用法」をそれぞれ「なら-2」「なら-3」「なら-4」と表記する<sup>76</sup>。（各用法の出現率については表 5-3 を再度参照されたい。）

「ば」と「たら」は動詞の仮定形に接続することが多いが、表 5-7 が示すように、名詞が述語の場合は「なら（ば）」の形が多く、「ば」「たら」と「なら」は相補的に分布していると思われる。

表 5-7 「なら」の各用法の統計 (BJSTC)

「なら」 全 565 例				
表 記	「なら-1」	「なら-2」	「なら-3」	「なら-4」
用 法	接続助詞用法	名詞・助詞・副詞に接続する用法	慣用用法	文頭用法
出現数	342	45	176	2
出現率	60.53%	7.96%	31.15%	0.35%

現代日本語の小説における用例と対照してみると、「なら」の用法は一致している。

<sup>76</sup> ここでは、「なら」の用法分類も「たら」と同じように出現率の高さに基づいて表記するつもりだったが、「なら」の場合は、「慣用用法」と「文頭用法」には繋がりがあがあるため、説明の便宜上、「慣用用法」は「なら-3」に移し、「なら-4」と順を追って表記することにした。

ただし、表 5-8 が示すように、BCCWJ (コアデータ) では「なら-1」が半数以上を占めるという点は同様であるが、「なら-2」の用法がやや多く「なら-3」と「なら-4」がやや少ないという相違はある。

表 5-8 「なら」の各用法の出現数および出現率 (BCCWJ)

「なら」 全 50 例				
表 記	「なら-1」	「なら-2」	「なら-3」	「なら-4」
用 法	接続助詞用法	名詞・助詞・副詞に接続する用法	慣用用法	文頭用法
出現数	27	14	6	3
出現率	54.00%	28.00%	12.00%	6.00%

まず、「なら」の各用法の中で最も出現率が高いものである「接続助詞用法」(「なら-1」)について辞書の記述を見てみよう。『大辞林』(第三版)には、「なら」について「「にてあり」から出た「である」が「であ」を経て「だ」となったもの。中世末に東国方言として用いられるようになったという。」と解説されている。「だ」の仮定形である「なら」は名詞・副詞、ある種の助詞、および体言に準ずるものに接続し、動詞・形容詞、助動詞「れる・られる」「せる・させる」「ない」「ぬ」「たい」「た」などの終止・連体形にも接続し、さらに、仮定形「なら」だけは助動詞「ます」の終止形にも接続するとまとめられている。

次に実際の用例から「なら」の用法を検討する。

(55) 三人ともいらっしゃるなら、わたしもお供します。 『あした来る人』

(56) それほど信じられないのなら、始めから信じなきゃいいんだよ。 『砂の女』

接続助詞としての「なら」は仮定の意味が強く、「のなら」「のならば」「ならば」などの派生形式を有する<sup>77</sup>。また、話し言葉では「の」を「ん」とする場合もよくある。「もし実際そうなるなら」「もし事実がそうだったなら」という意味を表す。この種の「なら」を「接続機能」と名付けておく。

次に、「なら」の「名詞・助詞・副詞に接続する用法」への機能拡張を見る。

<sup>77</sup> 「なら」と「のなら」の異同の詳細については第 6 章を参照されたい。

- (57) 午後なら手渡せる。 『あした来る人』
- (58) 曾根君の住所なら、確かこの間、暑中見舞が来ていたと思ったが。 同上
- (59) 岩下さんなら、どうにかするでしょう。とにかく、お金を銀行に振込まねば、品物の動きがばったりです。 『黒い雨』

「なら」が名詞などに接続する場合、当該名詞は話題として提起されることになり、後に続く文は「なら」の前の話題についての評価や叙述となる。「ったら」の提題機能と異なる点は、「なら」に続く後文は「なら」で提示する名詞を受け取ってから中立的に叙述するという点である。一方、「ったら」は話し手の話題となる人や事への評価が目立っている。「なら」が名詞に接続することのできる理由の一つとして、「なら」は断定助動詞「だ」の假定形であることが挙げられよう。「なら-1」から「なら-2」への機能拡張は以下のように図式化できる<sup>78</sup>。

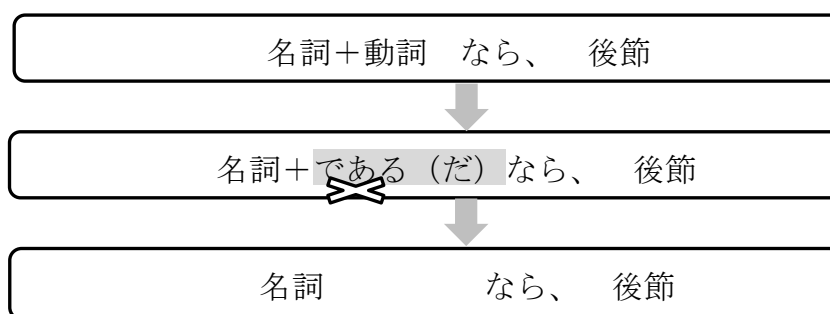


図5-5 「なら-1」から「なら-2」への機能拡張

図5-5 からわかるように、接続助詞としての「なら」は元々述語の終止形に接続するが、その述語が「である」の場合には、「なら」が元々断定(だ<sup>79</sup>)の意味をもつことから、同じ意味が重なるのをさけるために「名詞+なら」となったと考えられる<sup>80</sup>。

<sup>78</sup> 「なら」は提題助詞として扱われていて「ば」との対照が見られる。前田(2009: 57)は、「いつごろなら退院できます? (下線は原著のまま)」を例として挙げて、「なら」は主節の肯否の制約がないと説明している。

<sup>79</sup> 益岡(2013: 153)では「ナラ形式は「ナリ」が組み込まれた形式であるが、「～ナリ」がおおよそ現代語の「～ノダ」に相当する」と述べている。

<sup>80</sup> 山口(1969: 155)は名詞と形容動詞を述語とする假定句は動詞と形容詞との状況とやや異なると主張している。名詞や形容動詞の假定形式においては、「述語自体が、活用語尾または助動詞として判断形式「だ」を本来備えているため、そのうえさらに「なら」がつくことはないから

次に、「なら-3」への機能拡張プロセスを見ていく。

- (60) 岩竹さんは庄原行と聞いて、仰向けに臥たまま目蓋を指の先で明けて<sup>81</sup>天井を見た。はっきりと板の木目を見ることが出来た。これなら戸坂の駅まで歩いて行けそうな気持がした。『黒い雨』
- (61) そう、それなら、あの辺に埋まっているはずだ……地面をすかしてみると、砂が、スコップの形に盛上っているのがすぐ分った。『砂の女』

「指示詞+なら」の形式はよく使われている。例 (60) と例 (61) はそれぞれコ系指示詞とソ系指示詞+「なら」の形式で、そのうち、「それなら」という形式は一つの固定的な言い方となり、「接続詞」として扱われることが多い。詳細については第 8 章で述べる。「指示詞+なら」という形式では、指示詞が脱落して文の初めに「なら」が単独で使用される例もある。例 (62)、(63)、(64) を参照されたい。

- (62) なら、寄って下さればよろしいんですのに。『あした来る人』
- (63) 「なら、おれは行くよ」彼はためらいながら言った。『小鮑庄』
- (64) じゃあ、まあいつああゆうのそゆうの得意じゃないんでどうなるかわかんないっすけどね、なら、宴会部長も入れとこうか。(T010\_009) (CEJC)

「それなら」「これなら」のように「なら」が指示詞と共起し、全体が慣用句化する過程を経て、例 (62) ~ (64) のような文頭用法「なら-4」が現れる。「指示詞+なら」が慣用句化した後、指示詞が省略され、元々の付属語である「なら」が独立していく。つまり、「なら」自体は「接続助詞」から「接続詞」へと拡張している。この現象が生じる一つの要因としては、「なら」は断定助動詞「だ」の仮定形であり、「なら」自体が断定の意味を含んでいるためであると考えられる<sup>82</sup>。

---

である。この場合は、形容動詞または助動詞自体の、それこそ仮定形が用いられるのである。」と述べている。つまり、「なら」は名詞と形容動詞に後接する場合には、それらの述語形式「だ」自体の変形—仮定形であることが、動詞と形容詞に後接する場合と異なっている。

<sup>81</sup> ここの「明けて」は「開けて」の方が自然だと考えられるが、原作『黒い雨』（1970年、新潮文庫）を確認したが、「明けて」と表記されていたので、ここではそのままにした。

<sup>82</sup> 宮部 (2022: 13) は文頭の「なら」を詳しく検討している。「なら」と「それなら」についての比較・対照を通して、両者は同じレベルにある接続詞というわけではないと主張している。「先行する発話が相手（聞き手）のものではなく話し手自身の場合に、「それなら」はその話し手自

以上の「なら」の機能拡張を図5-6でまとめてみる。

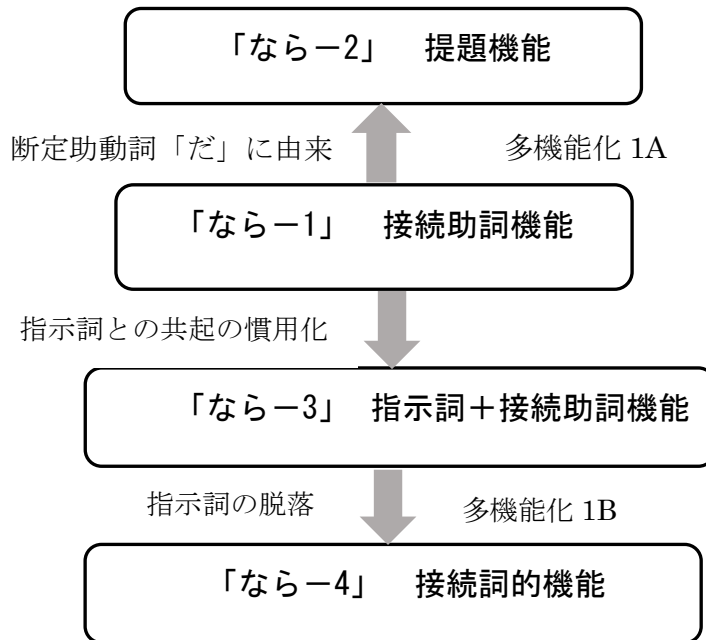


図5-6 「なら」の機能拡張プロセス

品詞上の具体的な機能拡張については図5-7のように示すことができる。

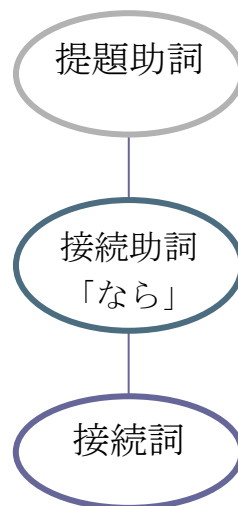


図5-7 「なら」の多機能化

---

身の発話内容をうけるが、「なら」はうけないという違いがあった。」と述べている。

「なら」は提題助詞と接続詞への機能拡張が見られる。元々接続助詞なので、提題助詞への拡張は同じく付属的機能語の枠内の変化で、多機能化 1A であると言えよう。一方、接続詞への拡張は付属的機能語から自立的機能語への移行で多機能化 1B であると見られる。

#### 5.4 本章のまとめ

本節では、「ば」と「たら」と「なら」のそれぞれの機能拡張について考察してきた。「ば」と「たら」は並行的に機能拡張していると見られる。主に接続助詞から文末の終助詞、文頭の接続詞、それに提題助詞へと拡張してきた。その一方で、「なら」は文末の終助詞的機能を持っていない。これは「なら」の接続形式とかがわっていると考えられ、「ば」と「たら」は動詞述語に接続することが多いのに対して、「なら」は名詞述語と共起しやすい。終助詞的用法は主に話し手が相手への行為要求や勧誘を表すため、動詞が述語である場合が多い。名詞述語と共起しやすい「なら」においては終助詞的用法があまりないことも納得できよう。しいて言えば、「ば」と「たら」は動詞に接続しやすく、主節に「どう」「いい」などの省略されやすい表現が出やすいため、文全体の右側(文末)にその拡張傾向が強い。これに対して、「なら」は名詞に接続しやすく、指示詞「それ」と共起する場合に「それ」が省略されやすいことからみれば、文全体の左側(文頭)に拡張する傾向が強いと考えられる。

「ば」「たら」「なら」に関する出現状態は実際の会話ではやや異なる。表 5-9 が表すように、『日本語日常会話コーパス』で検索した結果、これまで見てきた小説のデータと異なり、会話においては「たら」が多用されている。

表 5-9 CEJC における仮定表現の出現数

表現	ば(ってば)	たら	なら
用例数	377	819	55

すなわち、「たら」が話し言葉において多く使用されているということである。「ば」は「たら」より少なく、「なら」はさらに少ない。用法自体は「たら」と「なら」の接続詞としての機能が発達し、とりわけ「たら」が単独で文頭(節頭)に使われる状況ははっきりしており、コーパスの開発者はそれを「接続詞」と品詞分類している。しかも、

例文の出現数は72件である<sup>83</sup>。実際の話し言葉と小説の中の話し言葉の相違についての詳しい分析は今後の課題とする。

---

<sup>83</sup> 「語彙素」を「たら」、検索キーを「発話単位頭から1語」で検索した。その結果からさらに接続詞に分類したものを抽出し、72件の結果が出た。

## 第6章 中国語の仮定表現の機能拡張：非接続から接続へ

日本語は「主語—目的語—述語」のSOV型言語で、中国語標準語は「主語—述語—目的語」のSVO型言語である。この言語類型の相違が両言語の仮定関係を表す接続表現の構文に影響を与えている。日本語と中国語の仮定複文の構文上の特徴について言えば、どちらも従属節が前置され、主節が後置されるという共通の特徴をもっている。しかし、日本語の接続表現は常に従属節の末尾に置かれるのに対し、中国語の接続表現は従属節の初めか主節の初めに置かれるのが一般的である。本章では、中国語における仮定表現の特徴を明らかにする。

### 6.1 中国語における仮定表現の構造上の特徴

中国語の仮定複文は大きく3種類の構文形式に分けられる。日本語の構文形式と異なる点としては、図6-1の中の③の意合法が存在すること、従属節Pのみならず主節Qにも接続表現が用いられること、さらに接続表現を併用する(C1、C2やC3、C4のように二つの接続表現を同時に使用する)ことができることが挙げられる。

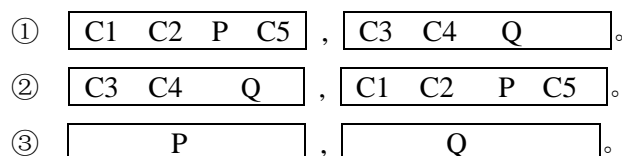


図6-1 中国語の仮定複文の構文形式<sup>84</sup>

中国語の①②③の構文形式と対応する代表的な例文は、それぞれ例(65)、(66)、(67)である。

- (65) 设若 一旦 忘了 这件事, 他 便 忘了 自己,  
 接続語 接続語 忘れる 完了 この 量詞 こと 彼 接続語 忘れる 完了 自己  
 而 觉得 自己 只 是 个 会 跑 路 的 畜生。《骆驼祥子》  
 かつ 思う 自己 ただ 断定 量詞 できる 走る 道 助詞 畜生

<sup>84</sup> この形式の図式は、主節、従属節と接続詞の位置関係を表現するのに一般的に用いられている図式である。同様の図式を用いたものに、森田(1989)、謝(2006)、新田(2007)、章(2014)、王(2017)等が挙げられる。

もしこのことを忘れたら、自分を忘れて、自分は道を走り回ることができるだけの畜生だと思うだろう。

(66) 那 就 别 说 了， 要是 不 掏 钱 的 话。 《金光大道》

接続語 接続語 否定 言う 完了 接続語 否定 金を出す 接続語

だったらこれ以上言うな。もしお金が出せないのなら。

(67 = (3a)) 你 去，我 也 去。 自作例

あなた 行く 私 も 行く

あなたが行くなら、私も行く。

①の例 (65) においては従属節頭に C1 “设若” と C2 “一旦” が主節に C3 “便” が使用されており、②の例 (66) においては従属節末 C5 (“的话”) と従属節頭 C1 に “要是” が同時に使用されており、さらに主節にも “那” と “就” を併用している。このように中国語の接続表現は従属節か主節で二つ併用されることもあれば、一つしか使用されないこともあり、多様な形式で表現される。さらに例 (67) に見られるような、仮定表現が全く用いられない形式③も存在する。

図 5-1 と図 6-1 で示したように、日本語においては仮定関係を表す接続表現 (仮定表現) は基本的に固定されており、通常従属節に置かれる。これに対して、中国語の仮定複文の構文形式は日本語より複雑で、一つの節に複数の表現が置かれる場合も、接続表現が使われない場合もある。さらに、使用される接続表現の種類が多いという特徴もある。また、両言語の仮定複文の構造形式はそれほど変わらないが、接続形式はまったく違う形式になっている。日本語、中国語がこれらの特徴をもつことについては、これまでも中国語学、日本語学の分野において議論されてきた ((邢 (2001)、鳥井 (2004)、刘、潘、故 (2019) を参照のこと)。以下、両言語の仮定複文の構文類型をもとに、具体的にどのような接続表現があるかを詳細に見ていく。

## 6.2 中国語で用いられる仮定表現

中国語における仮定複文は多種多様な形式で表現される。仮定関係を表す接続表現が、従属節のみに使用されるもの、主節のみに使用されるもの、また従属節と主節の両方に使用されるものがある。さらには、接続表現が全く使用されないものもある。また、接続表現が現れる位置も、従属節の頭、従属節末、主節の頭と複数ある。このため、従属節末のみに接続表現が現れる日本語との相違は大きい。加えて、使用される接続表現自

体についても中国語では多様な表現があり、“如果”、“要是”、“那么”のように論理的関係を表す接続詞が節間の関係を明らかにするものもあれば、“就”、“一”、“才”などのように出来事の生起順序や関係を表現する副詞が使われるものもあり、多岐にわたる。しかし、日本語と最も異なる点はやはり、節頭に置かれる表現が多数を占めていることである。つまり、日本語は節末の仮定表現が優勢である一方、中国語は節頭の仮定表現が優勢である。加藤 (2014: 514) に「日本語が右方主要部型の言語であって、柔軟にアドホックに構造的な主要部を追加して文構造を長くしていけることによって成立している。」という指摘があるように、節頭に比べて節末の仮定表現を保留しやすいのではないかと考えられる。一方、中国語は左方主要部型の言語であるため、左方の節頭に置かれる関連詞がよく使われるのであろう<sup>85</sup>。表 6-1 は、本研究で収集したデータにおいて観察された日本語の「ば・たら・なら」に対応する中国語の接続表現の一覧である。

表 6-1 から明らかなのは、中国語の仮定関係を表す接続表現が多様であることである。この中の接続表現は品詞別に概略三種類に分けられる。すなわち、論理性を表す接続詞、単なる接続機能を果たす副詞、語気助詞である。このように、副詞や語気助詞も仮定複文に出現するが、それらの仮定関係の意味は極めて弱いと考えられる。また、“呢”、“么”など中国語語気助詞は日本語でいう「終助詞」「間投助詞」の両方の機能を含んでおり、接続機能を中心的機能とするわけではない。詳細は次節で述べる。

---

<sup>85</sup> 加藤 (2014: 504-505) の定義によると、日本語は節右方型言語であり、中国語は節左方型言語である。両者の定義を以下に引用しておく。

- 1) 節左方標示型言語は、構造制約が強く、構造決定を早く行う必要があり、構造変更の柔軟さが低下するため、話者の負担は大きくなるが、予測容易性が高まり、聴者の負担は軽減される。
- 2) 節右方標示型言語は、構造制約が強く、構造決定を早く行う必要がなく、構造変更の柔軟さが確保されるため、話者の負担は小さくなるが、予測容易性が低く、構造確定まで注意を持続する必要があるため、聴者の負担は増大する。

表 6-1 中国語における仮定関係を表す接続表現一覧表<sup>86</sup>

I 仮 定 表 現	要是……，……	假如……，就……	II 準 仮 定 表 現	便	
	如果……，……	要是……，就……		就	
	假如……，……	如果是……，就……		一旦	
	若……，……	要……，就……		一	
	倘若……，……	如果……，才……		的时候	
	假若……，……	如果……，则……		时	
	要……，……	万一……，……		后	
	如果(若)是……，……	假使……，就……		然后	
	假如是……，……	如果……的话，就……		那(么)	
	如果说……，……	如果……，那(么)就……		那(么)就	
	要说……，……	要……的话，就……		的话	
	如果……，那么……	要是……的话，就……			
	要是……，那么……	假如……，那(么)就……		III 次 仮 定 表 現	吧(罢)
	假如……，那么……	如果是……，那就，……		呢	
	(倘)若……，那(么)……	要(是)……，那就，……		呀	
	若是……，那么……	要是……的话，……		么	
	如果…的话，那(么)……	如果……的话，……		啦	
	假如…的话，那(么)……	倘若……的话，……		呐(哪)	
	倘若……的话，那么……	假如……的话，……		哇	
	如果是……，那(么)……	要……的话，……		啊	
	假如是……，那(么)……	万一……的话，……		哎	
	如果说……，那(么)……	如果说……的话，……			
	如果说……的话，那(么)……	如果是……的话，……			
	要是……，便……	如果是……，便……			
	如果……，便……	如果……，就……			
	若……，便……	万一……，就……			

<sup>86</sup> この表は本研究で用いたデータ中の「ば」「たら」「なら」に対応する中国語の接続表現を抽出し、それを、文法書、辞書などを参照して、整理したものである。

### 6.3 中国語における仮定表現に関する機能拡張

周知のように、日本語は SOV 型言語で、中国語は SVO 型言語である。この差異は、接続助詞の文中の位置を決める。説明の便宜上、ここでは、表 6-1 に示した仮定表現と文中での位置を簡単にまとめておく。

表 6-2 中日両言語における仮定表現の文中の位置

言語		仮定表現	文中の位置				
			従属節			主節	
			文頭	述語の直前	文末	文頭	述語の直前
中国語	接続詞類	“如果”、“要是” <sup>87</sup> 類	+	+			
		“如果说”、“假如说” 類	+				
	名詞類	“时”、“的时候” 類			+		
	助詞 <sup>88</sup> 類	“的话” 類			+		
		“么・吧・呢” 類			+		
	副詞類	“就” 類					+
接続詞類	“那么” 類				+		
日本語	接続助詞類	ば					
		たら			+		
		なら			+		

表 6-2 からわかるように、中国語の接続詞類（“如果、如若、要是” 類と“如果说、假如说” 類）は文頭あるいは述語の直前に、日本語の接続助詞「たら」「なら」は文末に位置する。この位置関係は「たら」の接続助詞用法から終助詞用法への転化の一つの条件を提供していると考えられる。一方、中国語のいわゆる接続詞類は常に文頭に置かれるので、一見、助詞になるのは難しいと思われる。しかし、中国語では、文末に出現することが

<sup>87</sup> 姚 (2008) は、王 (1985:189-193) の“关系末品”の扱い方を参照した上で、“如果”、“要是”などを「典型的な仮定表現」、「就」、「便」などを「準仮定表現」と主張する。

<sup>88</sup> 中国語の“助詞”には構造助詞、アスペクト助詞、語気助詞があり、“的话”の位置づけは未だに明確ではないが、「語気詞」あるいは「語気助詞」として扱われることが多く見られる。“么・吧・呢”の位置づけは「語気助詞」であるが、中国語文法ではいわゆる「語気助詞」が日本語文法でいう「終助詞」「間投助詞」の両方の意味を含んでいることには注意したい。

できる仮定関係を表す接続表現があり、この種の語句は元々仮定・条件の意味を表わしていなかったが、“的话”類は話題用法から、“时 的时候”類は時間関係を表す用法から、“么、呢、吧”類は語気助詞から接続用法を発達させていったと考えられる。なお、“那么”などの主節に現れる仮定表現は本節では検討せず、第8章に譲る。以下、3つの部分に分けて、これらの仮定表現の機能拡張、さらに、非仮定的用法の品詞類がどのような過程を経て仮定的用法に変化したのかについて詳しく検討する。

### 6.3.1 接続(助)詞類<sup>89</sup>

接続(助)詞類の仮定表現は中国語では頻出する。表6-1のまとめから、以下の表6-3の接続詞類の表現にわけられる。その大まかな統計結果は以下の通りである。

表6-3 中国語仮定表現の使用状況<sup>90</sup>

接続詞	“要是”、“要”	“如果”、“如果说”	“若”、“若是”、“假如”、“假若”
使用数	249	117	56

接続詞類はこの順序で使用される傾向があるが、その仮定的意味は固定的であり、機能拡張は見られない。つまり、これらの仮定表現は日本語仮定表現のように終助詞や話題助詞の用法への機能拡張はあまり見当たらないということである。ただし、これらが仮定表現として機能するに至ったのはそれぞれが文法化を経てきたためと考えられる。詳しくは第8章以降で述べる。ここで機能拡張頻度の高い標識は使用されやすいが、頻度が低くなればなるほどその仮定の度合いは強くなる、という微妙な差異が存在している。また、これらの接続詞類は単独で使用することも、また従属節末の助詞“的话”やほかの主節の接続詞、副詞と併用することもできる。

一方、中国語の接続詞類の仮定表現は日本語の「ば」「たら」「なら」のように機能拡張が起こっているとは言えない。一方で、ほかの品詞類が接続機能を帯びつつあることに気づく。これらの接続詞類の文法化と機能拡張については次章から詳述する。

<sup>89</sup> 中国語では接続助詞というものがないが、ここでは後ろの「助詞類」と区別しようとするため「接続(助)詞」を使用した。現在中国語の仮定関係を表す標識の“如果”、“要是”などは単独で仮定の意味を表すことができるが、自立語の程度までは発達していないと思われる。

<sup>90</sup> 接続詞類の仮定表現の使用状況である。ほかの副詞や助詞などと共起する場合も含まれる。二つの接続詞が並列して使用される例は除外した。

### 6.3.2 助詞類

中国語の假定関係を表す表現の中には、接続詞類のほか助詞類が存在している。この類の標識は假定複文の従属節の節末に置かれ、節のはじめの接続詞類と呼応しながら使用されることも、単独で使用されることもあり得る。しかしながら、この類の助詞の中には、例えば、“时” など、元々助詞ではないものがある。元々は語気助詞の“呢”、“么”、“嘛”が假定関係を表す機能に拡がっていったのである。

#### 6.3.2.1 “时” と “的时候”（「の時」）

ここでは“时”（「時」）とそれに関する表現に注目し、それぞれがどのようなプロセスを経て接続機能を発達させてきたかを調査する。中国語では“时”は口語では二音節で“时候”として使用されている。とりわけ、構造助詞“的”といっしょに“的时候”を構成して前後節を繋ぐときに用いられる。

“时”は元々は名詞で、例 (68) に挙げているように語彙の中に現れる。

- (68) 时候    当时  
      とき    当時

時間を表す言葉なので、修飾語が前に来る場合が少なからずある。例えば、

- (69) a. 去 时  
      行く とき  
      b. 去 的 时候<sup>91</sup>  
      行く 助詞 とき

例 (69) の句は両方とも「行くとき」の意味であり、“时”、“时候”と動詞「行く」は被修飾語と修飾語の関係となる。a.“去时”とb.“去的时候”とでは意味上の違いはあまりないが、“时”が単独で使用される時には、構造助詞“的”が要らないのに対して、“时候”が使用されると、“的”を付けることが多い。この点は、中国語においてはしばしば指摘されるように、二音節（語彙）が多用される傾向にある（董 (2002)、程 (2003)

---

<sup>91</sup> 例 (68) と (69b) の“时候”には音韻上やや違いがあることに注意されたい。“候”は例 (68) においては第四声、例 (69b) においては轻声で発音される。

などを参照されたい) ことと関わっている。

このような連体修飾構造が名詞“时”、“时候”の「假定表現」への機能拡張の一因であると考えられる。これは、谢 (2005) が実質語が機能語に変化する際には、文構造が大きく関わると述べたことに合致する。また、Greenberg (1963) は、連体修飾節を言語類型論的視点から考察した。その結果、SOV 型の言語は通常後置詞を持ち、連体節が前におかれ、主名詞が後に置かれること、これに対して SVO 型の言語は通常前置詞を持ち、連体節が後に置かれ、主名詞が前に置かれることを指摘した上で、中国語は基本語順が SVO 型であるにもかかわらず、連体節が前に置かれ、主名詞が後に置かれる例外的な言語である<sup>92</sup>と指摘している。これは中国語にも日本語「たら」「なら」と似た従属節末の假定表現が存在する理由の一つと見なせる。

(70) 赵先生 如果 有 缺点 时, 就 一定 马上 改正。 (张 1990: 176)

趙さん 接続語 ある 欠点 接続語<sup>93</sup> すぐ 必ず すぐに 改正する

趙さんは何か欠点があれば、必ずすぐに改める。 (引用者訳)

(71) 三角形 的 三角 相等 时, 他<sup>94</sup> 的 三边 也 相等。 (黎 1924: 293)

三角形 助詞 三角 等しい 接続語 彼 助詞 三边 も 等しい

三角形の三つの角がそれぞれ等しければ、それらの三辺も等しい。 (引用者訳)

しかし、“时”、“时候”は完全には假定表現になっていないと思われる。例 (71) のように、“时”には「とき」の意味も残っているからである。この時の“时”は、ある動態的事柄の時間的变化に着眼し、その時間的变化によってもたらされる結果を述べる、ということを表すことが多い。しかし、江 (2002) はやはり文法化の視点から“时”の假定関係を表す機能を調査し、その結果として、唐代以降、“时”は完全に假定表現 (助詞)

---

<sup>92</sup> “However, outside of the sample there is at least one exception, Chinese, a prepositional language in which the relational expression precedes the noun.” (Greenberg 1963: 55)。実は、中国語は SOV 型言語か、それとも SVO 型言語であるかということ自体、議論が分かれる。言語類型論の最初の研究者たちは中国語を SVO 型言語であると位置づけたが、研究が次第に深まっていく過程で、SVO 型言語の特徴が中国語に合いにくい箇所があると気づくに至った。また、中国の方言の中には SOV 型もあるため、SOV 型言語の特徴が中国語標準語に混入してきたのではないかと考えられている。

<sup>93</sup> “呢”はここでは仮定の語気を表す助詞として、“如果”と呼応して假定複文に使用されることが多い。そのため、一種の假定表現と見なすことができる。本研究では「接続語」と表記しておきたい。以下の“的话”、“呢”、“么”も同じである。

<sup>94</sup> 人以外の場合は“它”を使うべきだが、“他”は原文のままである。

に変化したと述べた。

(72) 臣妾 飲 時, 号 曰 发装 (妆) 酒, 圣人 若 飲, 改却 酒名, 喚 甚  
わたくし 飲む 接続語 呼ぶ と 酒名 神様 接続語 飲む 変える 酒名 呼ぶ 何  
即 得? 喚曰 万岁杯。 《敦煌变文集・韩擒虎话本》 (江 2002: 291)  
は よい と呼ぶ 万歳杯

わたくしが飲めば、それは「発装」酒と呼びます。あなた様が飲むとすれば、それは何と呼び替えるのがよいでしょう。「万歳杯」と呼びましょう。(引用者訳)

例 (72) は江が唐代話本の中から引用したものである。文中の“時”が“若”と同義であることは明らかである。江は“時”の文法化のメカニズムについて以下のようにまとめている。

当“VP 時”的“时”实词意义弱化时，就引发了语法化。语法化的机制是类推和重新分析，“(若) VP 时”的“时”虚化之前是重心在“时”，原结构是定中结构，虚化之后，重心前移，“时”被分析为原条件小句的附加成分，从而演变为假设语气助词。

(江 2002: 291)

(引用者訳)「VP 時」の実質語としての「時」の意味が弱化していく過程で、文法化が引き起こされた。文法化のメカニズムは類推と再分析であり、「(若) VP 時」は弱化する前には、「時」が連語の中心で、その連語は「連体修飾語＋中心語」という構文であったが、虚化した後、中心は前に移動し、「時」は元の従属節の付加成分になり、やがて、仮説語気助詞に変わった。

江の“時”の「仮定助詞」の位置づけとは少し異なるが、連体修飾節構造が“時”の名詞から仮定関係を表す助詞への機能拡張の一つの要因となっていると考えられる。ただし、本論文では“時”が仮定関係を表すところでも名詞「時間」の意味も残していることを考慮した上で、このような“時”は「準仮定表現」と位置づけることにしたい。

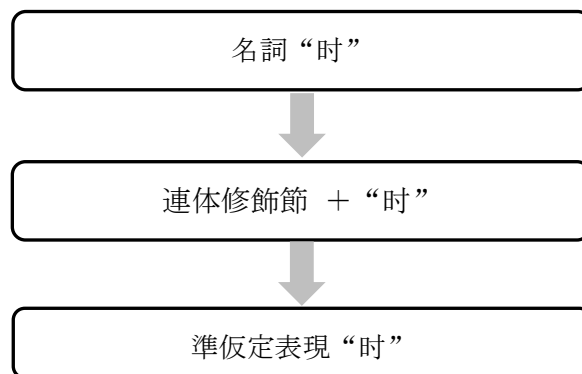


図 6-2 準假定表現“时”の機能拡張

### 6.3.2.2 “的话”

“的话”は清代の白話小説から用例が現れており（江 2004: 388）、現代中国語の話しことばでは“如果……”、“要是……”などの假定表現に代わって使われることが多い。“的话”の機能拡張プロセスは“时”、“的时候”と非常に似ている<sup>95</sup>と考えられる。それは“话”が“时”と同じ名詞であるためである。次の例（73）は“话”が普通名詞として使われている例である。

- (73) 话题 童话  
       话题 童话

また、名詞としての“话”は動詞の目的語にもなりうる。頻繁に使用されるのは例（74）と（75）、一つの動詞（「話す」の意味）と見なすこともできるし、「動詞+目的語」という動詞句（「～を話す」の意味）と見なすこともできる。この点は、“时”と異なる。

- (74) 说 话  
       話す 話/内容

<sup>95</sup> “的话”と“的时候”は「“的”+名詞」という構造で、“话”と“时候”は「名詞 → 假定を表す助詞」のプロセスは似ている。にも関わらず、両者が準假定表現として使われる場合に存在する差異についても否定しきれない。例えば、“的话”の進行プロセスは“时”、“的时候”より速いと思われる。現代中国語では“的话”は専ら仮定の意味を表す機能をもつものに対して、“时”、“的时候”の方は時間を表す用法がやはり強く残されている。張（1990）では“时”が假定複文に使用される条件が9つ挙げられているなど、かなり使用状況が限られていると考えられる。

(75) 讲 话

講じる 話/内容

次の例 (76) は“話”の前に“他说”という文節があり、“他说”と“話”の間は構造助詞“的”で繋がれている。「文節+構造助詞“的”」の形式で全体的に“話”の連体修飾節となる。

(76) 他 说 的 话

彼 話す 助詞 話

彼が言ったこと

(引用者訳)

このような過程がさらに進むと、“的话”は“要是”と共に起して、仮定関係を表すようになる(例(77))。また、“的话”は単独で仮定表現となる(例(78))。

(77) 你 要是 还 没 吃 了 的话, 一块儿 吧! 《骆驼祥子》

あなた 接続語 まだ 否定 食べる 完了 接続語 一緒に 語気

ご飯がまだだったら、いっしょにしようよ。

(78) 见 事 不 好 的话, 你 灭 了 灯, 打 后院 跳 到

見る 事情 否定 よい 接続語 あなた 消す 完了 明かり から 裏庭 飛ぶ まで

王家 去。

同上

王家 行く

あやうくなったら、明かりを消して、裏庭の塀を乗り越えて王さんの家へ逃げろ。

太田 (1958) は“的话”の用法の拡がりについて以下のように記述する。

《的话》はいうまでもなく、〈……の話は, ……の事は〉の意であるが、これが《至於》《對於》のような論及する語氣に轉じた例がある。假定はそこから更に轉じたものであろう。(太田 1958: 358-359)

すなわち、“的话”は構造助詞“的”と名詞“話”の組み合わせで「の話」の意味から、「に至って」「に対して」の意味を経て、仮定の意味をもつようになる、「……の話」

→「……について論じるという論及する語気」→ 仮定」というプロセスをたどったという<sup>96</sup>。この「に至って」「に対して」の論及する語気という過渡的用法は、仮定複文の中で“的话”が情報を再提示する機能を備えることになる直接的な誘因だと考えられる。このことについては第9章日本語「なら」「のなら」と対照しながら詳しく分析する。本節での議論は“的话”の機能拡張の解明にとどめる。

以上の“的话”の機能拡張を図式してみると、次のようになる。

---

<sup>96</sup> 構造助詞“的”と名詞の組み合わせによって構成される“的话”と“的时候”は似ているが、“的话”を使用する例文は“时”に置き換えられる場合(例(78))もあるが、そうではない場合(例(77))もある。

(77) \* 你要是还没吃了时，一块儿吧！

(78) ○ 见事不好时，你灭了灯，打后院跳到王家去。

例(78)が“时”に置き換わるのに対して例(77)では“的话”が“时”に置き換えにくいのは、この文の“的话”の前後節の主語が異なるからであると考えられる。つまり、「あなたがまだ(ご飯)を食べていなかったら、私たちは一緒にしましょう」。前後節の主語が異なる場合、“的话”を“时”に変えると文は成立しにくい。この文をさらに変換すると、結果も異なると考えられる。(77)では「私はもし何も食べていなかったら、(私は)何にもやりたくない」

(77) ○ 我 (要是) 没 吃 时， 什么 也 做 不 下去。  
私 接続語 否定 食べる とき 何 も やる 否定 続ける  
何も食べていない時は何もやりたくない。(引用者訳)

“的话”と“时”の仮定用法における機能の差異に注目した研究は管見の限り見られないが、張(1990:174)は“时”の使用条件の一つとして、「“如果 X 时”構文では“如果 X+时”ではなく、“如果+X 时”に分けて考えるべき」と指摘している。この点から考えれば、“如果 X 的话”構文の分け方には二種類の可能性があると言えよう。それは、“如果 X+的话”と“如果+X 的话”である。後者の“如果+X 的话”である場合が“如果+X 时”に置き換えられるものだと考えているが、詳細については今後の課題としたい。

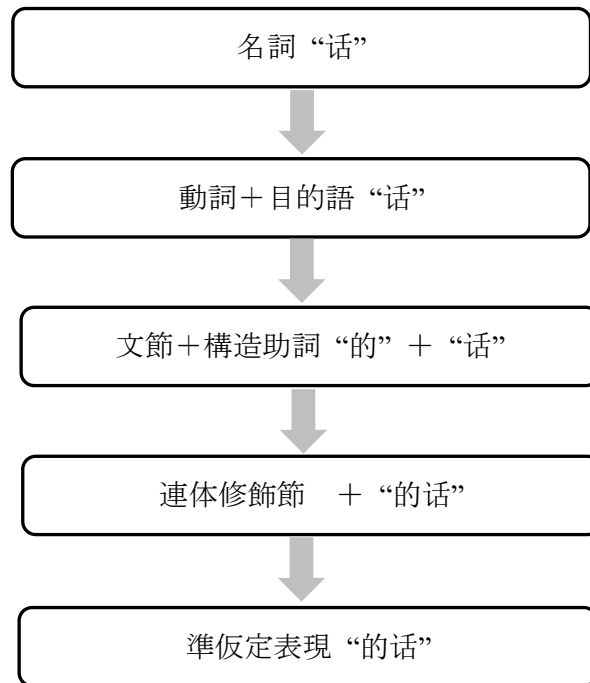


図 6-3 準假定表現“的话”の機能拡張

名詞“话”は動詞の目的語、連体修飾節の被修飾語、構造助詞“的”と“话”の融合という主たる三つの段階を経て、“的话”の假定関係を表すようになる。

赵 (1979) は“的话”の構成について、以下のように述べている。

形容词性小句的一个常见而重要的用处是修饰一个表时间、处所、条件的字眼儿，构成一个表时间、处所、条件的主语。（中略）被修饰的名词常常是轻声，因之“的”字加上这个轻声词实际上构成了一个复合的助词，作为从属小句的标志：“……的时候儿”，“……的地方儿”，“……的话”的作用跟一个连词相当。（赵 1979: 65）

(引用者訳) (“的话”の前の) 連体修飾節のよく見られかつ重要な役割は時間、場所、条件の言葉を修飾し、それらを表す主語を構成することだ。（中略）修飾される名詞が多くの場合に轻声であるので、“的”は轻声詞を加えて実際上の複合的助詞を構成し、従属節の標識となる。“……的时候儿”、“……的地方儿”、“……的话”の役割は接続詞に相当する。

つまり、“的话”は“的时候”と似ており、連体修飾節構造によって名詞から接続詞的用法へと機能拡張したものと考えられる。本研究では両者を共に「準假定表現」類に

分類する。

### 6.3.2.3 “呢”、“么”

“呢”と“么”は従来、語気助詞であることが定説化しているが、今回収集したデータの中にはこれらが仮定複文に使用されるものも確認された。中国語の語気助詞は他言語（印欧語族のような言語）と比べると、特有のものであると言える<sup>97</sup>。ここではまず、中国語の語気助詞の特徴と機能を明らかにしておく。劉、潘、故（2019）は、よく使用される語気助詞には“啊”、“吗”、“呢”、“吧”、“了”、“的”、“嘛”、“么”、“罢了”などの表現があると指摘し、その特徴について、次のように述べている。

#### (79) 中国語の語気助詞の特徴

1. 語気助詞はふつう文末に置かれる（複文では節[一般には従属節]の末尾に置かれることもある）。二つの語気助詞が並列されると、一音節に融合することもある。例えば、

“了+啊” → “啦” / le+a→la /

などである。

2. 語気助詞はふつう軽声で読み、文イントネーションの高低（昇降）変化は主に語気助詞の前の音節によって表される。例えば、

①你去吗？（あなたは行きますか。）〈“去”は相対的にやや高い〉

②你去吧！（行きなさい。）〈“去”は相対的にやや低い〉

3. 語気は一種の非常に抽象的かつ複雑な現象であるが、語気助詞はただ語気を表す手段の一つである。一般的に言えば、同種類の文の中では一つの語気は常に同じ語気を表しており、異なる文の中では一つの語気助詞は語気を表す機能上も常に内在的な共通性を持つ。注意すべきは、文にある他の言語表現の効果を語気助詞に添加できないことである。（劉、潘、故 2019: 408-409<sup>98</sup>）

<sup>97</sup> 劉、潘、故（2019: 408）などを参照されたい。

<sup>98</sup> 片山・守屋・平井（訳）（1988）を参照した。原文は以下の通りである。

1. 语气助词一般位于句末（包括分句末）。两个语气助词如果连用，还会合成一个音节。如：“了+啊” → “啦” / le+a→la / 等等。
2. 语气助词一般都读轻声，句子语调的高低升降变化主要体现在语气助词前的音节上，语气助词本身的音高也会受一些影响。例如：
  - ① 你去吗？（“去”相对地高些）
  - ② 你去吧！（“去”相对地低些）

この特徴からみれば、中国語の語気助詞は日本語の終助詞に近いと推測される。日本語の終助詞の定義を見てみる。『日本語文法大辞典』では、終助詞の定義と機能について、以下のように述べている。

**【定義】** 助詞の一類。文末に用いられ、文を終える働きをする助詞。表す意味には感動・詠嘆・疑問・反語・願望・詠え・禁止・念押し・強意などがある。(中略) 終助詞の名称を最初に用いたのは山田孝雄であり、その山田によれば、前に来る語への接続に一定の法則があり、また陳述に関係して命令・希望・感動などの意味を表しつつ文末に使われる助詞ということになる。助詞の中で文末の機能のあるのは終助詞のほか、係助詞・間投助詞は語句の切れ目であれば、文の途中でも使われるという、それぞれ文中の機能があるのに対し、終助詞は文末にしか使われないというところに違いがある。橋本進吉も終助詞を助詞の一類とするが、橋本は言い切りの文節に付き、そこで文が終止する助詞と定義している。

**【機能】** 終助詞は話し手の種々の心情を相手に伝えるとともに、完結した文にする働きをする。(後略) (山口・秋本 2001: 340-341)

下線部分の「終助詞」と「間投助詞」の二つの名称は、山田(1908)『日本文法論』において初めて使用されたが、同氏(1936: 508-531)『日本文法学概論』では、終助詞を「述語に関係あるものにして常に文や句の終止にのみ用ゐらるるもの」で、「文末で用ゐられ、感動・希望・疑問・命令・禁止・念押しなどの意味を有するもの」、間投助詞を「語勢を添へ、若くは感動を高めむが為に用ゐらるるものにして、その位置は他の助詞に比して稍自由なるもの」と定義している。

以下では、上記でまとめた日本語の終助詞、間投助詞の機能を参照しながら、中国語の語気助詞の機能を見ていくことにする。

#### 6.3.2.3.1 “呢”

まず、“呢”の辞書上の説明を確認しておく。

- 
3. 语气是一种非常抽象、复杂的现象，语气助词只是表达语气的手段之一。一般来说，一个语气助词在同一类句子中总是表达同样的语气，在不同类的句子中，同一个语气词在表达语气的功能上也总是有内在的一致性。应注意不要把句中的其他语言现象在表达语气方面的功能加到句中的语气助词上。

表 6-4 “呢” の辞書上<sup>99</sup>の記述

『中日辞典』 (第三版) <sup>100</sup> 小学館	『中日辞典』 (第三版) 講談社
<p><b>【助詞】</b></p> <p>1. 疑問文の文末に用い、答えを催促する気分を表す<sup>101</sup>。</p> <p>2. 平叙文の文末に用い、事実を相手に確認させる働きをする。</p> <p>3. 平叙文の文末に用い、動作や状態の継続を表す。</p> <p>4. 文中でポーズを置くときに用いる<sup>102</sup>。</p> <p>a. 主語の後に置くとき「...といえば」の意味をもつ。多くは対比または列挙に用いる。</p> <p>(80) 小李 <u>呢</u>, 她 去 西安, 我 <u>呢</u>,  <small>人名 助詞 彼女 行く 地名 私 助詞</small>          打算 去 昆明。  <small>つもり 行く 地名</small>          (李さんは西安に行きますが、私は昆明に行くつもりです。)</p> <p>b. 仮定条件句の後に用いる。</p> <p>(81) 你 <u>要是</u> 非 走 不可  <small>あなた 接続語 否定 行く ないといけない</small>  <u>呢</u>, 我 也 不 留 你。  <small>接続語 私 も 否定 引き止める あなた</small>          (君がどうしても帰るといふのなら、私は別に</p>	<p><b>【助詞】</b></p> <p>1. 疑問文の文末に置き、疑問の語気を強める。</p> <p>2. 選択疑問文の文末に置き、疑問の語気を強める。</p> <p>3. 平叙文の文末に置き、相手に対して念を押すような語気を表す。</p> <p>4. 文中に置き、中断を表す。</p> <p>(83) 喜欢 <u>呢</u>, <u>就</u> 拿去,  <small>好き 接続語 接続語 持っていく</small>          不 喜欢 <u>呢</u>, <u>就</u> 别 拿。  <small>否定 好きだ 接続語 接続語 否定 持つ</small>          (気に入ったら持っていけばいい、気に入らなかったらもらわなければいい。)</p> <p style="text-align: right;">(p.1161)</p>

<sup>99</sup> 辞書の選択については、内容を吟味して決定した。使用した各辞書についての説明は付録 4 を参照されたい。

<sup>100</sup> 『中日辞典』の第三版(電子版)を利用している。

<sup>101</sup> それぞれの項目には下位分類もあるが、ここでは本研究に関連する部分のみを引用した。

<sup>102</sup> 益岡・田窪(1992: 53)ではこのような用法を「終助詞の間投用法」と呼び、「文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働きをする」とする。

引き止めない。)

(82) 要是 你 喜欢 呢, 就 买下;

接続語 あなた 好き 接続語 接続語 買う

不 喜欢 呢, 就 别 买。

否定 好きだ 接続語 接続語 否定 買う

(気に入ったら買えばいいし、気に入らなかつたら買わなければいい。)

c.その他の成分の後に用いる。

上記の2冊の辞書によれば、“呢”は「助詞」として、疑問文と平叙文に使用することが一般的であり、それ以外に、文中で中断を示す用法もある。この場合、仮定文の従属節末に置かれ、中断を表す。この点から考えれば、中国語の語気助詞“呢”は日本語「終助詞」と「間投助詞」、両方の機能をもつと考えられる。

中国語の語気助詞“呢”の仮定関係を表す用法の条件の一つは「間投助詞」として使用される場合である。上掲例文(81)と(82)を準仮定表現“的话”で置換すると、

(81') 你要是非走不可的话, 我也不留你。

(82') 要是你喜欢的话, 就买下; 不喜欢的话, 就别买。

となり、いずれも問題なく成立する。この二つの文(81')と(82')ともに、仮定表現“要是”と共起しているが、“要是”を削除しても文は成立する。

(81'') 你非走不可呢, 我也不留你。

(82'') 你喜欢呢, 就买下; 不喜欢呢, 就别买。

1950年代という早い時期に、太田(1958: 365)は“呢”は承前疑問・仮定、及び疑問の強調に用いられると指摘し、仮定を表す場合に“若”のような仮定表現と共起する場合と共起しない場合が、いずれも成立し得ると説明している。さらに、「《若》など假定をあらわす語が用いられず、《呢》だけが用いられるようになったのは時代(元代を指

す: 引用者) が降るようである。」と時代上の変化も指摘している<sup>103</sup>。だが、このように単独で仮定表現として使用される“呢”には、前後を対比する意味が強く含まれることはその特徴として確認しておきたい。

さて、以上見てきたような「間投助詞」的用法を有するとは言え、中国語の“呢”はやはり仮定的語気を表す助詞として扱われるのが一般的である。王 (1985) はこの語気助詞の用法について詳細に分析している。「語気」を大きく「確定語気」「不定語気」「意志語気」「感嘆語気」の4種類に分け、さらに「不定語気」の下位分類に「仮説語気<sup>104</sup>」を挙げ、それぞれの語気を表す語気助詞も明確に記している。

(前略)

不定語気: (4) 誇張語気 (呢, 罢了); (5) 反詰語気 (不成); (6) 仮説語気 (呢); (7) 推測語気 (罢); 王 (1985: 245)

その中で、“呢”は「仮説語気」とされ、以下の例文が挙げられている。

(84) 要是 白来 逛逛 呢, 便 罢。 (王 1985: 242)  
接続語 ただ ぶらぶら 接続語 接続語 いい  
もしただぶらぶらしてきたら、それでいい。 (引用者訳)

例 (84) の“呢”は“要是……, 便……”のように組み合わされた仮定複文の従属節で使われ、ポーズを示すと同時に、仮定の語気を表す。太田が「“呢”は仮定関係を表す」とするのは異なり、王は“呢”はただ仮定の語気を表すと主張している。以下、本研究で収集したデータを使用し、実際に検証してみる。

<sup>103</sup> 元代の文献に以下のような例文が見つかった。仮定表現“若”と共に起して使われている。“咱们与你便是自家人一般。我怎麼敢说谎。你若不信我的话麼。到别个店里问问去。看是说谎不说谎。我只这麼说。”(《老乞大新释》・元) (関係部分の日本語訳: 君は私の話を信じないなら、他の店へ聞きに行ってみて。(引用者訳))

<sup>104</sup> 以下、原文は王 (1985:245) によるものである。

確定語気: (1) 決定語気 (了); (2) 表明語気 (的); (3) 誇張語気 (呢, 罢了);  
不定語気: (4) 誇張語気 (呢, 罢了); (5) 反詰語気 (不成); (6) 假设語気 (呢); (7) 推測語気 (罢);  
意志語気: (8) 祈使語気 (罢); (9) 催促語気 (啊); (10) 忍受語気 (也罢, 罢了);  
感嘆語気: (11) 不平語気 (吗); (12) 論理語気 (啊)。

次の例 (85) では、従属節に仮定表現“若是”と“呢”の両方が用いられている。“若是……呢，……”の構成で、“呢”は従属節の末尾に出現する。つまり、平叙文の文中に置かれる、「間投助詞」的用法である。

(85) 他问我要不要回北平？若是要回去呢，他就托人  
彼 聞く 私 勧誘 帰る 地名 接続語 願望 帰る 接続語 彼 接続語 託す 人  
带我到上海。我那时方寸已乱…… 《关于女人》  
率いる 私まで 地名 私 あの時 心が乱れる

彼は私に北京に帰りたいかと聞いた。もし帰るのなら、彼が人に頼んで私を上海まで送らせる（と言った）。そのとき私は心が乱れていた。

従属節の頭に仮定表現がなく、従属節末に“呢”だけがある場合も、仮定の意味を表す。これは、中国語には“意合法”で複文の関係を表すことがあり、前後文脈によって仮定の意味が判断できるためである。「仮定―帰結」の関係をもつ文において、“呢”がなくても「仮定―帰結」の関係は表せるが“呢”を用いることにより、仮定の意味が補強される。

(86) 更多数呢？其实都不想去，不得不去罢了；不得不  
もっと 多数 疑問 実は 皆 否定 願望 行く しないといけない 行く 語気 義務  
去 便 情愿 相信 这事 原是 光荣壮烈的。其实  
行く 接続語 むしろ 信じる このこと 元々 断定 光荣で勇壮 助詞 実は  
能不去呢，还是不去。 《插队的故事》  
できる 否定 行く 接続語 やはり 否定 行く

もっと多くの者は？ 実はみんな行きたくない。しかたなく行ったにすぎない。行かざるをえない以上、それが本来光荣で勇壮なことだと信じたかったのだ。だがもし行かなくていいのなら、やはり行かなかっただろう。

(87) 人吃不上肉，还能忍受。猫吃不上肝呢，  
人 食べられない 肉 まだ できる 我慢する 猫 食べられない 肝 接続語  
却受不了。 《活动变人形》  
かえって 我慢できない

人間は肉を食べられなくても我慢できるが、猫が肝を食べられなければ、耐えら

れない。

- (88) 近 两个月 来, 姜赵氏 渐渐 趋向于 垄断 这个 火了, 火 是 她  
近く 二か月 から 人名 次第に に向かって コンロ これ 火 完了 火 断定 彼女  
的 宠物, 大姑娘 静珍 或者 二姑娘 静宜 动 了 火, 她 会 嫉妒的。  
助詞 宝物 長女 人名 或いは 次女 人名 触る 完了 火 彼女 可能 嫉妬する  
外孙女 倪萍 动 了 呢, 她 就 要 骂 了。 同上  
孫娘 人名 触る 完了 接続語 彼女 接続語 願望 叱る 完了

ここ二カ月近く、姜趙氏は次第にコンロを独占していった。火は彼女の秘蔵の宝で、長女の静珍あるいは次女の静宜が触ったら、彼女は嫉妬するに違いない。孫娘の倪萍が触ったら彼女はすぐに怒鳴ってしまうだろう。

例 (86) ～例 (88) から見ると、“呢” は単独で假定複文に使われている。疑問文ではなく、叙述文でかつ複文の従属節に使われたものである。ただし、意味的な観点からすると、“呢” を使用する假定複文は「対照・対比」の意味が強いことに注目してほしい。以上の平叙文の“呢” は假定を表すほか、文同士の対比の意味合いが際立っている。例 (86) においては、「行く」と「行かない」の間にもたらされる結果の差異、例 (87) は「人間が肉を食べない」反応と「猫が肉を食べない」反応の差異、例 (88) は姜趙氏の「長女と次女」と「孫娘」への対応の差異が、それぞれの文に存在する。

“呢” で文が終わる場合は、対比の意味合いを伴う疑問文になる。例 (89) では、“如果” と“呢” が用いられている。

- (89) 慕樱 那 两根 细长 黑 亮 的 眉毛 往 上 一弓, 活泼 地 说:  
人名 あの 二本 細長い 黒い 明るい 助詞 眉 へ 上 曲げる 活発 助詞 言う  
“如果 我 非 要 呢?” 《钟鼓楼》  
接続語 私 必ず ほしい 接続語

慕桜はその黒くて長い眉を上にあげて、生き生きとした口調で言った。「もしわたしがどうしても欲しかったとしたら？」

例 (89) は“如果……呢?” という形で、明らかな疑問文である。こういう場合の“如果……呢?” は、假定複文の主節は省略されて従属節だけが残っており、先行文脈で提示された「假定一帰結」とは別の条件を対比的に提示して言外に「もし……だったら (ど

うする)?』という含意がある。仮定表現“若是”や“如果”を削除しても“呢”があれば疑問文として成立するが、仮定表現“若是”、“如果”を残して語気助詞の“呢”を省略した例(89’)はやや不自然になる。

(85’) 要回去呢，他就托人带我到上海。

帰りたいなら、彼が人に頼んで私を上海まで送らせる(と言った)。

(89’) 我非要呢?

わたしがどうしても欲しかったとしたら?

(85’’) ○ 若是要回去，他就托人带我到上海。

帰るのなら、彼が人に頼んで私を上海まで送らせる(と言った)。

(89’’) ? 如果我非要?

もし私がどうしてもほしい?

次の例(90)も“呢”で終わる文が疑問文になっている例である。この場合は自問自答の文である。

(90) 但 那样 的话 姜家 族里族外 的人 骂 的是 姜元寿。

しかし そのよう 接続語 姜家 一族とその以外 助詞 人 叱る 断定 人名

如果 她 和 女儿 回去 卖 地 去 呢? 她 和 女儿 就 会

接続語 彼女 と 娘 帰る 売る 土地 行く 接続語 彼女 と 娘 接続語 可能

被 千夫 所指。

受身 人々 非難する

しかしそうすれば、姜家一族とその以外の人を挙げて姜元寿を非難する。もし自分と娘とが土地を売ったら?自分と娘とは多くの人から非難されるに違いない。

例(90)は“呢”が仮定表現と共起し、かつ疑問文に使用される例である。しかも、自問自答の文である。

ただし、実際には“呢”だけで仮定文に現れることも少なくない。これは、中国語には“意合法”で複文の関係を表すことがあり、前後文脈によって仮定の意味が判断できるためである。「仮定－帰結」の関係をもつ文において、“呢”がなくても「仮定－帰結」の関係は表せる。“呢”は仮定の意味を補強しているのである。

“呢”で終わる文が疑問文になるのは、省略疑問文“名詞+呢?”と類似している。

(91) 明天 一班 去 参观 工艺 展览, 二班 呢? (刘、潘、故 2019: 418)

あした 1組 行く 見学する 工芸 展覧会 2組 疑問

あした1組は工芸展覧会を見学しに行きますが、2組は?

(92) 他 开始 不 同意 你 的 意见, 后来 呢? (同: 419)

彼 最初 否定 賛成する あなた 助詞 意見 その後 疑問

彼は最初、あなたの意見に反対だったが、その後は?

例(91)と例(92)はともに「名詞+“呢”?’という形式で、一種の省略疑問文である。例(91)は「2組は(見学しに行くかどうか)?」、例(92)は「その後は(賛成したかどうか)?」の省略文である。これらは対比に基づく省略疑問文だが、「従属節+“呢”?’の形の疑問文も対比の意味合いを伴う。

以上、“呢”の假定複文中の機能について、疑問文中の機能と対照しながら見てきた。中国語の語気助詞“呢”は文末から文中の接続助詞へと転化して、接続助詞化していると言えよう。このことから、“呢”は假定関係を表す専用表現ではなく、仮定のニュアンスを補強する「次假定表現」の一つであると言える。“呢”がなくても「假定-帰結」という関係は十分に表せる。ただし、間投助詞的な“呢”には主題提示的な機能があるので、「原因-結果」の関係の場合は“呢”は使いにくい。

#### 6.3.2.3.2 “么”、“嘛”、“吗”

“么”(me)、“嘛”(ma)、“吗”(ma)は発音上近い語気助詞であり、やや複雑な様子を呈する。小学館『中日辞典』は“么”(me)、“嘛”(ma)の項目について「軽く発音されるので、母音aが弱化し、meやmのように聞こえることがある」と提示しており、母音が弱化された“m”で発音することが少なくない。以下、本研究の“么”(me)、“嘛”(ma)、“吗”(ma)に関する違いについては区別せずに、假定用法に関する部分を引用する。

表 6-5 “嘛”、“么”の辞書上の記述

『中日辞典』 (第三版) <sup>105</sup> 小学館	『白水社中国語辞典』
<p>“嘛”【助詞】</p> <p>文中の切れ目に用い、聞き手の注意を促す。</p> <p>b. <u>仮定条件を表す文の最後に用いる。</u></p> <p>(93) 有 缺点 <u>嘛</u>， 大家 可以  <small>ある 欠点 接続語 皆 許可</small>          指 出来。  <small>指す 出す</small>          (欠点があった<u>なら</u>、みんなで指摘してよ          ろしい。)</p>	<p>“嘛” (“么”)【助詞】</p> <p><u>仮定を示す節の末尾</u>に用いて次に述べる          ことに対する躊躇を示す。</p> <p>(94) <u>要是</u> 你 想 不 出来 <u>嘛</u>，  <small>接続語 あなた 考える 否定 出す 接続語</small>          那 就 算了。  <small>それ 接続語 いい</small>  <u>(もし君が考え出せなかったとしたらだ          ね、なかったことにしよう。)</u>  <p style="text-align: right;">(p.908)</p> </p>

上記辞書からみればわかるように、例 (94) の“嘛”は仮定表現“要是”と共起して使用されるが、例 (93) の“嘛”は単独で使用されている。この二つの例文の“嘛”は“的话”に置き換えられる。

- (93') 有缺点的话，大家可以指出来。  
欠点があれば、みんなで指摘していい。
- (94') 要是你想不出来的话，那就算了。  
君が考え出せなければ、それでいい。

例 (93') と (94') はまったく問題なく成立する。太田 (1958) も《麼》 (“么” の繁体字) は仮定に用いることもあると指摘している。そこでは『紅樓夢』の例が挙げられている。

<sup>105</sup> 『中日辞典』の第三版 (電子版) を利用している。

(95) 他 有 情 麼, 说 你 两句; 他 一 翻脸, 嫂子, 你 吃不了  
彼 ある 感情 接続語 言う あなた 二言 彼 接続語 怒る お姉さん あなた ひどい  
兜着走! (《红楼梦》) (太田 1958: 363)

目に遭う

(あのかたが同情してくれたらすこし叱るだけでしょうが、本気で怒ったらさいご  
あなたはひどい目にあいますよ。) (太田訳)

李 (1998) は中国蘇州方言中の“嚳”(標準語<sup>106</sup>の“么”に相当)が仮定関係を表すと指摘している。

(96) 早 晓得 嚳 勿 买 哉。 (李 1998: 107)

早めに 知る 接続語 否定 買う 語気

早めに知っていたらら買わなかったのに。 (引用者訳)

(中国語普通話: 早知道的话我就不买了。)

(97) 饿仔 嚳 自家 烧 点 吃吃。 (李 1998: 108)

お腹空く 接続語 自分 焼く 少し 食べる

お腹空いたらら自分で何か作って食べてね。 (引用者訳)

(中国語普通話: 饿了嘛自己就做点吃吃。)

以上の例のように、“么”、“麼”、“嘛”それぞれの語気助詞は、文末末尾から従属節末に拡がってきており、文の語気を表す機能から文中の切れ目の機能を帯びようになり、特に、仮定語気か仮定関係を表す意味が付与されるようになったという機能拡張が起こっている。

以上の例が示すように、“呢”、“么”は「仮定—帰結」の関係をもっている仮定条件節の末尾において仮定の意味を補強している。呂 (2004: 323-324) は「仮定文と疑問文の間に多くの共通点があるのは、いずれも不定の語気だからだ」と主張する。この意味上の共通点は元々疑問文の助詞が仮定文に使われる理由の一つと考えることが可能である。だが、本研究では準仮定表現“的话”と違って、仮定複文の用法を中心とはしないため、“呢”、“么”を「次仮定表現」と位置づけることにする。ただし、“么”が“我非要么”の

<sup>106</sup> 中国語では“普通話”と言われ、「標準中国語」とも訳される。北京語音を標準音とし、北方方言を基礎方言とするものである。

ような疑問文に使えないということは“呢”と異なっている。

### 6.3.3 副詞類

副詞類は假定複文に現れるとき、主に主節のみである。“就”、“便”がその典型的なものである。

(98) 有 洗 的 湍 的, 就 搁下。 一 人 在 外 苦,  
ある 洗う 助詞 すすぐ 助詞 接続語 置く 一人 いる 外 苦しい  
不 容易。 《小鮑庄》

否定 容易

洗濯物や洗い物があつたら、おいておいてね。一人暮らしはつらいし大変だろう。

例 (98) では、主節に接続表現“就”が使用されているため、「P, C Q」という構文形式をとっている。このように接続表現が使用される場合、「P, Q」型より前後節の結び付きが強い。例 (98) は副詞“就”が使用されることで、それが無い場合よりも前後節の結びつきは強く感じられる。この場合、前後節の主語は同じものであり、同じ主語の「洗濯物をもっている」と「それを置いていく」という2つの事態が継起して起こることを表現しており、仮定の意味は弱い。

日本語との異同を明らかにするために、中国語で副詞が主節の頭に置かれて假定関係を表す例として (98) の例にあった“就”を中心に見ていくことにする。中国語および中日辞書<sup>107</sup>では、“就”の基本的用法について、以下のように説明している。

① “就” + 動詞 (または形容詞) の形

天 很 快 就 亮 了。

天 とても 速く すぐに 明るい 変化

夜は間もなく明ける。

(引用者訳)

② 動詞句 + “就” + 動詞の形、二つの動作が相次いでなされることを表す

说 完 就 走 了。

話し 終わる すぐ 行く 完了

話し終わるとすぐ行った。

(引用者訳)

<sup>107</sup> 『現代漢語大辞典』、『中日辞典』(第三版、電子版)などを参照。

③ 動詞句＋“就”＋形容詞の形、形容詞は動作の結果を表す

看见 你 就 高兴。

会う あなた 接続語 嬉しい

君に会えばうれしくなる。

(引用者訳)

④ “一(刚, 才)……, 就……”の形

一 看 就 会。

接続語 見る 接続語 できる

見ればすぐできる。

(引用者訳)

以上のような“就”は基本的に日本語の副詞「すぐ」に近く、時間副詞と見られることが多い。さらに、日本語の副詞「すぐ」の中国語訳はほぼ“就”で表せるという指摘もある(李 2011: 92)。これらのことから見ると、中国語の副詞“就”は前件から後件への「時間的継起性」を示す表現の一つであると言える。この用法は日本語の「と」と「たら」に類似しており、「“就”がある条件文は特定の事態間の『条件—帰結』を表しており、前件が実現されると、それに伴って後件が発生する」(井上 2003: 56-57)と指摘されている。つまり、“就”が仮定複文で使われるのは、仮定複文と“就”の用法の間に介在する「時間的継起性」がその出発点であると考えられる。また、ヤコブセン(1990)では日本語の条件文について次のように述べている。

二つの事態を結び付ける関連性は、その原形において、一方の事態が先にあって、もう一方の事態が時間の流れにそってそれに付随するという、時間的共起性に過ぎないということである。従って、事態が時間と並行して、どう展開していくかを論理的に規定するのが不可能であると同様に、条件文における関連性を理論的に規定することもできない。(ヤコブセン 1990: 107)

すなわち、複文の後件が「時間の流れにそって前件に付随する」という「時間的継起性」が日本語の仮定複文の原点であり、その点では中国語の“就”がもつ「時間的継起性」の特徴と一致している。この「時間的継起性」は“就”の機能が時間を表す副詞から仮定複文における接続表現の一つへと拡張される理由と考えることができる。本稿では6.3.2.1節の“的时候”と同じように、時間的継起関係の表示がより中心的と考えられるこれらの表現は「準仮定表現」に位置づける。

## 6.4 本章のまとめ

本章における中国語の仮定表現に関する機能拡張への観察を通して、三種類の仮定表現があることを確認した。第一に、典型的な仮定標識は、“如果”、“要是”などの接続詞類であり、「仮定表現」と位置づけることができる。第二に、“有的时候”、“的话”などが仮定文で用いられるが、仮定を表す専用標識としてはまだ固定していない表現であることを考えたため、これらの表現を「準仮定表現」の類に入れた。第三に、“呢”、“么”など仮定複文の用法を中心としない表現を周邊的な「次仮定表現」とした。副詞類も「次仮定表現」に入れておく。“如果”、“要是”という典型的な仮定表現は常に節の頭に置かれるが、“有的时候”、“的话”、“就”、“那么”は従属節の末か主節の頭や主語の後、つまり複文全体からみればちょうど中間的位置に置かれ、“呢”、“么”類は節末に置かれる。

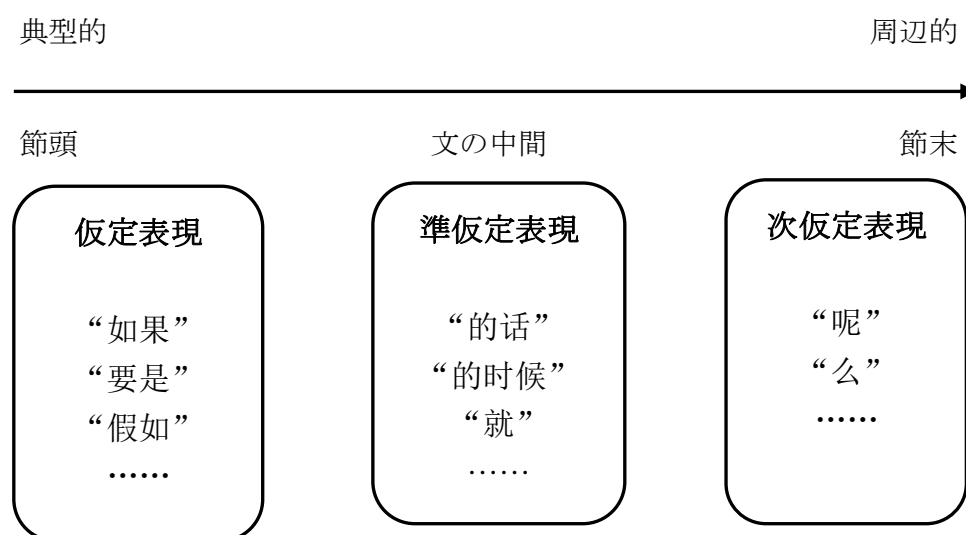


図 6-4 中国語の仮定関係を表す接続表現の類別

図 6-4 において、左から右の順で仮定の度合いが弱くなり、仮定的意味が薄れてきているため、元々の非接続詞的用法も現れる。「準仮定表現」は仮定関係を表すだけでなく、時間（“有的时候”）、順接（“就”）、場面喚起（“那”、“那么”）などを表すことも可能で、専用の仮定表現ではない。「次仮定表現」類の語彙は「假定—帰結」の場合に仮定の意味を補強するだけという点で、他の二者と異なる。以下、もっとも典型的な仮定文を例として、三者の違いを明らかにしていく。

(99 = (3b)) 如果 你 去, 我 也 去。 自作例  
接続語 あなた 行く 私 も 行く  
あなたが行くなら、私も行く。

例 (99) は典型的な仮定文であり、仮定表現“如果”で仮定関係が示されている。例 (100) を「準仮定表現」類の表現に置き換えてみると、

- (100) a. ○ 你 去 的话, 我 也 去。  
あなた 行く 接続語 私 も 行く  
あなたが行くなら、私も行く。
- b. ○ 你 去, 那(么) 我 也 去。  
あなた 行く 接続語 私 も 行く  
あなたが行く (としたら)、そしたら、私も行く。
- c. \* 你 去 时(的时候), 我 也 去。  
あなた 行く 接続語 私 も 行く  
あなたが行くとき、私も行く。
- d. ○ 你 去 时(的时候), 把 他 叫上。  
あなた 行く 接続語 を 彼 連れて行く  
あなたが行くとき、彼を連れて行ってください。

例 (100) の a. と b. にはいずれも“如果”を加えることができるが、加えなくても成立する。ただ、a. のように“的话”を使用した場合、「～という話なら」の意味が感じられる (“的话”の有無によってもたらされる意味合いの差については第 7 章で詳述する)。b. は“那么”を使用する文であり、「その場合」の意味が強く感じられる (“那么”については、第 8 章に譲る)。一方、“时”、“的时候”で表現される文は少し異なり、c. は成立しにくい。しかし、主節を少し改めた d. は成立する。この二つの例からみれば“时”、“的时候”は仮定文に使用できるが、その使用には一定の制限があることがわかる。この c. と d. の相違点としては、“时”、“的时候”の前後節の主語が一致するかどうか挙げられる。主語が一致する場合、“时”、“的时候”が成立しやすくなることは、張 (1990) の主張と同様である。

次に、“如果”を「次仮定表現」類の“呢”に置換してみると、

(101) a. ○ 如果 你 去 呢 , 我 也 去。

接続語 あなた 行く 接続語 私 も 行く

もしあなたが行くなら、私も行く。

b. ? 你 去 呢, 我 也 去。

あなた 行く 接続語 私 も 行く

あなたが行く、私も行く。

c. ○ 你 去 我 也 去; 你 不 去 呢, 我 也 不

あなた 行く 私 も 行く あなた 否定 行く 接続語 私 も 否定

想 去 了。

願望 行く 語気

あなたが行けば私も行く。あなたが行かなければ私も行かない。

「次仮定表現」の“呢”は仮定表現と共に起していれば仮定文の中に使える(例101a.)。しかし、b.のように仮定表現がない場合には“呢”はやや座りが悪く、他の要素や文脈を付加して、c.のような前後対比の意味のある文にすれば、“呢”が自然に使える。

このような「準仮定表現」と「次仮定表現」の機能拡張は、そのプロセス上、言語の構造がその可能性を提供していると考えられる。図式して見ると、以下のようになる。

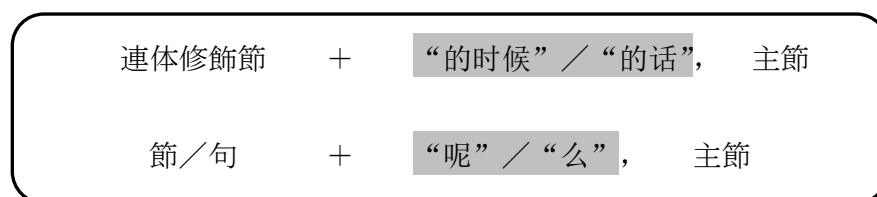


図6-5 準仮定表現と次仮定表現の文構造上の共通性

“的时候”、“的话”、“呢”、“么”の四つの標識はそれぞれ機能拡張しているが、この四者の位置の一致が機能拡張の理由の一つに数えられる。

ここまで、中国語の仮定関係を表す標識を「仮定表現」「準仮定表現」「次仮定表現」のように分けたが、これらの標識は品詞分類から見れば、「接続詞」と「助詞」と「副詞」というように領域を跨いで使用されている。小柳(2018)が規定する詳しい品詞分類と機能語の関係は以下の通りである。

(102) 品詞分類について

- a. 内容語：名詞、動詞、形容詞<sup>108</sup>
- b. 付属的機能語：助詞、助動詞
- c. 自立的機能語：接続詞、感動詞、副詞<sup>109</sup>

(小柳 2018: 104)

これと合わせながら、図 6-6 に示した中国語の仮定表現の機能拡張をまとめると次のようになるだろう。元々仮定関係を表す表現は付属的機能語の接続助詞類<sup>110</sup>である。副詞が機能拡張して接続助詞の機能を備えるようになるのは、自立的機能語から付属的機能語への変化、つまり多機能化 2A であると言えよう。一方、助詞類は同じく付属的機能語の枠内で、多機能化 1A である<sup>111</sup>。

---

<sup>108</sup> ここでの形容詞は形容動詞を含めて、下位分類をされない。

<sup>109</sup> 小柳 (2018: 104) は、品詞の下位分類をここではしなかったが、副詞の場合は陳述副詞・程度副詞は自立的機能語に、情態副詞は形容詞と同類に分類できると指摘している。

<sup>110</sup> 中国語の典型的な仮定表現は“如果”、“要是”などであり、日本語の接続助詞類に相当すると考えられる。これらの表現は単独では使いにくい。

<sup>111</sup> 2.2.4 にもあったが、ここでは参考にもなるため小柳 (2018) の文法変化の方向性を再度引用する。

- a. 多内容化:内容語→内容語  
例: 動詞や名詞の多義性
- b. 機能語化 A:内容語→付属的機能語  
例: はべり (丁寧の存在動詞→丁寧の複合動詞後項)
- c. 機能語化 B:内容語→自立的機能語  
例: つゆ (名詞→程度副詞)
- d. 多機能化 1A:付属的機能語→付属的機能語  
例: た (アスペクト→テンス)
- e. 多機能化 1B:付属的機能語→自立的機能語  
例: が (接続助詞→接続詞)
- f. 多機能化 2A:自立的機能語→付属的機能語  
例: われ (代名詞→終助詞/文末助詞) <sup>111</sup>
- g. 多機能化 2B:自立的機能語→自立的機能語  
例: まこと (副詞→感動詞)

(小柳 2018: 95、97、118 を参照した上で補足しながら作成した。)

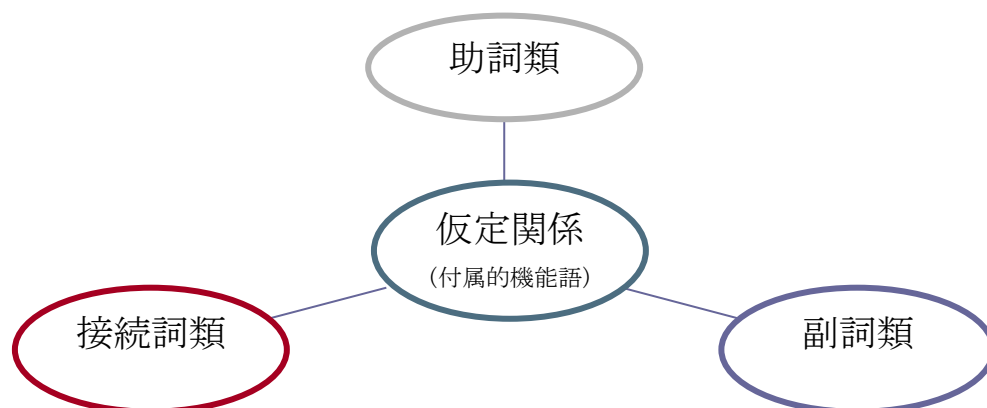


図 6-6 中国語の假定表現の多機能化

現代中国語の小説と口語コーパスで用例を検索してみたが、“的话”はどちらでも多用されていることがわかった。つまり、“的话”は假定表現としてすでに定着していると考えられる。従来、“要是”は口語に多用される表現であると多くの辞書で指摘されている(《现代汉语虚词例释》: 516 など)が、今回のコーパス調査では“如果”の方が圧倒的に多数の使用例が抽出された。コーパスに収録される資料の関係もあると考えられるが、この点を課題としてさらに調査していきたい。

表 6-6 中国語假定表現の当代小説と口語資料における出現数<sup>112</sup>

中国語假定表現	CCL 小説	CCL 口語
如果	825	1,080
要是	398	163
那么	798	954
如果说	21	34
的话	815	551
就是了	51	5

<sup>112</sup> CCL 小説の詳細は付録 3 を参照されたい。CCL 口語は表 4-1 に示したように、口語 (対話、テレビインタビュー) をデータとして取った。それぞれの中国語假定表現をキーワード、品詞分類を“连词”として入れ、時間と範囲を入れて検索した。

## 第7章 仮定表現の機能拡張の日中対照研究

日本語でも中国語でも、仮定関係を表す複文は、基本的に従属節前置構文と従属節後置構文の2種類の形式で現れるという点は同様である。しかし、5.1と6.1でも明らかになったように、この2種類の形式の具体的な出現形式については、日本語と中国語では大きく異なっている。そのうち最も大きな相違点は、日本語では基本的に従属節末に接続表現が用いられて仮定関係が表されるが、中国語では接続表現が用いられないゼロ形式つまり“意合法”が存在することである。さらに、中国語では、接続表現が用いられる場合も、それが主節の頭のみ用いられて仮定関係を表すことがあること、また従属節に用いられる場合も、従属節末のみならず従属節頭にも用いられること、さらには従属節と主節の両方に接続表現が用いられることがあるなど、様々な形態で仮定関係が表される。本節では、中国語の仮定表現の形式を、接続表現を使わない場合、主節のみに接続表現がある場合、従属節に接続表現がある場合に分けて、それがどのような意味機能をもつかについてまとめながら、日本語との相違について述べていく。

### 7.1 仮定表現を使用しない場合（無標識型<sup>113</sup>、仮定の意味は文脈より理解される）

日本語と中国語の間の最も大きな違いは、中国語の仮定関係を表す複文では、接続表現が用いられないことが多いことである。

以下、『中日対訳コーパス (BJSTC)』における「たら」と「なら」それぞれが中国語に訳される場合の、接続表現を使用する訳文と何も使用しない訳文の出現数と出現率をまとめる。

表7-1 日本語「たら」「なら」の中国語訳文中における接続表現の出現状況

	「たら」	「なら」
総出現数	825	574
中国語接続表現の 出現数と出現率	290 35.15%	286 49.82%
どちらも半分以下である		

<sup>113</sup> 「無標識」は「無標」とは全く異なる用語である。ここでは「無標識」を「何の接続表現も使用しない」ことを表すものとする。

表7-1からわかるように、日本語の中の「たら」「なら」で示される仮定関係は、中国語では接続表現を用いることなく前後の文脈を判断することを通して理解されることが多いと言える。

この形式は中国語では“意合法”と呼ばれ、接続表現を用いずに「P, Q」のみの形で仮定関係が表される。日常生活でよく使用される表現形式であり、仮定の意味はそれぞれの節の内容から読み取られ、形式的には示されていない。

(103) 你 要 把 心 放 宽 一 点。 老 是 愁 闷， 恐 怕 会 闷  
あなた 義務 を 心 広める 少し いつも 心配する 恐らく 可能性 閉じこもる  
出 病 来。 《家》  
でる 病気になる

少し心を休めなさいね。心配ばかりしていたら、病気になりますよ。

(104) 儿 童 的 书 还 应 该 是 香 甜 的， 读 完 了 可 以  
子供 助詞 本 やはり すべき 断定 香ばしい 読み終える 完了 いい  
象 吃 蛋 糕 一 样 地 把 它 吃 下 去。 《活动变人形》  
みたいに 食べる ケーキ ように を それ 食べる  
子供の本が甘くて匂がよく、読み終えたらケーキみたいに食べられるといい。

上記の例文は仮定表現がない裸の「P, Q」という構文形式をとっている。中国語原文には接続表現が出現せず、その文の意味関係は前後節の内容から読み取られる。例(103)では“老是愁闷，恐怕会闷出病来”の形で、「ふさいでいる状態が続いたら病気になる」の意味を表し、例(104)では“读完了可以象吃蛋糕一样地把它吃下去”の形で「読み終わったらケーキを食べるように甘く感じ取る」を表している。それぞれの例文は接続表現が使用されていないにもかかわらず、その文の意味関係が前後節の文脈から判断できる。このように前後の関係を明示する接続表現が使用されていないため、節間における仮定の意味は弱くなり、順接的継起関係（「心配する → 病気になる」、「読み終わる → 感じ取る」）に近いと言えよう。これらの中国語原文が日本語訳文では仮定関係を表す接続表現「たら」に訳されていることに注意されたい。

## 7.2 主節のみに仮定表現が使用される場合（従属節と主節の接続、時間的継起性型）

このタイプも中国語にしかない形式である。主節に現れる接続表現には2種類ある。

一つは“那”、“那么<sup>114</sup>”といった接続詞で、もう一つは“就”、“便”などの副詞である。以下、例 (105) に接続詞の例を、例 (106) に副詞の例を挙げる。

(105) 这 倒 不 怕! 他们 扳 我, 那 我 自然 也 可以 再  
 これ 却って 否定 怖い 彼ら ねじ回す 私 接続語 私 当然 も 許可 また  
 扳 别人。 《霜叶红似二月花》  
 ねじ回す 他人

そのことは怖くない。彼らが私を陥れるなら、私は他の人を陥ればいい。

(106=(98)) 有 洗 的 涮 的, 就 搁 下。 一 人 在 外 苦,  
 ある 洗う 助詞 すすぐ 助詞 接続語 置く 一人 いる 外 苦しい  
 不 容易。 《小鲍庄》  
 否定 容易

洗濯物や洗い物があったら、おいててね。一人暮らしはつらいし大変だろう。

例 (105) と例 (106) では、主節に接続表現“那”や“就”が使用されているため、「P, C Q」という構文形式をとっている。このように接続表現が使用される場合、「P, Q」型より前後節の結び付きが強いと思われる。例 (105) は接続詞“那”が用いられているため、前後節の接続関係がより強く感じられる。例 (106) は副詞“就”が使用されることで、それが無い場合よりも前後節の結びつきは強く感じられる。「洗濯物をもっている」と「それを置いていく」という2つの事態が継起して起こることを表現している。

### 7.3 従属節に仮定表現が使用される場合 (論理関係型)

この形式は中国語にも日本語にも同様に見られる。

(107) 如果 他 变 富 了 呢, 那 他 可就 从 根上  
 接続語 彼 なる 豊か 変化 接続語 接続語 彼 語気 から 根上  
 变 了 质, 成 了 另 一 种 人 了..... 《金光大道》  
 なる 変化 質 なる 完了 別の 一種 人 語気

もし彼が金持ちになったら?そしたら彼は根っから変わってしまって、まったく別

<sup>114</sup> “那么”は仮定複文の中で論理関係を示す機能をもつというのが定説だが、“那”は“那么”と少し異なっている。“那”と“那么”の仮定複文の用法の詳細については第8章に譲る。

人になってしまう……

(108) 若能好好学习，棋锋必健。 《棋王》

接続語 できるよく 練習する 囲碁の打ち方 必ず 良い

もし真剣に精進するなら、やり方が上手になるはずだ。

(109) もし発病初期に体のだるさを感じたら、何よりも先ず休養して栄養を摂ることが肝腎である。 『黒い雨』

(110) もし私がいつまでもここを去らないなら、やがて樹幹に醜くしがみついて、息絶えねばならぬかも知れぬ。 『野火』

仮定関係を明示的に示すものは、中国語には“如果”、“要是”、“假如”、“设若”など、日本語には「たら・ば・と・なら」がある。“如果”、“要是”、“假如”、“设若”などの接続表現が従属節に現れると、仮定関係のみ示される。つまり、中国語では、“如果”、“要是”などの従属節の頭にだけ使える接続表現は仮定性が強く、仮定関係を表す機能のみをもつ。すなわち、従属節の頭にある“如果”、“要是”を見れば、主節における接続表現の有無に拘わらず、その文が仮定関係を示す文であることがすぐにわかる。例 (107) と (108) において、節の頭の“如果”と“若”を見れば、その文が仮定文だとすぐにわかる。例 (107) では、従属節末の“呢”と主節の“就”がなくても、文の意味は変わらない。これに対して、日本語の「ば」と「たら」と「なら」にはそれぞれ仮定関係を表す以外の機能がある (第 5 章を参照されたい)。さらに、日本語では「もし」など副詞 (例 (109) (110)) を加えれば、仮定関係が強められるが、中国語では“就”、“便”などの副詞を加えると時間的あるいは前後の継起的関係が強く表示される。

#### 7.4 機能拡張の日中対照

第 5 章と第 6 章では、日本語と中国語、両言語の仮定表現の機能拡張をそれぞれ見てきた。日本語の仮定表現「たら」と「なら」は、小林 (1969) などで指摘されたように、条件を表す「ば」と元々条件を表さない「たり」、「なり」との融合により転化してきた形式である。その後、「たら (ば)」や「なら (ば)」は次第に仮定表現として固定されてきている。現代日本語では「ば」と「たら」と「なら」はさらに用法が広がっており、主に接続助詞から文末の終助詞、さらに「ってば」「ったら」のように広がってきている。また、「なら」は「名詞に接続する」場合は「たら」と同様に発展しつつも、その一方で「文頭用法」(「接続詞的機能」)も観察された。このように仮定関係を表す

代表的な接続表現が仮定以外の用法へと機能拡張している様子が確認される。一方、中国語の仮定表現の機能拡張については、典型的な「仮定表現」には見られなかったが、「非仮定関係」を表す接続表現が仮定的機能を帯びてきており、それは「準仮定表現」や「次仮定表現」に位置付けることができた。つまり、日本語の仮定表現が一定の方向で「終助詞」や「接続詞」などの仮定以外の機能、非仮定表現に広がっているのに対して、中国語の非仮定表現は仮定表現への拡張に止まることから、両言語の異なる点として指摘されよう。これを図式してみると、図7-1のようになる。

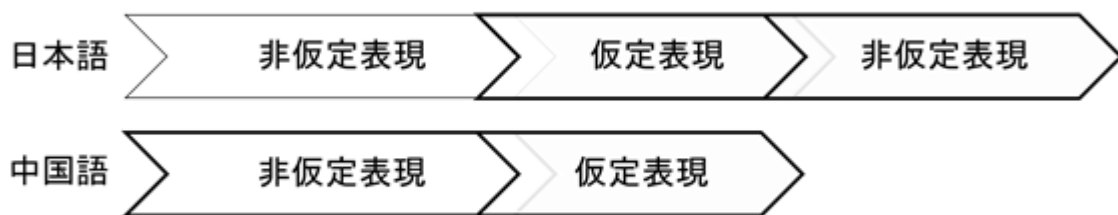


図7-1 日中両言語の仮定表現の機能拡張の異同

図7-1に示したように、日本語の仮定表現の機能拡張は「非仮定表現→仮定表現」と「仮定表現 → 非仮定表現」という2段階を経ているのに対して、中国語の仮定表現の機能拡張は「非仮定表現 → 仮定表現」という1段階のみである。これは、両言語の語彙の品詞性と関わると考えられる。日本語は文同士の関係を示すのを機能語に委ねる傾向が強く、仮定表現が機能語として存在している。これに対して、中国語は文同士の関係を語順で示す傾向が強く、一つの音で一つの意味をもっており、実質語が多く存在している。そこで、一部の実質語が機能語として使用されるようになる“実词虚化”がよく起こっている。つまり、中国語は、「実質語→仮定を表す機能語」という拡張プロセスを遂げたのに対して、日本語は、機能語の接続助詞「ば」「たら」「なら」が仮定以外のものに機能を拡張させている。両言語では機能拡張プロセスが異なると考えられる。

本章は第5章と第6章の記述をもとに、日中仮定表現の共時的文法化の類似点と相違点をまとめてみた。日本語の仮定表現「ば」「たら」「なら」のそれぞれの機能拡張については、「ば」「たら」は主に文中から文末の終助詞に広がってきており、「なら」については文の初めに使用される「接続詞的機能」も観察できた。このように仮定関係を表す代表的な接続表現が非仮定的用法へと機能拡張するプロセスが中国語には見られ

なかった。中国語の仮定表現の機能拡張については、「非仮定関係」を表す標識が仮定的機能を帯びてきており、本研究ではそれについて「準仮定表現」と「次仮定表現」という用語で区別した。このように、日本語の仮定関係を表す表現が非仮定機能に広がる一方で、中国語では非仮定関係を表す表現から仮定関係を表す表現への拡張に止まるのが両言語の差異であるとの指摘を行った。また、小柳 (2018: 93) に提示されている「機能語が拡張的に新しい機能を持つ変化」という多機能化の定義を援用し、表 7-2 のように日中仮定表現の機能拡張の異同をまとめた<sup>115</sup>。結果としては、付属的機能語の枠内の多機能化 1A は両言語ともに現れている。異なる枠の移り変わりは日本語と中国語とでは一致しておらず、日本語の場合は付属的機能語から自立的機能語へ、中国語の場合は自立的機能語から付属的機能語へ、という違いが見られた。

---

<sup>115</sup> 繰り返しになるが、理解しやすいように定義を繰り返す。2.2.4 にもあったが、小柳 (2018) の文法変化の方向性を再度引用する。

- a. 多内容化:内容語→内容語  
例: 動詞や名詞の多義性
- b. 機能語化 A:内容語→付属的機能語  
例: はべり (丁寧の存在動詞→丁寧の複合動詞後項)
- c. 機能語化 B:内容語→自立的機能語  
例: つゆ (名詞→程度副詞)
- d. 多機能化 1A:付属的機能語→付属的機能語  
例: た (アスペクト→テンス)
- e. 多機能化 1B:付属的機能語→自立的機能語  
例: が (接続助詞→接続詞)
- f. 多機能化 2A:自立的機能語→付属的機能語  
例: われ (代名詞→終助詞/文末助詞) <sup>115</sup>
- g. 多機能化 2B:自立的機能語→自立的機能語  
例: まこと (副詞→感動詞)

(小柳 2018:95、97、118 を参照した上で補足しながら作成した。)

表 7-2 日中仮定表現の機能拡張

接続助詞 (仮定機能)	接続詞	提題助詞	終助詞	助詞 <sup>116</sup>	副詞
	多機能化 1B	多機能化 1A	多機能化 1A	多機能化 1A	多機能化 2A
日本語	ば・たら-2	ば・たら-4	ば・たら-3/4		
	なら-3/4	なら-2			
中国語 代表例			次仮定表現	準仮定表現	準仮定表現
			“呢”、“么”	“的话”	“就”

以上の日中仮定表現の機能拡張は各段階における特徴をまとめると、表 7-3、表 7-4、表 7-5 のようになる。

まず、日本語の仮定表現「ば・たら」の四つの用法については、意味、機能、語類、文中の位置、融合、節の独立性、語彙・文レベルの面から表 7-3 のようにまとめられる。「ば・たら-1」は最も基本的な用法であり、複文の前後節を接続し、仮定関係を表す。この場合は常に従属節末に置かれ、節に依存している。「ば・たら-2」の用法になると、指示詞との融合によって文頭に置かれる接続詞として機能している。より大きい単位、文と文を接続し、節から逸脱していると見られる。「ば・たら-3」の用法になると、主節の「いい」「どう」などの融合を通して主節がさらに省略され文末に位置するようになる。この場合、「ば・たら」はもとの従属節に後接し、一つの文になると理解できる。同じように複文の形が崩れ単文を構成するのが「ば・たら-4」の用法である。この用法は動詞「いう」との融合がその特徴であり、「ってば・ったら」の形で話し手の主観的態度を明示する提題や文末語気を表すようになる。

<sup>116</sup> この「助詞」は中国語の準仮定表現“的话”を指す。

表 7-3 日本語仮定表現「ば・たら」の各段階の特徴

	ば・たら-1	ば・たら-2	ば・たら-3	ば・たら-4	
意味	仮定接続	接続	主観的態度	主観的態度	主観的態度
機能	節の接続	文の接続	付加	付加	付加
語類	接続助詞	接続詞	終助詞	準提題助詞	準終助詞
文中の位置	従属節末	文頭	文末	名詞の後	完全句の後
融合		指示詞と融合	主節と融合	「という」との融合	
節の独立性	完全な節 節に依存	非完全節 節から逸脱	非完全節	非完全節	非完全節
語彙・文レベル	複文	語	単文	単文	単文

日本語の仮定表現「なら」も「ば・たら」と同様に拡張しており、それをの表 7-4 でまとめる。

表 7-4 日本語仮定表現「なら」の各段階の特徴

	なら-1	なら-2	なら-3	なら-4
意味	仮定接続	提示	接続	接続
機能	節の接続	提題	句の接続	文の接続
語類	接続助詞	提題助詞	接続助詞	接続詞
文中の位置	従属節末	名詞の後	指示詞の後	文頭
融合		断定辞と融合	指示詞と融合	指示詞と融合
節の独立性	完全節 節に依存	非完全節	非完全節 節から逸脱	非完全節
語彙・文レベル	複文	単文	単文	語

中国語については、仮定表現、準仮定表現、次仮定表現に分けて各段階の特徴を見ていく。“如果”、“要是”などの仮定表現は複文の前後節を接続し、仮定関係を表すことがその最も基本的な用法である。この場合は常に従属節の頭に置かれ、節に依存している。準仮定表現の元々の語類は主に副詞や助詞であり、主節の頭や文末に置かれ、単文の場合が多い。さらに、次仮定表現は文末の語気助詞であり、話し手の主観的態度を表すものである。これらをまとめると、表 7-5 になる。

表 7-5 中国語假定表現の各段階の特徴

	假定表現	準假定表現	次假定表現
意味	假定接続	陳述や提題	主観的態度
機能	節の連接	付加	付加
語類	接続助詞 (連詞)	副詞や助詞	終助詞 (語気助詞)
文中の位置	従属節の頭	主節の頭や文末	文末
融合		言説動詞との融合	
節の独立性	完全節 節に依存	非完全節	非完全節
語彙・文レベル	複文	単文	単文

次章からは具体的な假定表現の日中対照を行う。日本語と中国語とでは対応できる假定表現がどのような経緯で假定関係を表すようになったのか、さらに文法化のプロセスの違いがもたらす両言語の表現の差異をめぐって通時的变化を加えながら考察を進めていく。

## 第8章 指示詞と融合した日中仮定表現の文法化

本章では、日中両言語に頻出する指示詞を含む仮定表現を取り上げて、これらの仮定表現に潜んでいる指示詞的特徴と接続詞的特徴を文法化の枠組みで対照する。

### 8.1 日本語における指示詞を含む仮定表現

日本語には、指示詞を含む接続詞が数多く存在している。日本語の指示表現には、「こ」「そ」「あ」の三系列の指示詞がある。一方、中国語の指示表現では、“这”と“那”の二系列の指示詞が含まれる。しかし、文法化を成すのは、すべての系列の指示詞ではなく、一部だけである。日本語の仮定表現では「そ」系列指示詞、中国語の仮定表現では“那”系列指示詞と融合して文法化のプロセスが進んでいる。まず、日本語の場合から確認していきたい。

高橋ほか (2005) は接続詞を8種類に分けている。その詳細は以下の通りである。

① まえの文を原因・理由とする結果や結末などであることをあらわす。(順接)

だから それで それから つづいて そして で それゆえ ゆえに したがって そこで そのため かくして

② まえの文の内容にそぐわないこと、つりあわないこと、反対のことなどであることをあらわす。(逆接)

だが が しかし けれど けれども だけど でも ところが それなのに しかるに

③ まえの文の内容が、あとの文が成立するための条件やきっかけであることをあらわす。(条件)

すると とすると そうすれば とすれば そしたら そうしたら だとしたら だったら それなら なら そうでなければ そうでないと でなければ でないと それでも だとしても といっても

④ まえの文、または語へのつけくわえやおぎないであることをあらわす。(並立)

また かつ および あわせて さらに しかも それに そのうえ なお ただし ちなみに もっとも

⑤ まえの文、または語のあらわすことがらと、あとの文、または語のあらわすことがらとの、どちらか1つであることをあらわす。(選択)

または あるいは もしくは それとも ないし

⑥ まえの文、または語のいいかえであることをあらわす。(換言)

つまり すなわち いわば いいかえれば いってみれば

⑦ まえの文の説明や理由などであることをあらわす。(解説)

なぜなら だって というのは なんとすれば なぜかっていうと

⑧ まえの文とは別の方向にはなしをかえることをあらわす。(転換)

さて ところで ときに それでは それより では じゃあ はなしかわって  
それはそうとして

(高橋ほか2005: 163-164)

以上の種類から見ると、⑥「換言」と⑦「解説」以外、すべての種類に指示表現と関わる接続詞がある(下線を引いた表現)。「条件」に属するのは、「そうしたら」「そしたら」「それなら」等である。これらの表現は、「「そう」+「する」+仮定形」、「指示詞(+動詞・断定辞)+仮定形」の形で慣用的<sup>117</sup>表現として多く使用されている。本節で注目するのは、③の中の文法化したものである。本研究の収集したデータの中にもこれらの表現を使用する例文が少なくなかった。

(111) 「一カ月、……そうだな、一カ月以内に、新聞に僕のことが大きく出ると思う。

そうしたら、思い出してくれ。」 『金閣寺』

(112) 「そしたら、何故、そんな勘当同然の身体で、あたしの家へ来たか、っていやがった。」 『野火』

(113) 掛けるだけですか、それならいい。 『あした来る人』

(114) お前は法科の学生だったな。……そんならお前は解っている筈だ。法律というものは善良な庶民の味方だ。しかし、犯罪人の味方なんかしてくれやしないよ。

『砂の女』

例(111)と例(112)は「「そう」+「する」+仮定形」、例(113)と例(114)は「指示詞「それ」(+断定辞)+仮定形」、いずれも「そ+X」<sup>118</sup>の形式で、後続する文先

<sup>117</sup> 国立国語研究所(1964: 148)では「そしたら」「そういえば」などを条件表現の「慣用的な用法」と類別している。

<sup>118</sup> 本論文では「指示詞+(し+)助詞」を「そ+X」で表す。指示詞と後続する接続詞が指示

頭に位置している。「そ-」は、先行文脈の先行詞を指示するというより「そ-+仮定形」<sup>119</sup>の全体で、文と文の接続機能を果たしていると考えられる。「そ-+仮定形」という複合形式はこれまで考察の対象とされたことはあまり少ないが、「それも」「それが」「それで」「そして」などの「そ-+助詞」の形式に関する研究は進んでおり、ひけ (1985, 1986, 1987)、庵 (1996)、伊藤 (2001) などが挙げられる。本節では「たら」「なら」と指示詞の文法化のプロセスを考察していくが、接続詞の中には、「それで」「それに」「それなら」「それから」「それでも」のように「それ」を含むものが多くあるのに対し、「これ」と「あれ」を含むものはそれほど多くないことに注目したい。辞書によれば、「これ」についても、「これから」「これきり」「こればかり」「これまで」「これほど」のように慣用化したものは存在するが、それらを語彙化したものとして扱った辞書は少なく、「あれ」を含む複合語はさらに少ない。本節では、「そ-+仮定形」だけではなく、「こ-+仮定形」「あ-+仮定形」を含めて指示詞と仮定表現の文法化に焦点を当て、これらのいわゆる指示詞を含む接続詞がどのような変化を経て作り出されてきたかという変化の過程をたどることとする。また、「そ-+仮定形」が「こ-+仮定形」「あ-+仮定形」より多用されている理由についても触れる。

### 8.1.1 先行研究の概観

これまで文法化の観点から「指示詞+助詞」を取り上げた先行研究は、主としてソ系語を対象とし、その語構成や意味機能を論じている。以下、それらの研究を簡単に概観する。

伊藤 (2001: 331) は、接続詞「それも」を「指示詞の「それ」+とりたて詞の「も」」が結びついて文法化したものと捉え、「「A それも B」においてもっばら A を受けて B でもって A を詳細化する」働きをもつと述べている。ひけ (1986: 74-87) は、「そこで」と「それで」との間にどのような機能・意味的な違いがあるか、また、指示語の「そこ」および「それ」からどのような変化を経て当該接続詞に転成したかを説明し、「そこで」の意味変化は、「元々の空間・場所的な指示性の意味 → 出来事の時間・状況的な関係の表現 → 接続詞の機能」といった指示機能から接続機能へのメタファー的拡張を通して行われたと指摘している。一方、「それで」の場合は、「具体的な指し示す対象をもつ → 指

---

詞を含む複合接続詞になる過程において、「指示詞」は「詞的」から「辞的」に変わってきたと考えられるので、ソ系指示詞ではなく「そ-」で表記しておく。

<sup>119</sup> ここでは「仮定形」とした。「したら」「(断定)なら」を含む。

示詞と接続詞の機能とをあわせてもつ → 出来事の因果関係を表す接続詞として機能する」という意味・機能の変化としている。

「それでは」に関する研究は主に2つの観点から行われている。

- ① 「では」の前に指示語の「それ」が付いたもの。ほとんどの場合「では」で言い換えられる。(『日本語文型辞典』(改訂版) 2023: 155; 小林 1996: 279)
- ② 「それでは」は「それーでーは」の条件表現から転じた接続詞で、「そうであるならば」の意味であることを述べている。(森田 1980: 237)

また、庵 (1996) は「それが」「それを」など「指示性」をもつ接続詞を指示詞と接続詞の接点と考えている。つまり、指示性と接続性を融合した形式が存在しているという解釈である。

このように、先行研究の大部分は「そ-+助詞」の意味変化や転成に注目し、「指示詞」の文法化から転じたものと主張している。本研究はまず、辞書の調査を行い、これら指示詞を含む仮定表現がどの程度定着しているかを確認する。その上で実例を用いて具体的に分析する。「こ-」「そ-」「あ-」を三系列に分け、実際に使用されているか否かを問わず、「こ-/そ-/あ- + 仮定形 (たら・なら)」の組み合わせを表 8-1 の形式に限って調べた。

表 8-1 「こ-/そ-/あ- + たら・なら」をめぐる調査対象<sup>120</sup>

コ系	ソ系	ア系
こうしたら	そうしたら	ああしたら
* こしたら	そしたら	* あしたら
これなら	それなら	あれなら
* こんなら	そんなら	* あんなら

(\*を付けている語は標準日本語に出現しないものである。)

### 8.1.2 辞書による調査

コソア系列指示詞のどれが接続助詞の「たら」「なら」と結びついて一語化するのか

<sup>120</sup> 表 8-1 に示した語のほかの、「こ-/そ-/あ-+接続助詞たら・なら」の組み合わせである「こ-/そ-/あ-う+なら」、また「指示詞+だったら」の形式についての調査は、今後の課題としたい。

を、辞書における出現の有無に基づき調査した。その結果は表 8-2 のようになる。

表 8-2 辞書による調査結果

		新 明 解 国 語 辞 典 ( 第 七 版 )	新 明 解 国 語 辞 典 ( 第 八 版 )	言 泉 国 語 大 辞 典	明 鏡 国 語 辞 典 ( 第 二 版 )	学 研 国 語 大 辞 典 ( 第 二 版 )	広 辞 苑 ( 第 六 版 )	広 辞 苑 ( 第 七 版 )	大 辞 林 ( 第 三 版 )	日 本 語 大 辞 典	日 本 国 語 大 辞 典 ( 第 二 版 )	集 英 社 国 語 辞 典 ( 第 二 版 )	日 本 俗 語 大 辞 典
コ 系	こうしたら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	こしたら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	これなら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	こんなら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
ソ 系	そうしたら	○	○	*	*	○	*	○	*	*	○	*	*
	そしたら	*	*	*	*	○	*	○	*	○	○	*	○
	それなら	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	*
	そんなら	*	○	*	*	○	*	○	*	○	○	*	○
ア 系	ああしたら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	あしたら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	あれなら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	あんなら	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

(○は当該の語が辞書の独立項目として出現している語を示している。\*を付けた語はその語自体日本語として出現しないものと辞書の独立項目として記載されていないものを含む。)

表 8-2 からわかるように、「こ-/そ-/あ-+たら・なら」における用法の分布は対称的ではなく、ソ系列のみにおいて語彙化(一語化)したものが多く見られる。また、今回調査した 12 冊の辞書<sup>121</sup>では、「それなら」は独立した語として辞書に登録されていたが、

<sup>121</sup> 調査対象の扱い方が変わったため、『新明解国語辞典』と『広辞苑』はそれぞれ 2 つの版本を利用した。『新明解国語辞典』(第八版)は「そんなら」を語彙項目として登録している。『広

「これなら／あれなら」は独立した語としては辞書に登録されていなかった。

### 8.1.3 分析

表 8-1 の語を『中日対訳コーパス』の用例で検索した結果を表 8-3 にまとめた。

表 8-3 各調査対象の使用状況

コ系	出現数	ソ系	出現数	ア系	出現数
こうしたら	4	そうしたら	19	ああしたら	0
こしたら	0	そしたら	10	あしたら	0
これなら	23	それなら	83	あれなら	5
こんなら	0	そんなら	65	あんなら	0
合計	27		178		5

以下では、使用頻度の高い「そ-+X」の各形式から見ていく。

#### 8.1.3.1 「そ-+接続助詞 たら・なら」の各形式の分析

##### 8.1.3.1.1 「そうしたら」

表 8-2 から、「そうしたら」は『新明解国語辞典』（第七版、第八版）、『学研国語大辞典』（第二版）、『広辞苑』（第七版）、『日本国語大辞典』（第二版）において一語として登録されているのがわかる。これらの辞書における「そうしたら」の記述や説明は、以下の通りである。

表 8-4 「そうしたら」の辞書解釈

『新明解国語辞典』 (第八版) (p.888)	そのことがきっかけとなって、何かが起こることを表す。
『学研国語大辞典』 (第二版) (p.1111)	〈接続詞〉 そのようにしたなら。また、そのようにしたところ。

辞苑』の第六版では「それなら」しか語彙項目として登録していなかったが、第七版では、「そうしたら」「そしたら」「そんなら」はいずれも登録するようになった。なお、2つの版本ともに登録している語彙項目については、最新版の記述を引用する。

『広辞苑』 (第七版) (電子版)	〈接続詞〉 ①前の事柄が起きると、後の事柄が起きることを示す。そうしたところ。そのときには。 ②前の事柄を受けて、新たに指示・提示することを示す。それでは。
『日本国語大辞典』 (第二版) (第8巻) (p.259)	〈接続詞〉 ①前の事柄を仮定し、その場合に後の事柄が起こることを示す。そのようにしたら。そのときには。 ②前の事柄を契機として、偶然、後の事柄が起こることを示す。そうしたところ。

しかし、これら四つの辞書の「そうしたら」の扱い方は同じではない。『学研国語大辞典』(第二版)と『広辞苑』(第七版)と『日本国語大辞典』(第二版)は「そうしたら」を「接続詞」として扱っているが、『新明解国語辞典』(第八版)は、単に慣用したものとしてしか扱っておらず、「接続詞」としては認めていない。すなわち、『学研国語大辞典』(第二版)と『日本国語大辞典』(第二版)は「そうしたら」を指示語と接続助詞が組み合わさった語とは解釈せず、それ自体で独立した一語として見ている。

次に、「そうしたら」の具体例を見てみよう。

(115) 「外国へ行った方が、君の仕事に少しでもいいようだったら、行ったらいいと思う。そのくらいのことはして上げられるからね。」

「別にすすめはせん。ただその方が気が変わるなら、そうしたらいいと思ったまでだ。それに若い者は自由でないといけない。」 『あした来る人』

(116= (38)) 「まことに、先生にはよう申訳がありまえんのやけれど……」

時雄は熱していた。「然し、君、解ったら、そうしたら好いじゃありませんか、僕は君等の将来を思って言うのです。……」 『蒲団』

例(115)、例(116)の「そうしたら」は「そう」+「『する』の連用形」+「たら」の形で構成されている。「そう」は先行文脈を指し、「する」は動作を示し、全体では「そのようにしたなら」という意味である。この場合、「そうしたら」に後接するものは「いい」「よい」の形式で、「～たらいい」全体として勧誘を表す。

次の用法は、「そうしたら」が前節と後節の継起関係を表すものである。この場合は、前節と後接の主語が同じ場合と異なる場合に分けられる。まず、前後節の主語が異なる例として例 (117) と例 (118) が挙げられる。

(117) 尤もこの頃は時々会社を休んでいるから、もしも会社に居なかった場合は直ぐ大森へ電報を打って貰いたいこと。そうしたら私が迎えに来るから、それまで必ず何処へも出さずに置いてくれること。 『痴人の愛』

(118) なあに、いずれそのうちみんなが覚えるだろうから、そうしたら奴等を取っ掴まえて習ってやるのよ。ダンスなんざあそれで沢山よ。 同上

継起関係を表す例のうち、上記の例 (117)、(118) は「そうしたら」の前後節に描かれる出来事の動作主が異なる文である。例 (117) においては前節「電報を打つ」のは「聞き手」であり後節の「迎えに来る」のは「話し手」である。例 (118) においては、「覚える」のは「みんな」、「取っ掴まえる」のは「話し手」である。いずれも前後節の動作主は一致していない。また、「そうしたら」の前後の動作はどちらも未来のことである。

次に、前後節の描く出来事の(被)動作主やその動作の結果状態の経験者が一致する場合を見てみよう。

(119) でもまあいつも波風立てるのもどうかと思うから私何も言わずにちゃんとおにぎり二十個作っていったわよ。梅干し入れて海苔まいて。そうしたらあとでなんて言われたと思う?小林のおにぎりは中に梅干ししか入ってなかった、おかずもついてなかったって言うのよ。 『ノルウェイの森』

(120) 「とにかく、ここに居て下さい。そうしたら気持が変わると思うんです。」 同上

(121) 「あたしは十九よ、十九から見れば三十二の人はお爺さんよ。悪いことは云わないから、外に奥さんをお貰いなさいよ、そうしたらヒステリーが直るかも知れないから。」 『痴人の愛』

例 (119) ~ (121) において、「そうしたら」前文の動作主と後文の被動作主・動作の結果状態の経験者は同じ人物である。例 (119) では「そうしたら」の前文「梅干し入れて海苔巻いておにぎり二十個作った」のは「私」であり、後文の受身の被動作主「小林

のおにぎりは中に梅干ししか入ってなかった、おかずもついてなかった」と言われたのも「私」である。例 (120) は話し手である私の聞き手に対する意見であり、「そうしたら」が「(あなたが)ここに居る」という(あなたの)動作とその結果としての「(あなたの)気持ちが変わる」という(あなたの)気持ちの変化を述べている。例 (121) も同様に、聞き手のあなたが「(外に奥さんを貰う)」と「(あなたの)ヒステリーが直る」という形式で、前文の動作とその動作の結果状態の経験者は同じである。「そうしたら」の前の動作主と後の状態はどちらも未来のことである。この場合、「そうしたら」の意味は「そのようになったら」、「その時には」に近い。このような「そうしたら」の用法は、『日本国語大辞典』(第8巻)に記載する「そうしたら」②の説明、すなわち「前の事柄を契機として、偶然、後の事柄が起こることを示す」と合致していると考えられる。

以上の説明をまとめると、例 (117)、(118) のように前後の動作主が一致しない場合、例 (119) ～ (121) のように前後節の動作主・経験者が同じ場合である。このような「そうしたら」は全体として継起関係を表し、「そうする」は「そうなる」の意味に近く、全体としては「その時になったら」という意味に解釈できる。

なお、「そうしたら」は今回『中日対訳コーパス』から収集したデータの中には19例しかなかったが、上記の分類方法に従って分けてみると、表8-5のようになる。

表8-5 「そうしたら」の用法のまとめ<sup>122</sup>

合計 (19 例)		
	指示機能+動作性+接続機能	継起関係
用法	慣用用法 (勧誘)	2つの出来事の継起関係を表す
用例	「そう」+「し」+「たら」 (例 (115)、(116))	そのようになったら (例 (117)、(118)、(119)、(120)、(121))

「そうしたら」という語彙の構成要素を厳密に「そう+「する」の連用形+たら」の三つの要素(機能)に分けて考えれば、それぞれの要素がきちんと機能している例は、す

<sup>122</sup> 今回収集した用例数が少ないので、今後用例を増やしてさらに確認したい。川端・伝 (2018: 1-18) は、『日本語日常会話コーパス』を題材に「そうしたら」と「そうすると」の会話での出現状況を分析している。結論の一つとしては、「そうしたら」の選択については元々「たら」の意味・用法に影響されるとする。なお、『日本語日常会話コーパス』で検索したところ、「そうしたら」が49件抽出されたが、用法はここでの分類と同様であった。実際の会話についての詳しい分析については今後の課題とする。

なわち「そう」が指示機能のある程度残している例は、例 (115)、例 (116) の「いい」などと共起する慣用用法にしか見られない。例 (117) ～ (121) は「そうしたら」の前後の主語によって区別されるとは言え、それらは「そうしたら」の元々の意味から離れており、構成要素の三つを分けて考えにくい傾向がある。つまり、「そうしたら」は「そのようにしたら」の意味にも「そうなったら」の意味にもとれるということで「継起関係」を表すようになる。「そうしたら」の文法化プロセスを図式してみると、図 8-1 のようになる。

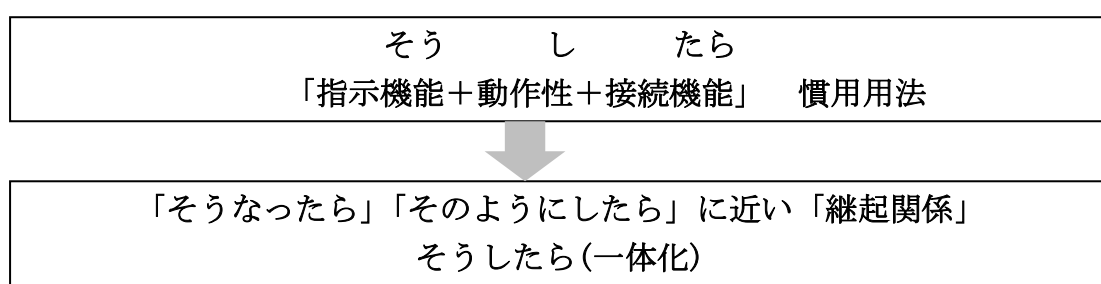


図 8-1 「そうしたら」の文法化プロセス

このように、「そうしたら」は「指示機能+動作性+接続機能」から「継起関係」を表す機能を備えるようになる。これも「そうしたら」から次に述べる「そしたら」への語形変化の要因であろう。

#### 8.1.3.1.2 「そしたら」

まず、「そしたら」に関する辞書記述のまとめておく。

表 8-6 「そしたら」の辞書解釈

『学研国語大辞典』（第二版） (p.1131)	<接続詞> [俗] そうしたら。
『広辞苑』（第七版）（電子版）	<接続詞> ソウシタラの約。
『日本語大辞典』（p.1261）	<接続詞> [俗語] そうしたら、すると。
『日本国語大辞典』（第二版） 第 8 巻 (p.412)	<接続詞> ①「そうしたら①」に同じ。 ②ところで。①の仮定の意味が薄れ、話をもとに

	戻すのに用いる。 ③「そうしたら②」に同じ。
『日本俗語大辞典』 (p.328)	<接続詞> (「そうしたら」の変化した形) そうしたら。

『学研国語大辞典』(第二版)と『日本語大辞典』は両方ともに「そしたら」を「そうしたら」の俗語として扱い、俗語の専門辞書『日本俗語大辞典』の中にも記述がある。

(122) だけどあなたが嫌なんだから、私は何も言わないで、あなたの好きなようにしていたのよ。そしたら急に別れるって言うんでしょ。 『青春の蹉跎』

(123) お母さんの病気と同じだからよくわかるのよ。脳腫瘍。信じられる?二年前にお母さんそれで死んだばかりなのよ。そしたら今度はお父さんが脳腫瘍。

『ノルウェイの森』

(124) それで次の週のミーティングで、読んだけど何もわかりませんでした、ハイって言ったの。そしたらそれ以来馬鹿扱いよ。問題意識がないだの、社会性に欠けるだのね。冗談じゃないわよ。私はただ文章が理解できなかったって言っただけなのに。 同上

以上の3例の「そしたら」はみな「すると」に置換することが可能で、継起する二つの行為・作用の繋ぎの表現として用いられている。例(122)は前文「あなたの好きなようにしていた」が後文「急に別れる」を生起させた例である。それに対して、例(123)は「二年前にお母さんそれで死んだ → 今度はお父さんが脳腫瘍」、例(124)「ハイって言った → それ以来馬鹿扱い」という順序で前後の事態が結びつき、「そしたら」の後に続く文の表す事態が継起的に生起したことを表す。「そしたら」がこのような関係を表すのは「そしたら」の前の動詞の「る形/た形」に関わると思われる。

「そうしたら」と「そしたら」の前文の述語が「る形」か「た形」かという接続形式(表8-7)から両者の違いを詳しく見てみよう。『中日対訳コーパス』による例の出現数である。

表8-7 「そうしたら」と「そしたら」の前接形式

	出現数(合計)	V-る形に接続	V-た形に接続
そうしたら	19	17	2
そしたら	10	3	7

『学研国語大辞典』（第二版）と『日本語大辞典』と『日本俗語大辞典』の三つの辞書では、「そしたら」を「そうしたら」の「俗語」として挙げるだけで、両者の具体的な区別はしていない。しかし、今回収集した例文から見ると、「そしたら」の前文は過去の事態が「そうしたら」より多いことがわかった。「形式が違えば意味も違う」（Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 88-89) という文法化の考え方からすると、「そしたら」は「そうしたら」の単なる「俗語」にすぎないとは言えない。ここでの収集例においても、単に音の短縮化のみならず、意味も変化しているものも少なくない。すなわち、「そしたら<sup>123</sup>」は「そうしたら」から拡張したものであると考えられるが、必ずしもすべての場合に置き換えられるわけではないのである。

前述のように、「そうしたら」の用法の中には、前文の事態を受けて、前文と「そうしたら」に続く文の間の時間的継起関係<sup>124</sup>を表すものがある。これは「たら」の文法化前の形式、完了を表す「たり」と関係があると考えられる。この継起関係を表す「そうしたら」の用法は、いわゆる条件的な「そうしたら」に比べるとより文法化が進んでいると言える。この文法化が進むと、「そうしたら」が「そしたら」に変化することになる。その過程を図式で示すと、図 8-2 になる。「そしたら」を「そうしたら」と同様に分析することが出来ないのは、「そしたら」自体、一語と見なせるからである。

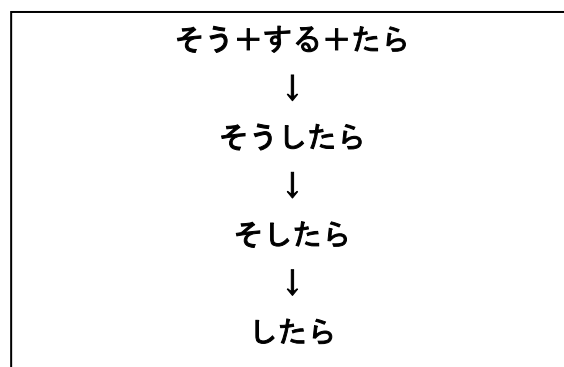


図 8-2 「そしたら」<sup>125</sup>の文法化プロセス

<sup>123</sup> 馬場 (2006) あるいは本研究の 8.3 を参照たい。

<sup>124</sup> Akatsuka (1985: 636) は、日本語の条件標識は条件機能と時間性機能を共に遂行すると説明している。

<sup>125</sup> 「したら」→「たら」へ変化していることもあり得るが、「たら」の文頭用法は「それだったら」「だったら」→「たら」のような過程も考えられる。故にここでは「したら」までを記しておいた。

### 8.1.3.1.3 「それなら」

「それなら」は「接続詞」として最も定着しており、本研究が参照した辞書では、『日本俗語大辞典』を除き、すべての辞書では独立した一語として挙げられている。

表 8-8 「それなら」の辞書解釈

『新明解国語辞典』 (第八版) (p.912)	<接続詞> そういうわけなら。
『言泉国語大辞典』 (p.1380)	<接続詞> ①前の事柄を受けて後の事柄を述べる。そういうわけなら。それでは。 ②事柄を始めたり、終わったりする時の切れ目を示す。それでは。
『明鏡国語辞典』 (第二版) (p.1013)	<接続詞> 相手の発言など、前提となる事柄を受けて、そういうのなら、そうであるならばの意を表す。
『学研国語大辞典』 (第二版) (p.1144)	<接続詞> [前の事柄を受けて]そういうわけなら、それでは。
『広辞苑』 (第七版) (電子版)	<接続詞> そういうわけなら。そんなら。しからば。
『大辞林』 (第三版) (p.1491)	<接続詞> そういうわけなら、それなら、それでは。
『日本語大辞典』 (p.1270)	<接続詞> 条件の発展を示す語。そういうわけなら。そんなら。
『集英社国語辞典』 (第二版) (p.1034)	<接続詞> そうであれば。そういうことなら。くだけた会話では「そんなら」ともいう。
『日本国語大辞典』 (第二版) (第8巻) (p.533)	<接続詞> ①仮定の事柄、または、ほぼ確実な判断に基づいて、後の事実を述べる。そういうわけなら。それでは。それならば。 ②事柄を説き起こしたり、説き終わったりする時の切れ目を示す。それでは。それじゃ。

上記の記述から、「それなら」は前の文の内容を認め、その内容に対する話し手の意

見や、それに基づいた話し手の判断、感想などを後の文で示すことがわかる。

(125) あなたの靴下をあむんでしょう？ それなら、もう、八つふやさなければ、はくとき窮屈よ。 『斜陽』

(126) 夏期、脂っこい食物を食べさせることが親切であるという信念を持っている。それなら、同じ脂っこいものでも、うなぎでも取ったらよさそうなものであるが、梶はうなぎを食膳に並べるより、スキヤキの方が家庭的雰囲気醸成する上に効果があると考えている。 『あした来る人』

(127) あんたたちだって、子の親なんでしょう？ それなら、教師の義務というものが、分らないことはないはずだ！ 『砂の女』

例 (125)、(126)、(127) の「それなら」は「それ」と「なら」に分けられ、「それ」は先行文脈の意味内容を指し、その意味内容が真であるならば、後続する文の示す内容になるということを表す。一方、三上 (1972) には次のような指摘がある。

「デハ」や「ナラ」は、「ソレデハ」「ソんなラ」から出てきたように思われる。「ソレ」が残っていても消えていても意味がほとんど変わらないところを見ても、「ソレ」が代名詞離れしていることがわかる。 (三上 1972: 183)

佐治 (1991) も同じく次のように主張している。

条件の接続詞の成り立ちの上での特色は、そのほとんどすべてが前を受ける部分(そ、さ、しか、だ、する)と、あとに続けていくべき接続助詞相当の部分(と、とも、……ば、から)からなるものだという点である。そして、前の部分は省略されてしまって、接続助詞相当の部分だけになってしまうこと (だが → が、そうすると → すると → と) も多いのは諸書の説くところである<sup>126</sup>。 (佐治 1991: 298)

つまり、「それ」と「なら」に分けられる「それなら」は、指示性をもつ「それ」を省略し「なら」だけで成り立つ。上記の例 (127) を (127') に置き換えても、意味は通じる。

---

<sup>126</sup> 句読点は原文ママである。

(127) あんたたちだって、子の親なんでしょう? それなら、教師の義務というものが、  
分らないことはないはずだ! 『砂の女』

(127') あんたたちだって、子の親なんでしょう? なら、教師の義務というものが、分らないことはないはずだ!

「なら」単独で文頭に使えるのは、「なら」が断定詞「だ」の条件形であるからだと考えられる。「ダ」系<sup>127</sup>や単独形式は、形態上すでに元の条件節としての統語構造を失っており、その時点で自立語として文法化(語彙化)したと考えられる。宮内(2014: 611)は、指示詞や断定辞を落として単独の形式が発生するのは接続表現の発達プロセスの一つの特徴とし、「「ダ」系<sup>128</sup>の形式はこのように、「ソレ」系、「ソウ」系と同様の用いられ方をしている」と指摘している。

#### 8.1.3.1.4 「そんなら」

まず、「そんなら」に関する辞書の記述をまとめておく。

表 8-9 「そんなら」の辞書解釈

『学研国語大辞典』(第二版)(p.1147)	<接続詞> 「それなら」のくだけた言い方。
『広辞苑』(第七版)(電子版)	<接続詞> (ソレならの転) それならば。さらば。
『日本語大辞典』(p.1273)	<接続詞> 「それなら」のくだけた言い方。
『日本国語大辞典』(第二版)(p.560)	<接続詞> 「それなら」の変化した語。 ①「それなら①」に同じ。

<sup>127</sup> 宮内(2014: 611)では「指示詞を含まず「ダ」「デス」などの断定辞と接続助詞のみで構成されるもの」を「ダ」系と呼ぶ。

<sup>128</sup> 「そうなら」と「それだったら」を今後の課題としてさらに調査したい。「そうなら」は『日本語日常会話コーパス(CEJC)』で「文字列検索」を利用して検索してみたが、0件の結果が出た。「それだったら」は48件、「これだったら」は12件、「あれだったら」は43件の結果が出た。「あれだったら」は「それだったら」と近い出現数であることは興味深い。現場指示と文脈指示に分けて詳しく検討する必要がある。

	②「それなら②」に同じ。
『日本俗語大辞典』 (p.334)	<接続詞> (「そんなら」の変化した形) それなら。くだけた語感。

表 8-9 の辞書解釈からみれば、「そんなら」は「それなら」から変化してきた言い方である、くだけた感をもっている。

(128) そんならお前、大学院に残って博士コースをやったらどうだ。 『青春の蹉跎』

(129) お前は法科の学生だったな。……そんならお前は解っている筈だ。法律というものは善良な庶民の味方だ。しかし、犯罪人の味方なんかしてくれやしないよ。 同上

「そんなら」は「それなら」のくだけた言い方として問題はないと考えられる。これは通常文法化する過程に伴う音声変化や脱落と合致している。

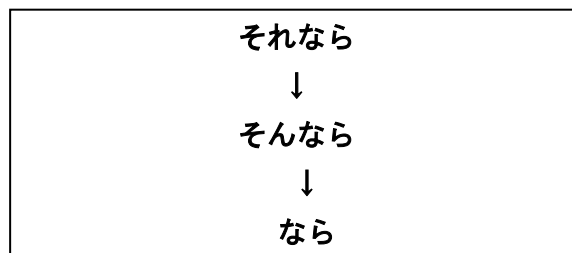


図 8-3 「そんなら」の文法化のプロセス

### 8.1.3.2 「こ- + 接続助詞 たら・なら」の各形式の分析

#### 8.1.3.2.1 「こうしたら」

「こうしたら」の場合は「そうしたら → そしたら」のような短縮形式を持たず、意味変化も起こっていない。

(130) その気持なら、うちでは今後こうしたらどうかしら。 これからは毎年八月六日の原爆記念日に、あの八月六日の朝の献立通りの朝飯を食べたらどうかしら。

『黒い雨』

(131) 「ね、こうしたらいいじゃないの。男の人が三人そこへお並びなさいよ、あたし此方へ独りで寝るわ」と、ナオミが云います。 『痴人の愛』

例 (130) の「こう」は後の文の「これからは毎年八月六日の原爆記念日に、あの八月六日の朝の献立通りの朝飯を食べる」こと、例 (131) は「男の人が三人そこへ並び、あたし (話し手) は此方へ独りで寝る」ことをさす。つまり、「こう」の指示内容が、「こうしたら」に後続する文によって示されるということである。

#### 8.1.3.2.2 「これなら」

同じ「こ-+条件接続助詞」の形でも、「これなら」と「こうしたら」はやや性質が異なる。以下の例文を参照されたい。

(132) その手紙には女の身として文学に携わることの不心得、女は生理的に母たるの義務を尽さなければならぬ理由、処女にして文学者たるの危険などを縷々として説いて、幾らか罵倒的の文辞をも陳べて、これならもう愛想をつかして断念めて了うであろうと時雄は思って微笑した。 『布団』

(133) 岩竹さんは庄原行と聞いて、仰向けに臥たまま目蓋を指の先で明けて天井を見た。はっきりと板の木目を見ることが出来た。これなら戸坂の駅まで歩いて行けそうな気持がした。 『黒い雨』

例 (130) と (131) における「こうしたら」の「こう」の指示する内容が「後方照応」となるのに対し、「これなら」の「これ」の指し示す内容は前の文に出現したもので、つまり「前方照応」である。例えば、例 (132) の「これ」は「女の身として文学に携わることの不心得、女は生理的に母たるの義務を尽さなければならぬ理由、処女にして文学者たるの危険などを縷々として説いて、幾らか罵倒的の文辞をも陳べる」ことを、例 (133) は「はっきりと板の木目を見ることが出来た」を指す。いずれも「これなら」の前の内容である。「これ」の代用する内容を再び提起するときに「これ」で指すと考えられる。

#### 8.1.3.3 「あ-+接続助詞 たら・なら」の各形式の分析（「あれなら」）

「あ-+接続助詞 たら・なら」の形式は「あれなら」以外、標準日本語には出現しないことから、ここでは「あれなら」だけを分析する。

(134) 小間使いには大へん都合のいいのがある、内で使っていた仙太郎の娘がお花と云って、今年十五になっているから、あれならお前も気心が分って安心して置けるだろう。飯焚きの方も心あたりを捜しているから、引っ越し先が決まるまでには上京させる。『痴人の愛』

(135) ウム、なかなかよく踊る！……あれなら見つともない事はない……ああ云う事をやらせるとやっぱりあの児は器用なものだ。同上

(136) ともかく僕は昨日の杉子さんを見て、君の結婚の幸福を本当に望む気がしたよ。今までそう云っては失敬だが、少し疑っていた。あれなら安心と思った。『友情』

例 (134) の「あれ」は前に言及した「お花が今年十五になっている」こと、例 (135) は省略記号の前の「なかなかよく踊る」こと、例 (136) は「昨日の杉子さん」のことを指す。「あれなら」と「これなら」は、文頭に置かれるという点では、接続詞に類似するが、意味的には、「これ」「あれ」が前文の内容を指すという点において、指示語としての機能を十分維持していると言える。ただし、形式的には、「それなら」「あれなら」は後接する文頭に置かれ、接続詞と同じ位置に配置されている。

#### 8.1.4 まとめ

以上の分析をもとに、接続助詞「たら・なら」と「こ-/そ-/あ-」の指示詞の文法化プロセスをまとめてみる。

1) 「そ-+X」の形として、本節では「そうしたら」「そしたら」「それなら」と「そんなら」の四形式を取り上げた。「そうしたら」は「「そう」の指示機能+「する」の連用形+「たら」の条件接続機能」から、語彙化して継起関係を表す形式へと文法化が進んでいる。この文法化に合わせて形式も変化すると「そしたら」になる。「そしたら」が「そうしたら」のように明確に分析しにくいのは、「そしたら」はすでに全体として一語になっているからであろう。さらに、『日本語日常会話コーパス』で「文字列検索」を利用して見たが、「そうしたら」は49件の使用例があるのに対して、「そしたら」の使用例は588件あり、より多く使用されていることが分かった。「そしたら」は「そして」などのソ系接続詞と同様に、より一語化して文法化のプロセスが進んでいると言えよう。

2) 「こ-+X」については、『中日対訳コーパス』でも『日本語日常会話コーパス』でも「こうしたら」と「これなら」の実例だけ見つかった。そのため、分析にも両形式

だけを扱った。しかし、いずれも実例が少なかったため、今後用例を増やして「こうしたら」と「これなら」の違いも含めて詳しく検討したい。

3) 「あれなら」を「あ-+X」の唯一の形式として分析した。「これなら」の場合と同じく「あれ」の指し示す内容は「前方照応」である。指示語「あれ」と指示内容とに少し距離が置かれている点が「これなら」と異なる点である。

最後に、「そ-」が「こ-/あ-」より条件接続助詞「たら・なら」と結合しやすい理由を探ってみたい。森岡 (1973: 15) は「『こそあど』系の語基『そ』によって形成される語の多くは一般に接続詞と認定される」と主張し、佐久間 (2002: 119) にも「接続詞には、ソ系の指示詞を含む連語が多く、両者の境界が不明瞭な、転生途上とでもいった用法もある」という説明がある。さらに、佐久間 (2002) は森岡 (1973) から例を引用し、「これ」より「それ」の方が語彙化しやすい理由を説明している。

「「それ」と「これ」の区別がつかないし、ともに代名詞としての指示の機能が残っているように思われる」というが、文脈指示的な「ソ」系よりも、場面指示的な「コ」系の方が、指示性が明確に認められることから、接続詞としての転成度はより低い段階にあると考えられる。(佐久間 2002: 142)

(137<sup>129</sup>) 雨が降った。それで (= これで) 木々がすっかり生きかえった。

(138) 試験に落ちた。それでも (= これでも) ぼくはへこたれなかった。

(森岡 1973: 16)

例 (137) と例 (138) の「そ-」の指示内容はあまりはっきりしておらず、必ずしも直前のことではない。このようなソ系指示語は文脈指示性がより高く、しかも「そ」系指示語は「こ」系と「あ」系の間位置し、指示内容がより中立化するため、接続詞への転成度は高くなると考えられる。金水 (1999: 87) は、ソ系列指示詞は多義性をもっている言えるが、直示用法から転じてきたのかまだ検討する余地が残っているとしている。しかし、コ系列とア系列指示はより明確な指示対象をもっているのに対して、ソ系列指示はより曖昧であると述べている。

コ系列とア系列は、直示用法が原型的な用法であり、文脈照応用法と見られるもの

---

<sup>129</sup> 例文番号は筆者が本研究の通し番号で付けた。下線は佐久間 (2002) による。

でも、直示的な性質を色濃く残している。(中略) つまりソ系列の非直示用法は、アやコとは違って、直示としての性質をいっさい持たないことによって特徴づけられるのである。(金水 1999: 87)

すなわち、接続詞として「そ」系が多用されるのは、直示性に関して中立的あるいは文脈指示性が高いからだと考えられる。例 (137) の「それ」は「雨が降った」という実質的な(眼前の)事態を指すというより、先行する「雨が降った」という文脈と照応するのである。

しかし、こういう「そ」系接続詞の用法は、ソ系指示語の文脈指示性により「そ+X」が文法化しやすくなるのか、あるいは「そ+X」は文法化してからソ系指示語の文脈指示性を高くさせるのかについては明らかではない。両者の相互関係については「そうしたら」と「そしたら」を例として、8.3 で詳しく検討する。

## 8.2 中国語における指示詞を含む仮定表現

次に、中国語において仮定関係を表す接続表現と指示詞の連続性について少し触れておきたい。中国語の仮定関係を表す接続表現と指示詞の文法化も存在している。むしろ、中国語の仮定表現と指示詞の連続性は日本語より強い。

### 8.2.1 “那” と “那么” に対する見方

まず、中国語の指示表現の体系をまとめると次のようになる。

表 8-10 中国語の指示表現の体系<sup>130</sup>

	近称	遠称	対応する日本語表現
中心語彙	这	那	$\left[ \begin{array}{c} \text{こ} \\ \text{そ} \\ \text{あ} \end{array} \right] \text{れ} \left[ \begin{array}{c} \text{こ} \\ \text{そ} \\ \text{あ} \end{array} \right] \text{の}$

<sup>130</sup> 表 8-10 は朱 (1982)、木村 (2012) などを参照した上で作成。中国語の“这”は「こ」と対応することも「そ」と対応することもでき、この表は、具体的な対応は示さない。

時間	这时	那时	〔こ〕 〔そ〕 〔あ〕 のとき
場所	这儿 这里	那儿 那里	〔こ〕 〔そ〕 〔あそ〕 こ
性質、方式	这么 这样 这么样	那么 那样 那么样	〔こ〕 〔そ〕 〔あ〕 んな／のような
程度	这么 这样	那么 那样	〔こ〕 〔そ〕 〔あ〕 れほど

語彙研究の視点から、“这/那”は一般に指示詞として扱われる。多くの研究が“那么”の接続詞的機能に注目しており、“这么/那么”は指示表現の体系の中に主要な位置を占める指示代名詞“这/那”から派生し、“这/那”の後ろに“么”を付加して構成され、物事の方式や様式を表すと広く認められている。王(1944)、刘、潘、故(2019)は共に“那么”と“这样”は前文を受けて後文を提示する働きをもつと指摘し、赵(1979)は“那么”に接続詞的用法があると明言している。徐(1988: 122)では指示詞としての“这”と“那”の非対称性が詳しく論じられており、「中国の最大規模の漢字統計頻度表によれば、“这”は第10位にランクインし、出現数は138,426; “那”は第182位にランクインし、出現数は28,882である<sup>131)</sup>と指摘している。出現数としては“这”は“那”より遥かに多いのに、なぜ“这”ではなく、“那”がより文法化したのかという疑問が起こる。また、接続詞の“那么”は“那”とどういう関係をもつかを解明することも本節の目的である。

### 8.2.2 “那么”の歴史的由来

常用される“这”ではなく、“那”の方がより文法化したのは、“那么”の由来に関わる

<sup>131)</sup> 原文は以下の通りである。

我国最大規模の漢字統計頻度表明: “这”位于第10个常用字, 出現次数为138,426; “那”位于182位, 出現次数为28,882。

と考えられる。本節では、“那么”の歴史的変化を辿ってみる。

太田 (1958)、呂 (1985)、志村 (1995) 等は通時的側面から“那么”について研究を行った。呂 (1985: 267) は「“这么”、“那么”の出現した時代はやや遅く、早い時期に最も使用されたのは“恁”である。それよりもっと早いものには“异没”、“與摩”等があり、さらに南北朝時代の“宁”と“能”に遡ることができる<sup>132)</sup>と指摘している。“那麼”が現れるのは明代に編集された元曲の中であり、元明時代に多用されるのは“那們”である一方、“那么”が大量に使用されるのは『紅樓夢』の時代からである。志村は“恁麼”の歴史的変化が以下のような過程を経ており、宋代に至って“恁”の表記形式が定まったと結論づける。

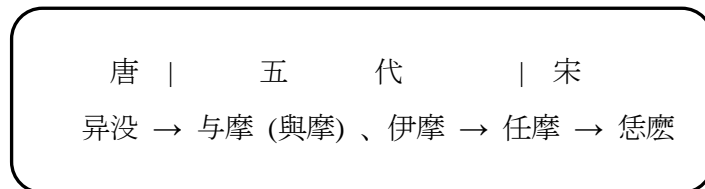


図 8-4 “那么”の歴史的変遷 (志村 1995: 196-211 を整理したもの)

一方、呂 (1985: 186) では、「“那”の由来は古代遠称指示代名詞“彼”、“夫”と一切関係ないが、二人称代名詞“尔”と“若”に関わる (引用者訳)<sup>133)</sup>と指摘されている。太田や志村は“那么”の元の語彙は“恁”であるとしているが、この“恁”は古語で二人称代名詞として多く使われる。つまり、“那”と“那么”の両者は古代において二人称代名詞と関わっており、接続詞としての“那”と“那么”は指示詞“那”から文法化したものであると考えられる。

### 8.2.3 準仮定表現としての“那”と“那么”の品詞分類

中国語の中では、“那”、“那么”は“如果”、“要是”などの仮定表現と共起し、仮定複文の中に使用されることが多い。従来の研究では、両者ともに接続機能を有すると指摘されている。本論文第 6 章では、“那”、“那么”を「準仮定表現」と位置づけた。以下、

<sup>132)</sup> 原文は以下の通りである。

“这么”“那么”是后起的形式，早期近代汉语里用得最多的是恁。比这个早的有只没、与摩等，更早还可以追溯到南北朝时代的宁和能，(后略)。

<sup>133)</sup> 原文は以下の通りである。

那跟古代远的指代词彼或夫毫不相干，倒是跟第二身代词尔(爾)和若有关系。

辞書の記述から概観していく。

(139) “那”

[连] 跟“那么”③相同：那么就好好儿干吧！ | 你不拿走，那么你不要啦？

〔接続詞〕“那么”③と同じである：それならちゃんとやりなさい。 | あなたは持って帰らないのなら、あなたは要らないということ？（《現代汉语词典》（第七版）：932、引用者訳）

虚詞に関する専門辞書でも同じように、“那么”にはほぼ同じ、副詞“就”とよく共起すると書かれている<sup>134</sup>。

一方で、“那么”については、次のような記述がある。

(140) “那么”（“那末”）

[连] 表示顺着上文的语意，申说应有的结果或做出判断（上文可以是对方的话，也可以是自己提出的问题或假设）：这样做既然不行，那么你打算怎么办呢？ | 如果你认为可以这么办，那么咱们就赶紧去办吧！

〔接続詞〕前文の意味に従い、あるべき結果を説明するか、或いは判断を下すことを表す。（前文は相手の言葉でもよいし、話し手自身が提示した問題或いは仮定でもよい）：こうするのがだめである以上、では、あなたはどのようにするつもり？ | もしもあなたがこうするのがいいと思うなら、私たちはすぐそうしよう。

（《現代汉语词典》（第七版）2005: 933、引用者訳）

虚詞に関する専門辞書では、副詞“就”とよく共起すると書かれている<sup>135</sup>。また、《現

---

<sup>134</sup> <连> 表示承接关系。连接分句或句子。意义、用法与“那么”基本相同。在“那”的后面经常有关联副词“就”与其搭配使用。（《现代汉语虚词辞典》：179）

（引用者訳）〔接続詞〕接続関係を表す。節或いは単文に接続する。意味、用法は“那么”と基本的に同じである。“那”の後ろには多くの場合接続関係を表す副詞“就”が置かれ、組み合わせて使用する。

<sup>135</sup> <连> 表示承接关系。用来承接前面的假设、前提或原因，引出后面的推论、判断或结果。连接分句或句子，有时也连接段落。后面常与关联副词“就”搭配使用。（《现代汉语虚词辞典》179-180）

（引用者訳）〔接続詞〕接続関係を表す。前文の仮定、前提或いは原因を受け、後ろの推論、判断或いは結果を導き出す。節或いは文を繋ぐが、段落を繋ぐ場合もある。後ろは接続関係を表

代汉语虚词辞典》(2001: 180) は“那”と“那么”の關係に少し触れている。「(“那”、“那么”) 両者の意味、用法は基本的に同じである。ただ、接続詞の“那”は指示機能を兼ね、代名詞になれるが、“那么”にはこの機能と用法がない。(引用者訳)<sup>136)</sup>と明言されている。つまり、“那”は接続詞として認められるが、その指示機能がより強調されている。

呂(1999)は“那”の接続機能を表す用法を「代名詞」とし、以下のように書いている。

引进表后果的小句，起连接作用。同‘那么’。

結果を表す節を導き、接続機能を果たす。“那么”と同じ。(呂1999: 397、引用者訳)

一方で、接続機能を果たす“那么”を「接続詞」としている。

承接上文，引进表结果或判断的小句。

前文を受け、結果或いは判断を表す節を導く。(呂1999: 402、引用者訳)

上記の引用文からわかるように、呂は“那”と“那么”はともに「結果などを表す節を導く」働きをもつ、つまり両者は接続機能を有すると認めているが、それぞれを「代名詞」と「接続詞」と明確に分けている。しかし、その理由については説明していない。呂の例文を見ても、はっきりした差異は見られない。

(141) 你 要是 不 肯 一点一滴 从 小 事 做起，那 就  
あなた 接続語 否定 同意する 少しずつ から 小さい こと やる 接続語 接続語  
什么 事 也 做 不 成。(呂1999: 397)

どんな こと も やる 否定 成功する

あなたは小さなことから始めることをしたくないなら、それでは何もできないはずだ。(引用者訳)

(142) 他 要 不 来 给 我们 当 翻译，那 我们 就  
彼 接続語 否定 来る に 私たち 務める 訳者 接続語 私たち 接続語  
得 另外 找 人 了。 同上

---

し副詞“就”と組み合わせて使われることが多い。

<sup>136)</sup> 原文は以下の通りである。

両者の意义、用法基本相同。只是连词“那”还兼有指代作用，可作代词。“那么”则没有这个作用和用法。

ないといけない 別に 探す 人 語気

彼が通訳をしてくれなければ、私たちは別の人を探さないといけなくなる。

(引用者訳)

(143) 如果 海上风不大, 那么 船一定要起锚的。 (吕 1999: 402)

接続語 海上風 否定 大きい 接続語 船 必ず 将来 出帆する 語気

海上の風が強くないのなら、船は必ず出帆するものだ。 (引用者訳)

(144) 要是 咱们 小组 决定不了, 那么就 请 上级 决定。 同上

接続語 私たち グループ 決定できない 接続語 接続語 頼む 上司 決定する

もしうちのグループが決められなければ、上司に決めていただこう。 (引用者訳)

これら四つの例文では、“那”と“那么”を相互に置き換えても自然である。“那”と“那么”はともに接続詞であると考えられる。

#### 8.2.4 “那么”の文法化プロセス

“那”に対して、“那么”を接続詞とする見方は定着している<sup>137</sup>が、その文法化の過程については様々な議論があり、それは大体二種類に分けられる。

<sup>137</sup> 太田は指示副詞、指示代名詞、接続詞の品詞類の中で“那么”の用法を説明している。同じ観点をもつものに呂 (1985) がある。一方で、金 (1988) は“那么”には代名詞の用法だけがあり、副詞と接続詞の用法はないと主張する。“那么”の指示対象は前文であり、その働きは話し手や聞き手の記憶の負担を減らすためであるとしている。北京大学中文系 1955・1957 级语言班编 (1982) は、“那么”を「接続詞」と「副詞」の二種類に分けている。以上の観点は次のようにまとめられる。

表 8-11 “那么”の品詞類

	(指示) 副詞	(指示) 代名詞	接続詞
太田 (1958)	+	+	+
呂 (1982)	+	+	+
北京大学中文系 1955・1957 级语言班 (编) (1982)	+	*	+
金 (1988)	*	+	*
呂 (编) (1999)	+	*	+

- a. “那么着” から変化してきたもの
- b. “要是那么”、“既然那么” から変化してきたもの

a. “那么着” から変化してきたものという主張の研究者は太田 (1958) と楊 (2010) である。太田 (1958) は“那么”の接続詞としての用法は“那么着”という連語に由来し、現在では、“那么”としか言えないと主張している。

《那麼》を連詞として用いることはきわめて新しいらしく、清代では多く《那麼着》または《這麼着》といった。いま《那麼》だけが連詞となっているのは江南語の影響かとおもわれる。 (太田 1958: 324)

太田は『紅樓夢』の中の例を用いて説明している。

(145) 那麼着, 爲什麼 這等 傷心 起来? (紅 81) (太田 1958: 324)

接続語 どうして こんなに 悲しむ ようになる

ではどうしてそんなに悲しんでいるのですか。 (太田訳)

(146) 這麼着, 我 也 不 要 了。(紅 46) (太田 1958: 324)

接続語 私 も 否定 要る 変化

それでは私はいりません。 (太田訳)

楊 (2010) も同じく、接続詞“那么”は“那么着”の「照応」用法から転じてきたものとしている。元来、方式などを指す“那么”が“着”と共起し一語化するに伴い、“着”が希薄化<sup>138</sup>し、結果的に、“那么”に転化したという。この変化は、図 8-5 のように示される。

---

<sup>138</sup> 日野 (2001:63) は「意味の希薄化」を意味変化の過程の一つとしており、「この過程において、語彙項目は語彙的ではない機能をもつようになり、最後に機能だけをもつようになる」と定義している。

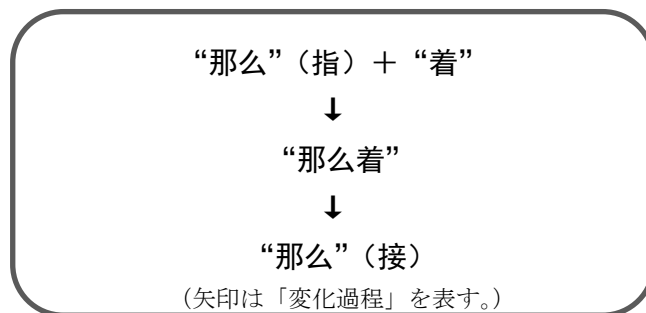


図 8-5 太田 (1958) らにおける“那么”の転化過程

これに対して、呂 (1985) は、“那么”の接続詞的な用法は「接続詞 (例えば、“既然”、“要是”等)+“这么”、“那么”」の形式から接続詞が省略されたものだと主張する。

有许多小句是用一个连词加这么、那么组成的。这种小句都是复句的第一小句，所用的连词以既然和要是 (若是) 为最多。(中略) 很早已有省去那个连词的句法，于是这么、那么就兼有连接的作用，甚至不妨本身算是一种两次。(吕 1985: 292-293)

(引用者訳) 多くの従属節は接続詞と“这么”、“那么”で構成される。こういう従属節は複文の最初の節である場合が多く、よく使用される接続詞は“既然”、“要是”(“若是”)である。(中略) (文の) 接続機能は接続詞で行使するが、しかし、早い時期から接続詞を省略する用法が出てきたため、“这么”、“那么”は接続する機能を兼ねるようになり、さらには一種の接続詞とも見做せる。

呂の解釈を図 8-6 で示す。

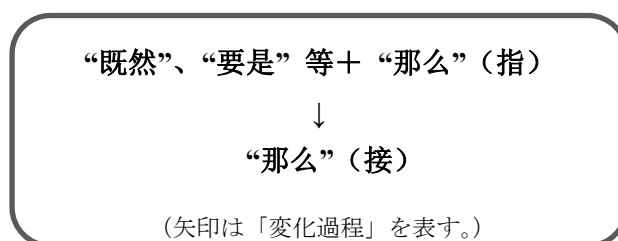


図 8-6 呂 (1985) における“那么”の転化過程

以上の研究からわかるように、a.の見方に立つ研究者は接続詞“那么”を「やり方を表す“那么”+着」から、「着」の脱落によって転化してきたとし、b.の見方に立つ研究者は「接続詞“既然”、“要是”等+やり方、様態を指示する機能をもつ“这么”、“那么”」から接

続詞と指示詞の融合によって転化してきたとする。すなわち、接続機能を果たす“那”はその指示機能と深く関わっており、“那么”(接)は“那么”(指)から文法化しているということである。以上のことを図式してみると、次のようになる。

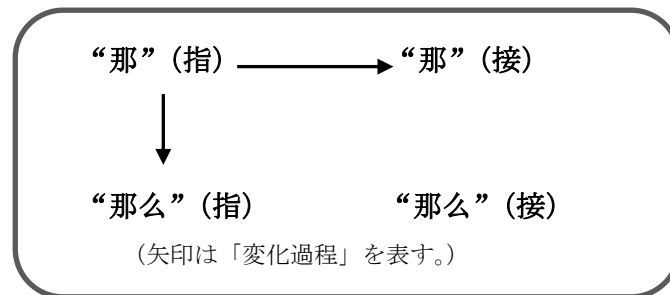


図 8-7 “那”、“那么”の文法化プロセス

以上の“那么”に関する品詞類の論争は、“那么”を“那”系指示表現の下位分類の一つとして扱うか、或いは“那么”を別語彙として、“那”の接続詞的用法が“那么”から転用してきていると理解するか、という違いから生まれたと考えられる。“那”は指示代名詞、“那么”は接続詞として認識されてきたが、それと“那么”の由来は必ずしも一致しないということである。本節では通時的变化に従って、“那么”の文法化プロセスを抽出してみた。“那”と“那么”の用法上の詳細な差異については、次節で日本語「そうしたら」と“那么”を対照しながら述べたい。

### 8.3 「そうしたら」と“那么”における文法化のプロセス

第5章と第6章で機能拡張の観点から日中両言語の假定表現を観察した際に、非仮定の用法の発生・発達という点が日本語の假定表現の特徴の一つであることを述べた。例えば、いわゆる接続助詞本来の用法からやや隔たりを見せながら漸次に接続詞的用法に拡張し、「たら」(接続助詞・仮定的用法)→「そうしたら」「そしたら」→「したら」「たら」(接続詞・非仮定的用法)のように非仮定的用法を発達させていったと考えられる。これらは「指示詞+動詞+接続辞」の形式で、一語化し、接続詞に転じていく様子が、形式上あるいは構造上の特徴として表れている。同じく中国語でも“那么”と“那”との区別のあいまいさから、これらが構造上一種の連続体を形成し、文法化していくことになったと考えられる。これまで観察した非仮定的用法は、多くの場合、従属節が自立性を失うことから生じたものと理解できる。ここで見る接続詞的用法も、節を構成す

る機能を喪失していく中で成立する用法であり、これまで見てきた非仮定的用法の発達と同じ流れであると言える。ゆえに、これもまた仮定複文 (標識) に広く共通する変化のありようの一つとして捉えられる。本節では、日本語「そうしたら」「そしたら」と中国語“那”、“那么”を例として考察を行う。

### 8.3.1 「そうしたら」と“那么”における文法化のプロセスの類似点

日本語の「そうしたら」と「そしたら」、中国語の“那”と“那么”には、それぞれ一音節の差異しかないが、文法化していく中で音韻上起こった変化だと言える。第 6 章では「そうしたら」と「そしたら」の文法化のプロセスを確認したが、ここでもう一度まとめておく。

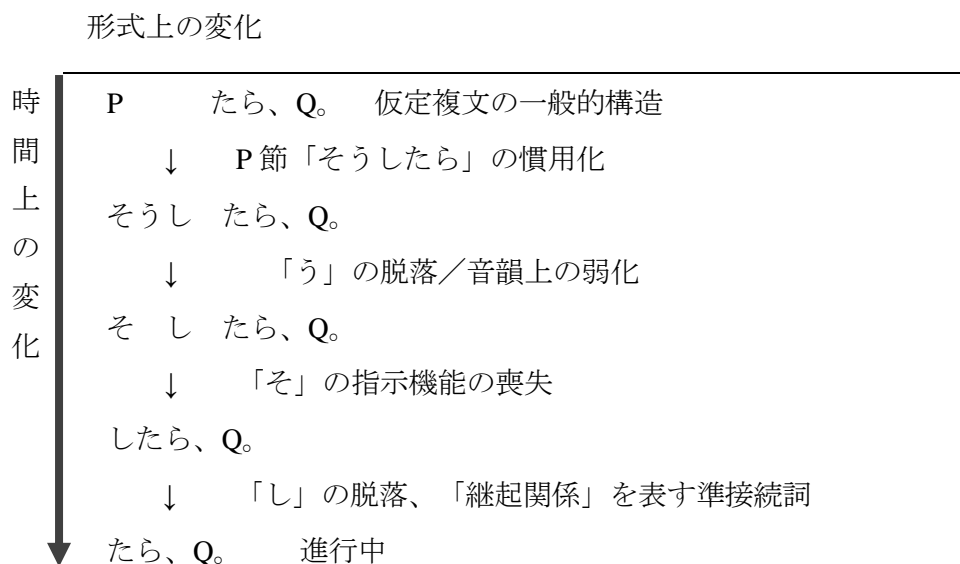


図 8-8 「そうしたら」の文法化のプロセス (まとめ)

具体的な文法化プロセスの例を以下に示す。

(147= (35)) それはもしも面接試験でやられたら、一番困るところだね。『青春の蹉跎』

(148) 「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする。」『蒲団』  
「どうするって……」奥さんはそこで口籠った。

(149) おぼえている? そしたら、あなたは泣き出しちゃって、……。 『斜陽』

(150= (40)) そんな重たいの何も、うける、したら、みーちゃんがああ、なんか重たい棒  
でこうやって、上のほうに付いてる。 (K013\_020) (CEJC)

(151=(41)) そっかそっか、うーん、確かに、たら、見事に引っかかっちゃった。

(C001\_001) (CEJC)

例 (147) のような「たら」の前文の内容を「そう」で受けると、例 (148) のように「そしたら」になり、それが「慣用的な」用法になり、その後「う」の音が脱落し、「そしたら」に至った (例 (149))。さらに「そ」の指示機能も薄れて喪失し、「したら」という形になり時間的継起関係を表すようになった (例 (150))。「し」の脱落によって「たら、Q」の形が生じることもある (例 (151))。

一方、中国語の“那”と“那么”の文法化のプロセスをまとめる以下のようなになる。

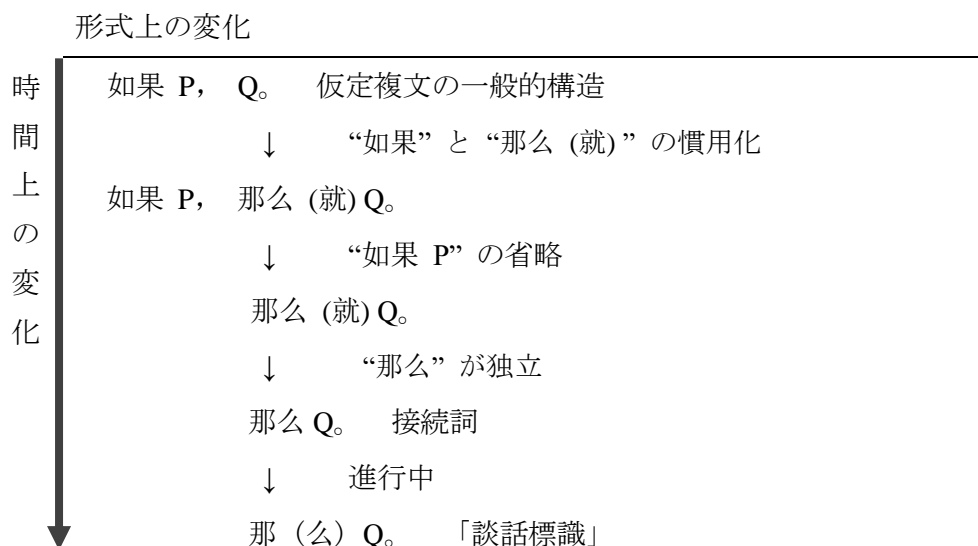


図 8-9 “那么”の文法化のプロセス (まとめ)

“那么”の具体的な文法化プロセスの例を以下に示す。

(152) 如果 我见到 你, 我 会 高兴 得 哭 起来 的。 《友情》

接続語 私 会う あなた 私 できる 嬉しい 助詞 泣く 出す 語気

お目にかかれたら、私はうれしくて泣き出してしまうだろう。

(153=(144)) 要是 咱们 小组 决定 不了, 那么 就 请

接続語 私たち グループ 決定できない 接続語 接続語 頼む

上级 決定。

(吕 1999: 402)

上司 決定する

もしうちのグループが決められなければ、上司に決めていただこう。

(154) “那么，叔叔，这个社会又是为的什么而存在呢？”《奋斗》

接続語 おじさん この 量詞 社会 また 断定 どうして 接続語 存在する 語気

「では、おじさん、この社会って何のために存在しているの。」

中国語では、“如果 P, Q。”(例 (152)) という仮定複文の一般的構造は、仮定表現と準仮定表現“那么(就)”(例 (153)) とが組み合わせられ“如果(要是) P, 那么(就) Q”として使用され、それが慣用化した。さらに P 節が省略された“那么(就) Q”(例 (154)) という形式が生じた。その後、“那么”が独立して、“那么”の“么”が脱落して、文頭の接続詞になった。これがさらに進んで、談話標識としても用いられることがある。

中国語の“那”と“那么”は二つの品詞に属しているが、それは指示代名詞と接続詞の両方である。これに対して、日本語の「そうしたら」「そしたら」は「したら」へと形式の変化が起こっている<sup>139</sup>。

次節からは、日本語「そうしたら」「そしたら」と中国語“那”と“那么”の二組の非常に似ている仮定関係を表す接続表現の差異、さらに主節と従属節の構造上の変化との関わりを含めて検討する。

### 8.3.2 日本語の「そうしたら」と「そしたら」

馬場 (2006) は、以下の例を挙げて、「そうして」と「そして」の差異を説明している。

(155) 空は青く、「そして／？そうして」、あくまでも澄み切っている。(馬場 2006: 96)

例 (155) において、「そして」が「そうして」に置き換えられないのは、「文の途中で用いられ、直前が動詞述語ではない累加的用法では「そうして」の使用が不自然である」(馬場 2006: 96) からとされている。馬場のこの説明は「う」の有無による「そうして」と「そして」の差異について考察した唯一のものである。本研究はこれを基にして、「そうしたら」と「そしたら」の相違について検討を進めていく。

この二語の相違に関する先行研究はないため、まず、辞書上の記述から確認しておき

---

<sup>139</sup> 日本のバラエティー番組の談話では「したら」をしばしば耳にするが、具体的な検討は別稿に譲りたい。

たい。本研究で参照した 12 冊の辞書の中の「そうしたら」と「そしたら」に関する説明は以下の通りである。

表 8-12 辞書における「そうしたら」と「そしたら」の記述

辞書	そうしたら	そしたら
新明解国語辞典 (第七版)、(第八版)	そのことがきっかけとなって、何が起こることを表す。	
学研国語大辞典 (第二版)	【接続詞】 そのようにしたなら。また、そのようにしたところ。	〈俗〉 そうしたら
日本国語大辞典	【接続詞】 ①前の事柄を仮定し、その場合に後の事柄が起こることを示す。そのようにしたら。そのときには。 ②前の事柄を契機として、偶然、後の事柄が起こることを示す。そうしたところ。	【接続詞】 ①「 <u>そうしたら</u> ①」に同じ。 ②ところで。①の仮定の意味が薄れ、話をもとに戻すのに用いる。 ③「 <u>そうしたら</u> ②」に同じ。
日本語大辞典		【接続詞】〈俗〉 <u>そうしたら</u> 、すると。
日本俗語大辞典		【接続詞】 (「 <u>そうしたら</u> 」の <u>変化した形</u> ) <u>そうしたら</u> 。

上記の辞書上の「そしたら」の解説は、そのほとんどが「そうしたら」に同じとして  
いる。もちろん形式から見れば、「そうしたら」「そしたら」両語はともに指示的意味を  
もつ動詞「する」の連用形から転じたものであることは明らかである。

(156=(148)) 先生は私の顔を見た。私は笑った。

「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。 そうしたらお前どうする。」

「どうするって……」奥さんはそこで口籠った。

『蒲団』

例 (156) の「そうしたら」は「そう」 + 『する』の連用形 + 「たら」の形で構成  
されている。例 (156) の「そう」は先行文脈の「おれの方が先へ行く」ということを

指し、「そうしたら」は「そうする」の假定形であると見なせる。この場合には、前文の内容を指示する機能をもつ指示表現「そう」と、それに述語性を与える機能をもつ動詞「する」の連用形、及び前の文の内容を後ろの文に関係づける機能をもつ接続助詞「たら」という三つの要素に分析できる。

一方、例 (157) の「そうしたら」は上記の三つの機能を備えるわけではなく、「する」の動作性が薄くなってきていると見られる。

(157=(111)) こうした焦慮のあげく、とうとう言うべきでないことを私は言った。

「一ト月、……そうだな、一ト月以内に、新聞に僕のことが大きく出ると思う。そうしたら、思い出してくれ。」

言いましたと、私は激しく動悸していた。 『金閣寺』

例 (157) において「新聞に僕のことが大きく出たら」が「そうしたら」の具体的な指示内容であり、この「そうしたら」は「誰かがそうしたら」のような動作主が明示できる文ではなく、「何かがそうなったら」という事態変化の文に近いと考えられる。このように、「指示詞+動詞の連用形+たら」から転成した接続詞の場合は、述語性を与える機能をもつ「する」のような動詞の連用形や条件形によって表されるために、接続詞に転成する過程で動詞「する」の動作性という意味機能を表す要素を失った場合には、動詞の機能自体も失うことに繋がる。そうすると、「そうしたら」は三つの要素に分けることが難しくなっていく。しかし、例 (157) における「そうしたら」の「そう」は前文の内容を指すという意味において指示的機能は維持している。この「そう」の指示機能が失われ、前文と後文の継起関係のみを表すようになると「そしたら」になる。

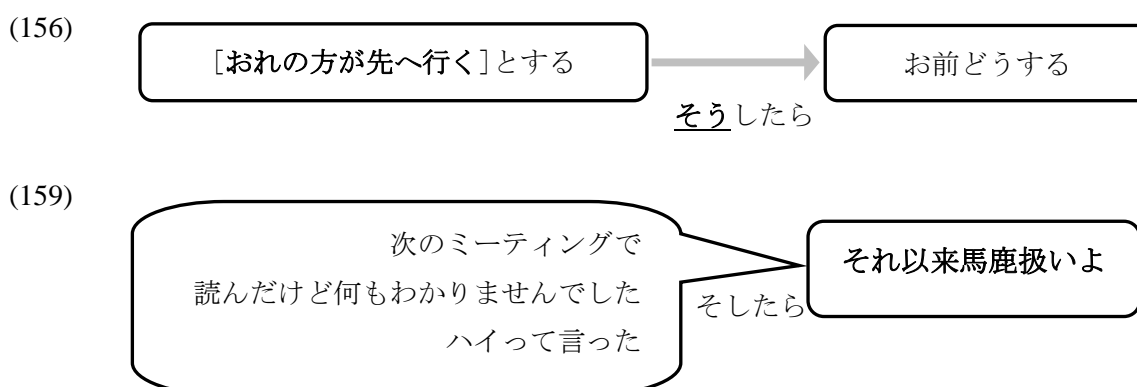
以下、まず「う」の有無によりもたらされた「そうしたら」と「そしたら」の両者の相違点を見てみよう。以下具体的な例文を見ていく。

(158=(122)) だけどあなたが嫌なんだから、私は何も言わないで、あなたの好きなようにしていたのよ。そしたら急に別れるって言うんでしょう。 『青春の蹉跎』

(159=(124)) それで次の週のミーティングで、読んだけど何もわかりませんでした、ハイって言ったの。そしたらそれ以来馬鹿扱いよ。問題意識がないだの、社会性に欠けるだのね。 『ノルウェイの森』

例 (158) と例 (159) は「そしたら」を用いた例文である。例 (158) は「あなたの好きなようにした → 急に別れるって言う」、例 (159) は「ハイって言った → それ以来馬鹿扱い」という順序で前後の事態が結びつき、「そしたら」の後に続く文の表す事態が継起的に生起したことを表す。また、以上の例文から、「そうしたら」と「そしたら」のもう 1 つの相違点が見られる。例 (156) は「お前は どうする」という相手の意見を尋ね、例 (157) では文末に命令表現が用いられて、同様に相手に対して働きかけをする発話になっている。これに対して、「う」が加えられる場合には、「そ」とともに指示語「そう」になり、指示性が強くなるのに対して、「そしたら」の場合は、話し手自身の主張や意見を強調し、相手への働きかけをあまりせず、自分の話を発し続けるつもりであると考えられる。

上記の四つの例文を同時に置くと、「そうしたら」と「そしたら」の微妙なニュアンスの差異が読み取れる。例 (156) と例 (159) を例として説明する。



「そうしたら」を使用する文は「そのようなときになったら」や「その結果」のニュアンスが強く、後文は相手への働きかけを表す文が多い。つまり、前文の内容を強く意識させて、相手への勧誘、命令、依頼や質問、また強い意見表明という働きかけに使われることが多いのである。「そうしたら」で前文の内容をすべてまとめて後文と繋がっていく。一方、「そしたら」は前後の場面の転換を喚起するために用いられることが多い。

(156=(148)) 先生は私の顔を見た。私は笑った。

「しかしもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたらお前どうする。」

「どうするって……」

奥さんはそこで口籠った。 『蒲団』

(157=(111)) こうした焦慮のあげく、とうとう言うべきでないことを私は言った。

「一ト月、……そうだな、一ト月以内に、新聞に僕のことが大きく出ると思う。そうしたら、思い出してくれ。」

言いましたと、私は激しく動悸していた。 『金閣寺』

(160) 「あの金で買って上げるよ、ね、いいだろう、……………」

「だって、そうしたら困りやしない?……」 『痴人の愛』

(161) 「しばらく千葉の田舎へ帰っていたが、松戸でかたづいてる先を、おやじにきいたから、訪ねて行った。」

「……」

「そしたら、何故、そんな勘当同然の身体で、あたしの家へ来たか、ついでやがった。」 『野火』

前掲例 (156)、(157) と例 (160) は「そうしたら」の例文では、それぞれ質問、命令・依頼、意見表明と相手への働きかけをしている文である。一方、例 (161) の「そしたら」の後続文は、「あなたは泣き出した」「いやがった」というような、予想もつかなかった事態を導入するために使用されているという異なった特徴をもっている。すなわち、「そしたら」の後続文は、予想外の新しい内容を導入するために使用されるのである。

それらの例文の中国語訳文にもやや相違が見られる。上記の例 (160) と例 (161) を再掲すると同時に、中国語訳文も併せて挙げる。

(160) だって、そうしたら困りやしない?…… 『痴人の愛』

不过，那样做有些不方便吧？……

(161) おぼえている?そしたら、あなたは泣き出しちゃって、……。 『斜陽』

你记得吗？你听了就哭起来。

例 (160) の「そうしたら」は中国語に訳すと、“那样” に示されるように、指示詞「そう」の意味が残っていることがわかる。例 (161) の「そしたら」を中国語に訳すと、「そ」の痕跡が明らかに弱められており、例 (160) で対応する訳語がないと見られる。

まとめて言えば、「そうしたら」と「そしたら」の機能・用法はある程度重なる一方、異なる点も存在している。「そうしたら」は指示詞「そう」の意味合いが強く残されて

いるが、「そしたら」は「う」の脱落により指示性が弱くなっており、「たら」がもつ接続性や完了性が前面に出されたために、「そしたら」の重点は「たら」の方に転じてきていると考えられる。その結果、意味的にも「そしたら」の「継起的」意味がより明確になったのであろう。このように、文法化のプロセスがさらに進むと、「したら」のような指示語が省略される表現が使われるようになるのだと考えられる。

### 8.3.3 中国語の“那”と“那么”

中国語の“那”と“那么”の文法化については8.2で述べたが、ここでは両者の間の意味・機能の差異を日本語の「そうしたら」「そしたら」と対照してみたい。

従来の辞書や研究では、“那”と“那么”の意味的類似性が強調され、相互に置き換え可能だと指摘されてきた。また、両者ともに接続機能をもつということは認められているが、帰属する品詞類自体は一致していない。例えば、呂(1999)では、“那”の接続機能を表す用法は「代名詞」、「那么」の接続機能を表す用法は「接続詞」とされている。

(162) “假如太太的意思是这样，那么……？”鸣凤接口问道，她已经  
接続語 奥さん 助詞 意思 断定 このよう 接続語 人名 続いて 問う 彼女 す  
 止了哭，但是声音里还带了一点悲哀，脸上也  
でに 止める 完了 泣く 接続語 声 中 まだ 帯びる 進行 少し 悲しさ 顔 上 も  
 还有泪痕。 《家》  
まだ ある 涙あと

「もしも奥さまのお気持ちがそうでしたら？」鳴鳳はそうたずねる。彼女はもう泣きやんでいたが、声はまだ悲しそうで、顔も涙でいっぱいだった。

(163) 如果这个姨父还活着，那他们又该  
接続語 この 量詞 叔父さん まだ 生きる 進行 接続語 彼ら また すべき  
 怎样生活呢？ 《活动变人形》  
どのように 生活する 語気

もし伯父ちゃんが生きてたら、彼らはこれからどのように生活すればいいだろう。

例(162)と例(163)は“那么”と“那”が仮定複文の中に出現する用例である。前文の仮定的な事柄をもとに、推測して後文を導く意味を表す。“假如”、“如果”等の接続詞と共起する場合が多い。一方で、“那么”や“那”は単独で使われる場合もある。会

話文の中では、複文の形式ではなくても、前後の文脈を通して、“那么”は接続機能を果たす<sup>140</sup>こともある。

(164) 张太太 高兴 地 说：“你 现在 没有 事 吗？那么 现在 就 去。”

張奥さん 嬉しい 助詞 言う あなた いま ない こと 語気 接続語 いま すぐ 行く

她 也 站起来， 还 掉过 头 看了 看 琴。 《家》

彼女 も 立ちあがり また 振る 頭 見る 人名

「今用事がないの？それならすぐ行きましょう」と張奥さんは機嫌よく言った。そして立ち上り、琴の方をふり向いた。

例 (164) の文は、「あなたがいま用事がないなら、私たちはすぐに行きましょう」と理解できるが、中国語では、“那么现在就去”(それではいまから行きましょう。)の前に従属節を付け加えて、“你现在没有事吗？没事的话，那么我们现在就去。”(いま用がありますか。なければ、いま行きましょう。)や“你现在没有事吗？如果(要是)没事，那么现在就去。”(いま用がありますか。もし何もなければ、いま行きましょう)でも成立する。

(165) 嫂嫂，你 比 我 多 辛苦， 多 操心 呵， 不过， 你 要

お姉さん あなた 比べる 私 もっと つらい もっと 心配する 語気 しかし あなた 願望

说 老 的话，那 我 又 该 说 什么！ 《霜叶红似二月花》

言う 老いる 接続語 接続語 私 また すべき 言う 何

お姉さん、私よりずっと苦労してきたよ。ずっと気遣ってたよ。でも、あなたが年をとったと言うなら、そしたら私は何といたらいいのよ。

例 (164) と例 (165) を比較してみれば、二つの文の“那”と“那么”は交換できる。それはこれらの例文では、“那”や“那么”で繋ぐ節の主語が異なり、複文に変わるからであろう。このような場合、“那”と“那么”は同じ機能を果していると考えられる。

しかし、次のような場合は事情が少し異なる。

<sup>140</sup> この用法は、《現代汉语虚词辞典》等も指摘している。

(166) 可是 我 最 喜欢 游山玩水。还有 海，我 还 没 见 过 海，  
 しかし 私 最も 好きだ 旅行する また 海 私 まだ 否定 見る 経験 海  
 多 倒楣！ 和光，要是 我们 到 青岛 去 过 一个 夏天，  
 どんなに 運が悪い 人名 接続語 私たち まで 地名 行く 経験 一 量詞 夏  
 那 多么 有趣！ 《霜叶红似二月花》

それ どんなに 面白い

でも私はやはり自然が一番好きだわ。それと海、まだ海を見たことがない。とても不運だろう。和光、青島でひと夏をすごしたら、それはきっと楽しいと思う。

(167) 倘若他们 团 里 那些 搞 舞台美术 的 同志，也 能 有 这种  
 接続語 彼ら 団体 中 あの やる 舞台設計 助詞 人 も できる ある こんな  
刻意求精 的 精神，那 该 多 好 哇！ 《钟鼓楼》

きちんとした 助詞 精神 それ べきだ どんな いい 語気

舞台設計の人たちもこんなふうにキメ細かに仕事をやってくれるとしたら、それはどんなにいいかしら。

例 (166) と (167) は“那”が“要是”や“倘若”と共に起る文である。いずれも、“那”で前文の内容を代用すると同時に後文の主語になっており、日本語「そうしたら」の「そう」のように、指示詞の性格を強く残していると考えられる。このような場合、“那”の本来持っていた前文を指示するという指示詞としての機能が前面に出るため、接続詞としての機能がやや後退したと考えられる。そのため、“那么”とは置き換えにくいのである。

(166')? 可是我最喜欢游山玩水。还有海，我还没见过海，多倒楣！和光，要是，我们到青岛去过一个夏天，那么多么有趣！

このような文において、“那”は接続詞的用法を持ちながら、同時に後の文の主語ともなる。つまり、前文を指示することで指示機能が中心となり、前文と後文を結び付ける役割を果たしていると考えられる。以上、“那么”は“那”よりその使用が制限されていることを見てきた。これも“那么”の接続詞的機能が強められたことの証左であると考えられる。

ともに指示機能と接続機能をもつ“那么”と“那”が、このような関係を示すのは指

示詞と接続詞が連接作用、或いはテキストの結束性を守る働きをもつからであると思われる。しかし、両者が接続機能を果たす（本研究では準仮定表現と位置づける）場合、そこには細かな差異が存在している。次の図 8-10 にまとめてみよう。

	“那”	>	“那么”
指示性	強		弱
接続性	弱		強
(>は変化の過程を表す)			

図 8-10 接続機能を果たす“那”と“那么”の相違点

すなわち、接続機能を果たす際、“那”は“那么”より指示性を強く保っているが、これに対して、“那么”は指示性から完全に文法化して連接機能だけが残っている。これは呂 (1999) が“那”を「代名詞」、「那么」を「接続詞」と見做す理由の一つだろう。

#### 8.4 指示性と接続性の違いがもたらした日中言語間の差異

本章では、日本語「そうしたら」「そしたら」と中国語“那”、“那么”の相違点と類似点を見てきた。「そうしたら」と“那”は指示性が強いのにに対して、「そしたら」と“那么”は接続性が強いと言えよう。しかし、「そうしたら」＝“那”、「そしたら」＝“那么”という図式は成立しない。日本語では、「そうしたら」では指示機能と接続機能をいずれも完全に保持しているのにに対して、「そしたら」では指示機能部分「そ」が短縮化されているため相対的に指示機能が弱まり接続機能が強い表現となっていると考えられる。一方中国語では、“那”が指示機能と接続機能を元々備えている上に、“那么”では“么”が加わることでさらに接続機能が強化されることで接続性が強い表現になっていると考えられる。このように、日本語と中国語の文法化のプロセスの違いが、日本語と中国語の相違を生み出していると考えられる。

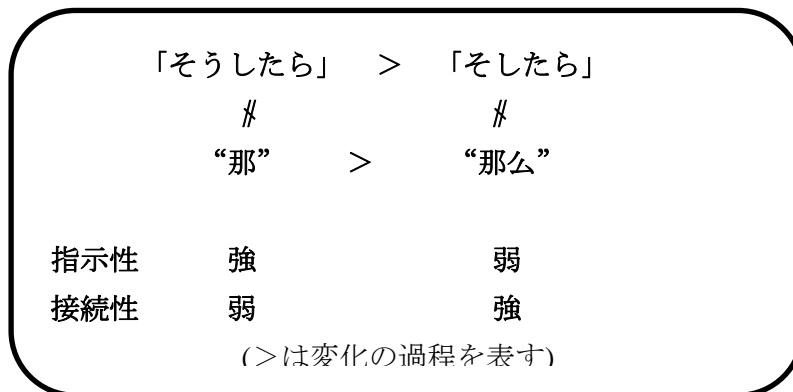


図 8-11 「そうしたら」「そしたら」と“那”、“那么”の対応関係

日本語の「そうしたら」「そしたら」と中国語“那”と“那么”、この二組の表現は語源も同じく、機能も全く同じではないが似ている。また、一文字の差異であっても、「そうしたら」と「そしたら」、「那」と“那么”は無視することのできない違いが存在する。辞書の上ではほぼ区別せずに扱われているが、その詳細については改めて検討する必要があると考える。

以上を見ればわかるように、日中両言語の仮定関係を表す接続表現は指示詞と非常に強い関連性をもつ。「なら」類を構成要素とする接続詞的形式は、「指示詞を含む形式 → 指示詞を落とした断定辞と接続助詞を構成要素にもつ形式 → 接続助詞単独の形式」のように、形態省略の方向へ推移した。また、形態のみを見ると「ソレ」系、「ソ」系の語構成は条件表現の統語構造と同様であるが、その用法には個々の構成要素の意味が希薄な例が見られ、その点でも文法化の傾向が窺えた。一方、中国語の“那”と“那么”の文法化の方向を見ると、相似する過程を経ている。連語の“那么着”の動詞性をもつ“着”が脱落し、“那么”になるのは、日本語「そうしたら」から「そしたら」の文法化過程と類似しており、動詞の意味希薄化がその重要な要素である。さらに、両言語ともに仮定表現と指示表現の融合が見られ、また日本語では「そ」系、中国語では“那”系の中で発生しており、それらの文脈指示用法と密接に関わると考えられる。また、人間にとって遠いものあるいは把握しにくいものがより把握しやすいものへと文法化（中国語で言う“虚化”）しやすいのではないかと考えている。Halliday and Hasan (1976) によれば、指示や接続などは文法的結束性<sup>141</sup>を達成する手段であるが、日本語と中国語の「指示表現」

<sup>141</sup> 庵 (2007: 10) では「ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包しているとき、その文は先行/後続する文(連続)に解釈を依存しており、そのことによってその文連続性は全

と「接続表現」も相互に絡んでおり、切り離せない連続性を有すると考えられる。

---

体でテキストを構成する場合、その文連鎖は「結束的」であり、そのテキストには「結束性」が存在する」と定義される。

## 第9章 助詞と融合した日中仮定表現の文法化

第5章と第6章で述べたように、日本語と中国語の仮定表現は助詞、詳しくいえば提題助詞と終助詞に関わっている。本章ではまず提題助詞との連続性から日本語「なら」と中国語“的话”の文法化について確認する。両形式は接続機能と提題機能を兼ねる形式であり、接続機能と提題機能には連続性が存在する。次に、終助詞との連続性から日本語「ば」と中国語“就是(了)”を対照しながら、両言語における対応関係、および文法化の特徴を見る。

### 9.1 提題助詞と融合した日中仮定表現の文法化

#### 9.1.1 仮定表現と提題助詞の連続性

「提題助詞」の典型的機能は主題や話題を提示する「提題」である。主題や話題は通常名詞で表現されるため、名詞に後接する「なら」は提題助詞と似ている。一方、中国語の“的话”は話題提示用法から仮定条件文に拡張してきており、清代の白話小説から使われ始め(江 2004: 388)、現代の話しことばでは“如果……”、“要是……”などの仮定表現に代わって使われることが多い。日本語「なら」と中国語“的话”は同じく従属節末に位置しながら、複文構造上一定の類似点を示している。以下、主節と従属節との意味的関係の考察を通して、接続機能と提題機能を兼ねる日本語「なら」と中国語“的话”、および、日本語「のなら」と“的话”と共起しやすい中国語の“如果说”を対象として、日中両言語における対応関係、また両者のもつ仮定接続機能と提題機能との連続性を探究したい。

まず、話題文と条件文の共通点は、Haiman (1978) が述べたように、構成上類似性をもっていることである。

A conditional clause is (perhaps only hypothetically) a part of the knowledge shared by the speaker and his listener. As such, it constitutes the framework which has been selected for the following discourse. (Haiman 1978: 383)

(引用者訳) 条件節は(たぶん仮想的にのみ)話し手と聞き手の共有知識の一部である。そういうものとして、それは後に続く談話のために選択された枠組みを構成する。

これに対して、話題文については以下のようにまとめられている。

The topic represents an entity whose existence is agreed upon by the speaker and his audience. As such, it constitutes the framework which has been selected for the following discourse. (Haiman1978: 385)

(引用者訳) 話題とはその存在が話し手と聴衆によって認められた実体を表す。そういうものとして、それは後に続く談話のために選択された枠組みを構成する。

Haiman によれば、条件文と話題文は共通する特徴を持っている。それを図式で示すと以下のようなになる。

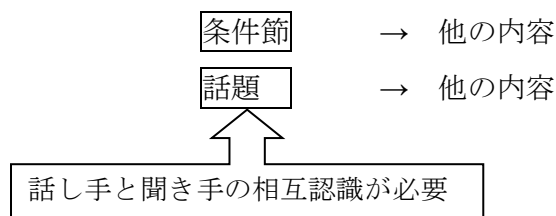


図 9-1 条件文と話題文の類似性

条件節部分あるいは話題の部分では話し手と聞き手が認識したという前提で後の内容に続く。条件文や話題文はともに既定の情報あるいは相互に認識したこととして文や談話の先に来るのが一般的である。日本語「のなら」と中国語“的话”はこの連続性に関わりがあると思われる。日本語「のなら」と中国語“的的话”はどちらも「の」および構造助詞“的”<sup>142</sup>が介在していることが注目されてきた。以下、日本語「なら」形式と中国語“如果”形式および日本語「のなら」形式と中国語“如果……的话”形式の間に類似性があるかどうかを中心に考察を行う。

### 9.1.2 日本語における「なら」「のなら」の通時的変化

本節では「なら」と「のなら」の由来を資料で確認する。次節では、“的话”の歴史

<sup>142</sup> 日本語「の」と中国語“的”に関しては多くの対照研究が見られる。これらの研究では「名詞＋名詞」「形容詞＋名詞」など連体修飾節における日本語と中国語における相違点に重点が置かれている。于 (2010) などを参照されたい。日本語の「のなら」の「の」は助動詞「だ」の連体形であるが見なすことができるが、中国語には「助動詞」という品詞類がない。「だ」のかわりに“是”や“说”などを用いるのではないかと推測している。

上の由来を確認する。分析を行う際に利用するコーパスは『中日対訳コーパス』の他、『日本語歴史コーパス (CHJ)』と中国語『北京大学現代漢語コーパス (CCL、古代)』も併用した。

丹羽 (2006: 275) は、「仮定条件の側からの題目関係への派生と位置づけられる」と主張している。つまり、「なら」の機能転化は以下に示すことができる。

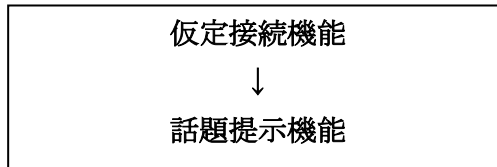


図 9-2 「なら」の機能転化

丹羽 (2006) は、仮定条件文と題目関係文との共通性について下のように述べている。

「S なら T」などの仮定条件文は、「S という世界を設定して、その世界でどんなことが成り立つか」というと T が成り立つ」ということを表す。ここには「S を提示して、それに何が割り当てられるか」というと T が割り当てられる」という課題構造が成り立っている。  
 (丹羽 2006: 274)

これは「なら」の接続形式と密接に関わっていると考えられる。「なら」形式は「断定辞ナリの未然形+ば」の形から変化してきたものであり、「なら」は「もし…… (である) なら」のように名詞述語を取る場合が多くあるため、構造上以下の変化が起こったと考えられる。

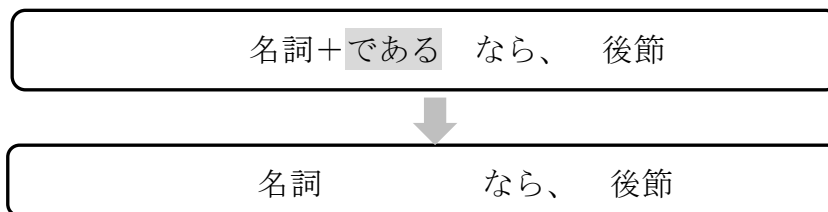


図 9-3 「なら」の仮定表現から提題標識への変化

(168) 二十二なら立派な大人だ。なあ、おい、こうなったら、めいめいが自分で命を継いで行くよりしようがねえんだ、他人のこた構っちゃいられねえ。 『野火』

(169) だけど鎌倉なら、毎日汽車で通えるじゃないの、ね、そうしない? 『痴人の愛』

例 (168) と例 (169) の「なら」は従属節の「なら」とは少し異なる性質をもつ。それは「名詞+なら」という形で、「相手から話し手へ主題の受け取りがある状況や、相手からの発話を受けその名詞 (話題) についての話し手の評価や判断などを述べている」(江田 2005: 1) 点である。また、江田 (2005: 10) は、提題の「なら」の文の後件には、名づけ、推量的判断、当為的判断、主観的評価などの表現が使われ、文末には話者の判断評価のムードが必要であるとした。さらに、主題提起を表す「って」と比較することで、「なら」を使うときには、自分の知っていることからでてくる評価や判断でなければならないことを指摘している。このようなとき、「なら」は条件節から非節的<sup>143</sup>な「なら」へと広がっていると言える(第5章「なら」の機能拡張の部分を参照のこと)。

一方、「のなら」の成立については、青木 (2017: 140) は「のなら」の「の」を「準体助詞」として扱い、「節を名詞化するために、名詞句の主名詞の位置 (= 句末) で用いられる形式のことを指す」と定義づけている。

『日本語歴史コーパス』で「なら」の前に準体助詞が出現するという条件で検索してみると、最も早い時期に使用される例は江戸時代である。

(170<sup>144</sup>) コウ、金がねへのなら、どふともしようぜ。(落咄熟志柿 1816)(青木 2017: 151)

(171) 笑はれぬやうに仕てくれい、予ゆへ笑はれるが妨嫌其やうにいふのならいつそ  
離て仕まふたがよい。(『南遊記』・1800)

(172) 病ひの根がしれないから。どふもわたしは案じられるよ。癩や血の道でふさぐ  
のなら案じるほどの事もないが。(『仮名文章娘節用』・1834)

青木 (2017: 141) は、「17 世紀までに成立した準体助詞「の」は、これまで準体句が用いられていた様々な環境に顔を出すようになる」と指摘し、「のなら」は「の」の準体助詞が成立してから「の」と助詞などが組み合わさって複合形式になったとしている。例 (171) と (172) 文の前後から見れば、「のなら」の前節の内容はすでに出現したものである。「のなら」で再度提出し、そのことについて話し手の推測や評価を述べる。つ

<sup>143</sup> 高梨 (1995) の用語である。高梨は「なら」を「条件節のナラ」と「非節的ナラ」に分けている。

<sup>144</sup> 例 (170) の仮名は青木 (2017) のまま、例 (171) と (172) は『日本語歴史コーパス』のままである。

まり、仮定機能か提題機能が判別しにくい部分がある。

次は、日本語「のなら」と似ている形式である中国語“的话”の仮定表現機能と提題機能について、具体例を挙げながら提示し議論していく。

### 9.1.3 中国語“的话”の通時的変化

中国語の“的话”が仮定複文の中に用いられ、仮定接続機能をもっていることは従来から認められている。しかし、“的话”の品詞分類上の位置づけについては議論が分かれている。例えば、朱(2004)は“的话”を「関連助詞<sup>145</sup>」としている。つまり、仮定関係を表す“如果”などと呼応して使うことが多くあるとする。趙(2009)は、“的话”は現代漢語中では仮定的語気を中心に表現する語気助詞であり、仮定従属節末に用いられて、仮定の語気を表すと指摘している。一方、余(1999)は、現代話し言葉では一般的に“的话”だけを使い、“如果”はあまり使われないが、従来の文法書では“的话”についての明確な説明がないとしている。これより“的话”の仮定表現機能は広く認められていることがわかる。江(2004: 388)は、“的话”の用法を、「仮定助詞」、「話題標識」、「停頓助詞」に分類している<sup>146</sup>。また、“的话”の「話題標識」機能を定着したものとすべきだとも主張している。これは中国語“的话”の話題提示機能に明確に言及した論文である。江(2004)は、“的话”は話題標識から仮定表現へ転化したとの議論を行っている。すなわち、日本語の「なら」と違って、中国語“的话”は話題提示機能が仮定接続機能へ拡がった。これに基づけば、中国語“的话”の機能変化は、以下の図9-4のように示される。

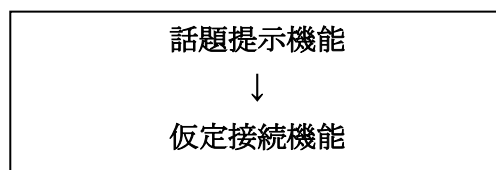


図9-4 “的话”の機能転化

<sup>145</sup> これは前後節を関連させるために使用される助詞という意味で、日本語の接続助詞に相当する。

<sup>146</sup> 張(2018: 514)は、“的话”の用法を、①構造助詞“的”+名詞“话”；②限定助詞；③ムードを表す語気助詞、と三種類に分けている。仮定関係を表す“的话”を助詞として、その用法の発生は清の時代からであり、①構造助詞“的”+名詞“话”という用法から拡がったと主張している。

中国語における話題提示機能の発達の有無、そして仮定接続機能に発達する順序については、現時点では研究者の間で合意があるわけではないが、本研究では、中国語では図 9-4 のような順序で機能転化が起こったという江 (2004) の主張に賛同する。理由は“的话”の成立とかかわっている。“的话”という二文字は元代から多く使用されている<sup>147</sup>。“话”の意味は「言ったこと」であり、動詞の目的語となる場合が多い。その後、「名詞“话”→準仮定表現“的话”」という機能拡張が起こっている。“的话”は「構造助詞“的”+名詞“话”」からなる。融合により名詞“话”の語義が共に虚化していると見られる。これは、“话”を除いても文の意味は変わらず、“的”と融合して音声上も軽く読まれるのが一般的であるという趙 (1979: 65, 353) の説明と合致している。つまり、“话”に含まれる実質的意味がなくなったということである。

さらに、“的话”の意味が元々の実質的な意味から逸脱し、一定の文脈の下で省略しても文の意味があまり変わらない場合がある。

(173) 王 夫人 道：“没有 的话，你 再 细 找找。” (《红楼梦》・清)

王 奥さん 言う ない 接続語 あなた もっと 丁寧に 探す

王夫人は「なければもっと探してみてください」と言った。(引用者訳)

(173') 王夫人道：“没有，你再细找找。”

(174) 不 然 的话，不 知 不 觉 便 坠 落 到 卑 污 一 流， 必 定 有

否 定 そう 接続語 知らず 接続語 転落 まで 行儀の悪い人 きっと ある

被 人 看 不 起 的 一 天，不 可 以 不 慎 重。 (《曾国藩家书》・清)

受身 人 貶す 助詞 一日 否定 いい 否定 慎重

そうでなければ、知らず知らずのうちに行儀の悪い人々に転落し、いつか必ず見下されることになるのだから、気をつけないわけにはいかない。(引用者訳)

(174') 不然，不知不觉便坠落到卑污一流，必定有被人看不起的一天，不可以不慎重。

<sup>147</sup> 江 (2004) では「“的话”最早出现在清代白话小说中，但是较少见。(“的话”は清の白話小説に初めて登場したが、まだ使用例が少ない(引用者訳)。)」と指摘されているが、おそらく当時資料調査の制限があるためであろう。コーパスでは多くの歴史資料を格納し、言語の歴史的調査に便宜を提供している。今回、コーパスで各時代において“的话”の使用状況を確認してみたが、宋代にも3例を発見し、それは全部南宋の話本である。元代から使用例が急増して定着したと見られる。

例えば、例 (173) は物探しの場面で、「(ここに) なければ」という仮定の意味を表し、例 (174) は“不然”と組み合わせて「そうでないと」という意味として使われている。それぞれを例 (173') と (174') のように置換することができる。つまり、“的话”が省略されても仮定を表す表現として成立する。

また、“的话”の話題提示用法を確認したが、同じく清の時代からであると見られる。例 (175) では、「老元帥という、彼は自分にとっても厳しい」のように、「老元帥」を話題として、その人物についての評価を述べている。

(175) 汪子升 道：“老师 的话，不免 自责 过 严 了。”(《孽海花》・清)

人名 言う 老元帥 接続語 当然 自責 すぎる 厳しい 語気

汪子昇は「老元帥なら、あまりにも自責の念に満ちていた」と言った。

(引用者訳)

ここまで見てきたように、中国語“的话”の仮定表現用法と話題提示用法はともに清の時代から始まり、どちらが先に現れたかは判断しにくい部分もある。しかし、本節で議論した意味上の変化からみると、江 (2004) の「話題提示から仮定表現へ」という主張が妥当だと考えられる。江 (2004: 395) では、「“的话”是产生于话题句，扩展到假设句。因此，从词源上看，“的话”是更地道的话题标记，把“的话”看作话题标记比把它看作假设助词更符合语言实际。（“的话”（の用法）が話題文から由来し、仮定文に拡がってきている。そのため、“的话”は仮定を表す助詞より話題標識と見なされるのがよさそうだ。）」と述べて、“的话”を話題標識とみなし、“的话”は話題標識から仮定表現へ転化したと主張している。この主張が妥当だと考えると、日本語の「なら」は仮定接続機能から話題提示機能へ転化した、中国語“的话”は話題提示機能から仮定接続機能へ拡がったということになる。すなわち、日本語と中国語の提題とかかわる仮定表現の機能転化については逆方向になっているということである。

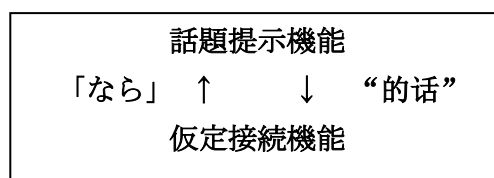


図 9-5 「なら」と“的话”の機能転化

さらに、日本語「なら」と中国語“的话”の仮定表現機能と話題提示機能の出現率か

らみれば上記の主張の妥当性が強まる。『中日対訳コーパス』から収集したものを分類してまとめたが、表 9-1 と表 9-2 を参照されたい<sup>148</sup>。

表 9-1 「なら」の出現数と出現率

なら (計 574 例)	
仮定表現 (計 472 例)	話題提示 (計 102 例)
82.23%	17.77%

表 9-2 “的话”の出現数と出現率

“的话” (計 1116 例)	
仮定表現 (計 159 例)	話題提示 (計 957 例)
14.25%	85.75%
単独使用する例 (43 例)	ほかの接続詞と組み 合わせて使用する例 (116 例)

ここに示されるように、日本語「なら」は仮定表現が中心をなしているが、中国語“的话”は話題提示用法がかなり高い比率を占め、主要な位置を占めている。つまり、日本語「なら」と中国語“的话”は仮定表現機能と話題提示機能をもつことは同様であるが、中心的用法が異なる。次節では、日本語「なら」と中国語“的话”の相違点をめぐり、従属節と主節の関係から詳しく考察を進めたい。

#### 9.1.4 「なら」「のなら」と“如果 (说)……(的话), ……”構文の対照

「なら」は、「～なら」と「～のなら」という形式を有する。従来の「～のなら」の説明に関しては、「ナラの用法のほとんどは、ノナラ (またはンナラ) を使っても表すことができる。その場合は、ノナラはナラの意味を強める働きをもつ」(蓮沼ほか 2001: 67)とされる。さらに、「～のなら」が用いられる場合は『「なら」の前に『という』を挿入できる場合が少なくない」(野田ほか 2005: 88)と指摘されている。この現象と類似した中国語の仮定接続形式の中に“如果 (说)……(的话), ……”という構文がある。この

<sup>148</sup> 『中日対訳コーパス』から収集したものを分類してまとめた。他のコーパスの統計については今後行っていきたい。

構文は、“说”や“的话”の有無によって仮定複文の意味に差異をもたらすと考えられる。本節では、日本語「なら」「のなら」と中国語“如果(说)……(的话), ……”構文を対照しながら、それらの間の対応関係の有無について検討し、また、日本語「の」と中国語“说”や“的话”が各々の文の中で果たす機能、また、それらの構文に付随する様々な統語的・意味的性質をより深く探ることを目指す。なお、本節で取り扱う構文形式は以下の通りである。

- (176) a. 「Pなら、Q」構文および「Pのなら、Q」構文  
b. “如果P, Q”構文および“如果P的话, Q<sup>149</sup>”

#### 9.1.3.1 「なら」と「のなら」構文

従来、「のなら」に関する考察は「なら」や「のだ」の研究の中で行われてきた。田野村(1990)は、「なら」の用法を「実情仮定」と「状況設定」の二種類に分け、「実情仮定」の場合は「のなら」との置き換えがより自由であるが、「状況設定」の「なら」は事実性についての関心が稀薄であるため「のだ<sup>150</sup>」との相性が悪いと述べている。まず、「なら」の特徴について、蓮沼ほか(2001)による説明を挙げる。

ナラは、事柄と事柄の関係を表すのではなく、事柄に対する話し手の判断に基づいた関係を表すという特徴があります。(蓮沼ほか2001: 69)

この点に関して、角田(2004: 47)は節接続とモダリティの関係について論じている。「なら」節は「と」「ば」「たら」節と異なる点が主節のレベルにあると指摘した。「と」「ば」「たら」を用いると、主に従属節の事柄と主節の事柄の関係を表すが、「なら」はそうではなくて、主にモダリティと関連付けると言う。例えば、

- (177) a. この薬を飲むと、痛みがおさまりますよ。(日本語記述文法研究会2008: 102)  
b. パソコンを買うなら、あの店へ行き(なさい)。(前田2009: 67)

<sup>149</sup> “如果说P, Q”、“如果说P的话, Q”の形式も含んでいる。

<sup>150</sup> 「のだ」は、「何かの背後にある事情、すでに定まった実情を表現するもの」(田野村1990:94)とされ、従来の「のだ」に関する研究では、「既定性」「既定命題」といった概念が使用されることもある。これらは田野村と共通すると見られる。

b'. パソコンを買うのなら、あの店へ行きなさい。 (引用者による書き換え<sup>151</sup>)

「と」を用いた例 (177a) は、従属節の出来事が主節の出来事を引き起こすという関係を明示する。「なら」を用いた例 (177b) は、「従属節の内容を前提として、主節では話者の意見、判断、命令などを述べている」(角田 2004: 57)。つまり、例 (177a) においては、主節「痛みがおさまる」が従属節「この薬を飲む」から直接に導かれた結果であるのに対して、例 (177b) においては、話し手は、従属節の内容(聞き手がパソコンを買う)ことを前提として、主節は主観的モダリティ表現(「なさい」など)を付け加えることで、「あの店へ行く」ことを勧誘または命令している。例 (177b) の「なら」は、例 (177b') のように「のなら」に置き換えることもできる。蓮沼ほか (2001: 67) は「ナラの用法のほとんどは、ノナラ (またはンナラ) を使っても表すことができる。その場合は、ノナラはナラの意味を強める働きを持つ」と説明している。

一方、藤城・宗意 (2000: 85) は、「なら」「のなら」両形式の相違点に言及している。それによると、「のなら」は「なら」よりも「現実の状況や文脈に、より即した形で事態を提示する表現」であり、これは「のだ」の性質、特に「の」の「事態を現状のありさまのまま捉える」という性質から生じるものだとする。ここでは、以下の例を見てみよう。

- (178) そうして、私もそれを否定いたしませぬけれども、しかし、ただ私が自身のパソコンが欲しいのなら、失礼ながら、特にあなたを選んでお願い申しませぬ。『斜陽』
- (179) もしこれがもともと俺の外部存在であったのなら、どうして、いかなる因縁によって、俺の内部に結びつき、俺の痛みの根源になりえたのか? 『金閣寺』

この2つの例においても、「のなら」で前文の事態をありのままに捉えている様子が見て取れる。この点は藤城・宗意 (2000) の指摘する「のだ」の機能に関連づけられよう。ただし、藤城・宗意は基本的に「なら」と「のなら」を同一のものと見なして考察を進めている。その他、野田 (1997)、田野村 (2002)、中野 (2005) などが「なら」と「のなら」の違いについて論じている。野田 (1997) は「のなら」の中には「のだ」の

---

<sup>151</sup> 日本人母語話者にも文法性判断についての確認を行った。その結果は、b と b' の意味は同じであり、「のなら」を使うと「パソコンを買う」行為が強調される感じがあるとの蓮沼ほか (2001) の説明と一致していた。

性質が含まれると指摘しつつも、「なら」との違いはあまりないと述べている。田野村 (2002) は、「実情を表す」という「のだ」の機能を考慮に入れて、「なら」自体も実情を仮定する用法をもつため、「のなら」と「なら」の違いはそれほど明らかではないとしている。つまり、形式的には「のなら」を「のだ」と関連づけて、[のだ]+[なら]の組み合わせと見なしているが、意味的には「なら」と「のなら」の違いを明らかにしていない。

一方、中野 (2005: 22) では、「のなら」が「のだ」の機能を受け継ぐことで「なら」との違いが生じたと述べた上で、ナラとノナラの相違について以下のように述べている。

一つは、ノナラが導く節の内容が話し手によって自身の情報領域に既に位置づけられた情報であるということである。話し手本人は、ノナラが接続する節の情報を真であるとみなしている点でナラとは異なる。もう一つは、ノナラの導く内容は話し手が主観的に自身の情報領域に位置づけたものだということである。したがって、客観的にも明らかに真であるとみなせるような情報をノナラで提示するのは不自然である。

(中野 2005: 22)

中野 (2005) では「主観的に真であるとみなしている」場合は「のなら」が使われるとするが、「主観的な真」というのは何を意味しているか分かりにくい。「なら」と「のなら」にどのような相違があるかについて理解するためには、文脈中の具体例の用法をより仔細に観察する必要がある。例えば、「のなら」が使われている例 (188) では、「(私は) 自身のパトロンが欲しい」という相手をもつ前提に対して「(私は) 自身のパトロンが欲しいのではない」という、相手へ反問する語気が含まれ、相手が言ったことは正しくない、或いは真実ではないという気持ちが強調されている。例 (189) も同様に、「これがもともと俺の外部存在であった」という前提に対して、「では何故それが俺の内部に結びついたのか」と強い疑問を感じている。「のなら」は、「のだ」で従属節の内容を前提とする機能をもつために、これらの例が示すように「その前提に対する話し手の反問や強い疑問」を表現するのに使われることが多い。この機能は、「のだ」のない「なら」では起こりにくい。例 (180) を参照されたい。

(180) もし人間がその飢えの果てに、互いに食い合うのが必然であるならば、この世は神の怒りの跡にすぎない。

『野火』

(180')? もし人間がその飢えの果てに、互いに食い合うのが必然であるのならば、この世は神の怒りの跡にすぎない。

例 (180') は例 (180) の「ならば」を「のならば」に変えたものであるが、文法的に適格であるにもかかわらず、「のなら」が使われている例 (180) は、「元々は人間は互いに食い合うのが必然である」という前提があることが強調されており、そのことを前提ではなく単に仮定している例 (180) と明らかに異なっている。

上記の例から見ると、「なら」と「のなら」の間には相違が存在すると言える。「なら」は元々断定を表す助動詞「だ」に由来しており、その前接形式には文を置くことができる。その場合、「だ」に前置される文は名詞化される必要がある。これを図式してみると、次のようになる。

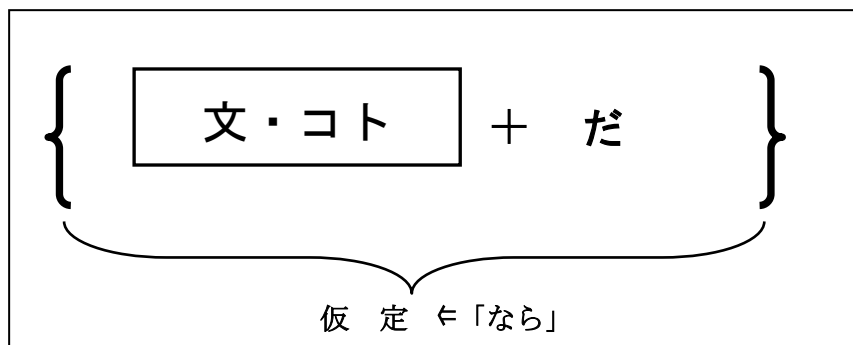


図9-6 「なら」の構成形式

つまり、「なら」はある断定文を仮定文に変化させるための機能を有する。一方、「のなら」の「の」は前接する文を体言化させる役割を果たしており、文構成の面からみれば、「のなら」形式の方がより相応しい形式であると考えられる。断定助動詞「だ」の仮定形である「なら」では、「だ」に前置される文を名詞化させる必要があるからである。

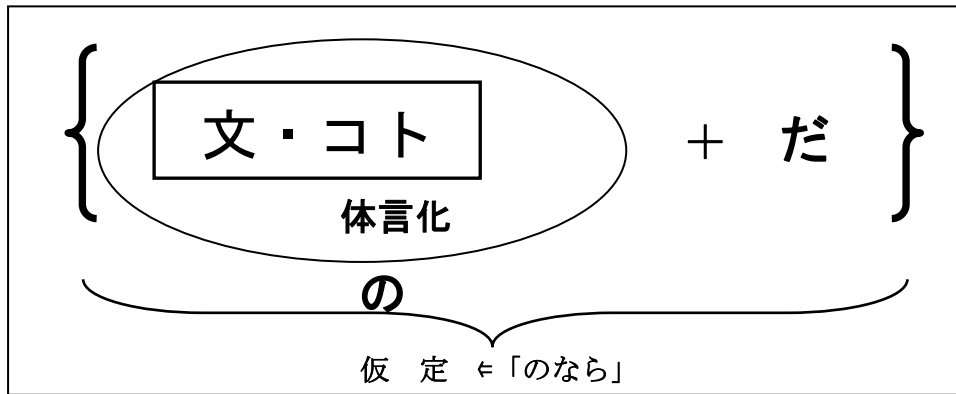


図9-7 「のならば」の構成形式

文の名詞化のためには準体助詞「の」の助けが必要である。しかし、「ならば」が独立した假定形式になる文法化過程が進むにつれ、「ならば」の断定助動詞としての元来の機能が薄れることで、「の」が省略されることになったと考えられる。これが「ならば」と「のならば」の置き換えが常に可能な理由の一つであろう。しかし、「Pならば」と比べてみれば、「Pのならば」の場合は「Pという假定が既成事実であれば」という意味が強まり、[[ [P]ならば]のだ]ということになるのではないかと考えられる。「ならば」は従属節Pを「断定→假定」という操作を経た一次的なものとして表現する。その一方で、「のならば」は「のだ」か「の」の介在で、従属節全体を前提としそれをスコープに入れて假定するという機能ももつという二次的なものとなる。そのため、「のならば」は、その前提に対する反実発想や話者の主観を加えやすい従属節を成すと考えられる。

### 9.1.3.2 “如果”と“如果(说)……的话”

中国語の“如果”については假定複文の中で用いられることが従来から認められている。董(2007)では、現代中国語では“要说”(言うならば)、“这么说”(そう言えば)など“X+说”が語彙化しており、一語になった“X+说”は、“说”の元々の意味をもつものもあるが、“说”の意味をほとんど喪失した場合も少なくないと指摘している。“如果说”は語彙化した複合辞の一つである。一方、中国語“的话”は一つの助詞として扱われることが多い。また、“那样的话”(そのようであれば)、“这么说的话”(そう言えば)などが一種の構文形式かコロケーションとして取り上げられている(志賀(1960); 江(2004)など)。志賀(1960: 1)は“的话”について「白話に、一つの特別な詞語—条件小句の後に用いられる—「的话」があり、「的话」の二字には、何らの実義がなく、準語気詞とみなしてさしつかえなかろう」と述べている。従来の研究では、品

詞類 (語気助詞か後置接続助詞か) をめぐって “的话” を論じることが多いが、歴史的変化から見た “的话” に関する研究としては、張 (2001)、江 (2004) が挙げられる。

中国語の仮定複文は、“如果” の後ろに “说” を加えなければならない場合もあるが、“说” を加えられない場合もある。本節では “说” の有無による違いについて分析を試みる。まず、以下の例文を見てみよう。

(181) 说 实在 的 ， 以 他 现在 的 这 个 水平，如果到 国外 去，他  
言う 実に 語気 を以て 彼 現在 助詞 この 量詞 水準 接続語 国外 行く 彼  
能 混 得 满 不错 嘛。 《钟鼓楼》  
可能 やる 助詞 かなり いい 語気

正直に言えば、彼の今の實力だったら、国外に行けばかなりいけるはずだね。

(182)=(152) 如果 我 见到 你，我 会 高兴 得 哭 起来 的。《友情》  
接続語 私 会う あなた 私 できる 嬉しい 助詞 泣く 出す 語気

お目にかかれたら、私はうれしくて泣き出してしまおうだろう。

(183) 如果说 她 爹 给予 了 她 一 笔 可贵的 遗产，那么 这 遗产  
接続語 彼女 父 与える 完了 彼女 一 量詞 貴重 助詞 遺産 接続語 この 遺産  
就 是 一 种 高度 的 自尊，而 同 自尊 相 联系 的 便 是 一 种 甘愿  
断定 一種 強い 助詞 自尊 且つ と 自尊 相関わる 助詞 断定 一種 むしろ  
为 比 自己 弱小 的 人 提供 援助 的 豪爽。 《钟鼓楼》  
ために 比べる 自己 弱い 助詞 人 提供する 援助 助詞 豪快

彼女の父親が何か貴重な遺産を残したと言うなら、それは一種の強い自尊心だろう。

そしてその自尊心と結びついたものは、弱い者を助けてあげようという義侠心だった。

(184) 如果说 冯少怀 也 怕 人 的话，他 怕 这 个 人。 《金光大道》  
接続語 人名 も 怖る 人 接続語 彼 怖る この 量詞 人

馮少懷の恐れる人間がいるとしたら、その人だった。

例 (181)、(182) と例 (183)、(184) を対照してわかるように、“如果” で導かれる仮定複文は、従属節の事柄が成立すれば主節の事柄も成立するというものである。つまり、“如果” という従属節と主節は「仮説 → 結果」の順接的な関係である。一方、“如果说” は “如果+说” という構造を有する。動詞 “说” は常に目的語を取り、[ “说” +目的語 ] が “如果” と合わさり、[ “如果” [ “说” +目的語 (内容) (以下、P で表記する) ] ] のようにな

る。そして、“如果”と“说”が融合して“如果说”全体として仮定の意味を表すようになる。つまり、[[P]を言う]と仮定する] → [[Pを言う]と仮定する] 意味になり、つまり、『Pを言う』としたら』というプロセスである。ここでのPは一つの可能性、或いは思考過程を経た上で認められたものとして述べられている。

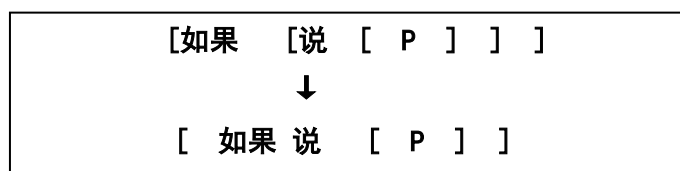


図9-8 “如果说”の文法化プロセス

以上の解釈をまとめると、“如果”は事柄自体が存在するか否かを条件とするが、“如果说”は事柄の存在の可能性の一つを条件とする。“如果”と“如果说”のこのような違いは「なら」と「のなら」の違いに通じるところがある。「なら」はある情報を単に「仮定」して主節の判断の条件として提示するが、「のなら」は従属節の仮定が既成事実であることを主節の判断の条件とする。すなわち、日本語「の」と中国語“说”と“的话”は同様に、「(仮定的)事柄」に対する思考過程を暗示する働きを持っている。

一方で、“如果”や“如果说”が“的话”と共起すると、事情が少し変わる。上記の例(184)を再掲する。

(184) 如果说冯少怀也怕人的话，他怕这个人。

馮少懷の恐れる人間がいるとしたら、その人だった。

(184') 如果冯少怀也怕人的话，○ 他怕这个人。

もし馮少懷の恐れる人間がいるなら、その人だった。

(184'') 如果冯少怀也怕人，?? 他怕这个人。

○ 那么XX害怕就没什么奇怪的了。

もし馮少懷の恐れる人間がいるなら、その人だった。

それでは、XXも恐れることは珍しくない。

例(184)は元々“如果说P的话，Q”という組み合わせで仮定を表している。この構文形式をそれぞれ“如果P的话，Q”や“如果P，Q”に変えて比較してみると、“如果

P 的话, Q”は“如果 P, Q”より成立しやすい。“如果 P, Q”では、後件に“那么XX 害怕就没什么奇怪的了”のような、前件をそのまま受け入れて言い続ける文が来るのが自然である。“的话”と他の仮定表現が共起して複文に使用されることについて、太田(1958: 358)では、“的话”の仮定用法は、「～について」「～に関して」などのような意味から転じてきたものであり、こうした過渡的用法が、仮定複文の中に“的话”の情報を再提示する機能を備えさせる直接的な誘因だと判断されている。また、“如果说 P 的话, Q”という形式の中には、“说 P 的话”という P 節が含まれているが、“说”は“话”と結び付きやすい語彙であり、両者は共起しやすいため、“如果 P 的话, Q”と“如果说 P(的话), Q”は同様の機能を備えるようになったのではないかと考えられる。つまり、「P なら、Q」構文と“如果 P, Q”構文は [ [P] 仮定表現 ] だけとなり、従属節の事柄を仮定するのに対して、「P のなら、Q」構文と“如果 P 的话, Q”は [ [ [P] の / “的话” ] 仮定表現 ] のようになり、従属節の事柄を二次的操作を経ている点が、両言語で共通していると見られる。

本節は話題提示機能との連続性による文法化について日本語・中国語の仮定関係を表す表現を考察した。仮定表現機能と話題提示機能は、共通関係にあるという指摘が従来からあるが、日本語「なら」及び中国語“的话”がこの二つの機能を兼ね備える仮定関係を表す接続表現であることを先ず確認した。同時に、両者の中心的用法が異なることに注目した。日本語「なら」は仮定表現から話題提示用法へ転化し、中国語“的话”は話題提示機能から仮定表現へ広がったと考えられる。両言語では以下のような対応関係を有するとの結論が得られた。

(185) 「P なら、Q」構文——“如果 P, Q”構文

「P のなら、Q」構文——“如果 (说) P 的话, Q”構文

## 9.2 終助詞と融合した日中仮定表現の文法化

### 9.2.1 仮定表現と終(語気)助詞の連続性

本節では、終助詞との連続性から日中両言語における仮定表現の対応関係、および終助詞との連続性から日本語「ば・たら」と中国語“呢”、“么”、“就是(了)”、“好了”を対照研究しながら、文法化の特徴を見ていく。

## 9.2.2 終助詞との連続性からみる日中両言語における仮定表現の対応関係

第5章では、日本語仮定表現「ば・たら」は「ば・たら+いい／どう」などの慣用化を通して、「いい／どう」が脱落して次第に「ば・たら」の終助詞用法が生まれたことを述べた。第6章では、中国語における仮定関係を表す表現をまとめた上で、仮定表現、準仮定表現、次仮定表現という三種類が存在し、特に語気助詞“呢”、“么”が機能拡張して次仮定表現として位置づけられることを示した。これらは中国語では語気助詞とよく言われるが、本節では日本語と中国語において、文末に置かれる語気を表す表現を終助詞に統一して議論することにする。

日本語の仮定表現「ば・たら」は文末の終助詞に機能拡張してきている。第5章で見た両者の文法化プロセスを併せてまとめると図9-9のようになる。

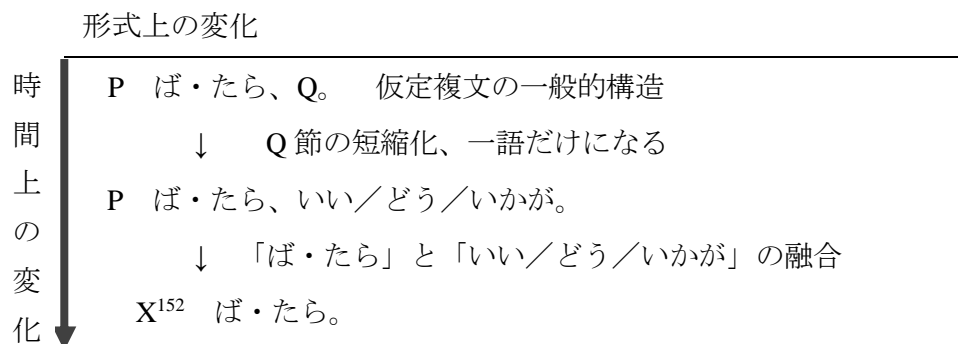


図9-9 「ば・たら」の終助詞化

「ば」と「たら」の終助詞化は第5章で詳しく述べたので、ここでは「ばいい」に対応する中国語の“就是(了)”を中心に論をすすめる。“便是”、“便了”は「ばいい」に対応するが、これらは前の時代に使われる副詞なので、ここではとりあげない。

例(186)の「ばいい」の中国語訳は“就是<sup>153</sup>”であった。ここでの“就是”は一つの言葉として統合された意味をもつ。“就”と“是<sup>154</sup>”の二つに分けることはできない。

<sup>152</sup> 「ば・たら」が文末の終助詞として使われる場合は、もとの複文の従属節と主節の関係が崩し、複文が単文になっていると言える。そのため、PではなくてXで区別しておく。図9-9も同じである。「従属節の主節化」については、堀江(2014b)が詳しい。

<sup>153</sup> コーパスの訳文である。

<sup>154</sup> 中国語において、“就”は副詞であり、「すぐに」の意味で使われることが多い。仮定複文においては、“如果……，就……”の形でよく利用される。“是”は判断を表し、日本語の断定助動詞「だ」にあたるものである。

(186) 「まあ、置いて行こう。余計だったら貯金しておけばいい。」 『あした来る人』  
 “还是放下吧。要是用不了，存起来就是。”

“就是”は一つの意味を表す言葉として日本語仮定表現の終助詞用法と同様の機能をもっている。近現代の虚詞辞典は“就是(了)”を助詞として分類しているが、現在の研究では「語気助詞」と見なすことが多い(例えば、宋(2021))。中国語における仮定関係を表す助詞を辞書で調べても“就是(了)”が含まれている。辞書の詳細については付録を参照されたい。

表9-3 中国語仮定関係を表す助詞

辞書	語気助詞	助詞
『古代漢語虚詞詞典』	者	
『近代漢語虚詞詞典』		便了、便是、时
『現代漢語虚詞詞典』		的话、好了、就是 <sup>155</sup> 、就是了 <sup>156</sup>
『現代漢語八百詞(増訂本)』	啊、吧、嘛、呢	的话、

“就是”は文末の語気助詞として、話し手が相手への勧誘、意見を表すのによく使われる。つまり、日本語「ば・たら+いい」と似た意味をもつ。

(187) 主人 如果 不 愿 见 客, 只消 不 理会 铃声 就是了。《活动变人形》  
 主人 接続語 否定 願望 会う 客 いい 否定 答える ベル 語気  
 客に会いたくないのなら、呼び鈴を無視すればいい。

(188) 跟着 大泉 你们 干 就是了。 《金光大道》  
 つく 人名 あなたたち する 語気  
 大泉らについてやればいいんだ。

太田(1958: 392)では、“就是(了)”(「はいい」)、“就完了”(「は終わりだ」)、

<sup>155</sup> “就是”は助詞と連詞(接続詞)の二つの品詞類をもっている。ここでは文末に使われる助詞を指す。

<sup>156</sup> “就是”と“就是了”は同じ形式だと認識されている。やや古い時代に“就是”を使っていたが、白話が流行してから“就是了”は次第に“就是”の代わりに使われるようになった。詳細については、宋(2021)などを参照されたい。

“就有了”(「はできた」)、“就结了”(はいい)を「準句末助詞」としている。これらの準句末助詞には制限を表す“就”が含まれるため、太田(1958: 392)は、「もと全句の述語であったものが退化し、単に制限の語気を有するにとどまると認められるものであるが、なお陳述するはたらきが完全に消失しているとは言えないようなこともあるので、助詞に準ずる扱いをする。」と述べている。“就”は限定を表す副詞であり、假定複文によく使われており、後続する述語は動詞述語が多い。“就是(了)”、“就完了”、“就有了”、“就结了”という準句末助詞は「“就”+動詞(了)」のような構造をもち、“就”と動詞は次第に融合して一つの文末助詞(終助詞)になっている。これは、日本語「ば・たら」と同じような文法化プロセスを経ていると考えられる。

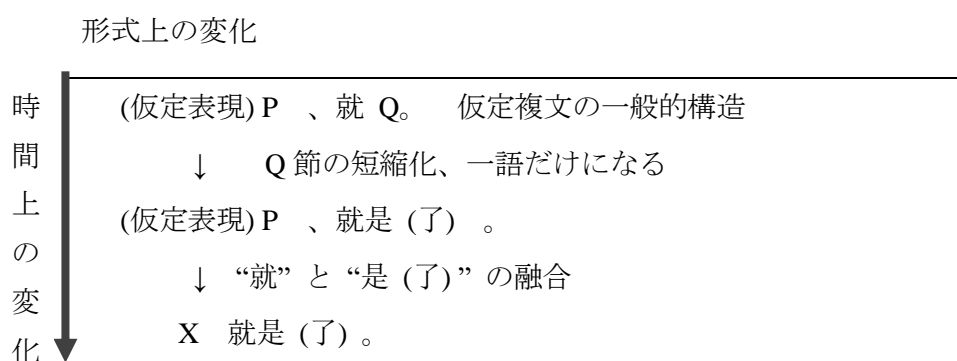


図9-10 “就是(了)”の終助詞化

このように、日本語と中国語における假定表現は文末の終助詞と連続していると考えられる。中国語の“就是”は二つの語で構成されており、助詞として完全に認められているというわけではない。しかし、専門の虚詞辞書では古代でも助詞が假定関係を表すことができる指摘している<sup>157</sup>。

以上のことをまとめると、日本語と中国語の假定表現は文末終助詞と連続性を有して、文法化プロセスには対応関係が見られる。

表9-4 日本語と中国語における假定表現と終助詞の対応関係

日本語	中国語
ば・たら+いい	就是、就是了、好了
	呢、么、啊 など

<sup>157</sup> “者”は古代における假定を表す助詞として挙げられている。現代中国語の“的话”が“者”から変化してきたという説もある。

### 9.2.3 文末における日本語「ばいい」と中国語“就是(了)”

本節では日本語「ば・たら(いい)」と中国語“就是(了)”を具体例として対照研究を行う。ここでは特に、「ばいい」と“就是(了)”との対照を行うことにする。

対訳コーパスの実例を見ると、「ばいい」は以下の中国語訳語に対応していることが分かった。本研究で“就是(了)”に絞ったのは、文末の語気助詞として最もよく使われる表現だからである<sup>158</sup>。

表 9-5 文末「ばいい」に対応する中国語

日本語	中国語
ばいい	就是、就是了、好了、就好了、就行、就行了(嘛)、就可以了、就得了、可以、就可以了、就完了、也好嘛、嘛

前文の例文を再掲する。例(186)は日本語原文であり、「ばいい」は中国語の“就是”に訳されている。例(187)(188)は中国語原文であり、“就是了”が日本語「ばいい」に訳されている<sup>159</sup>。

- (186) 「まあ、置いて行こう。余計だったら貯金しておけばいい。」 『あした来る人』  
 “还是放下吧。要是用不了，存起来就是。”
- (187) 主人如果不愿见客，只消不理睬铃声就是了。 《活动变人形》  
 客に会いたくないのなら、呼び鈴を無視すればいい。
- (188) 跟着大泉你们干就是了。 《金光大道》  
 大泉らについてやればいいんだ。

“就是(了)”は現代中国語においては多くの用法があり、汪(2010: 60)は“就是

<sup>158</sup> “就是了”は文末における用法については、CCLで検索した結果51例、BJSTCでは25例出た。一方、“就好了”はCCLでは11例、BJSTCでも11例出た。“就行了”や“就可以”なども検索してみたが、やはり文末の用法は少なく、もともとの“行”、“可以”という許可を表す意味合いが強く残っており、文の述語として使われることが数多いということが分かった。

<sup>159</sup> 本研究では“就是”と“就是了”の違いは説明しないことにする。“就是了”は“就是”と助詞“了”で構成されるものであり、“了”は肯定の語気を強めるという働きをもっているという指摘がある(汪2010:61)。

(了)”には動詞と助詞の用法をもっていると指摘している。

(189) a. 你 去 就是了。 (自作例)

あなた 行く 語気

あなたが行けばいい。

b. ? 你 去 是了。

例 (189) は、「“你去就是了” = “你去”」となり、文の後半を省略しても文が成立し、“你去”のみでも成り立つ。“就是了”は一つの融合した形式として、文末の語気助詞的機能をもつようになって、省略されても文の意味に影響を及ぼさず、話し手の勧誘や義務を表すだけになっている。“就是了”を使う長い例文、例 (192) と例 (193) のにおいては、“就是了”を省略しても文としては成立する。“就是 (了)”を使う場合には、直前のことについての話し手の勧誘や義務を表現すると考えられる<sup>160</sup>。

(190) 卖 就是了。 《小鲍庄》

売る 語気

「売ればいいだろう」

(191) 还 就是了。 (同上)

返す 語気

「返せばいいだろう」

(192) 没问题。我 已经 给 供销社 打 电话 了, 让 他们 立刻 收购 集中,  
大丈夫 私 すでに に 協同消費組合 かける電話 完了 使役 彼ら すぐ 買う 集める  
保证 不 让你 落空 就是了。 《金光大道》

保証する 否定 使役 あなた がっかりする 語気

大丈夫だ。もう供销社（協同消費組合）に電話をかけといたよ。すぐに買い付けるようにした。そっちの計画をダメにさせなければいいんだろ。

(193) 我 也 没有 别的 好 办法。 只好 听 爷爷 的话: 你 这 几天

<sup>160</sup> この点については、同じく文末助詞である“好了”とやや違いがある。“好了”は反実仮想にも使えるのに対して、“就是 (了)”はその場合は使いにくい。この点について今後の課題としてさらに検討したい。さらに、今回収集したデータから仮定表現の「ば」「たら」「なら」三者ともその後ろに「いい」がくる例は多く見られた。それぞれに対応する中国語には差異があるか否かも含めてこれからの課題として検討していきたい。

私 も ない ほかの いい 方法 しかない 聞く お祖父さん 話 あなたこの 何日  
不 出去 就是了。 《家》

否定 出る 語気

私にもほかにいい方法がないし、お祖父さんのおっしゃったことに従うしかない。  
おまえはこの二三日外出しなければいいんだよ。

以上のように、日中両言語において、仮定表現と終助詞の間には連続性が見られる。日本語の仮定表現「ば」は「いい」との融合を通して文末の「ば」に機能拡張しているが、中国語の次仮定表現“就”は“是”との融合を通して文末の“就是(了)”に機能拡張している。両言語には一定の類似点が見られる。

### 9.3 単文化がもたらした仮定表現の文法化

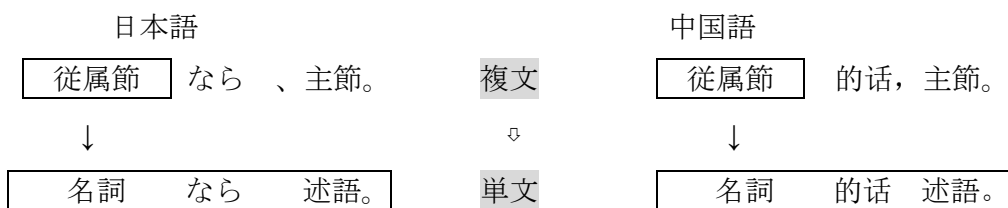
本章では助詞と仮定表現の融合形式の文法化について考察を行った。特に仮定表現と提題助詞とが結合した日本語「(の)なら」と中国語“的话”について対照した。

まず提題助詞との連続性から日本語「なら」と中国語“的话”の文法化について分析し、両形式は接続機能と提題機能を兼ねる形式であることが明らかとなった。その上で、「(の)なら」構文と“如果(说)……的话,……”構文の対照を行った。結論として、「なら」構文と“如果……,……”構文、「のなら」構文と“如果(说)……的话,……”構文が対称関係をなすことを論証した。

次に、次に、仮定表現と文末助詞との連続性の部分については日本語「ば・たら」の終助詞的機能と中国語“就是(了)”について対照を行い、変化のプロセスは異なるが、両言語ともに構造の変化が単文化を引き起こしたことを明らかにした。

助詞との融合からの文法化が成立した理由の一つとしては、構造上の変化が考えられる。日本語においては、従属節の接続助詞と主節の述語が融合が先に発生しており、従属節と主節にまたがる変化であるのに対して、中国語においては、主節だけに起る変化だと言える。結果としては、もとの複文の構造が崩れて単文の構造となる。提題助詞と融合した「なら」と“的话”の文法化プロセス、助詞と融合した日本語「ば(いい)」と中国語“就是(了)”の文法化プロセスにおいては、それぞれ次のようにまとめられる。

(194) 文頭における日本語「なら」と中国語“的话”の単文化<sup>161</sup>



(195) 文末における日本語「ば/たら」と中国語“就是(了)”の単文化



<sup>161</sup> この枠を付けることは、謝 (2006) 等からヒントを頂いた。

## 第 10 章 考察

これまで、機能拡張と文法化の観点から日中両言語の仮定表現の類似点と相違点をまとめた。具体的には、第 5 章と第 6 章では機能拡張の観点から、第 8 章と第 9 章では文法化の観点から、日本語と中国語の仮定表現を対照研究を行ってきた。日本語においては、仮定から非仮定へ、中国語においては非接続から接続へ、という両言語の差異が見られた。これは文法化の種類の違いから説明できると考えられるが、これについては 10.1 で考察する。つづく 10.2 では、両言語に共通している指示詞 (第 8 章) や助詞 (第 9 章) との文法化現象を構文上の類似性から検討し、さらに文法化が起こるメカニズムや変化を起こさせる原因について 10.3 で考えていきたい。最後に 10.4 でこれらの類似点と相違点をもたらす要因について簡単に考察する。

### 10.1 文法化の種類

異なる言語が必ずしも同じ種類の文法化を起こすわけではない。小柳 (2018) では文法化を四種類に分けている。

(196) 文法化の種類：

I類：もともとある形式が、もともとあるがその形式が表してはいなかった意味を新たに表すようになる。

II類：もともとある形式が、新たな意味を表すようになる。

III類：新たな形式が、もともとある意味を表すようになる。

IV類：新たな形式が、新たな意味を表すようになる。

(小柳 2018: 211)

この四種類は次の表 10-1 のようにまとめられる。

表 10-1 文法制度化<sup>162</sup>の種類

	もともとある意味	新たな意味
もともとある形式	I類	II類
新たな形式	III類	IV類

(小柳 2018: 222)

<sup>162</sup> 小柳 (2018: 208-211) では、言語変化の共時的側面と通時的側面を区別するために、共時的言語変化を「文法制度化」、通時的言語変化を「文法化」と区別している。本研究は特に両者を区別しないが、小柳の説を引用する際、原文の言い方をそのままにしておく。

そして、それぞれの類の具体例を以下のように挙げている。

(207) 文法化の種類具体例

I類：副助詞「だに」の拡張。上代では「だに」は、成立の蓋然性の高い事態が予想に反して成立しないことを表しており、否定述語と呼応している。一方、事態の成立と関わり、肯定述語と呼応する副助詞は、上代では「すら」がある。しかし、中古になると、肯定述語と呼応することができるようになっており、予想に反する事態の成立を表すこともできるようになった。つまり、「すら」の機能を備えるようになり拡張していると見られる。

II類：終止形接続の「なり」はもともと、音や声による聴覚的な事態の把握を表すことから、知覚したことを生じさせた事態の背後にある別の事態を推定を表すようになる文法化である。

III類：副助詞「しか」は否定と呼応して対象を限定する意味は、もともとある「よりほか」「ほか」から由来する。これについては、小柳 (2018) は文法化の種類IIIに入れたが、小柳 (2008: 218) は「しか」の語源ははっきりと判断できず、I類の事例になる可能性もあると述べている。

IV類：受益の主体敬語「てたぶ」の文法化である。中古までは、発話者が利益を受けるか否かにかかわらず、複合動詞後項「たまふ (→たぶ)」が使われていたが、中古になると、「てたぶ」という新しい形式で受益の場合に専用されるようになる。

(小柳 (2018: 210-220) に基づきまとめたものである。)

日中仮定表現の機能拡張に現れる差異は、小柳 (2018) で示されている文法化の種類の違いから説明できる。仮定表現の発達から見れば、日本語では「もともとある形式」(仮定表現「ば」「たら」「なら」) が新たな機能に拡張して「新たな意味」をもつという文法化II類が優勢である。これに対して、中国語では「もともとある意味」(仮定の意味) を表すために「新たな形式」を増やすという文法化III類が優勢である。日本語と中国語の文法化の種類の違いを明示できるように第7章の表7-2を修正すると、表10-2のようになる。中国語の場合は、「もともとある意味」(仮定の意味) を表すために「新たな形式」を増やし、「那么」、「的话」、「呢」、「么」は仮定表現として使われるようになっている。その過程を日本語の「ば」「たら」「なら」が他の機能をもつようになる

過程と区別するために、「'」を付け加えた。

表 10-2 日中仮定表現の機能拡張と文法化の種類

日本語		中国語	
II類: もともとある形式 ( <u>仮定の意味</u> のば・たら・なら) → 新たな意味 ( <u>非仮定の意味</u> )		III類: 新たな形式 (様々の <u>非仮定の意味</u> ) → もともとある意味 ( <u>仮定の意味</u> )	
ば・たら-3/4	多機能化 1A (仮定→非仮定)	“呢”、“么”	多機能化 1A' (非仮定→仮定)
		“就是了”	
なら-2	付属的機能語→付属的機能語	“的话”	付属的機能語→付属的機能語
ば・たら-2 なら-3/4	多機能化 1B (仮定→非仮定) 付属的機能語→自立的機能語	“那么”	多機能化 1B' (非仮定→仮定) 付属的機能語→自立的機能語
		“就”	多機能化 2A' (非仮定→仮定) 自立的機能語→付属的機能語

表 10-2 からわかるように、日中両言語の文法化の種類が異なるにもかかわらず、多機能化 1 が両言語に共通している。このような類似した機能拡張が発生する理由の一つとして、構文上の類似した位置関係があるのではないか。つまり、文中の位置の類推によって機能拡張を起こしたのではないかと考えられる。このことについて、次節から詳しく考察する。

## 10.2 構文上の類似性

Lehmann は 1982 年文法化のパラメータを連合関係と統合関係の 2 方面から提示し、その中で統合関係は構文と関わりとみられるとした。文法化の程度を測る基準としては、形態統語的な要素と関わっている。文法化は音韻、意味機能、統語機能など多くの面に現れるが、その一方で、音韻上の変化 (音の縮約)、意味・機能変化、構文位置の変化なども文法化をもたらすと考えている。Lehmann (2015: 178) では “functionally similar

paradigms may be compared as to their degree of grammaticality at the cross-linguistic level.”(引用者訳: 機能的に類似したパラダイムは、通言語的にその文法性の程度を比較することができる。)との主張からみれば、本研究で第8章と第9章で対照した文法化が進んでいる日本語と中国語の仮定表現の文法化の程度については比較することができるのではないかと推測される。

日本語と中国語の機能拡張において多機能化 1A と多機能化 1B という主要なプロセスを共有していることは、構文の類推によって説明できると考えられる。多機能化 1A は付属的機能語の枠内の機能変化のことであり、第5章と第6章の機能拡張の観点から両言語の仮定表現を分析した結果からみると、日本語においては、接続助詞から提題助詞や終助詞への変化の類にあたる。多機能化 1B は付属的機能語から自立的機能語への変化のことであり、主に接続助詞から接続詞への変化にあたる。まず、多機能化 1A から見ていく。

日本語の仮定表現「ば・たら・なら」はいずれも文頭に置くことができ、提題用法として使われることを第5章で確認した。これらは節と節を繋ぐ文中の位置から前節が節の機能を失ったことから文頭の句の位置に移り、機能拡張を遂げた。一方、中国語においては、“的话”の提題機能から接続機能への機能拡張が確認されたが、これらには共通している構文関係が見られる。つまり、図10-1に示したように、仮定表現と提題助詞は文中の位置が類似しているため、前節が節としての機能を失えば提題機能をもちやすくなるが、前節が節としての機能を残せば仮定表現として機能すると考えられる。中国語では、もともと名詞のみだったものが節となることにより、提題助詞“的话”が仮定表現になっている。逆に日本語では、もともと節をなしていたものが名詞のみになって単文化され、もともとの仮定表現が提題助詞となっている。すなわち、日中両言語では仮定表現と提題助詞とは拡張の方向性が逆である。

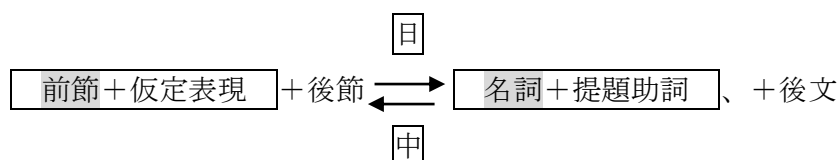


図 10-1 提題助詞と仮定表現の構文上の類似性<sup>163</sup>

<sup>163</sup> この枠を付けることは、謝 (2006) 等からヒントを頂いた。以下も同じである。

終助詞と仮定表現の文中における位置にも類似性が見られる。図 10-2 に示すように、日本語の仮定表現は、固定化した複文形式が慣用化し、後節が省略されることで、仮定表現が終助詞機能を獲得するようになった。これに対して、中国語では同じようなプロセスで成立した“就是了”が見られるが、“呢”などのように、中国語の終助詞が文中に移り、仮定表現機能をもつようになるというもう一つのプロセスも見られる。

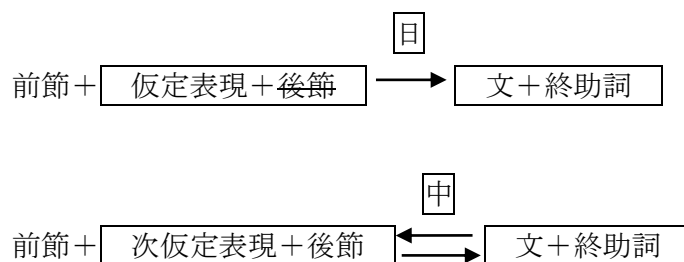


図 10-2 終助詞と仮定表現の構文上の類似性

さらに、接続詞と仮定表現の構文上の類似性は以下の図 10-3 で示すことができる。日本語の場合は、「そうしたら→そしたら」のように、仮定表現と前節が一つの句に融合して、それに音声的な脱落が加わり独立した接続詞機能を帯びるようになる。これと同様に、中国語の場合は、“那”のように、主節に置かれる仮定表現が独立して接続詞になるという文法化プロセスが進んでいる。これらの接続詞は指示詞と深く関わっている。これは、前節あるいは前節の一部がその指示対象であり、指示詞が前後節を繋ぐ働きをもつため、前後節を繋ぐ働きの接続詞と機能が共通するためであろう。

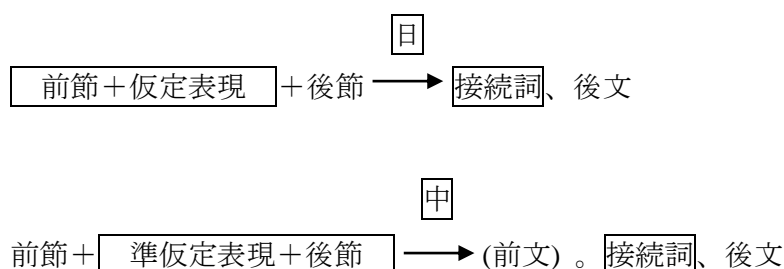


図 10-3 接続詞と仮定表現の構文上の類似性

Himmelmann (2004: 32-33) は文法化過程では“change of syntactic context” (引用者訳: 統語的文脈変化) の発生が伴うと提示し、“the larger syntactic context in which the

construction at hand is used may change” (引用者訳：使用されている構文のより大きな統語的文脈が変化する可能性はある) と説明している。つまり、文法化が進んでいるうちに、構文上の変化が起こり、それによって意味機能の転化をもたらすことは十分考えられる。

### 10.3 融合をもたらした脱文(節)化

Hopper and Traugott (1993) は、文法化を起こさせるメカニズムとして「再分析」と「類推」を挙げている。また、「融合」について「最もわかりやすく、よく文法化に見られる再分析の一つに、融合がある。」(Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 53) )として、「語や形態素の境界を越えて、二つあるいはそれ以上の形式が一つになる現象である。」(Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 53) )と述べている。融合は再分析の下位分類であり、文法化のメカニズムを解明する際によく使われる。本稿で議論した仮定表現と指示詞の融合によって仮定関係を表す接続助詞から接続詞へ(日本語「そうしたら」、「それなら」や中国語“那么”)の文法化を起こしたり、仮定表現と助詞の融合によって仮定関係を表す接続助詞から提題や文末の語気を表す助詞へ(日本語「(の)なら」、文末の「ってば」「ったら」や中国語“的话”、“呢”)の文法化を起こしている。これらはすべて再分析の一種であり、融合という文法化のメカニズムが働いている。仮定表現の日中両言語の文法化現象からみれば、複文を繋ぐ接続表現が融合を通して接続機能を失い、複文の形を崩していることが観察された。Lehmann (1988: 3) は節の連結の類型を検討する際の一つの類型として、“the desententialization of the subordinate clause” (従属節の脱文化)、すなわち従属節としての性質を失うことを挙げている。本研究で見た仮定表現の機能拡張や文法化も融合と深く関わっていると考えられる。これまで見てきた表 10-3 の表現がどのように融合を介して文法化したのかを検討する。

表 10-3 融合を介した日中両言語の仮定表現

日本語	中国語
そうしたら／そしたら／それなら	那么
なら／のなら	(如果……) 的话, ……
文末ば／たら (いい)	就是了

日本語の「そうしたら」と「そしたら」と「それなら」は指示詞とともに使用するこ

とで節ではなくなり、接続詞として機能するようになる。中国語の“那么”も似ている。“那么”は後節の頭に置かれており、前節の“如果”、“要是”などと呼応して仮定関係を表す。“那么”はもともと指示性と接続性の両方の機能をもっているため、文頭で独立して使用されるようになる。このプロセスは、前節が節でなくなり単文になったように見える。「なら」と「のなら」については、「なら」の前接形式と関係している。名詞に後接する形式なので、「名詞+である+なら」が多用されている。そのうち、「である」が省略され「なら」だけになっている。一方、「のぞ+なら」で構成される「のなら」は「のだ」と「なら」が融合した形式であり、構造助詞“的”と名詞“话”の融合によって成立する中国語の“的话”と似ている。「(の)なら」と“的话”のように、前節が節ではなくなり語だけとなる脱節化は少なくない。

もう一つは、文末における「ば」と「たら」の文法化プロセスである。「ば/たら」は形容詞「いい」「よろしい」などと共起することが慣用化して、「ばいい」「たらいい」のように融合する形になっている。その後さらに形容詞が脱落して「ば/たら」が終助詞的機能を担う。つまり、主節の節としての性質がなくなり、複文が単文化している。中国語の“就是了”も終助詞的機能を獲得する際には、類似のプロセスを経ている。

以上をまとめると、日中両言語の仮定表現は機能拡張と文法化において、他の文成分との融合が重要な動機づけであることがわかる。さらに、仮定表現で繋がれる前後節はどちらかが節ではなくなる脱節化がその文法化を起こさせる誘因の一つであろう。

10.2 と 10.3 の節では、これまで観察した日本語と中国語における仮定表現の文法化した動機づけを確認した。再分析や融合が文法化の動機づけであると広く知られているが、第 8 章と第 9 章の日本語と中国語の仮定表現の文法化の実例から観察できた。

#### 10.4 日本語と中国語の文法化の相違点と類似点はどこから起こるのか

本節では、10.1 と 10.2 でのべた相違点がなぜ起こるのかについて、また 10.3 でのべた類似点がなぜ起こるのかについて推察する。

10.1 で確認したように、小柳 (2018) で示されている文法化の種類の違いが日中仮定表現の文法化の特徴の違いに関係する。日本語においては仮定表現の「ば」「たら」「なら」が「新たな意味」に拡張するという文法化Ⅱ類が優勢を占める。これに対して、中国語においては仮定という意味を表すために「新たな形式」を増やすという文法化Ⅲ類が優勢である。この相違は日本語と中国語が異なる言語類型であることによると推論す

ることが可能ではないかと考えられる。日本語は膠着語、中国語は孤立語<sup>164</sup>であると言われる。この言語類型は言語に多くの面に影響を与えているが、文法化の相違もその影響を受けていると言える。日本語は述語を後置する言語であり、述語に豊かな語形変化をもっている。仮定表現は述語に後接する変化形式であるため、統語的に述語の後ろに置かれる。これによって、日本語の仮定表現の文法化は制約を受ける。日本語の仮定表現の文法化は、「ば」「たら」「なら」という形式が他の意味や機能に拡張するという形式の意味発達が起こる。これに対して、中国語は述語が文中に置かれる言語であり、述語は語形変化をもたない。仮定表現の文中の位置は節頭（従属節と主節の頭<sup>165</sup>）か節末かであるため、中国語では、仮定という意味を表すために「新たな形式」を増やすという、意味の形式発達が起こる。このような理由によって、日本語の「(つて) ば・たら・なら」は接続機能から提題機能、終助詞的機能などへ変化し、中国語の仮定表現には新たに“的话”や“呢”などが入ってきたと考えられる。

このように、日本語と中国語は異なる文法化の種類に属してはいるにもかかわらず、関連した通言語的な特性をもっている。このような共通的特性ゆえ、日本語「ば」と「たら」は仮定接続機能から終助詞的機能への文法化、中国語“呢”などは次仮定表現への文法化が生じた。また、日中両言語の仮定複文は従属節が前置、主節が後置するという共通の構造を有するために、仮定機能と話題提示機能を兼務する表現ができた。仮定的条件が実現した後に結果が出ることから考えれば、これは「時間性」とも言える。現実世界において、まず動作があって、そのあとに結果が出るという、生起順に文を並べることがよくある。そして、仮定的条件が実現し前提となった場合に、これが話題として前置される。これが話題提示機能である。このような構造環境が文法化の発生の機会に繋がったと推測できる。

つまり、日本語と中国語は言語構造が異なることが、文法化の種類の違いをもたらしているが、その一方で、仮定文に含まれる意味機能が似ているため、日中仮定表現の文法化には類似のプロセスが存在している。Hopper and Traugott (1993)、日野訳 (2003: 26-27) や小柳 (2018: 40-51) で述べられたように、文法化は類型論的に考えられることを通してより多くの文法化現象や一方向性仮説の妥当性の証拠を提供できる。

---

<sup>164</sup> Comrie (1989) 著、沈・罗訳 (2010: 60) では、Humboldt は Schlegel の基に、言語を孤立語、膠着語、屈折語、総合語という四つの類型を設けたという。

<sup>165</sup> 加藤 (2014: 504) ではこのような節頭に標示を行うタイプの言語を「前置詞型の言語」と呼んでいる。一方、日本語は節末に標示を行う節の右方型言語であると主張している。もちろん、これは言語を単純化して考える「典型例」であるとも示唆している。

## 第 11 章 結 論

### 11.1 本研究の要約

従来、日本語ではいわゆる「条件表現」について数多くの研究が行われてきた。同様に、中国では 1900 年代に複文の研究が盛んになり、現在でも毎年 2、3 冊の複文に関する研究書が出ている。このように個別の言語の研究は盛んに行われているのに対して、日中両言語を対照する研究は遅れていると言わざるをえない。本研究では、日本語の「条件表現」の中の「順接・仮定」条件文の表現、中国語の複文中の狭義仮定複文の表現を合わせて「仮定表現 (仮定関係を表す接続表現)」と呼び、これら仮定表現の日中両言語における類似点と相違点を共時的および通時的文法化の視点から分析を試みた。

本研究は、主に共時的と通時的文法化の観点から日中両言語の仮定表現の類型や機能を明らかにした上で、両言語の類似点と相違点をまとめる。ここで、第 1 章 1.2 節で示した研究課題を再び挙げてみよう。

1) 仮定条件的接続表現として広く認められている「たら」は仮定関係を表す用法の外、他の用法も持ち多機能性を有している。このように、二つ以上の意味・機能が一つの形式で表現されるようになるのはなぜか。つまり、その動機づけはどこにあるのかを明らかにしたい。また、同じ仮定条件の形式「ば」「たら」「なら」は同様の多機能性をもっているのか。

2) 中国語において一般に仮定関係を表す表現と見られるのは“如果”、“要是”、“的话”、“就”などであるが、これらの表現は連詞 (“如果”、“要是”、“若”)、助詞 (“的话”)、副詞 (“就”) というように、品詞が異なるにもかかわらず、中国語ではよく仮定関係を表す接続表現として扱われている。それぞれ異なる品詞の表現がどのようなプロセスを経て仮定的意味・機能をもつようになったのか。

3) 日本語と中国語における仮定表現の文法化にはどのような類似点と相違点があるのか。また、それはどのような理由によるのか。

以上 3 つの課題をめぐって本研究を通して具体的にどの程度明らかにできたか、各章の考察を要約し、結論を述べる。

第 1 章では、本研究の背景、研究対象と用語、目的について述べた。日中両言語の仮定表現の対照研究は手薄であるという問題意識を出発点とし、両言語における仮定関係

を表すそれぞれの接続表現の機能および使用範囲を分析し、それをもとに機能拡張における対称・非対称、対応・非対応を明らかにした。

第2章では、本研究で援用した認知言語学および文法化に関する理論的背景を概観した。

第3章では、先行研究を概観し、本研究の研究課題を明らかにした。まず、日中両言語の複文研究における本研究の研究対象である「假定複文」の位置づけを確認した。日本語では、複文を分類する際に、形式、構造、意味という三つの観点から行われるのに対して、中国語では意味上からの分類しか見られなかった。それぞれの言語中における複文の分類を明らかにした結果、日本語の「順接・假定」条件文と中国語の「假定複文」とが対応関係をもつことが判明した。次に、これを前提として、両言語の假定表現に関する先行研究および対照研究に関する従来の研究を整理し、先行研究では十分な議論が行われていない点を明らかにした後、本研究の研究課題を提示した。

第4章は本研究で利用したコーパスとデータ収集方法について説明した。

第5章以降が本論である。まず、第5章は日本語の假定表現に関するものである。假定表現の日本語複文における構造上の特徴を見た後、假定表現「ば」「たら」「なら」の機能拡張とそのプロセスについて議論した。「ば」「たら」「なら」のような假定関係を表す代表的な接続表現は、非仮定的用法からの発達と見なすことができるが、その過程で終助詞的機能、接続詞的機能が発達する様子を明らかにした。課題1への解答としては、假定条件の形式「ば」「たら」「なら」は仮定的接続機能と終助詞的機能や接続詞的機能、多機能性をもっていることが明らかである。これらの多機能性を起こす理由としては文中の位置の変化や語彙の融合によることが挙げられる。

第6章は中国語の假定表現に関するものである。第5章の日本語假定表現のまとめと同様に、假定表現の中国語複文における構造上の特徴を見た。その後、中国語の假定関係を表す接続表現に関する機能拡張では、非接続表現が接続関係を表すようになるプロセスをとることを確認した。これは日本語と異なる中国語の特徴であり、本研究では假定表現の出現状況や文中の位置関係などの差異によって「假定表現」「準假定表現」「次假定表現」の三種に類別した。このようにして、中国語では異なる品詞が3種類の假定表現を生み出すに至った。これが、課題2への解答である。

第7章から第10章では、研究課題3に取り組むべく日本語と中国語の文法化の類似点・相違点、さらにその理由について考察を進めた。第7章では、第5章と第6章の結果に基づいて、両言語における假定表現の共時的文法化の類似点と相違点を述べた。小柳

(2018) の文法化と多機能化の議論に基づいて、日中両言語の假定表現に関する機能拡張の異同を提示し、さらに、その点について両言語が非対応関係になっていることを明らかにした。

第 8 章は指示詞と假定表現の融合形式の文法化についての考察である。まず、日本語と中国語における假定表現の中に指示詞を含むものを抽出し分析した。日本語においては「そうしたら」「それなら」などの指示詞を含む接続表現が成り立つのに対して、中国語では接続機能と指示機能とを同時に備える準假定表現“那”、“那么”が存在している。さらに、具体的な標識、日本語「そうしたら」と中国語“那么”について対照することで、日本語「そうしたら」「そしたら」と中国語“那”、“那么”それぞれの間の差異を示した。日本語「そうしたら」には指示詞「そう」の性格が残っており、前文への意識が「そしたら」より強い。その一方で、「そしたら」は「たら」の接続機能を強く残しており、前文と後文を接続する機能が強い。すなわち、「そしたら」については継起性が「そうしたら」より強い。中国語“那”と“那么”も相似の様相を呈する。“那”は指示性と接続性を備えるが、相対的に指示性が強い。これは“那”の指示対象である前文を後文に持ち込むことで、前文の内容が焦点として表現されるためである。また“那么”は「そしたら」と類似しており、接続性が強い。日本語と中国語の相違については、以下のように考えることができる。日本語では、「そうしたら」では指示機能と接続機能をいずれも完全に保持しているのに対して、「そしたら」では指示機能部分「そ」が短縮化されているため相対的に指示機能が弱まり接続機能が強い表現となっている。一方、中国語では、“那”が指示機能と接続機能をもともと備えている上に、“那么”では“么”が加わることでさらに接続機能が強化されることで接続性が強い表現になっている。このように、日本語と中国語の文法化のプロセスの違いが、日本語と中国語の相違を生み出していると考えられる。

第 9 章は助詞と假定表現の融合形式の文法化についての考察である。具体的に提題助詞と文末語気助詞(終助詞)に分けてそれぞれ見た。まず、假定表現と提題助詞とが結合した日本語「(の)なら」と中国語“的话”について対照した。話題提示機能と接続機能を兼ねる日本語「なら」と中国語“的话”それぞれの文法化プロセスを明確化した。その上で、「(の)なら」構文と“如果(说)……的话,……”構文の対照を行った。結論として、「なら」構文と“如果……,……”構文、「(の)なら」構文と“如果(说)……的话,……”構文が対称関係をなすことを論証した。假定表現と文末助詞との連続性の部分については日本語「ば・たら」の終助詞的機能と中国語“就是(了)”について対照を行っ

た。假定表現と助詞との融合による文法化はもとの複文の単文化がその要因の一つと考えられる。

第10章では、これまでの章で行った議論を踏まえ、日本語と中国語の假定表現の機能拡張と文法化の類似点と相違点について統合的観点から考察を行った。日本語と中国語は異なる文法化の類型に属しているため、日本語においては形式の假定から非假定へ、中国語においては非接続表現から接続表現への拡がり成り立つ。また、異なる文法化の類型の両言語が類似の文法化プロセスを経ていることからみると、構文上の類似性が要因の一つと考えられる。融合ももう一つの誘因であると見られる。融合を介して複文における假定表現の機能が弱くなり、他の機能へ転じるとともに、もとの複文の形が崩れて脱文(節)化していると考えられる。

## 11.2 本研究の意義

以上の本研究の目的と要約をもとに、本研究の意義は以下の4点にまとめられる。

第1に、大規模コーパスを用いて収集したデータ用例を観察することで、日本語・中国語の假定表現を抽出し、類型化した点である。

第2に、コーパスを用いたデータを質的量的に分析することで、現代日本語における「ば」と「たら」と「なら」それぞれの機能拡張を明らかにした点である。「ば」と「たら」は類似した拡張をしており、主に接続助詞から文末の終助詞、また「名詞や終止文に直接接続する」ように拡がってきており、「なら」は「名詞に接続する」場合は「たら」と同様に発展しているが、それに加えて「文頭用法」(「接続詞的機能」)も観察された。このように假定関係を表す代表的な接続表現が非仮定的用法へと機能拡張している様子が確認された。一方、中国語の假定表現の機能拡張については、「非假定関係」を表す接続表現が仮定的機能を帯びてきており、それは「準假定表現」や「次假定表現」に位置付けることができた。つまり、日本語の假定表現が一定の方向で「終助詞」や「接続詞」などの假定以外の機能に拡がっているのに対して、中国語では非假定関係を表す表現が假定機能への拡張に止まることが、両言語の異なる点であることを指摘した。

第3に、日中両言語における假定表現の文法化の対応関係を示した点である。假定表現の発達から見れば、日本語は「もともとある形式」(假定表現「ば」「たら」「なら」)が「新たな意味」に拡張する、つまり小柳(2018)が指摘する文法化Ⅱ類に合致した。これに対して、中国語では「もともとある意味」(假定という意味)を表すために「新たな形式」を増やすという文法化Ⅲ類に合致した、と両言語の間にある相違点を明らかにし

た。

第4に、仮定表現の類型化の試みを行った点である。日中両言語の仮定表現は「指示詞」、「助詞」という連続性を有する。このことについては、言語類型論研究で言語的現象だとの見解も提出されている。本研究ではその一角を掘り下げることをも意図して、日中両言語の仮定表現と「指示詞」「(提題と文末)助詞」との関係を示した。

### 11.3 今後の課題

本研究の結びとして、残された課題を述べる。

第1に、本研究で用いられるデータは、主に『中日対訳コーパス』に収集されている文学作品を中心としたものであるため、そこでの用法はあくまで小説の作者が創出したものであり、実際の会話における用法とは異なっている可能性も考えられる。例えば、本研究で「ったら」について、「提題機能」「行為要求機能」「仮説機能」など語用論的強化によって得られる用法を提示したが、これらが実際の会話中でどの程度使用されるかについては、『日本語日常会話コーパス』や『北京大学現代漢語コーパス』の口語資料も使ったが、それを中心としての分析は行っていない。実際の会話を中心として日中対照研究を行うことは今後の課題である。

第2として、中国語“那”、“那么”に関する歴史的変遷への考察が不足していると思われる。両語の起源や用法の相違等を一步進めて明らかにすることが課題となろう。

第3は、研究対象の拡大という問題である。本研究では、日本語「ば」とその分化形式の「たら」「なら」を抽出して中国語と対照した。今回の研究結果を端緒として、今後、「と」をも対象に入れつつ両言語の仮定表現を全体的に把握していくことを目指したい。

第4として、「そうしたら」「そしたら」と“那”、“那么”の差異についてさらに掘り下げて検討したい。今回収集したデータの中に、「そうしたら」「そしたら」の例がいまだ十分とは言えないため、今回の調査結果がどの程度当てはまるかについては、さらに多くの資料を収集し、考察することによって、より明らかになると考えられる。また、今回は『日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を利用した際、ごく一部の小説のコーデータに限定したので、「ってば」用法、「ったら」用法に関する用例数が多く出せなかったが、全データで検索すると異なる結果が見られる、この点も今後検索範囲を広げて詳しく検討したい。

第5として、「ば」と「たら」には「よければ」「よかったら」のような前置き用法が

多くあるが、それについての分析も行う必要がある。中国語にも“可以的话”（可能なら）があり、これらの対照も可能である。これらの表現は談話標識や語用論的標識として扱うことができ、詳しく検討することが必要である。

## 参考文献

### <日本語>

- 相原茂 (1982) 「中国語の複句」『講座日本語学 11 外国語との対照Ⅱ』, pp.240-258, 明治書院.
- 青木博史 (2017) 「「のなら」の成立—条件節における準体助詞—」, 有田節子(編)『日本語条件文の諸相: 地理的変異と歴史的変遷』, pp.139-155, 東京:くろしお出版.
- 秋元実治(編) (2001) 『文法化—課題と研究』 東京: 英潮社.
- 秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 東京: ひつじ書房.
- 秋元実治・尾形こづえ・遠藤光暁・近藤泰弘・Elizabeth C.Traugott (2004) 『コーパスに基づく言語研究—文法化を中心に—』 東京: ひつじ書房.
- 網浜信乃 (1990) 「条件節と理由節—ナラとカラの対比を中心に—」『待兼山論叢』 24, pp.19-38.
- 荒川清秀 (2003) 『一步すすんだ中国語文法』 東京: 大修館書店.
- 有田節子 (1991) 「日本語の条件表現と叙述の特定性という概念についての一考察」『日本語日本文化』 17, pp.97-112.
- (1993) 「日本語の条件文と知識」, 益岡隆志(編)『日本語の条件表現』, pp.41-71, 東京:くろしお出版.
- (1993) 「日本語条件文研究の変遷」, 益岡隆志(編)『日本語の条件表現』, pp.225-278, 東京:くろしお出版.
- (2007) 『日本語条件文と時制節性』 東京:くろしお出版.
- (2017) (編)『日本語条件文の諸相:地理的変異と歴史的変異』 東京: くろしお出版.
- 庵功雄 (1996) 「「それが」とテキストの構造—接続詞と指示詞の関係に関する一考察—」『阪大日本語研究』 8, pp.29-44.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 東京: スリーエーネットワーク.
- 市江愛 (2022) 「日本語学習者のモシの使用に関する一考察—KY コーパスにおける学習者の第一言語・習熟度別の違いに着目して—」『国立国語研究所論集』22, pp.125-136.
- 伊藤晃 (2001) 「接続表現としての「それも」—情報付加のあり方と文法化の可能性—」『立命館文学』 568, pp.307-333.
- 伊藤勲 (2005) 『条件法研究—いわゆる接続助詞をめぐって—』 東京: 近代文芸社.

- 井上優 (2002) 「言語の対照研究」の役割と意義, 国立国語研究所(編)『日本語と外国語との対照 X 対照研究と日本語教育』, pp.3-20, 東京: くろしお出版.
- (2003) 「文接続の比較対照—日本語と中国語—」『言語』 32(3), pp.54-59.
- 于飛 (2010) 「日本語助詞「の」と中国語助詞「的」の比較対照研究—連体修飾構造と用法—」『人文研究』 172, pp.81-114.
- 遠藤織枝 (1978) 「条件を表わす「ば」「たら」「なら」について」『東海大学紀要 留学生別科』 2, pp.1-13.
- 王琪 (2019) 『逆接関係を表す表現に関する日中対照研究:文法化の観点からの分析を中心に』九州大学博士論文.
- (2020) 「逆接接続表現「けど」と「でも」の通時的変化についての一考察—文法化の観点から—」, 松村瑞子・山崎和夫・因京子(編著)『語用論研究の可能性』, pp.177-186, 東京: 朝日出版社.
- 大河内康憲 (1986) 「中国語の文と句の連続」『日本語学』 5(10), pp.67-75.
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』東京: ひつじ書房.
- 太田辰夫 (1958) 『中国語歴史文法』京都: 朋友書店.
- (1988) 『中国語史通考』東京: 白帝社.
- 大野剛・キンベリー・ジョーンズ (2005) 「文法規則の使用と形式の選択の実際:会話における「条件節」の観察から」, 南雅彦 (編)『言語学と日本語教育』 4, pp.73-85, 東京: くろしお出版.
- 大橋浩 (2024) 「言語変化と(間)主観性—認知言語学の立場から—」九州大学英文学会総会講演ハンドアウト, 2024年2月17日.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京: 東京大学出版会.
- (2005) 「日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—」『日本語の研究』 1-3, pp.1-17.
- 小川泰生 (1999) 「日本語と中国語の接続表現—仮定条件を表す「なら」—」『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』 pp.597-616, 岡村貞雄博士古稀記念中国学論集刊行会.
- (2001) 「中国語と日本語の接続表現—条件表現を表わす「たら」—」『中國學研究論集』 8, pp.97-112.
- (2003) 「日本語と中国語の接続表現—条件を表す「ば」—」『言語文化研究』 28, pp.87-103.
- 小野米一・巴壘維 (1983) 「条件表現「と」「ば」「たら」「なら」の異同について—中国

- 人学習者のために—」『北海道教育大学紀要』 1-A34-1, pp.13-23.
- 郭春貴 (1996)「假定複文における関連副詞“就”について」『広島修大論集—人文編—』 36-2, pp.59-83.
- 加藤重広 (2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京: ひつじ書房.
- (2008)「日本語の品詞体系の通言語的課題」『アジア・アフリカの言語と言語学』 3, pp.5-28.
- (2014)「日本語の語用特性と複文の単文化」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編), pp.495-520, 東京: ひつじ書房.
- 加藤陽子 (2003)「日本語母語話者の体験談の語りについて—談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機—」『世界の日本語教育』 13, pp.57-74.
- 河上誓作 (1996)『認知言語学の基礎』 東京: 研究社.
- 川端良子・伝康晴 (2018)「会話における「そうしたら」と「そうすると」の出現状況—『日本語日常会話コーパス』を題材に—」『国立国語研究所論集』 16, pp.1-18.
- 木村英樹 (2012)『中国語文法の意味とかたち—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—』 東京: 白帝社.
- 許夏玲 (2010)『意味論と語用論の接点からみる話し言葉の研究』 東京: 白帝社.
- 金水敏・田窪行則 (1992)『日本語研究資料集 指示詞』 東京: くろしお出版.
- 金水敏 (1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』 6(4), pp.67-91.
- 金水敏・高田博行・椎名美智 (2014)『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』 東京: ひつじ書房.
- 久野暉 (1973)『日本文法研究』 東京: 大修館書店.
- グループ・ジャマシイ(編著) (2023)『日本語文型辞典』(改訂本) 東京: くろしお出版.
- 元春英 (2010)「会話の文末における「—たら」「—ば」の終助詞的用法—発話行為と対人関係から—」『言葉と文化』 1, pp.199-216.
- 小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修 (編) (2003)『応用言語学事典』 東京: 研究社.
- 江田すみれ (2005)「主題の「なら」の表現する内容について」『日本女子大学紀要』 54, pp.1-11.
- 国立国語研究所 (1951)『現代語の助詞・助動詞:用法と用例』 東京: 国立国語研究所.
- (1964)『現代雑誌九十種の用語用字 (3) 分析』, pp.147-160, 東京: 国立

国語研究所.

小林賢次 (1969)「条件表現形式としての「なら」「たら」の由来」『国文学言語と文芸』54, pp.22-35.

——— (1996)『日本語条件表現史』東京: ひつじ書房.

小柳智一 (2018)『文法変化の研究』東京: くろしお出版.

三枝令子 (1999)「提題の「ってば」「ったら」—「珠美ったら、無茶言わないでよ」—」『一橋大学留学生センター紀要』2, pp.1-11.

阪倉篤義 (1958)「条件表現の変遷」『国語学』33 (『日本語の表現の流れ』1993 再録) pp.85-108.

坂原茂 (1993)「条件文の語用論」, 益岡隆志 (編)『日本語の条件表現』, pp.185-201, 東京: くろしお出版.

佐久間まゆみ (2002)「接続詞・指示詞と文連鎖」, 野田尚史ほか (編)『日本語の文法4 複文と談話』, pp.117-189, 東京: 岩波書店.

佐治圭三 (1991)「接続詞の分類」『日本語の文法の研究』 pp.281-301, 東京: ひつじ書房(『月刊文法』2(12), 1970年初載)

志賀正年 (1960)「「的話」に関する若干の考察」『中国語学』101, pp.1-8.

島弘子 (1993)「助言の表現「～たらどうですか」「～すれば?」を巡って—ポライトネスの観点から—」『金沢大学留学生教育センター紀要』, pp.13-23.

下地早智子 (2004)「中国語の条件表現」『神戸外大論叢』55(1), pp.53-69.

白川博之 (1991a)「「テ形」による言いさしの文について」『広島大学日本語教育学科紀要』1, pp.39-48.

白川博之 (1991b)「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要』2(39), pp.249-255.

白川博之 (1995)「タラ形・レバ形で言いさす文」『広島大学日本語教育学科紀要』5, pp.33-41.

白川博之 (2009)『「言いさし文」の研究』東京: くろしお出版.

謝福台 (2006)「接続助詞「シ」の意味・機能—並列からいわゆる原因・理由へ—」『日本語・日本文化研究』16, pp. 63-72.

徐一平 (2004)「世界の言語研究所 (15) 北京日本学研究中心 (中国)」『日本語科学』15, pp.134-138.

徐秀姿 (2020)「陳述副詞「もし」から見る日本語の条件表現」『東アジア言語文化研究』2, pp.11-20.

- 鈴木義昭 (1990)「条件句の日中対照研究—「ば」「たら」「なら」「と」をめぐって—」  
『中国語学研究論集』8, pp.53-73.
- 鈴木義和 (1993)「ナラ条件文の意味」, 益岡隆志(編)『日本語の条件表現』, pp.131-148,  
東京: くろしお出版.
- 曹大峰 (2002)「パラレルコーパスの特徴と可能性研究—中日対訳コーパスの課題を考え  
て—」, 徐一平、曹大峰 (編)『中日対訳コーパスの開発と応用論文集』(《中日対訳  
語料庫的研制与应用研究论文集》), pp.49-60, 北京: 外語教学与研究出版社.
- 桑忠林 (2019)「日本語の条件文による独立従属節」『名古屋言語研究』13, pp.29-43.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) (2011)『歴史語用論入門—過去のコミュニケーション  
を復元する—』東京: 大修館書店.
- 高田博行・小野寺典子・青木博史 (編) (2018)『歴史語用論の方法』東京: ひつじ書房.
- 高梨信乃 (1995)「非節的Xナラについて」, 仁田義雄 (編)『複文の研究 (上)』, pp.167-187,  
東京: くろしお出版.
- 高橋太郎 (1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』12(9), pp.18-26.
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈 (2005)『日  
本語の文法』東京: ひつじ書房.
- 高橋光子 (2016)「言語変化と文法化についての一考察」『流通経済大学社会学部論叢』  
27(1), pp.45-65.
- 高山善行・青木博史(編) (2010)『ガイドブック 日本語文法史』東京: ひつじ書房.
- 田中寛 (1992)「条件表現と発話機能—慣用的側面をめぐって—」『講座日本語教育』27,  
pp. 71-100.
- (1994)「条件表現と基本文型」『日本語学』13(9), pp. 60-73, 東京: 明治書院.
- 田野村忠温 (1990)『現代日本語の文法 I —「のだ」の意味と用法—』大阪: 和泉選書.
- 辻幸夫 (編) (2002)『認知言語学キーワード事典』東京: 研究社.
- 角田三枝 (2004)『日本語の節・文の接続とモダリティ』東京: くろしお出版.
- 坪本篤朗 (1993)「条件と時の連続性—時系列と背景化の諸相—」, 益岡隆志 (編)『日本  
語の条件表現』, pp.99-130, 東京: くろしお出版.
- 鄭亨奎 (1992)「条件の接続表現の研究—中国語話者の学習者の立場から—」『日本語教  
育』79, pp.114-125.
- 寺村秀夫 (1981)「条件の表現」『日本語教育指導参考書 日本語の文法 (下)』, pp.65-79,  
東京: 国立国語研究所.

- (1984)『日本語のシンタクスと意味 II』東京: くろしお出版.
- (1992)「連体修飾節のシンタクスと意味」『寺村秀夫論文集—日本語文法編—』, pp.157-320, 東京: くろしお出版.
- 鳥井克之 (2004)「再論 中国語の複文について—新しい中国語教学文法の再建築を目指して—」『外国語教育研究』8, pp.75-97.
- (2008)『中国語教学 (教育・学習) 文法辞典』東京: 東方書店.
- 中島悦子 (2007)『条件表現の研究』東京: おうふう.
- 中野友理 (2005)「ナラとノナラ」『北海道大学留学生センター紀要』9, pp.22-38.
- (2010)「話者は「ノダ」文の内容をどう捉えるか—既定性の再考—」『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』10, pp.113-132.
- ナロック・ハイコ (2005)「日本語の文法化の形態論的側面」『日本語の研究』1(3), pp.108-122.
- 名嶋義直 (2007)『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』東京: くろしお出版.
- 新田小雨子 (2007)「因果関係を表す接続表現の日中対照研究」早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008)『現代日本語文法 6 複文』東京: くろしお出版.
- (編) (2009a)『現代日本語文法 5 とりたて 主題』東京: くろしお出版.
- (編) (2009b)『現代日本語文法 7 談話 待遇表現』東京: くろしお出版.
- 日本語文法学会 (編) (2014)『日本語文法事典』東京: 大修館書店.
- 丹羽哲也 (1995)「假定条件と主題、対比」『国語国文』62-10, pp.19-33.
- (2006)「第9章 接続関係と題目—「について言えば」「なら」,(接続助詞の「が」—)『日本語の題目文』, pp.265-288, 大阪:和泉書院.
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002)『日本語の文法 4 複文と談話』東京:岩波書店.
- 野田春美 (1997)『「の(だ)」の機能』東京: くろしお出版.
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001)『日本語文法 セルフマスターシリーズ7 条件表現』東京: くろしお出版.
- 馬場俊臣 (1991)「指示語—文脈指示のコ系・ソ系の使い分けについて—」『語学文学』29, pp.29-37.

- (2006)『日本語の文接続表現—指示、接続、反復—』東京:おうふう.
- 林大(1964)「ダとナノダ」, 森岡健二ほか (編)『講座現代語 6 口語文法の問題点』, pp.282-288, 東京: 明治書院.
- ひけひろし (1985)「「そして」と「それから」」『教育国語』 83, pp.44-53.
- (1986)「接続詞「そこで」「それで」」『教育国語』 86, pp.74-88.
- (1987)「「それで」「だから」「したがって」」『教育国語』 88,pp.46-59.
- 日野資成 (2001)『形式語の研究—文法化の理論と応用—』福岡: 九州大学出版会.
- 平田未季 (2016)「コ系の意味の再分析:指示詞体系における新たな最小の意味的対立」『国立国語研究所論集』 10, pp.19-39.
- 福田嘉一郎 (2006)「条件表現の範囲—古典日本語の接続助詞バをめぐって—」, 益岡隆志 (編)『条件表現の対照』, pp.47-63,東京: くろしお出版.
- 藤城浩子・宗意幸子 (2000)「(ノ) ナラの意味と特徴」『三重大学日本語文学』11, pp.81-92.
- ヘイズ高野園・新里瑠美子 (2001)「条件の接続助詞から談話・対人機能の助詞へ—タラ、ツタラの文法化—」, 南雅彦・アラム佐々木幸子 (編)『言語学と日本語教育 II』, 東京: くろしお出版.
- 堀江薫・プラシヤント=パルデシ (2009)『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—』東京: 研究社.
- 堀江薫・金廷珉 (2011)「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化—機能主義的類型論の観点から—」, 高田博行ほか (編)『歴史語用論入門』, pp.139-207, 東京: 大修館書店.
- 堀江薫 (2014a)「言語類型論・対照言語学の観点から見た日本語複文研究の動向と課題」, 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編)『日本語複文構文の研究』, pp.545-558, 東京: ひつじ書房.
- (2014b)「主節と従属節の相互機能拡張現象と通言語的非対称性」, 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編)『日本語複文構文の研究』, pp.673-694, 東京: ひつじ書房.
- 前田直子 (2002)「複文の類型と日本語教育」, 上田博人 (編)『日本語と日本語教育』, pp.249-272, 東京: 東京大学出版会.
- (2009)『日本語の複文』東京: くろしお出版.
- (2017)「順接条件節「なら」の接続形態」『現代日本語研究』 9, pp.23-29.
- 益岡隆志 (1993)「日本語の条件表現について」, 益岡隆志 (編)『日本語の条件表現』, 東

- 京:くろしお出版.
- (1997)『複文』東京:くろしお出版.
- (2006)「日本語における条件形式の分化一文の意味的階層構造の観点から」  
『シリーズ言語対照第6巻:条件表現の対照』,東京:くろしお出版.
- (2011)「原因理由を表すダケニとタケアッテの分化」『日本語・日本語学研究』  
1, pp.1-12.
- (2013)『日本語構文意味論』東京:くろしお出版.
- 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦(編)(2014)『日本語複文構  
文の研究』,東京:ひつじ書房.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』,東京:くろしお出版.
- 松下大三郎(1930)『改撰標準日本文法』東京:中文館/勉誠社.
- 松本曜(編)(2003)『シリーズ認知言語学入門(第3巻)認知意味論』東京:大修館書店.
- 三尾砂(1942)『話言葉の文法(言語遺編)』帝国教育會出版部(復刊(1995)東京:くろ  
しお出版).
- 三上章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院(復刊『現代語法新説』  
(1972)東京:くろしお出版).
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』東京:大修館書店.
- (1993)『現代日本語文法の輪郭』東京:大修館書店.
- 宮内佐夜香(2014)「「ガ」・「ケレド」類を構成要素とする接続詞の発達について—近  
世後期江戸語・明治期東京語における推移—」,小林賢次・小林千草(編)『日本語  
史の新視点と現代日本語』,pp.620-603,東京:勉誠出版.
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」  
『日本語の研究』1(3), pp.61-76.
- 宮島達夫・仁田義雄(編)(1995)『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』東京:く  
ろしお出版.
- 宮部真由美(2022)「「φなら」の考察—ナラ条件節との関連を視野に入れて—」『国立国  
語研究所論集』22, pp.1-15.
- メイナード・泉子・K.(2008)『マルチジャンル談話論 間ジャンル性と意味の創造』東  
京:くろしお出版.
- 糀山洋介(2002)『シリーズ・日本語のしくみを探る5 認知意味論のしくみ』,東京:  
研究社.

- 梶山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」『シリーズ認知言語学入門 (第 3 卷) 認知意味論』, pp.73-134, 東京: 大修館書店.
- 森岡健二 (1973) 「文章展開と接続詞・感動詞」『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』, pp.7-44, 東京: 明治書院.
- 森田良行 (1967) 「条件の言い方」『講座日本語教育』3, pp.27-43, 早稲田大学語学教育研究所.
- (1980) 『基礎日本語 2』, 東京: 角川書店.
- (1989) 『基礎日本語辞典』 東京: 角川書店.
- 守屋宏則 (1995) 『やさしく くわしい 中国語文法の基礎』 東京: 東方書店.
- ヤコブセン M. ウェスリー (1990) 「条件文における「関連性」について」『日本語学』9(4), pp.93-108.
- 矢島正浩 (2017) 「中央語におけるナラバ節の用法変化」, 有田節子 (編)『日本語条件文の諸相: 地理的変異と歴史的変遷』, pp.115-138, 東京: くろしお出版.
- 山口明穂・秋本守英 (編) (2001) 『日本語文法大辞典』 東京: 明治書院.
- 山口堯二 (1969) 「現代語の仮定条件法—『ば』『と』『たら』『なら』について—」『月刊文法』2(2), pp.148-156.
- (1994) 「条件形式の起源」『日本語学』13(9), pp.18-25, 東京: 明治書院.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 大阪: 宝文館.
- (1936) 『日本文法学概論』 大阪: 宝文館.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 楊雨・李光赫 (2019) 「ナラ派生形式の中国語訳傾向について—ノナラ、ナラバ、タナラを中心に—」『東アジア言語文化研究』1, pp.134-141.
- 李光赫 (2011) 『日中対照から見る条件表現の諸相』 大阪: 風詠社.
- 劉月華・潘文娛・故韡 (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』 (片山博美・守屋宏則・平井和之 共訳), 東京: くろしお出版.
- 劉曉華 (2016) 『多層的なネットワークモデルとしての日本語条件表現の研究—認知言語学の視点から—』 城西国際大学博士論文.
- 劉曉華 (2016) 「意味論的な省略による言いさし文」『研究論集』15, pp.179-194.

## <中国語>

- 北京大学现代汉语教研室 (编) (2003) 《现代汉语》北京: 商务印书馆.
- 北京大学中文系 1955,1957 级语言班 (编) (1982) 《现代汉语虚词例释》北京: 商务印书馆.
- 陈昌来 (2017) 《汉语常用双音词词汇化和语法化研究》上海: 学林出版社.
- 陈颖 (2001) 《现代汉语假设分句末尾的“吧”和“呢”》《四川师范大学学报(社会科学版)》28(1), pp.27-43.
- 程湘清 (2003) 《汉语史专书 复音词研究》北京: 商务印书馆.
- 戴炜华 (编) (2007) 《新编英汉语言学词典》上海: 上海外语教育出版社.
- 丁声树、吕叔湘、李荣、孙德宣等 (2002) 《现代汉语语法讲话》北京: 商务印书馆.
- 董秀芳 (2002) 《词汇化:汉语双音词的衍生和发展》成都: 四川民族出版社.
- (2007) 《词汇化与话语标记的形成》《世界汉语教学》1, pp. 50-61+3.
- (2017) 《汉语词汇化和语法化的现象与规律》上海: 学林出版社.
- 董秀英、徐杰 (2009) 《假设句句法操作形式的跨语言比较》《汉语学报》4, pp.64-74.
- 方梅 (2002) 《指示词“这”和“那”在北京话中的语法化》《中国语文》4, pp.343-355.
- 付琨 (2012) 《试论后置关联标记“的话”的篇章分布与关联特征》《渭南师范学院学报》, 27(7), pp.27-43.
- 高名凯 (1948) 《汉语语法论》上海: 开明书店.
- 古川裕 (2006) 《关于“要”类词的认知解释: 论“要”有动词到连词的语法化途径》《世界汉语教学》1, pp.18-28.
- 胡明扬 (编) (1996) 《词类问题考察》北京: 北京语言学院出版社.
- (编) (2004) 《词类问题考察续集》北京: 北京语言大学出版社.
- 胡裕树 (编) (1995) 《现代汉语》上海: 上海教育出版社.
- 黄伯荣、廖序东 (编) (2002) 《现代汉语》北京: 高等教育出版社.
- 江蓝生 (2002) 《时间词“时”和“后”的语法化》《中国语文》4, pp.291-301.
- (2004) 《跨层非短语结构“的话”的词汇化》《中国语文》5, pp.387-400.
- (2017) 《汉语语法化的诱因与路径》上海: 学林出版社.
- 金立鑫 (1988) 《“那么”的词类问题》《中国语文》2, pp.131-133.
- 黎锦熙 (1924) 《新著国语文法》北京: 商务印书馆.
- 李小凡 (1998) 《苏州方言语法研究》北京: 北京大学出版社.
- 李宗江 (2017) 《语法化与汉语实词虚化》上海: 学林出版社.
- 刘顺、潘文 (2014) 《“便是(了)”的词汇化与语法化——兼论语气词“就是(了)”的形成》

《语言科学》13(1), pp.66-73.

刘月华、潘文娉、故鞞 (2019)《实用现代汉语语法 (第三版)》北京: 商务印书馆.

吕叔湘 (1942/2002)《中国文法要略》北京: 商务印书馆.

—— (2004)《吕叔湘文集》(第1卷)北京: 商务印书馆.

吕叔湘 (著), 江蓝生 (补) (1985)《近代汉语指代词》上海: 学林出版社.

吕叔湘 (编) (1999)《现代汉语八百词(增订本)》北京: 商务印书馆.

彭睿 (2017a)《同构项变化的方式及其在语法化中的角色》《语言科学》16(2), pp.142-157.

—— (2017b)《如何定位汉语语法化的“特色”》《语言教育与研究》5, pp.1-14.

—— (2020)《语法化理论的汉语视角》北京: 北京大学出版社.

沈家煊 (1994)《语法化研究综观》《外语教学与研究》4, pp.17-24.

—— (1998)《语用法的语法化》《福建外语》(季刊)2, pp.1-14.

史金生 (2017)《语法化的语用机制与汉语虚词研究》上海: 学林出版社.

石毓智 (2011)《语法化理论——基于汉语发展的历史》上海: 上海外语教育出版社.

宋文辉 (2021)《从作述题的小句到句末语气词:“就是了”的形成机制》《河北师范大学学报(哲学社会科学版)》44(5), pp.109-117.

邢福义 (2001)《现代汉语复句研究》北京: 商务印书馆.

徐丹 (1988)《浅谈这/那的不对称性》《中国语文》2, pp.128-130.

徐一平、曹大峰 (编) (2002)《中日对译语料库的研制与应用研究论文集》, 上海辞书出版社外语教育与研究出版社.

谢惠全 (2005)《谈实词的虚化》《汉语语法化研究》(吴福祥主编)上海辞书出版社商务印书馆.

谢晓明、陈琳 (2012)《“的话”的话题标记功能及相关问题讨论》《语文研究》4, pp.31-35.

王春辉 (2010)《汉语条件句标记及其语序类型》《语言科学》9(3), pp.265-278.

王力 (1982)《汉语语法纲要》上海: 上海教育出版社.

—— (1984)《王力文集》(第1卷)济南: 山东教育出版社.

—— (1985)《王力文集》(第2卷)济南: 山东教育出版社.

—— (1985)《王力文集》(第3卷)济南: 山东教育出版社.

王丽莉 (2017)《汉日转折复句对比研究》吉林大学博士论文.

汪如东 (2010)《助词“就是了(就是)”的语法化及相关结构研究》《宁夏大学学报(人文社会科学版)》32(2), pp.60-65.

王维贤、张学成、卢曼云、程怀友 (1994)《现代汉语复句新解》上海: 华东师范大学出版

社.

- 吴慧颖 (1991) 《句首“那么”的词性》《中国语文》5, pp.60-362.
- 杨永龙 (2016) 《结构式的语法化与构式演变》《古汉语研究》4, pp.46-57.
- (2017) 《实词虚化与结构式的语法化》上海:学林出版社.
- 杨玉玲 (2010) 《“这”“那”系词语的篇章用法研究》北京:中国广播电视出版社.
- 姚双云 (2008) 《复句关系标记的搭配研究》武汉:华中师范大学出版社.
- 余志鸿 (1999) 《表假设的“吧”与“的话”》《汉语学习》4, pp.38-42.
- 张斌 (主编) (2001/2005) 《现代汉语虚词词典》北京:商务印书馆.
- 张炼强 (1990) 《试说以“时”或“的时候”煞尾的假设从句》《中国语文》3, pp.174-179.
- 章瑾 (2014) 《因果类“一 p 就 q”复句及其对外汉语教学》湖南师范大学博士论文.
- 张雪平 (2011) 《“假定”的语法化》《汉语言文学研究》2(4), pp.92-96.
- 张谊生 (2000) 《现代汉语副词研究》上海:学林出版社.
- 张谊生 (2001) 《说“的话”》*Contemporary Research in Modern Chinese* 3, pp.70-81.
- (2017) 《与汉语虚词相关的语法化现象》上海:学林出版社.
- (2018) 《助词的功用、演化及其构式》商务印书馆.
- 张振亚 (2013) 《句末后附性“就是了”的语义及其对语篇功能的影响》《宿州学院学报》28(4), pp.47-51.
- 张志公 (1979) 《汉语知识》北京:人民教育出版社.
- 赵国军 (2009) 《表假设的“吧”与“的话”》《汉语学习》4, pp.50-55.
- 赵元任 (1979) *A Grammar of Spoken Chinese* (《汉语口语语法》吕叔湘(译)北京:商务印书馆).
- 志村良治 (著), 江蓝生·白维国(译) (1995) 《中国中世语法史研究》北京:中华书局.
- 朱德熙 (1982) 《语法讲义》北京:商务印书馆.
- 朱岩 (2004) 《关联助词语法化初探》《青海师范大学学报(哲学社会科学版)》6, pp.108-111.
- 中国社会科学院语言研究所古代汉语研究室 (编) (1999/2017) 《古代汉语虚词词典》北京:商务印书馆.
- 钟兆华 (编著) (2015) 《近代汉语虚词词典》北京:商务印书馆.
- 詹卫东、郭锐、常宝宝、谌贻荣、陈龙 (2019) 《北京大学 CCL 语料库的研制》《语料库语言学》6(1), pp.71-86.
- 詹卫东、郭锐、谌贻荣 (2003) 《北京大学中国语言学研究中心 CCL 语料库(规模:7 亿字;时间:公元前 11 世纪-当代)》([http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus)).

<英語>

- Akatsuka, Noriko (1985) Conditionals and the epistemic scale. *Language* 61(3), pp.625-639.
- Ariel, Mira (2008) *Pragmatics and grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Bisang, Walter and Andrej Malchukov (eds.) (2020) *Grammaticalization scenarios: cross-linguistic variation and universal tendencies (1) Grammaticalization scenarios from Europe and Asia*. Berlin / Boston: Walter de Gruyter GmbH.
- Brinton, Laurel J. and E. C. Traugott (2005) *Lexicalization and language change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L., Revere D. Perkins, and William Pagliuca (1994) *The evolution of grammar: Tense, aspect and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. 2nd edition. Chicago: University of Chicago Press. (沈家煊・罗天华 (訳) (2010) 《语言共性和语言类型 (第二版)》北京: 北京大学出版社。)
- Cristina, Lastres-López (2018) If-insubordination in spoken British English: Syntactic and pragmatic properties. *Language Sciences* (66), pp. 42-59. Amsterdam: Elsevier Ltd.
- Evans, Nicholas (2007) Insubordination and its uses. In Irina Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and empirical foundations*, pp.366-431. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, Nicholas and Watanabe, Honoré (2016) The dynamics of insubordination: An overview. In Evans, Nicholas and Watanabe, Honoré (eds.) *Insubordination*, pp.1-38. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Greenberg, Joseph H. (1963) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In Joseph H. Greenberg (ed.) *Universals of Language*, pp.73-113. Cambridge, MA: MIT Press.
- Givón, Talmy (1971) Historical syntax and synchronic morphology: An archaeologist's field trip. *Chicago Linguistic Society* 7, pp.394-415.
- Halliday, M.A.K. and R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. London: Longman Group Limited.
- Haiman, John (1978) Conditionals are topics. *Language* 54(3), pp.564-589.
- Haiman, John and Sandra A. Thompson (ed.) (1988) *Clause combining in grammar and discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Heine, Bernd. (2003) On the role of context in grammaticalization. In Ilse Wischer and Gabriele

- Diewald (eds.) *New reflections on grammaticalization*, pp. 83-101. Amsterdam: Benjamins.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer (1991) *Grammaticalization: A conceptual framework*. Chicago: University of Chicago Press.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2005) *Language contact and grammatical change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, Bernd, Kaltenböck, Gunther and Kuteva, Tania (2016) On insubordination and cooptation. In Nicholas Evans and Honoré Watanabe (eds.) *Insubordination*, pp.39-63. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Himmelmann, Nikolaus P. (2004) Lexicalisation and grammaticalization: Opposite or orthogonal? In Walter Bisang, Nikolaus P. Himmelmann, and Björn Wiemer (eds.) *What makes grammaticalization? A look from its fringes and its components*, pp.21-42. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hopper, Paul J. (1979) Aspect and foregrounding in discourse. In Talmy Givón (ed.) *Syntax and semantic* 12, pp. 213-241. New York: Academic Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.(日野資成(訳)(2003)『文法化』福岡:九州大学出版会.)
- Hopper, Paul J. and E. C. Traugott (2003) *Grammaticalization*. 2nd revised edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jacobs, Andreas and Andreas H. Jucker (1995) The historical perspective in pragmatics. In Jucker, Andreas H. (ed.) *Historical Pragmatics: Pragmatic developments in the history of English*, pp.3-33. Amsterdam: John Benjamins.
- Kaltenböck, G. (2016) On the grammatical status of insubordinate if-clauses. In G. Kaltenböck, E. Keizer, and A. Lohmann (eds.) *Outside the clause: Form and function of extra-clausal constituents*, pp.341-378. Amsterdam: John Benjamins.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago and London: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他(訳)(1993)『認知意味論: 言語から見た人間の心』東京: 紀伊國屋書店; 李葆嘉・章婷・邱雪玫(译)(2017)《女人、火与危险事物: 范畴显示的心智》北京: 世界图书出版公司.)
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press. (兰盖克(Langacker, Ronald W.)著, (2004)《认知

- 语法基础(I):理论前提》(西方语言学原版影印系列丛书6)北京:北京大学出版社.)
- Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* (1), pp. 5-38.
- Lehmann, Christian (1988) Towards a typology of clause linkage. In J. Haiman and S. A. Thompson (eds.) *Clause combining in grammar and discourse*, pp.181-225. Amsterdam: John Benjamins.
- Lehmann, Christian (2015) *Thoughts on grammaticalization*. 3rd edition. Leipzig: Language Sciences Press.
- Matisoff, James A. (1991) Areal and universal dimensions of grammatization in Lahu. In E. C. Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization II: Focus on types of grammatical markers*, pp.383-453. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Matsumoto, Yo (1988) From bound grammatical markers to free discourse markers: History of some Japanese connectives. Berkeley (eds.) *Linguistics Society* 14, pp.340-351.
- Maynard, Senko K. (1997) *Japanese communication*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Meillet, Antoine (1912) L'évolution des formes grammaticales. *Scientia (Revisita di Scienza)* 12, pp.384-400.
- Narrog, Heiko (2012) *Modality, subjectivity, and semantic change: A Crosslinguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Narrog, Heiko (2016) Exaptation in Japanese and beyond. In Freek Van de Velde and Muriel Norde (eds.) *Exaptation and Language Change*, pp.93-120. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Narrog, Heiko (2016) Insubordination in Japanese diachronically. In Nicholas Evans and Honoré Watanabe (eds.) *Insubordination*, pp.247-279. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Narrog, Heiko (2017) Three types of subjectivity, three types of intersubjectivity, their dynamicization and a synthesis. In Daniël Van Olmen, Hubert Cuyckens, and Lobke Ghesquière (eds.) *Aspects of Grammaticalization: (Inter) subjectification and Directionality*, pp.19-46. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Norde, Muriel (2009) *Degrammaticalization*. New York: Oxford University Press.
- Onodera, Noriko and E. C. Traugott (2016) Introduction to the special issue *periphery. Diachronic and cross-linguistic approaches*. *Journal of Historical Pragmatics* 17(2): 163-177.

- Shinzato, Rumiko (2007) (Inter)subjectification, Japanese syntax and syntactic scope increase, *Journal of Historical Pragmatics* 8(2), pp.171-206.
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Traugott, E. C. (1988) Pragmatic strengthening and grammaticalization. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, pp.406-416.
- (1989). On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language* 65(1), pp.31-55.
- (1995a). Subjectification in Grammaticalization. In D. Stein and S. Wright (eds.) *Subjectivity and subjectivisation: Linguistic perspectives*, pp.31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- (1995b). The role of the development of discourse markers in a theory of grammaticalization. In Paper presented at ICHL XII, Manchester, pp.1-23.
- (2003) From subjectification to intersubjectification. In Raymond Hicky (ed.) *Motives for language change*, pp.124-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- (2010) (Inter)subjectivity and (inter)subjectification: A reassessment. In Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.) *Subjectification, intersubjectification and grammaticalization*. Berlin: Mouton de Gruyter. (福元広二(訳)(2011)「文法化と(間)主観化」『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』(高田博行・椎名美智・小野寺典子(編著))大修館書店,pp.59-70.)
- Traugott, E. C. and Richard Dasher (2002) *Regularity in semantic change*. Cambridge University Press.
- Wu, Zoe Xiu-Zhi (2004) *Grammaticalization and language change in Chinese : A formal view*. London and New York: Routledge Curzon.

付録1 本研究で利用する『中日対訳コーパス』の小説の詳細

日本語小説名、著者及び訳者など

日本語原文			中国語訳文		
小説名	著者	出版社 (年)	訳本名	訳者	出版社 (年)
あした来る人	井上 靖	筑摩書房 (1954)	情糸明天	林少華	北岳文芸 (1988)
雁の寺	水上 勉	文藝春秋新社 (1961)	雁寺	何平	海峡文芸 (1985)
金閣寺	三島由紀夫	新潮社 (1956)	金閣寺	唐月梅	作家 (1988)
黒い雨	井伏鱒二	新潮社 (1966)	黒雨	宋再新	湖南人民 (1982)
死者の奢り	大江健三郎	文藝春秋新社 (1958)	死者的奢華	李慶国	光明日報 (1995)
斜 陽	太宰 治	新潮社 (1947)	斜陽	张家林	上海譯文 (1981)
砂の女	安部公房	新潮社 (1962)	砂女	葉謂渠	珠海 (1997)
青春の蹉跎	石川達三	新潮社 (1968)	青春的蹉跎	金中	雲南人民 (1981)
痴人の愛	谷崎潤一郎	新潮社 (1947)	痴人之愛	郭来舜	陝西人民 (1988)
野 火	大岡昇平	創元社 (1952)	野火	王杞元	崑崙 (1987)
ノルウェイの森	村上春樹	講談社 (1987)	挪威的森林	林少華	瀋江 (1996)
蒲団	田山花袋	易風社 (1908)	棉被	胡毓文	江蘇人民 (1987)
友情	武者小路実篤	以文社 (1920)	友情	馮朝陽	青海人民 (1984)

(日本語小説名の五十音順による; 出版年はすべて初版)

中国語小説名、著者及び訳者など

中国語原文			日本語訳文		
小説名	著者	出版社(年) (出版社を略す)	訳本名	訳者	出版社(年)
插队的故事	史铁生	山东文艺 (2001)	遙かなる大地	山口守	宝島社 (1994)
盖棺	陈建功	北京文学 (1979)	棺を蓋いて	岸陽子	早稲田大学出版部 (1993)
关于女人	谢冰心	天地 (1943)	女の人について	竹内実	朝日新聞 (1993)
活动变人形	王蒙	人民文学 (1987)	応報	林芳	白帝社 (1992)
家	巴金	开明书局 (1933)	家	飯塚朗	鎌倉文庫 (1948)
金光大道	浩然	人民文学 (1972)	輝ける道	神崎勇夫	東方書店 (1974)
轮椅上的梦	张海迪	中国青年 (1991)	車椅子の上の夢	飯塚朗	新潮社 (1994)
骆驼祥子	老舍	人民文学 (1955)	駱駝祥子	立間祥介	岩波書店 (1980)
棋王	阿城	上海文学 (1984)	チャンピオン	立間祥介	徳間書店 (1989)
小鮑庄	王安忆	上海文艺 (1986)	小鮑庄	佐伯慶子	徳間書店 (1986)
霜叶红似二月花	茅盾	华工书店 (1943)	霜葉は二月の花 に似て紅なり	立間祥介	岩波書店 (1980)
天云山传奇	鲁彦周	安徽人民 (1979)	天雲山伝奇	田畑佐和子	亜紀書房 (1981)
钟鼓楼	刘心武	人民文学 (1985)	鐘鼓楼	蘇琦	恒文社 (1993)

(中国語小説名のピンインアルファベット順による)

付録2 本研究で利用する BCCWJ の小説の詳細

著者	生年代	書名/出典 (『』を略す)	出版者	出版年
森村 誠一	1930	雪煙	光文社	2001
志茂田 景樹	1940	あご伯父の川	KIBA BOOK	2001
高山 路爛	1940	わが愛はやまず	文芸社	2002
江戸川 乱歩	1890	少年探偵王	光文社	2002
森村 誠一	1930	煌く蒼生	講談社	2002
小松 左京/高橋 桐矢	1930/1960	安倍晴明	二見書房	2002
加賀 乙彦	1920	夕映えの人	小学館	2002
村山 早紀	1960	シェーラひめのぼうけん海の王冠	童心社	2002
河野 多恵子	1920	秘事; 半所有者	新潮社	2003
上田 秀人	1950	波濤剣	徳間書店	2003
松本 葉	1960	どこにいたってフツウの生活	二玄社	2003
角田 光代	1960	キッドナップ・ツアー	新潮社	2003
久世 光彦	1930	女神	新潮社	2003
押川 國秋	1930	螢の舟	廣済堂出版	2004
ジュール・ヴェ ルヌ (著)/江口 清 (訳)	1820/1900	八十日間世界一周	角川書店	2004
Spindler, Erica. (著)/平江 まゆ み (訳)	1957/1959	さよならジェーン	ハーレクイ ン	2005
ほしお さなえ	1964	天の前庭	東京創元社	2005
角田 光代	1960	人生ベストテン	講談社	2005

(著書の出版年代順)

付録3 本研究で利用するCCJの小説の詳細<sup>166</sup>

著者	生年代	書名/出典（《》を略す）	出版者	出版年
陆文夫	1928	清高	《人民文学》杂志	1987
刘震云	1958	故乡天下黄花	中国青年出版社	1991
张欣	1954	岁月无敌	长江文艺出版社	1996
大江健三郎（著） /谢宜鹏（译）	1935/不详	日常生活的冒险	作家出版社	1996
莫言	1955	红树林	《江南》杂志	1999
韩寒	1982	三重门	作家出版社	2000
陈染	1962	无处告别	江苏文艺出版社	2005
贾平凹	1952	秦腔	《收获》杂志	2005
迟子建	1964	原野上的羊群	外文出版社	2005
铁凝	1957	树下	海南出版社	2006
刘慈欣	1963	三体 I	《科幻世界》杂志	2006
刘醒龙	1956	菩提醉了	文汇出版社出版	2006
石康	1968	奋斗	百花洲文艺出版社	2007
麦家	1964	风声	《人民文学》杂志	2007
冯德英	1935	苦菜花	解放军文艺出版社	2007
艾米	不详	山楂树之恋	江苏文艺出版社	2007
严歌苓	1958	寄居者	新星出版社	2009
阿加莎·克里斯蒂 （著）/韩英鑫， 吕方（译）	1890/不详	沉默的证人	人民文学出版社	2008

（著書の出版年代順）

<sup>166</sup> 中国語の出版年は全部2000以降ではないが、できる限り2000年に近いものを選んだ。また、作家の生年や著書の出版年はコーパス自体には書かれておらず、インターネットに公開している資料や著書の中から得られたものである。その小説も最初に雑誌に発表して著書として出版することもあり、ここでは雑誌に公開した最初の年代を記した。誤った場合は筆者の責任である。日本語BCCWJには訳書が2冊出ているが、同じく中国語のコーパスには訳書を2冊選択した。

付録4 各辞書の概要

辞書名及び基本状況 (『』書名記号を省略)	収録語数	特徴 (選択した理由)
<b>日 本 語 辞 書</b>		
<b>新明解国語辞典</b> (第七版) 2011年、三省堂 <b>編纂者</b> ：山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄、上野善道、井島正博、笹原宏之 <b>初版</b> ：1943年『明解国語辞典』	約 77,500 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代語を主とする。</li> <li>・語義は、通常使用されているものに着目し、頻度の高いものから低いものへ、一般的なものから特殊的なものへという方向によることを原則として編纂された。</li> <li>・「文法欄」を設ける。</li> </ul>
<b>新明解国語辞典</b> (第八版) 2020年、三省堂 <b>編纂者</b> ：山田忠雄、倉持保男、上野善道、山田明雄、井島正博、笹原宏之 <b>初版</b> ：1943年『明解国語辞典』	約 79,000 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい語彙項目を約 1500 語補充する。</li> </ul>
<b>学研国語大辞典</b> (第二版) 1988年、学習研究社 <b>編纂者</b> ：金田一春彦、池田弥三郎 <b>初版</b> ：1978年	約 102,000 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参考欄を設け、比喩的な意味、時代的背景、語源、使い方の注意など幅広く収めた。</li> <li>・文学作品から引用した例が多い。</li> </ul>
<b>明鏡国語辞典</b> (第二版) 2010年、大修館書店 <b>編纂者</b> ：北原保雄 <b>初版</b> ：2002年	約 70,000 項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的な現代語を中心に、新語や話し言葉で用いられる<u>俗語</u>なども収録する。</li> </ul>
<b>言泉国語大辞典</b> 1986年、小学館 <b>編纂者</b> ：林大監修 尚学図書館言語研究所編集	150,000 余り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本国語大辞典をベースとして編集する。</li> <li>・語の成り立ちや用法などを補う補注欄を設定する。</li> </ul>
<b>広辞苑</b> (第六版)	約 240,000	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初版当時、匹敵する規模の辞書が同時代に</li> </ul>

<p>2008年、岩波書店  <b>編纂者</b>：新村出  <b>初版</b>：1955年</p>		<p>無かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・語義が多数の場合、語源に近いものから列記することを原則とした。</li> <li>・古代語彙は文学などから引用し、現代語は作例を使用するが多い。</li> </ul>
<p><b>広辞苑</b>（第七版）  2018年、岩波書店  <b>編纂者</b>：新村出  <b>初版</b>：1955年</p>	約 250,000	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第六版刊行後に収集した言葉に加えて、日本語として定着した語を新項目としては約1万語加えた。</li> </ul>
<p><b>大辞林</b>（第四版）  2019年、三省堂  <b>編集者</b>：松村明、三省堂編修所  <b>初版</b>：1988年</p>	251,000 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・万葉集の古代語から現代語に至るまで各時代のことばと語義を収録する。</li> <li>・語彙解釈を現代用いられている最も一般的なものから順に記し、語の全体像を見渡す分かりやすい構成である。</li> <li>・新語・新語義を加えた上、複合動詞やさまざまな接続語など、母語話者には自明でも、説明の難しいことばを収録する。</li> </ul>
<p><b>日本語大辞典</b>  1995年、講談社  <b>編纂者</b>：梅棹忠夫、金田一春彦  <b>初版</b>：1989年</p>	200,000 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の歴史的な背景も視野に入れる。</li> <li>・複合語や成句も豊富である。</li> <li>・現代的な用例に徹する。</li> </ul>
<p><b>日本国語大辞典</b>（第二版）  2001年、小学館  日本国語大辞典第二版編集委員会  <b>初版</b>：1972年</p>	全 13 巻で約 500,000 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語釈の用例は上代から昭和時代に及び、実際の使用例を書名とその成立年または刊行年とともに示す。</li> <li>・用例総数も約 1, 000, 000 に及ぶ。</li> <li>・「語源説欄」を付ける。</li> </ul>
<p><b>集英社国語辞典</b>（第二版）  2000年、集英社  <b>編集者</b>：森岡健二、徳川宗賢、川端善明、中村明、星野晃一  <b>初版</b>：1993年</p>	約 94,000 語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字辞典や百科事典の機能を兼ねる総合的な辞典。</li> <li>・現代日本語の変化に応じて、言葉の新しい意味や近年の用法を明示する。</li> </ul>

<p>日本俗語大辞典</p> <p>2003年、東京堂</p> <p>編纂者：米川明彦</p>	<p>6,300語余り</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治・大正・昭和・平成時代にわたる日本初の俗語大辞典。</li> <li>・用例を12,000余り集成した。</li> <li>・若者語、卑語、隠語、流行語、差別語、口頭語形など国語辞典になくとも毎日使われる俗語を収載。</li> </ul>
<b>中 国 語 辞 書</b>		
<p>汉语大词典 (漢語大詞典)</p> <p>1986~1993年、漢語大詞典出版社</p> <p>編纂者：羅竹風 主編</p> <p>中国漢語大詞典編輯委員会、漢語大詞典編纂処</p>	<p>375,000項目 余り</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計12巻(「索引」一卷別)、中国において最も規模の大きい辞典。</li> <li>・各項目において、用例は、古典から現代にかけて幅広く採用しており、説明も詳しい。</li> </ul>
<p>現代漢語詞典 (第七版)</p> <p>2016年、商務印書館</p> <p>編纂者：中国社会科学院語言研究所詞典編輯室</p> <p>初版：1960年</p>	<p>65,000項目</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・編集には中国語標準語(“普通話”)の普及が反映されており、より正確な用語用字を使用する。</li> <li>・400項目以上補充し、100項目に新たな意味解釈加えた。</li> </ul>
<p>現代漢語虚詞例釈</p> <p>1982年、商務印書館</p> <p>編纂者：北京大学中文系1955、1957級語言班編</p>	<p>790項目</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各項目に品詞類を表示。</li> <li>・例文は主に近現代白話文やあるいは新聞、雑誌などにより、それぞれ出典が明記される。</li> </ul>
<p>現代漢語常用虚詞詞典</p> <p>1992年、浙江教育出版社</p> <p>編纂者：曲阜師範大学</p>	<p>1,170項目</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誤用の多い虚詞については、それぞれの相違点などの解説も付す。</li> </ul>
<p>現代漢語虚詞辞典</p> <p>1995年、中国国際広播出版社</p> <p>編纂者：現代漢語辞系</p> <p>主編：陶然、蕭良、岳中、張志東</p>	<p>850語</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「虚詞」的用法を中心に、「実詞」をも含めて解説する。</li> <li>・例文は、新聞、小説など幅広い分野から採録する。</li> </ul>

<p><b>現代漢語虚詞辞典</b> 2013年、商務印書館出版社 編纂者：張斌 初版：2001年</p>	1,013語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・副詞、介詞、連詞、助詞（語気助詞も含む）、方位詞、代詞、</li> </ul>
<p><b>古代漢語虚詞辞典</b> 2017年、商務印書館出版社、 1999年初版 主編：中国社会科学院語言研究院古代漢語研究室</p>	1,855語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・副詞、介詞、連詞、助詞、語気詞、感嘆詞、助動詞、代詞、不定数詞など。</li> <li>・単音節虚詞 762項目、複合虚詞 491項目、慣用フレーズ 289項目、固定的組み合わせ 313項目。</li> </ul>
<p><b>近代漢語虚詞辞典</b> 2015年、商務印書館出版社、 編著：鐘兆華</p>	4,000語余り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・副詞、連詞、介詞、助詞、嘆詞、助詞、助動詞、語尾と接辞。</li> <li>・唐宋～清末における虚詞。</li> <li>・単音節、多音節、固定的組み合わせを含める。</li> </ul>
<p><b>白水社中国語辞典</b> 2002年、白水社 編著：伊地智善継</p>	65,000項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親字 1万1千、見出し 6万5千、用例 11万</li> <li>・詳細な用例を加え、品詞や文型を表示している。</li> </ul>
<b>日 中 辞 書</b>		
<p><b>中日辞典 (第三版)</b> 2016年、小学館 編纂者：北京・商務印書館、小学館 (共同編集) 初版：1992年</p>	100,000語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2013年に中国で公布された「通用規範漢字表」の全漢字を収録する。</li> <li>・日常用語から科学技術・コンピュータ用語まで、あらゆる分野の新語を 8000増補する。</li> <li>・既存の項目についても、新しい意味・用法、わかりやすい例文を多数加えている。</li> </ul>
<p><b>『中日辞典』 (第三版)</b> 2010年、講談社 編纂者：相原茂 初版：1998年</p>	100,000項目以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明解文法や類義語などのコラムを増補する。</li> <li>・品詞表示を徹底する。</li> </ul>